
ゼロの男の物語

銀

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ゼロの男の物語

【Nコード】

N75810

【作者名】

銀

【あらすじ】

自分に関する記憶がない状態で目覚めた男。

自分の名前すらわからない彼は成り行きで自らの名をゼロと名乗る。そして出会った女性の薦めでギルドに入る。

彼は自分は『世界の中心』であると豪語し、尊大な態度で日々を送る。

そして仲間を得て自分の感情の赴くままに生きている。

果たして彼はいったい何者なのか？

これは名前と記憶がゼロの男の物語

主人公最強物というわけではありませんが、そこそこ強いです。

〈登場人物紹介〉（前書き）

主要な登場人物が増えるor事実が判明したら順次内容を増やしていきます

ネタバレを含むものもあるので、物語を読んだあとや登場人物の名前を忘れた時に見ることをオススメします

～登場人物紹介～

ゼロ

主人公。起きると記憶を失っていた青年。言葉は話せるが文字は読めない。自分は世界の中心であると思っている。しかし割りとき空気を讀んだりする。また、卓越した銃技を持つ。ダガーを持つことになるが素人以下の腕前だった。

ギルドランク Eランク

白い髪に金色の瞳

リーラ＝フラウン

ヒロイン。ゼロが起こした諍いに首を突っ込んだ結果、たかられることになった女性。お嬢様口調。簡単な回復魔法と火、水の魔法が使える。また、ゼロの記憶喪失を信じていない。武器にはレイピアを使用。

ギルドランク Dランク

金髪でオッドアイ（右は朱色、左は蒼色。）

シャルロット

ゼロを理想の弟と見いだす。ゼロ以外に姉とつく呼び方をされるのは嫌がる。使用武器は鞭。魔法は使えない。

ギルドランク Cランク

赤みがかったピンクの髪で瞳は赤（リーラは薄いパープルと認識）

オルト＝シリア

ライルの妹。兄からストーカーを受ける。感情表現が乏しく、ゼロ

に得体が知れないと思われる。魔法が得意らしい。

兄に冷たく対応しているが大切にしているそぶりもある。

ギルドランク Dランク

長いブラウンの髪をうなじで二つ結っている。瞳の色はブラウン。

ライルⅡシリア

オルトの兄。妹にストーカー行為をするほどのシスコン。妹には従順である。ゼロに銃を向けられるとトラウマが発動し、ひたすら謝り続ける。使用武器は大剣『白夜叉』。

ギルドランク Bランク

髪は剃っているが瞳の色は妹と同じくブラウン。

ラキナⅡグレイセスⅡグランネイドル

グレイセス王国第三王女。若干10歳ほどの少女であるが、輿入れ先がすでに決まっており、輿入れ先に行くまでの短い期間を自由に過ごすことを許されゼロ達と行動を共にしている。

エレナ

ラキナの護衛兼世話係として付き従うメイド。そこそこな毒舌であり、行動にラキナを守るつもりがあるのか疑問なものも多い。

銀髪をサイドポニーテールにしている。

ユリ

ピンク好きの防具屋の店長。いわゆるお姉系である。親にもらった体を傷つけるという意味で性転換手術には否定的。8話以降の出演は絶賛考え中。

商隊一家

夫ジオレン、妻ブグレイ、息子ルアップ、娘ベリーの四大家族。

始まりの物語（前書き）

初投稿です。

拙い文章ですみません。

少し修正しました。

始まりの物語

視界が拓ける。

そこに映るものは青い空と緑あふれる光景。

現状を確認すると今、自分は地面に倒れているらしい。
首筋にあたる草が正直くすぐつたい。

さて、ここで大きな問題がある。由々しき問題といっても差し支えない。それはすなわち、

「なぜ、俺はここに倒れているんだ？」

声に出して考えてみる。

そして結論が出るよりも先にもっと重要なことに気づいてしまった。

「俺は誰なんだ……」

上半身を起こして両手を見る。たぶん男のもだろう無骨な手だ。指が若干長いかな？比較対象が思いつかないからわからん。個人的な見解だ。

とある場所に触れてみる。

付いてる。つまり俺は男だ。間違いない。

そこでやっと正常に頭が回り始めたのか腰に違和感があることに気付く。

手を回して触れてみると堅い感触がある。

どうやら何かが腰に取り付けられているようだ。

その何かを自身の前に持つてくる。

その何かとは銃だった。

自分の名前すらもわからない俺ではあるが、これが銃と呼ばれる兵器だということはわかるようだ。

それは鉛色の無骨な装飾銃。

大きさは30センチ程だろうか。重量はそれなりにあるが別段重過ぎるわけでもない。しつくりくる重さだ。

銃身に奇妙な紋章が描かれていることから考えれば、特別なものかもしれないと考えさせられる一品だ。

まあ、あくまでも私見ではあるが……

そのほかにも身の回りを確認してみるが、めばしいものは何もない。しかし着ている服に関しては、軍服のようだがはっきり言ってぼろぼろだ。

上半身は右肩から先の布はない。つまり右腕は丸出しだ。下半身は穴が開いていたり擦り切れていたりとはつきり言って買い換えるべき代物である。

別にそこそこの筋肉が付いているから見られることに関しては問題ないが、服装に関してはみつともないといえるだろう。

そしてこの服装から推察できることは、

「俺はどこぞの軍人で、戦いで受けた傷が元で記憶を失ったというところだろうな」

と推測を立てるにいたる。

現状これ以上の情報は得られない。

何といっても自分の顔さえわからないのだ。触れて確認してみたが

それで得られる情報など微々たる物だ。しいていえば無精ひげが生えてるみたいなので剃りたいと思ったくらいだ。

結局見つかった自分に対する手がかりといえば銃と軍服（？）くらいだ。

これだけで個人を特定するのは無理だろうが、ここらが俺の住んでいる土地かもしれないし、俺を知る人物がいるかもしれない。というかその可能性が高い。手がかりを探すためにもまずは

「とりあえず人のいるところに行かないとな……」

そう口にすると同時に立ち上がる。

体は正常で、どこにも痛みはない。行動することには何の問題もない。

自分の事に関しては何一つ思い出せないがすぐに解決するだろう。

その時はそう思っていた。

しかし、現実はあるに甘くないと知るのとはそんなに遠い話ではない。

でも、不安はなかった。

なぜなら

『世界の中心たる俺に不可能はない』

何も覚えていなかろうとこれだけは自身を持っていえるのだから

これが俺の始まりの物語

出会いの物語（前書き）

ヒロイン登場（出番少なめ）

出会いの物語

草木の生い茂る道なき道を進むこと3時間ほど、陽は中天に輝いている。

気温はさほど暑いわけでもなく過ごしやすいといえる。

草木の様子から考えて今の季節は春なのだろうか。

などと考えているとようやくまともな道に出ることが出来た。

まともといっても石が転がっていたりするわけだが、紛れもなく人の通る道である。

この森を抜けるために先人が開拓した道なのだろう。

あとはこの道をたどればいずれ人の住む場所に着くだろう。

問題は

「右に進むべきか、左に進むべきか……」

これに尽きる。

どちらがより少ない時間で人の住む土地につくのか皆目検討もつかない。

周りの木々が邪魔で遠くを見通すこともできない。

しかし悩んだのもほんの一瞬だ。

なぜなら俺の進む道こそが正道。正しいのだ。

そして今の気分は

「右だな」

そして向かって右へと足を進める。道は見るからに果てしなく続いている。

「今日中には人のいるところに着きたいものだな」

つい口から出た言葉は、何も寂しから人の温もりが欲しいといった理由では断じてない。

今、俺は猛烈に腹が減っている。そしてそれ以上に喉が渴いているのだ。

川とか湖的なものがあれば有り難くいただくのだが、そのようなものが現れる気配はない。

周りの森で調達すればいいと思うかもしれないが、俺は素人だ。下手なものを食してしまう恐れもある。そのため餓死する寸前まで森で食料を調達する気は毛頭ない。

まあ、何より俺が進むその先に遠からず人里があるはずだから無理をする必要がないと言っ理由が九割だ。

俺の足取りは決して軽くはなかったが、ようやく森の中の道から出ることが出来た。

どれくらい歩いたのか定かではないが陽はほとんど沈みかかっており空を茜色に染め上げている。

さらには赤と青二つの月が空に姿を現していた。

ん？月って二つだったっけか。まあ、いいか。特になにか問題があるわけではない。

今、考えるべきは視界の先にうつすら見えるのは町ではなからうかというものだ。

若干暗くなっており、なおかつまだ20キロほど離れているので俺の願望の見せる幻覚の可能性も少なからずあるが、町が見えたのは僥倖だ。

俄然気力が湧く。

だが決して走ることはない。

そのような力の無駄遣いはアホのすることにほかならない。

人の体力は無限ではないのだ。

歩けば歩くほど目に入る町の姿は大きくなる。
陽はすでに完全に沈み暗い夜空を照らすのは淡い月の光と星たちの輝きのみだ。

町に向かって進むこと体内感覚で4時間ほど。
やっと町の入口に着いた。

喉は渴いているし、腹も減っている。

さつさとどこか飯が食えるところに行きたいわけだが如何せん持ち合わせがないことに今さらながら気づく。
となればやることはひとつしかない。

俺はあたりを見回しながら町の中を練り歩く。
と、そこに大声で笑いながら歩いているはた迷惑な鎧姿の3人組が目に入る。

「ふむ、あいつらでいいか」

俺はその男達に近づいていく。

「おい、その3人止まれ」

俺の制止の声に3人が振り向く。

そして俺の姿を見て、さらに自分達の周りを見回してようやく声がかけられたのが自分達であることに気付いたようだ。

「俺達に何か用かな」

一番体格のいい男が俺に話しかける。
こいつがリーダーなのだろう。雰囲気がそんな感じだ。

顔は醜悪だが。

それよりも俺は内心ひそかに安心していた。

最悪言葉が通じないことも考えていたからだ。

しかし、言葉が通じることから考えれば俺の記憶喪失は軽いものなのだろう。むしろ喪失ではなく欠落といったほうが正しいのかもしれない。

「おい、なに無視してやがる」

先程よりも強い口調で俺に向かって男が話しかけてくる。他の二人も怪訝そうにこちらを見ている。

どうやら思考にふけて彼らを蔑ろにしていたらしい。

「黙れ。臭いから口を開くな」

「んだと！」

俺の言葉に男は怒りをあらわにする。他の二人も俺に対して怪訝な視線から敵意の視線に変わりつつある。

まあ、そんなことはどうでもいいことだ。

「黙れと言った。俺の用件は一つだ。金を置いて失せろ。さもなければ殺す」

馬鹿でもわかるような懇切丁寧な発言だ。さすが俺と内心感心したほどに。

しかし男達から返ってきたのは大音量の笑い声だった。

「馬鹿かテメエは。俺らは冒険者だぞ？ その俺達に向かって金を置いていけてマヌケ過ぎるだろ。しかも殺すときか。馬鹿の極みだな。ん？ よく見りゃ、ボロボロな格好してやがる。食うにも

困って強盗のまね事か。相手見て喧嘩売れよ、ぼくちゃん」

男の挑発的な言葉。

判決、死刑。

死ねと小さく呟きながら腰にある銃を引き抜き、男の額に照準を合わせると同時に引き金を引く。

そして男は額に風穴を開けて倒れ………なかった。

というか弾丸が発射された形跡も感触もない。

そこで俺はある重要な事実を認識する。

それはすなわち残弾の確認をしていないことだ。

手持ちは銃以外に持ち物はなかったから銃に入っていないければ弾はない。

俺の持つ装飾銃はリボルバー式ではあるみたいだが、残弾の確認はできない様に作られている。

しかし高確率で弾は入っていないだろう。

思い返せば引き金引いた時、カチツとか音したような気もする。

壊れたという可能性もあるがどちらにせよ銃という役目はこなせない。

「あん？　なんだこりゃ。おもちゃか？」

男が突き付けられた銃を見ながら言う。何故か汗が凄い。不快だ。

しかし、どうしたものか。

一般的に見れば弾なしや、壊れた銃など荷物でしかなく、いらない子発言されて然るべき存在だ。

だがこの銃は俺という存在の手がかりである。まあ、それ以前に手放すつもりなど今だ微塵も浮かんでいない。

結論からいえば鈍器としてこの銃を使用し、こいつらを殺そう。そう思っていたところ。

「そこで何をしているんですの！」

横から声がかかる。女の、それも若いであろう声に視線だけ向け
る。銃は相変わらずリーダー格の男の額に狙いを定めている。別段
特に意味はないが……

声の主はやっぱり女だった。

しかし驚いたのはその容姿。

薄暗い中で光でも放ちそうな淡い金色の髪をポニーテールにして、
体は赤い軽鎧に身を包んでいる。

目は釣り目がちで彼女が強気な性格であればこの上なく似合うだろ
う。鼻や口のバランスを考えれば10人が10人とも美人だと言っ
たろう。

しかし彼女の容姿で特筆すべきはなんとと言っても左右で色の違う瞳
の色だろう。

右目は炎の様に朱く、左目は海のように蒼い。

吸い込まれそうとはこのことを言うのだろうか。

まあ、だからどうした。ではあるが…

「なんだ姉ちゃん。ナンパなら後にしてくれ。いまからこのふざけ
た小僧に教育的指導しなきゃならんからな。そのあとだったら朝ま
でじつくりねっとり相手してやるからよ」

下品に笑いながらリーダー格の男が女に言う。

他の二人はずるい。や、俺も混ぜてください。などと言っている。
正直気持ち悪い。

「あら、せっかく助けに入って差し上げたのに随分な言い草ですわ
ね」

女は男達の言葉をあつさりを受け流す。言われ慣れてんだろうな。

「はははっ。嬢ちゃんよ、正義の味方ごっこは結構だが喧嘩を売ってきたのはこの小僧だ。だからこの小僧に助ける価値なんかねえよ」

リーダー格の男が女に言う。その男の反応に女は少し驚いた表情を浮かべたがすぐに微笑むと俺に視線を向ける。

「何を勘違いしているか知りませんが、私が助けに来たのはあなたたちですわよ？」
わたくし

その言葉に男達はまた笑い声を上げる。

正直耳障りで不快だがここで俺が発言するのは空気が読めてない行為だろう。

だから流れに身をまかせることにした。

「俺達を助ける？ 馬鹿がもう一人出やがったか。顔はいいのに勿体ねえなあ。物事つてのはちゃんと状況を見てから言えよ」

「状況を見るのはあなた方ですわ。理解してないだろうから教えて差し上げますけど、そちらの方があなたに向けているのは古代兵器たる銃ですわよ。その方の指が後一ミリでも動けばそのあなた！ 死にますわよ」

ビシッとリーダー格の男を指さして女が言う。俺は古代兵器のあたりでひっかったがそういうもんなのか、と空気を読んで口をつぐんだ。

対する他の反応は

リーダー格の男。汗がさらに吹き出す。不快。

リーダー格の男の左側の男。理解してないらしくあきらかに？が浮

かんでいる。キモい。

リーダー格の男の右側の男。異常に震え出す。ウザい。

「あ、あにい……銃っていやあ使い手なら例えガキでもドラゴンを単独で殺せるっていう代物じゃあ……」

右側の男が呟くように言った言葉で明らかに顔が青くなったリーダー格の男をはじめ、左側の男もようやく理解したらしく顔を青ざめている。

なんか話の方向に不安を感じる。

そしてその予感正しかったといえる。

「うわあああああ！」

右側の男が叫びながら町の入口に向かって走り出す。それが呼び水となって他の二人も逃げてしまう。叫びに氣をとられたせいで簡単に逃がしてしまった。

結局男達からは一銭も奪うことはできなかった。

あとに残ったのは今だ虚空に向け銃を構えている俺と、見事なまでの逃走劇にビックリした表情の女だけだ。

「見事な逃げっぷりですわね。あなたもいい加減そんな物騒な物仕舞いなさいな。今回に限りあなたの蛮行には目をつぶりますわ」

そう言う女は俺に背を向けて歩きだそうとする。しかし

「おい」

俺の声かけで女の視線は俺に戻る。せつかくの獲物を逃がしてくれただ。ただで帰すわけにはいかない。

とは言っても銃はもはや銃としての役割を成さないことが判明したし、何より腹が減っては戦ができない。無論俺はいま腹が減っているわけで。

飯を食うには金がいる。

そんな俺の金づるをこいつは奪ったわけで。

なら責任をとらせよう。

金づるを奪ったこいつこそが新たな金づるだ。

容姿はなかなかいいから殺すのは勘弁してやるか。

では手始めに

「これから飯を食う。責任をとって金はお前が出せ」

これが俺とこの女、リーラとの出会いの物語

出会いの物語（後書き）

俺様というか凄く自己中な男。

今だ名前すら出てません。

ものすごいポ力をやらかしましたが結構強い設定です。その要素も微かに入れたけど気付きました？

ヒロイン登場しましたがお嬢様口調で容姿端麗。ポニテは完全な趣味です。髪を結ってれば女性が5割り増しで可愛く見える髪型フェチの自分。

最後にヒロインの名前も出ました。

次回はヒロイン視点で物語が進む予定です。

旅立ちの物語（前書き）

今回はヒロイン視点で進めます。

旅立ちの物語

人通りが少ないとはいえ、往来の道での騒ぎに視線がいったのはギルドでの依頼を達成した帰りのことですわ。

粗悪な鎧に身を包んだ3人組が一人の青年と相対しておりました。青年は短く切って逆立てた真っ白な髪に元は白かったであろうボロボロの汚れた服を着ていました。

一瞬、物乞いかと思いましたでしたがすぐに否定することになりました。だって彼は小さくだけ確かに呟いたのですから

強烈な殺気と共に

男達に対して

「死ね」

と……

そして瞬き一回ほどの時間があつたでしょうか。

わたくし私が気付いた時には既に3人組の中で一番体格のいい男の額にそれが突き付けられていたのは……

その光景に戦慄しました。

だって彼の手に握られているのは使いこなせば子供でさえ単独で低級のドラゴンを殺せると言われる古代兵器だったのだから。

それを一瞬でかまえた青年はかなりの使い手なのでしょう。

気付いた時には声を出しておりました。

「そこで何をしているんですの！」

わたくし私の言葉に静寂が訪れます。

3人組はもとより、青年もこちらに視線だけは向けました。

その瞳は金色に染まっており、まるで全てを見透かしているかのよ

うでした。

青年はいつ引き金を引いても不思議ではない状態ですわ。
出来るだけ早く穏便に事態を收拾しなければ私^{わたくし}を含めた死体が4体
転がることになってしまいます。

だというのにこのおバカさんたちは下品な笑みを私^{わたくし}に向け、あまつ
さえ私^{わたくし}が青年の方を助けに来たと勘違いしやがりましたわ。

完全にあなたの方に向けて助けにきて差し上げたと言いましたわよね。
お耳が悪いんでしょうか。

青年は静観の構えを見せています。

正直いつその銃口が自分に向けられるのか怖いですが、目の前で人
が死ぬのはあまり好ましくないことです。

私^{わたくし}が彼の持つている武器のことを教えて差し上げるとやっと状況を
理解したのか一目散に逃げる男達。

正直、あまりの逃げ足に呆然としてしまいました。

そして気付いてしまったのですわ。

彼らがいなくなったことで青年の矛先が私^{わたくし}のみに及ぶ危険性に。

男達の発言から喧嘩を吹っかけたのは青年の方らしいです。

つまりは私^{わたくし}は彼の邪魔をした敵（仮）に他なりませんわ。

下手すれば殺されるかもしれませんわね。

ということ捨てぜりふ的なことを吐き彼に背を向け歩こうとしま
す。

幸い彼は男達の逃走に呆氣にとられています。

逃げるなら早いほうがいいですわ。

しかし

「おい」

一歩も歩かないうちに声がかけられました。

恐る恐る視線だけを彼に戻してみます。

その顔は怒りに染まっているわけではありませんが不気味なものを感じさせられました。

彼は少し考えるそぶりをしたあと私にこう告げました。

「これから飯を食う。責任をとって金はお前が出せ。」

…なるほど。逆らえば命はないのでしょうかね。

だったら私に残された選択肢は一つだけしかありません。

「いいですわよ。ついて来なさいな。」

内心とは別に口をついて出たのはなんとも偉そうな物言いでした。

ちらりと青年を見れば特に気にした様子もなく私について来ている。彼の機嫌を損ねてはいけない。

だって私は死ぬわけにはいかないのだから……

辿り着いたのは宿屋兼酒場の店。といっても田舎と言っていいこの町じゃ唯一といってよい大人の憩いの場。

都市から仕事の為やってきた冒険者や地元の人達で賑わっています。

この町にはギルドはないですからこのマスターが似たようなことをこなしているらしいです。

私が今回こなした依頼はここではなくアーガルドのギルド支部で受けた依頼なのですが、マスターの斡旋する仕事はギルドのそれとなら遜色のないものらしいですわ。

そんなことを考えながら空いている席に腰掛ける。

青年も私の前に座る。

それと同時に店員がメニューを持ってきました。
青年はメニューを眺めるとなぜか顔をしかめました。

「お前の薦める料理を3品持ってこい。あと、この店で一番安い酒を頼む。」

青年はそのまま店員に注文しました。幸いこの店はリーズナブルなのでよほどの無茶を言わない限り問題ないでしょう。
一度承諾した手前、後には引けません。

「私も料理は彼と同じ物を、あと飲み物にワインを頂けるかしら。」

表向きは冷静に見えるよう努力しますが内心これからどうするべきかと思いが若干パニック状態の私は料理を選ぶことを放棄しました。

まあ、店員のオススメを頂くのは悪くないアイデアですし、こんどから使わせてもらうことにしましょう。

店員が去ったあと私たちのテーブルに訪れたのは静寂。
周りが賑やかなだけに余計気まずい感じがしますわ。
なにか話題を振るべきでしょうか。

「せっかく食事を一緒に摂るのですから自己紹介をするべきですね。私の名前はリーラ・フラウンですわ。あなたのお名前を教えてくださいませ。」

私の問いに青年はただじつと私の目を見つめる。
まさか、偽名だとばれてしまったのかしら。いえ、だとしても本名

を名乗るわけにはいきませんわ。

「名前は忘れたな。」

くっ…偽名を名乗ったお返しというわけですね。

あからさま過ぎる嘘に内心、心がざわめきましたわ。

「それは大変ですわね。」

だからつい、嫌味な口調で返してしまいましたわ。

この時、すでに私の中わたくしでは殺されるかもという恐怖はかなり薄まっていた。

それがなぜかはわかりませんが…

「お待たせしました。エールとワインです。」

店員が飲み物をそれぞれの前に置いていきます。

青年は店員がエールを自分の前に置くと同時に持ち上げ、一気に飲み干し、オカワリを告げる。

遠慮する気は一切ないらしいですわね…いえ、エールを頼んだのは彼なりの遠慮なのでしょう。

それからは大した話もなく、頼んだ料理も届きました。

店員がオススメとして持ってきた料理は、確かにオススメするだけあっておいしいです。

でも料理の味なんかより気になるのは目の前の青年です。

そもそもよく考えれば銃を持っているという事だけでも興味をそそられます。

何せ銃は一丁買うだけで安くても平均的な庶民の家が5つ買える値段であり、なおかつ弾薬代もかかるという金食いの武装の代名詞だと聞いたことがあります。

また、市場にも滅多に出回りません。

もちろん手に入れた見返りも大きいようですが、冒険者が手に入れようとする場合は手に入れる過程で違う武装での戦闘法が確立されて、もはや無用の長物になっていることうけあいです。

コレクターとして鑑賞するために銃を集める者が存在するらしいですが、彼の動きは明らかに銃を扱う者の動きでした。

他の武装を持っている様子もありませんし、彼は銃を唯一の武装として装備しているのでしょう。

そういえば先程の3人組には彼から喧嘩を売ったらしいですわね。

「質問に答えてくだらない？」

気になって聞いてみました。彼は私の問いかけに顔を上げるとまた目をじっと見てくる。

どうやら聞くだけは聞いてくれるようですわね。正直、あの全てを見透かすかのような瞳は苦手ですわ。

「先程の3人組に最初に喧嘩を売ったのはあなたらしいですわね。理由をお聞かせ願えるかしら。」

単純な好奇心でした。あの醜悪な3人組が何か彼に粗相してしまい、彼の逆鱗に触れたのかもしれない。

彼に対しての恐怖心が薄れた私は^{わたくし}自分のした質問の答えを勝手に予想はじめていました。

「小遣い稼ぎだ。」

しかし返ってきた答えははっきりいえば最低な理由でした。

「小遣い稼ぎですか…お金が欲しいなら働きなさいな。」

心からそう思います。それだけの能力はありそうですし。

「あてがあれば働くのも悪くないが、正直どうでもいいな。」

働く意欲はあるようですわね。後半は聞かなかったことにしましょう。

「ギルドには入っていませんの?」

ギルドに登録しているのならば危険報告するべきだろうと思い聞いてみました。

「なんだそれは」

返ってきた答えに嘘をついた様子はありません。

「ならギルドに登録すべきですわね。ギルドならよほどの事でないと仕事にあづけませんし。」

それがいい、と自分の中で勝手に決める。

「ふむ、そうまで言うならギルドとやらに登録してやる。で、どこにいけない。」

青年も乗り気だ。

「ここからならアーガルドが一番近いですわね。」
「なるほど。では明日にでもいこう。案内しろ。」

彼の言葉に少し首を傾げます。アーガルドはこの国では王都に次ぐ大都市です。

案内が必要とも思えません。

しかし、私は丁度ギルドの依頼を完了して明日にでも報告のためアーガルドに戻るとこだったため、深く考えず了承してしまっていました。

まあ、若干小悪党気質ですがほんとに悪い人間ではなさそうだったのも理由の一つなのでしょう。

「ところで、あなたのお名前は？」

もう一度名前を聞いてみます。案内をするならそこその日数を一緒に行動することになりますし、聞いておいたほうがいいでしょう。

「忘れた。」

この後に及んでまだ言うのですか……強情ですわね。

翌朝

食事代だけでなくなぜか彼の宿泊費までも払われました。

それは置いておいて私は丁度アーガルドへと向かうという商隊の方たちの馬車に乗せてってもらうことを約束することに成功しました。あと1時間ほどで出発するようです。

彼はというとのんきに朝ごはんのあとのコーヒーを楽しんでいました。

どうせ支払い私は私なのでしょーね……

「随分と優雅ですわね。」

口をついて出るのは嫌味だけです。

昨夜一緒にアーガルドに向かうことに決まってから少ばかり話をしましたが彼は後ろめたいことでもあるのか自分のことになると忘れたといって誤魔化してしまいます。

あげくのはてに記憶喪失だなどと言い出す始末です。

はつきり言っではやくも共にアーガルドに行くことに不安になっている自分がいます。

信頼されない相手を信頼することなんてできません。

そうこう言っているうちに出発の時間になってしまいました。

「では行くつか。」

なぜか商隊の者たちに向けて彼が偉そうに告げています。

皆さん戸惑っているようです。

彼はそんなことは全く意にかえさず馬車に乗り込んでしまいました。彼と出会ってまだ一日と経っていませんがこれだけは確実に分かります。

彼はとんでもなく自己中人間です。

これからの旅路での心労を考えると不安しかありません。

でも彼のことを投げ出すことはできません。

だって我が家の家訓にありますもの。

『一度決めたことは最後までやり通す』

これが我が家に伝わる家訓。

そしてこれが私^{わたくし}と彼の旅立ちの物語

旅立ちの物語（後書き）

ヒロインいい娘です。

普通宿泊費まで払いませんよね。

ちよつと強引すぎるかな？

次回はまた主人公視点で話が進みます。

道中の物語

「いい加減お名前くらい教えていただいてもよろしいじゃありませんか？」

女、リーラが何度目になるかわからない問いを俺に投げかける。

正直うんざりだ。

俺は何度も忘れたと本当のことを告げているのだがこの女は全然信じていないらしい。

最初はこの女に俺の事を聞いてみようかとも思ったが、もったいい情報が手に入りそうなところに案内してくれると言うのであえてこの女には何も聞いていない。

なんでもギルドとやらは世界各国の大きな都市にある世界規模の機関みたいだ。

ならば俺に関する情報も見つけられるだろう。

それまで女は案内役兼財布として精々利用してやることにする。

「ちょっと、無視しないでくださいませ！」

やかましい。耳元でキンキン騒ぐな。

「だから何度も忘れたと言っている。」

言葉に苛立ちが籠る。

「また、そうやって誤魔化すんですのね。」

これだ…

この女は人を信じるという事を母親の腹の中に忘れてきたらしい。

馬車は俺が歩いてきた道を今度は反対方向に進んでいく。

馬車に乗り込んで既に一日が過ぎている。

どこだったかは定かではないが俺の倒れていた場所付近は当の昔に通り返っていることだろう。

アーガルドという都市までは馬車で三日ほどの距離らしく、このまま道なりに進めば着くみたいだ。

やはり俺の判断は正しかったようだ。

馬車で三日なら歩けば3倍以上は確実にかかるだろう。そこをあえて右へと向かった俺の判断……ヤバいな。

ちなみに女とのやり取りはすでに両手の指の数以上にある。

最初は俺と女の仲裁をしていた商隊の連中も今では俺らの話には不干涉の態度を決めたらしい。

それにしてもこの女にはうんざりだ。

いい加減大人しくすればいいのに。

いや、待てよ…

この女が執拗に聞いてくるのは俺の名前だ。

まあ、世界の中心たる俺の名前を脳に未来永劫刻み付けたいというのはわからないでもない。

ならば適当に名乗ればいいではないか。

この場合の適当とはいいかげんという意味ではなく、ある条件・目的・要求などにうまく当てはまることの方だ。

ではどんな名前がいいだろうか。

宿で確認した俺の姿は白い髪に金色の瞳の20前後の青年の姿だった。

そこからとって『シロ』とでも名乗るか？

いや、これは安易すぎるか…

何よりどこなくペット臭がする。

ではどんなものがいいのだろうか。

今の俺には過去の記憶がない。

親の顔も、これまでどんな風に生きてきたのかも。

ならば無という意味を込めて『ゼロ』と名乗るか。

正確には言葉は話せるから、全くのゼロというわけではないかもしれないが、他に候補が思いつかない。ペット臭はシロほどには感じられない。

うん、これでいい。これで女の執拗な問いも止むことだろう。

「俺の名はゼロだ。」

女に向かって言ってみると女は虚を突かれた顔で数回ほど目をしばたかせる。

「…勿体振っておいて、話すときは随分と脈絡ありませんのね。まあ、いいですわ。ゼロさん、短い間ですがよろしくお願いしますわ。」

そう言ってみて俺に微笑みかける。

それに応えてやるほど俺は暇ではないため無視する。

「……………無視ですか。」

考えるべきことは山ほどある。

差し当たっては文字のことだろう。

先日の食事のときに渡されたメニューにはミミズがのたくったような文字が書かれており、正直全く読めなかった。

他にも文字を見ることがあったが結果が変わるわけもなく、俺は言葉は話せるが文字がわからないということが判明した。

では、どうするべきか。

選択肢は3つだ。

1つは覚えること。

記憶をなくす前は使えていたのだろうし、もう一度勉強し直す選択だ。

2つめは文字を読める者を連れておくこと。

自分が読めないなら他人に読ませればいい。候補としてこのリーラとかいう女が筆頭に挙げられる。結構なお人よしみだし、俺の申し出だ。嫌とは言わんだろ。

3つめは気にしないこと。

多少の不便は甘んじて受ける。思い出さえすれば問題も解決するだろうしな。

さて、どれがいいか…

とは言っても結論は2つめでは決まりだと思っている。

3は不便だし、1は記憶を思い出した時に労力が無駄になる気がする。しかし、2を選択してこの女を供にする場合には俺が対外的にみて無教養な男と成り果てる恐れがある。

何せ俺が記憶喪失だと信用していないのだ。

であれば俺が文字を読めない理由として、無教養だと勝手に考えることは想像に難くない。

何度も記憶喪失だと言っているのに困ったやつだ…

自分の信じる世界が全てにおいて正しいと思っっているみたいだな。

正しいのは常に俺だというのに憐れなやつだ。

「なんですか？」

女が俺に話し掛けてくる。どうやら無意識に慈愛の心で見つめていたらしい。

「憐れだと思つて無意識に目を向けていただけだ。気にするな。」

女を氣遣つてやる。俺は聖母より優しい存在だ。

「私のどこが憐れなのですか！」
わたくし

女が声を荒げる。まったく、短気な奴だ。

「自分で考える。」

人とは考えることで成長していくものだ。

俺のこの答えで女は人として成長することだろう。

俺つて奴はなんてお人よしなんだ…

まあ、この女には俺の金づるを奪うという自業自得があるとはいえ、一宿一飯の恩がある。

成長の手助けをしてやるのも悪くはない。

しかし女よ、そこは睨むのではなくて感謝の眼差しを向けるべきだぞ。

それとも俺が気づかなかつただけで実は目つきが悪いのか？

さて、女の心の成長を促したところでまた思考に耽る。

女にはまだ聞いていないが宿の店主を含め数人にこの軍服（？）や俺のことを聞いたが結果は芳しくなかつた。

話を聞く限り、最近軍人が町に来るようなことはなかつたらしい。

つまり俺は一人ないしは軍人以外とあそこに行つたらしいな。少なくとも以前に俺があ宿に宿泊したことはないらしい。

つまり、俺はあそこに倒れていた地点に行くためにアーガルドにいた可能性が高いことを示している。

ならばしばらくはアーガルドに逗留して情報を集めるのが賢明か…そんなことを考えていると突然馬車が大きく跳ねる。

どうやらなにかを踏んだらしい。

「どうしましたの？」

案の定、女が食いついた。

「いえ、なにか踏んだみたいなのですが…」

御者の男が説明する。

御者は商隊の男4人が交代で行っている。

名前を聞いたが覚えていないのでA、B、C、Dと見分けている。

御者は朝から昼までと昼から夕方にかけてと1人ずつの交代制らしい。

ちなみに夜は魔物が活発に徘徊する時間らしく安全な場所で夜が明けるとまで過ごしている。

今は4人目の商隊の男Dだ。つまり出発してから一日半以上経っているというわけだ。

「おかしいですね。アーガルドとヤムウの間の街道は十分な舗装がされていないとはいえ、先ほどのような揺れは起こらないはずなのですが…」

とそこで女がちりと先ほど通った道に目をやる。

「スピードを上げてください！」

突然女が声を荒げて御者に指示を出す。

なんだと思つて俺もそちらに目をやると同時に何かの咆哮のようなものが耳に入る。

そして次の瞬間地面から馬鹿でかいミミズが飛び出してきた。

いや、もうミミズとしか言いようのない外見だ。
大きさを除けばだが…

ミミズとの距離は50メートルほど空いているが、それでもわかる。
でかい。

目測で体長はおよそ3メートルほどだろうか。

胴回りは人間より太くないか、あれ…

でも外見はミミズ。と思ったら頭が横に二つに割れる。

そこから現れたのは幾本もある鋭い歯。

結論、ただのミミズではない。

それが1匹だけではなく3匹あらわれた。

「エンシェントワーム…」

誰かがつぶやいた。

なるほどあれはエンシェントワームというのか。

あれが噂の魔物とやらなわけだ。

そして馬車は地面に潜っていた奴らを踏ん付けて通過した、と。

冷静な俺とは裏腹に商隊の連中は慌てふためいている。

見ればリーラとかいう女も顔を青ざめている。

「とにかく逃げろ！」

商隊の男Bが叫んだ。それに呼応するように馬車の速度がわずかに
上がる。

速度が少ししか上がらないのは当たり前だ。

ちよくちよく休息を挟んでいるとはいえ、馬達はすでに一日以上走
っている。

これ以上を求めるのは酷だろう。

エンシェントワームたちは見かけによらず速い。

蛇と芋虫を混ぜたような気持ち悪い動きではあるが着実に距離を縮

めてきている。

もう距離は20メートルまで縮んでいる。

「おい、あんたら!」

商隊の男Cが俺達に声をかけて来る。

顔にかなりの焦りが見える。

「あんたらギルドの冒険者なんだろ? あいつら倒せないのか?」

「確かにそうですが、私はつい先日Dランクに昇格したばかりです。対してエンシェントワームはBランクの魔物……とても相手取ることとはできませんわ。」

正確には俺は冒険者とは違うわけだが、否定する前に女が答えてしまう。

視線を後ろに戻せばエンシェントワームとの距離は10メートル。掴まるなこれは…

などと考えた時、エンシェントワームの口から何か吐き出される。それは馬車の荷台、つまり俺達の乗っているところの屋根に当たる。そして当たった場所がみるみるうちに溶けていく。

馬車はいわゆる幌馬車で周りは布に覆われていたわけだが今では上に大きな穴ができてしまった。

連中はどうやら強力な酸を吐くらしい。

「ぐわあああああ」

悲鳴のような叫びに幌に出来た穴から視線を戻すと商隊の男Aが肩を押さえて唸っている。

その服は溶け、肩が赤い血で染まり出していることから、上から落

ちてきた酸に運悪く当たってしまったらしいことが見て取れる。

「どいてください。私が治療わたくしします。」

女が急いでAに近づくと酸を浴びてしまった肩に手を翳す。

その手が淡く発光すると同時に男の苦痛を浮かべた表情が幾分か和らぐ。

「嬢ちゃん回復ヒーラー導師だったのかい。」

Bが女に話し掛ける。

「いえ、私わたくしが出来るのは初級の回復術程度ですわ。このような怪我は回復ヒーラー導師とは違い、治癒には時間がかかってしまいます。」

これが魔法か…

と、そこで女は俺に目を向ける。

「ゼロさん。あなたの持つ銃ならばエンシェントワームを追い払えますわよね。このまま捕まれば死人が出てしまいますわ。ですからお願いしてもよろしいかしら？」

確かにそうなのだろう。

こいつらには世話になっていないといっても過言ではない。

だから協力してやるのもやぶさかではない。

なによりあのミミズどもは目障りだ。

しかし問題がある。

それは

「銃弾が一発もないから無理だ。」

ということだ。

銃弾がない銃でどうしろというのだ。

鈍器として使用？

つまり特効か。

却下だ。俺は世界の中心ではあっても無敵超人などではない。

死ぬ可能性が高い。

ではどうするか。

どうもできない。

残念ではあるがこいつらは見捨てていこう。

そんなことを考え始めていると

「弾ならある……」

商隊の男Cが懷から小さな箱を取り出す。

それを開くと中には銃の弾が5発だけ入っていた。

「この前王都に行ったとき、銃が売られていてな、高くても買えなかったんで、記念に弾だけ買ったんだよ。」

なるほどな。それで銃はないのに弾だけ持ってたわけか。

俺は弾を取り出し銃に込めようとする。

「一発一万Rな。」

空気の読めないやつとはこいつの事をいうのか。

「こんなときにお金を取るんですの？」

俺より先に女が反応する。

「おうよ、例え死の淵に立っても商売をする。それが商人ってもんだ。それによく言うだろ？ただより高いものはないって。つまり俺はこの弾をリーズナブルに売ってるわけだ。」

馬鹿が…だというなら本当に死ねばいい。
とりあえず逃げるか。

まずは御者を制圧して、次に馬を奪う。乗りこなせるかどうかは別として、男たちと馬車という荷物がなくなって軽くなるし、こいつらが囷となってくれば……

「わかりましたわ。わたくし私^{わたくし}が買います。ゼロさん、よろしく願いしますわ。」

俺の思考中に女が話をまとめていた。
仕方ない。

正直、Cは死ぬべきだと思うが弾がただで手に入るのだから我慢してやろう。

俺は弾を銃に込める。

問題なくピタリと嵌まる。

装填数は5発。

充分だ。

しかし、弾の問題はクリアしたが壊れてる可能性もあるな。
とりあえず撃ってみるか。

エンシェントワームとの距離はあと2メートルほど。

テキトーに狙いをつけて撃った。

銃声が響く

銃弾が一番近くにいたエンシェントワームの胴体に当たる。

緑色の体液がエンシエントワーム体から溢れる。

怯んだのかそいつは他の二体に抜かれ、一番後方に下がる。
まだこちらを追って来る姿に感服するよ。

「エンシエントワームの弱点は口の上にある赤い部分ですわ。」

女の助言らしきものが聞こえてくる。しかし、赤い部分？

よく見れば確かにそんなものがあるが、ありやなんの器官だ？

つーか弱点わかりやすすぎ（笑）

まあ、1ミリほどの大きさしかないが。

集中して狙いをつける。

その瞬間、まるで時間が止まったかのようにゆっくり流れだす。

先ほどまでは1ミリほどの大きさにしか映っていなかった赤い部分は今の俺の目にははっきりと見えている。

向かって右側のエンシエント・ワームに向けて銃を撃つ。

これは当たった。

まだ着弾してはいないが撃った瞬間にわかった。

では次だ。

今度は左側。

同じ様に狙いをつけて撃った。

ここでもようやく先程撃った弾がエンシエント・ワームに命中した。
やはりその銃弾は弱点である赤い部分を正確に貫く。

そしてすぐに先程撃った弾も命中する。

無論、弱点にだ。

二体はその場で力尽き倒れる。

残りは最初に試射の犠牲になった一体だけだ。

仲間が倒れたというのにまだ来るか。

どうやら知能は薄いらしい。

「死ね。」

最後の一体に向けた手向けの言葉。

それと同時に銃を撃つ。

寸分違わず弱点に当たる銃弾に断末魔の悲鳴すらなく倒れるエンシエント・ワーム。

「や、やった…」

誰かが呟いた。

その声のおこした波紋は徐々に広がり、馬車内は喜びの声に包まれる。

「もっと高く売りや良かった…」

ボソツとCが呟いた。イラッとするな、こいつ……

「弾はまだ一発残ってるんだがせっかく拾った命、捨ててみるか？」

Cの頭に銃を突き付けて言う。

「すみませんでした…もう言いません。」

ちっ、あと一回でも俺の機嫌を損ねたら速攻でこいつの頭を吹っ飛ばそう。そう心に決めた。

結果としてCの頭が吹き飛ぶことはなかった。

とは言ってもまだ可能性がないわけではない。

アーガルドまでまだ10分ほどの時間がある。

ここまで来るのにうるさかったのはリーラという女だけだ。

やれ、銃弾もないのになぜ喧嘩を売ったのかとか俺の銃技はどうやって習得したのか等、質問が矢継ぎ早にくる。

そんなの俺が知りたいくらいだ。

とは言ってもどうやらあの感覚は銃を持って集中すれば出来るみたいだ。

まあ、俺が卓越した銃技を持つことがわかったことは大きな収穫だ。

もうすぐアーガルドにはいる。

長いようで短かった移動もこれで終わりだ。

アーガルドでは何が待ち受けるのか。

これは俺の辿った道中の物語

道中の物語（後書き）

主人公の名前でした。

ゼロの男の物語だから名前もゼロです。

あつ、でもこれじゃゼロの男の物語じゃなくてゼロという男の物語じゃねーかとかいう突っ込みはなしの方向で

初戦闘シーンです。

あっけなくおわりましたが…

うまくないのは知ってます。

ここでちよつと説明を

主人公はリーラをきちんと認識していないので心のなかではほとんど女と呼んでいます。

また、通貨の単位はRで価値は円と変わらないと思ってもらえればちなみに紙幣ではなく異世界ものらしく

10R ↓銅貨

100R ↓銅板

1000R ↓銀貨

10000R ↓銀板

100000R ↓金貨

1000000R ↓金板

という設定です。

銅貨、銀貨、金貨 ↓十円玉ほどの大きさ

銅板、銀板、金板 ↓板ガムを二枚重ねた大きさ

ギルドでの物語（前書き）

うん、難しいもんですな…

ギルドでの物語

アーガルドに着いたのは出発してから二日経った夕方のことだ。

予定よりも早く到着した。

また魔物に襲われてはならないとペースを速めたことが要因らしい。

商隊の連中とは先程別れた。

なぜかCは無性にいらつく。

今となってCの頭を吹っ飛ばせなかったことに若干の後悔を感じている。

銃弾の金はしつかりと女が払っていた。

なんとも律儀な奴だ。

「では、ギルドに行きましょうか。」

女が話しかけてくる。

「それより、飯だ。案内しろ。」

そして金を払え。

昼にパンをひとつ食べた（いちいち商隊からリーラが買っていた）きり、何も口にしていない。

ギルドなんていつでも行けるだろうから、まずは腹ごしらえが先決だ。

「同意したいところですが無理ですわ。」

女からの否定の意見に眉根を寄せるが、仕方ない…話だけは聞いて

やろつ。

「なぜだ？」

俺の問いに女は袋を持ち逆さまにする。

あれは、たしか女の財布の袋か：

そこから女の手に落ちたのは銅板2枚に銅貨が3枚。

全部で230Rしかないではないか。

「この通り、な・ぜ・か、弾丸を一発も所持していなかったあなたのために所持金の大半がなくなりましたの。ですから先にギルドへ行かなければ食事代すらありませんわ。」

なぜかの部分を強調して女が言うが、銃の弾が無くなるなんて有り触れたことではないか。

「仕方ないな。では先にギルドで用事をすませよう。」

俺の財布である女に金がないとは由々しき事態だ。

まあ、いつでも行けるといことはいつ行っても変わらないというわけだ。

俺達は早速ギルドへ向かう。

アーガルドという都市は周りを壁に囲まれており、東西南北それぞれに入口である門がある。

ちなみに俺らが入ったのは東門からだ。

そしてその門を抜けた先にあったのは先日町、確かヤムウとかいっただ。それとは比べるまでもなく多い建物の姿たちだ。

それを立ち並ぶ街灯が夕暮れで薄暗くなりはじめた町を淡く照らし

ている。

時間のせいもあるだろうが人通りもそれなりにある。

俺は町を眺めながら女のあとに続いて歩く。

残念ながら今のところ俺の記憶にはなんの刺激もない。

「ここがギルドですわ。」

女がひとつの建物の前でこちらに振り向く。

見ればその建物は周りの建物に比べれば幾分か大きい。

建物には看板が掲げられているがやはり文字は読むことができない。だがドラゴンであろう生物の顔と剣の絵が描かれているのは問題なくわかる。ギルドは世界中にあるしいがこの絵は共通なのだろうか。それなら別の町に行った時も解りやすいのだがな。

女はその建物の中に入っていく。俺もそれに続いて中に入った。

ギルド内はそこそこ広く、受付のカウンターであろうものが5つ並んでいる。しかし、左から2つめと3つめのカウンターの間に仕切りのようなものがある。おそらくだが扱っていることが違うのだろう。

「あなたはそちらですわ。」

女が左側の2つのカウンターの方を指差す。

右側の3つはわりと混んでいるがこちらはそうでもない。というかこちら側は全く並んでいない。

言われた通りに左側のカウンターに向かう。

女は右側のカウンターのうちのひとつの列の後ろに並んだ。

「いらつしやいませ。新規ですか？再発行ですか？」

受付カウンター内にいた女が話しかけてくる。

「新規だ。」

以前に登録しているかもしれないが、あいにくと覚えていないのだから仕方ない。

「かしこまりました。ではこちらの用紙に記入をお願いします。」

そう言っ用紙とペンを差し出す。

ちっ、面倒だな。

「お前が書け。」

そっくりそのまま突き返す。

「えっと…ギルドに登録してもらうには書いてもらわなきゃダメなんですけど…」

女が困ったように言う。

なんだこいつは…

一から十まで言わなきゃわからんバカか。

「だから代筆しろと言っている。」

それようやく理解したのか女は自分の方に用紙を向けてペンをとる。

「察しが悪くてすいませんでした。いやあ、私のこと書くの？って焦っちゃいましたよ。もう、代筆なら代筆って言って下さいよ。」

あつ、もしかして恥ずかしかったんですか？大丈夫ですよ。時々いるんですよ。字が書けない人。」

やはり来たか、無教養扱い。まあ、こいつごときに訂正するのは面倒だし放置だ。

「ではまずお名前をお願いします。」

「ゼロ」

「ゼ、ロ、つと！では次にどなたかの推薦などがありますか？」

「推薦？」

女の質問に問い返す。

「はい、本来なら新規の登録者は全員最下級のGランクからなのですがEランク以上の方の推薦があれば初期の段階で1ランク上のFランクから始められるんです。」

なるほどな。どう違うのかはよくわからないがそちらのほうが得なのだろう。
それならば

「ちよつと待ってろ。」

受付の女にそう告げるとリーラという女の元へ向かう。

「ちよつと来い。」

俺はリーラの腕を掴むと問答無用で引っ張る。

「ちよつと！何ですの！」

リーラは声を荒げ抗議の声をあげるがそんなことはどうでもいい。

「こいつが推薦者だ。」

そういつて受付の女の前にはリーラを突き出す。

そういうことなんですの…とリーラが言うが、そういうことだ。

「では、推薦者様のギルドカードの提示、それから登録名とランクをおっしゃって下さい。」

それを聞いたリーラは受付に白いカードを渡す。

「リーラ＝フラウン、ランクはDですわ。」

リーラが名前を告げると受付の女は手元で何か操作をする。

「はい、結構です。推薦の正当を確認しました。」

受付の女はリーラにカードを返す。

どうやらリーラの出番は終わりらしい。

「戻っていいぞ。」

「まったく…順番次でしたのに。」

ぶつぶつ文句を言いながら戻るリーラ。当然列の最後尾だ。

「では、こちらに手を置いて下さい」

そういつて受付の女は俺の前に握りこぶしより一回りほど大きい黒

い球を置く。

「なんだこれは？」

「あなたの指紋と魔力波長を記録するんです。」

つまりは個人情報の登録というわけか。

「それはいわゆる個人情報なのだろう？さっきのあの女の確認はしなくて良かったのか？偽物かもしれんぞ。」

「推薦くらい偽られてもどうということはありません。どうせ実力がなければ何にもなりません。それに依頼の受諾やお金の引き下ろしには認証は必ず必要ですから悪用はできません。」

俺の問いに受付の女は淀みなく答える。

いい加減なようできて結構嚴重らしいな。

俺は黒い球を握るように掴む。

「はい、よろしいですよ。」

十秒ほど握ると声がかかる。

「これで登録は完了です。では、次に簡単にギルドの説明をさせてもらいますかよろしいですか？」

「ああ、頼む。」

リーラに聞くのもひとつの手だが、職員に聞くほうが確かだろう。

「ではまずこれを…」

そういつて受付の女は先程リーラが提示したカードと同じものを俺

に渡す。

「これがギルド登録者の証、ギルドカードです。これは世界各国のギルドで使えます。また、身分証にも使えますし、ギルドに預けたお金の引き下ろしにも必要です。だからなくさないように注意してください。万が一なくしたらギルドで再発行できますのでその時は一万Rで承ります。あとこのギルドカードは違いますが、Bランク以上の方はランクごとにカードの色が違います。それぞれ受ける特典がありますからランクアップした時に詳しく聞いて下さい。以上でギルドカードについての説明は終わりです。質問はありますか？」

「金はどうやって預かってもらったり引き出したりするんだ？」

「はい、それでしたら隣の3つの受付のうちのどれかで申し込んでいただければ結構です。あつ、気をつけて頂きたいのはアーガルド支部は夜の11時で閉まつちゃうんですよ。そしたら朝の6時になつて開くまではお金の引き下ろしとか依頼受けたり、報告は出来ないの注意してください。」

「わかった。次に進んでくれ。」

「では次は依頼の受け方ですが、後ろのボードに貼つてある依頼書のうち、自分のランクのひとつ上のランクの依頼まで受けることができます。そして受ける依頼の依頼書を隣側の受付に持って行けば係の者が勝手にやりますので。あとは実際に依頼を受けるときに聞いてください。次にランクについての説明をさせていただきます。ランクはポイントを300ポイントずつ貯めることで昇格していきます。そのポイントは依頼をこなすことで増やせます。同ランクの依頼ですと1ポイント、上のランクの依頼ですと2ポイントです。下のランクの依頼ですとポイントはありますが報酬が1.5倍になります。」

報酬が1.5倍とは豪気だな。

いや、違うな。もしかしたら、もともとの報酬がそれなのではない

のか。

それでポイントを餌に報酬額を三分の二にして残りは自分達の懐というわけか、これはなかなか…

「あくどいな。」

ぼろ儲けだろうな。

「お気づきになりましたか。でもそれがギルドの運営費になりますし、ひいては皆さんの為になります。……私のお給料にも（ボソッ）」

最後は聞かなかったことにしてやろう。指摘しても特に面白いことにはならない。

「では説明の続きをしたいと思います。依頼を失敗した場合ですが、失敗の条件は依頼によって違うのでその都度確認してもらおうとして、ペナルティは一律10ポイントです。あとは報酬の一割程度の罰金です。ちなみに受けた依頼を途中でキャンセルする場合も同様です。あと説明しないといけないのは魔物の討伐に関してですね。魔物は倒したら証明部位を剥ぎ取って隣側のカウンターに持って来ていたできれば換金します。あと、魔物にもランクがありまして、依頼の場合とポイントの関係はあまり変わりありません。ひとつ違うのは2ランク以上ランクが上の魔物を倒した場合ですね。でも簡単ですよ。ランクがひとつ上がるごとにポイントが倍になっていくだけですから。例えばですね、あなたのランクはFランクなわけですけど、Eランクの魔物を倒せば2ポイント。Dランクの魔物を倒せば4ポイント貰えるんです。そしてCランクの魔物なら8ポイント、となるわけです。ご理解頂けましたか？」

つまり、この前のミミズ共の証明部位とやらを持っていれば16×3で48ポイント手に入れてたわけだ。

ちっ、あいつらがまた襲われないうちにとそそくさと逃げてなければ…

いや、知らなかったし無理か…

リーラも何も言ってなかったしな。

まあ、今となつてはどうでもいいことだ。

それよりも気になったことがある。

「討伐部位はどうやって調べるんだ。」

「大丈夫です。わかりますから。」

こいつは頭も言葉も足りないみたいだ。

「だからどうわかるんだ？」

「え？え〜と…魔物を倒したときに一部魔力が濃く残ってる部位があるんでそこを持ってきてください。倒せばわかりますよ。」

ずいぶんと抽象的だ。

「他になにかありますか？」

少し考えてから特にないと言う。わからなければリーラにでも聞けばいい。

「これらの他にパーティー登録という多人数で組んだ場合の説明もあるんですが、こちらはパーティーを組んだ時に改めて説明するので、その時はこちら側の受付にパーティー構成予定のかた全員できてください。あつ、パーティー構成員の上限は5名までですから。」

「わかった。これでもう終わりか？」

受付の女に確認する。

「はい、本日の説明は以上です。」

ならばここに用はない。

振り返ると入口付近にてリーラがいた。
待っているとはご苦勞なことだ。

「終わりましたの？」

リーラが俺の様子を見て話しかけてきた。

「ああ、お前も用事は済んだらしいな。では飯にしよう。ここに
る途中良さそうな店を見つけた。そこへ行くぞ。」

「どうせまた、私が^{わたくし}払うんですね……」

リーラが何か言ってるが無視する。

というかお前が払うのは当然だろうに……

リーラを伴いギルドから出る。

俺のことに關しての情報収集はまた後日行おう。

まずは腹ごしらえからだ。

外ではすでに完全に陽が沈んでいる。

こうしてギルドへの登録はつつがなく終わった。

これは俺の初めてのギルドでの物語

ギルドでの物語（後書き）

結構二人の仲良し度は上がってます。まあ、三日一緒にいますし、問題ないくらいですよね？

やっと主人公の中で女↓リーラへと移行しました。

次回はリーラ視点の予定です。

運命の始まった物語（前書き）

ちよい短めです。

視点はリーラです。

運命の始まった物語

どうするべきでしょうか。

今、私はわたくしすごく悩んでいます。

というのも原因は私の目の前で食事をしているゼロさんについてです。

何を悩んでいるのか。

それはやはりこの後どうするかです。

はつきり言ってギルドへの案内は済んだのですし、ゼロさんとはここでお別れするべきなのでしょう。

でもなんでしょう。この、一人にしてしまうことへの不安感は…

ゼロさんのこれまでの言動を考えると心配ですわ。

というか、銃弾持っていないのに喧嘩を売るなんてこの人頭大丈夫なんでしょう？

それに今考えますと銃弾の入っていない銃にビビってた私わたくしって…
すごく恥ずかしいですわ……

バレてませんわよね？

あら？そういえば彼の食事代だけでなく銃弾の代金も私がわたくし払ってますわね。

これは完全に散財ですわ…

私もそう懷事情に余裕があるわけではありませんのに…

今までの暮らしが暮らしてしたし、まだ感覚が完全に消えたわけではありませんのね…

今後散財しないよう気をつけなければ！

それはそうとゼロさんは不思議なかたですわね。

お名前に關してはこの前やっと教えてくださいましたが、それ以外

は謎に包まれています。

特筆すべきはあの銃技。

あの時私がゼロさんに伝えたのは確かにエンシェントワームの弱点ではありましたが、それも参考程度に思っただけです。

現に私の目には見えませんでした。

しかしあれは確実に弱点である部位を正確に射抜いていましたわ。

でなければ一撃で倒れるはずがありませんもの。

ということは、ゼロさんには弱点が見えていてかつ、それを射抜くだけの腕があるということになります。

あれだけの腕をどこで手に入れたのでしょうか…

いけませんわね。知らず知らずのうちに彼に興味を引かれ、彼のことを考えている自分がいますわ。

そうだとすると、ゼロさんはまれに見る自己中ですわ。さっきもいきなり腕を引つ張るんですもの。

こっちは並んでいるというのに！

それにこちらが話しかけても無視することが多いですし！

何より自己紹介したというのに一度も私の名前を呼んでくれてませんわ！

まさか覚えてないなんてことはありませんわよね。

考えたら不満だらけですわ。

何を迷っていたのでしょうか。

食事を終えたらさっさとお別れしましょう。

その前に

「ゼロさん、ひとつ聞きたいんですけどよろしいですかしら。」

わたくし

私の言葉にゼロさんは明らかに嫌そうな表情と面倒だという表情を足して二で割ったような表情を浮かべています。

確かにあなたを質問責めにしたことは認めますが何がそこまで彼にこんな顔をさせているのか見当もつきません。

「私の名前、覚えてますか……？」

「リーラだろ。そんなことわざわざ聞くな。一度聞けば大体覚える。」

即答でした。

覚えていたんですか…

確かにそんなことと言われるようなどうでもいいことです。

……でも

覚えてくれていたということに素直に嬉しいと思いますわ。

「覚えてるなら、名前で呼んでくださいな。いつも、おいとかお前とかで呼ぶんですもの。あなたが私の名前を、おいかお前と間違つて覚えているのかと思いましたわ。」

しかし私の口から出るのは照れ隠しの嫌味。

まあ、素直でないのはお母様譲りですし、素直な私の姿を見せるのは生涯の伴侶のみですわ。

そういえばゼロさんはこれからどうするつもりなのでしょうが。

少なくともギルドの仕事は多種多様ですから最低の生活費は稼げるはずです。

これからは一人でやっていくというのなら私も悩むことなくお別れすることが出来ますわ。

「ゼロさんはこれからのこと考えていますの？」

私の問いにゼロさんはどう答えるか考えているようです。

ついこの間気づきましたが、どうやらゼロさんは考える時に右手の人差し指を鼻に沿って眉間におく癖があります。

無意識なのででしょうか？

そうだとしたら何ともわかりやすい…

「そうだな…しばらくはこの町にいる。目的が達成しないようなら移動するぞ。」

何か声音に私も一緒に行かなければいけないニュアンスが含まれて
いる気が…

「これからはおひとりで活動なさるということですか？」

とりあえずゼロさんが私をどうしたいのか聞いてみたいです。

「ひとり？なんだ、お前はここで別れるつもりだったのか。それは少し困るな。せめて明日にしてくれ。」

……明日？

ああ、今夜の宿の心配でもしているんですね。

薄々思っではいましたが、この方私のことを都合のいいお財布く
らに思ってるんでしょうね。

明日なら別れてもいいと言っているのがその証拠ですわ。

つまりはこの三日の間に私はゼロさんとの信頼関係をそこまでし
か進めることができなかったということです。

しかし変ですわね。

ゼロさんの答えにショックを受けている自分があります。

これじゃあ心の何処かで必要だと言われることを期待してたみたい
ですわ。

でも、これで心おきなくゼロさんとお別れできますわ。

「宿のことでしたら心配しなくても大丈夫ですわ。餞別にこれを差

し上げますから。」

そう言つて私はゼロさんに銀板を3枚差し出す。
なんか手切れ金みたいですね…

でもこれだけあれば2日は普通に暮らせるはずですね。
その間にお仕事をしていけば問題ないでしょう。

「ああ。財布ないから預かってくれ。」

そう言つてゼロさんは差し出した銀板を私の前に押し返してきます。
……は？この方はなにをおっしゃってるんでしょう。

「預けるも何も差し上げますわ。」

「だから、財布ないから預かっておいてくれって言っているだろ。」

どういふことですか？

ゼロさんの考えていることがわかりませんわ。

「私達^{わたくし}はここでお別れなのですから、預けられても困りますわ。」
「ん？ああ、あれやっぱなし。」

なし、つて…

「お前がいたほうがいろいろ都合が良さそうだと思い直した。」

都合がいいですか…

やはり私^{わたくし}のことをそのように思っているんですね。

あまりに自分勝手ですね。

やはりこの方と共に行動するべきではありませんわね。
何を迷っていたんでしょうか。

「まだ、ギルドでどうすればいいのかわかんしな。色々教えてくれ、リーラ。」

お別れの言葉を告げようとした私^{わたくし}にかけられた言葉に思考が止まっていた。てしまいました。

もしかして私^{わたくし}、ゼロさんに頼りにされてますの？

とゆーか今、リーラって名前で呼んで…

「仕方ありませんわね。しばらく面倒みてあげますわ。」

考えるより先に答えていました。

この時の判断は後々少しだけ後悔しましたが、間違っではいませんでした。

この後ゼロさんはご自分の物語だけでなく私^{わたくし}の物語にも巻き込まれていくことになります。

これは私^{わたくし}とゼロさんのそんな運命の始まった物語

運命の始まった物語（後書き）

あらやだ！読み返すと会話がカップルの痴話喧嘩みたいな匂いがする！

ダメな彼氏と別れようとして結局元の鞘にもどった的な？

二人が一緒に行動するようにしたくてちょっと強引になっちゃいましたが、どうでしたか？

ちなみにゼロくんの考える時の癖はドラマ『ガリ〇オ』の〇川教授を想像してください。

初仕事の物語 「前編」

「パーティー登録をしましょう。」

食事をしたあと、宿で一晩過ごして翌朝俺の部屋を訪れた時のリーラの第一声がこれだった。
パーティー登録って確か昨日受付の女が言ってた多人数で組む場合に必要なことだったな…

「したほうがいいのか？」

「はい、そのほうがゼロさんのランクを上げるのには便利だと思います。」

別に躍起になるほどのやる気はないのだが…

「行きますわよ。」

そう言っただけ俺の腕をとって歩き出す。

「まだ、朝飯も食ってない。」

「そこらで購入すればいいんですわ。」

このアーガルドの名物のひとつが早朝の屋台街らしい。
ふむ、それも悪くない。

「じゃあ、卵粥がいい。」

宿の店主が薦めていたしな。

彼の作る朝食が食べれないのは残念だが、機会はまたあるだろう。

「では、そのようにします。でもまずはギルドに行くのが先ですね。」

「別に飯の後でもいいだろ。」

何も急いで朝のこんなに早い時間に行く必要はない。

「いいえ。パーティー登録のあとに仕事の依頼も受けますので早く行くにこしたことはありませんわ。」

歩きながらリーラに説明を受ける。

なんでも依頼が更新されるのは緊急の時を除き、朝の受付開始時刻と同時にらしい。

依頼を受けるのは早い者勝ちなため、条件のいいものは早く行かないとだめらしい。

「もう6時ですから依頼情報の更新はされてますわ。ゼロさんの初仕事なのでから慎重に選びたいんですの。」

そういつてリーラは気持ち歩くペースをあげる。

俺なんかよりだいぶやる気があるな。

まあ、そこら辺はリーラに任せるとしよう。

ギルドに入ってまず向かったのは昨日の受付。

しかしそこにいるのは昨日とは違う受付。

今いるのは眼鏡の男だ。

「本日はどういったご用ですか？」

眼鏡の男が眼鏡を直す仕草をする。

「パーティー登録をしたいのですが…」

「かしこまりました。ではパーティー構成員の方のギルドカードをお預かりします。あとはそれぞれの本人確認をしますのでこちらを握ってください。」

そういつて男は昨日のギルド登録の時に使った球と似たものを取り出す。今回は昨日の黒い球ではなく白い球だ。

男の言葉通りにリーラはギルドカードを差し出し、白い球を握る。

「はい、では次ぎの方どうぞ。」

俺の番らしい。

俺はリーラと同じように男にギルドカードを渡し、白い球を握る。

「はい、もう結構ですよ。パーティー構成員は以上ですか？」

「他にいないんだから見ればわかるだろ。」

ギルドの職員はそんなこともわからない馬鹿ばかりか。

「ゼロさんっ！すみません。この人礼儀とか諸々ありませんの。お気を悪くしないでください。」

「いえ、大丈夫です。こちらこそすいませんでした。」

礼儀とか諸々ないだとか？

お前が俺の何を知っているというのか。俺ですらわからないことがほとんどだぞ。

「ではパーティー登録構成員は以上ということですので、パーティー制度についてご説明させていただきます。なお、お二方ともパーティー登録は初ということですのでこの説明は強制的に聞いてもらいます。」

「お願いしますわ。」

強制とは面倒だな。

リーラだけ聞けばよさそうなものだが俺も聞かなくてはだめなのだろうか。

「パーティー登録をされた方たちは、専用に用意されている依頼を受けることができます。依頼書にパーティ専用と書いてありますのでそちらの依頼を持って左側の受付に行ってください。その時は代表者一名だけで来ても結構です。あとはパーティーのランクが個人のそれとは別に設けられます。そのランクに関しては、パーティの1番上の方と1番下の方の平均で切り捨てとなります。あなた方ですとFランクとDランクの間のEランクがパーティーランクとなります。受けられる依頼は個人で受けられるものと同様に1ランク上のものまでで、ポイントはそれぞれのランクに適したものが手に入ります。また、ランクが1番下の方にとって2ランク以上上の依頼を受けることがあります。その時は魔物討伐の時と同様に倍々にポイントは増えます。報酬に関してはパーティ側で配分してください。ちなみに個人で依頼を受ける場合と違い報酬が増えることはありませんから。ここまでで何かありますか？」

「パーティー登録をして個人の依頼を受けることはできるのか？」
「はい、大丈夫です。ですが、依頼は原則1つずつしか受けられないのはご存知だと思いますが、それは個人の依頼だけでなく、パーティーで受けた依頼も同様の扱いです。ですから、パーティーの依頼も含め、何も依頼を受けてない状態で個人の依頼を受けてください。また、パーティーのうちの誰かが個人の依頼を受けている状態

でパーティーの依頼を受けるとその方は依頼達成時のポイントなどは入りません。また、二人以上が依頼を受けられる状態でないとパーティーの依頼を受けることはできませんから確認してから依頼を受けられますよう注意してください。」

俺の質問に男は特に詰まることもなく聞いたこと以上に答えてくれた。

「では、最後にパーティーで討伐した魔物に關してですが、これは討伐部位を持ってきた方にポイントと報酬が渡されます。しかし、一緒に持ってきた場合誰にポイントを入れるのかお聞きしますのでご相談のうえ、担当者に告げてください。あと、まだパーティーの上限人数はないので更に加入される場合は加入者とパーティーのうちの誰かおひとりこちら側の受付に来てくだされば手続きしますのでこれでパーティーの説明に關しては以上です。ご質問はありませんか？………無いようですね。ではお疲れ様でした。」

男が頭を下げる。それに対してリーラはありがとうございました。と礼を言っているがそれがその男の仕事なのだからありがとうも糞もないだろう。

俺はリーラたちを横目に依頼が張り付けてある板へと向かう。

たしかリーラが依頼を受けるといつていたから見ておこうと思ったのだ。

だが、忘れていた。ある意味重大な事実を。

「そういえば文字読めなかったな。」

かろうじてランクはわかる。

とは言っても自分と同じFランクだけだ。

簡単だ。自分のギルドカードに書かれているものと同じものを探せ

ばいいのだから。

ギルドカードには自分の名前とランクしか書かれていない。名前とランクはどっちがどっかわからなかったが、間違いない。ギルドカードに書いてある1つの文字がたくさん依頼書に書かれている。ゼロという文字がそうそう依頼書に書かれないうからこれがランクを現しているに違いない。

「何かいい依頼はありました？」

リーラが寄ってくる。

「お前が決めていい。」

こうゆうことは人任せにするのが一番楽だ。何より失敗したときの責任は大体相手が被ることになるからな。

「そうですね。実力的にはDランクの依頼を受けても大丈夫そうですが、でも初依頼ということですしFランクのこれにしましょうか。」

そう言ってリーラは一枚の依頼書を手に取る。

「どんな依頼なんだ？」

「魔法薬の材料の採取ですわ。」

ものさえ知っていれば一人でもできそうなものだがパーティー専用にする意味があるのか？

そうは思ってもリーラは依頼書を持って左側三列の受付の列の空いている列の一番後ろに並ぶ。

早い時間だというのに結構込み合っている。どいつもこいつも苦

労なことだ。

俺はリーラの隣に並ぶ。

程なくして俺たちの番になった。

「これをお願いしますわ。」

リーラが依頼書を受付に渡す。

昨日の登録の時に依頼を受けるときにその担当者に聞けと言われたが説明続きで面倒だから、リーラを見て覚えさせてもらおう。

「はい、フランクパーティー依頼、『魔法薬の材料の採取』ですね。期限は5日、達成条件はモギヨの葉10枚以上にフランク魔物、イビルラビットの角10本です。報酬は三万R。失敗条件は期限の超過。です。おひとりで結構ですのでギルドカードの提示と個人認識をお願いします。」

「わたくし私がやりますわ。それとお金の引き下ろしもお願いしますわ。」

「はい、おいくらですか？」

「五万Rほどお願いします。」

リーラが白い球を握り本人認証を済ませると受付は銀板を5枚リーラに渡す。

なるほどな。こうやって金を引き落とすわけだ。しかし、残高はどうやって確認するのだろうか。

「依頼達成条件を満たしたら依頼品はギルドまでお持ちください。ではご武運を」

ご武運とはまた物騒だな。それだけ依頼は大変ということか。俺とリーラは受付をあとにして外にでる。

「それにしてもお前、昨日も金を下ろしてなかったか？もう使いきったのか？金はもう少し計画的に使え。」

「あなたと一緒に行動することになったから必要になったんですわ。それに今回の依頼に魔物の討伐も控えていますからあなたの装備を整えませんか。」

「どうやら俺のせいらしいな。反省する気は全くないが。とゆーか俺が悪いのか？」

「その後まず装備品を売っている店に行った。」

「安い、使いやすい、何でもあるがモットーらしい。」

「こういう時は隠れた名店的なところに行くものではないのか？」

「そういうところは得てして高いんですのよ？どうしてもそちらがいいと言うのならご自分でお金を出してくださいな。私はわたくしこのお店以外のものにお金は出しませんわよ。」

「資金の話は卑怯ではないか。実質今の俺には金がありません。」

「つまり俺の金は財布であるリーラが握っている。」

「財布が自らの意志でもって紐は開かないと宣言した。」

「まあ、とは言っても俺に必要なものは銃の弾くらいだ。」

「特に問題はない。」

「……………なんだと？」

「へい、すいやせん。銃の弾なんて滅多に売れないもんでずいぶん前に取り扱うのは止めたんですわ。」

ハゲの癖に髭深く、贅肉でダルダルのからだをした店主が俺に告げる。

何でもあるがモットーではないのか？公約も守れないやつはミンチになるべきだ。

「ではこちらを買いますわ。」

俺が店主の殺害方法を考えている間にリーラが会計の台に品物を置く。

ダガーと呼ばれるソレは店内の照明を反射し、鈍い光りを放つ。

「使うのか？」

「あなたが使うんですわ？」

俺に向けてリーラが言う。

いきなりのことにビックリして店主の殺害計画はどこかへ飛んでしまった。

「なぜだ？」

「なぜって、弾がないのですから仕方ないでしょう？それに、銃では近距離には対応しきれませんでしょ？だからこういった武器に慣れておいて損はありませんわ。」

むう…なるほど一理あるかもしれないな。
だとするなら

「どうせならそれではなく、あれがいい。」

指し示したのは店主の後ろに飾られているダガーだ。

こちらはリーラが持ってきたものとは違い、いかにも斬れます的な

光りを放っている。

十五万Rと多少値が張るが俺がもつに相応しい。

「あらず、いいですわね。頑張つてご自分でお金を貯めて買つて下さいな。」

にべもない。なぜか冷たい針を刺されている錯覚に襲われる。

こいつ実は守銭奴か？

しかしこいつが金を出さないと云っている以上、諦めるのが無難か。別にどうしても必要なものではない。

しかしこれが銃の弾ならば無理矢理にでも買わせているところだ。

「んで、これでいいのかい？」

「ええ、それでよろしく願いますわ。」

「ウチとしちゃあ、こっちのダガーを買ってくれた方が儲けがでかいんだけどね。えーと、ブロンズダガーひとつで千五百Rだね。」

俺の目に留まったダガーの百分の一の価値のダガーをリーラが購入して俺に渡す。

「さて、次は防具屋に行きますわよ。」

すぐに店から出ていく。

「ここにも少しだがあるだろ。」

「この防具は安くても質はあまりよくありませんわ。そう変わらない価格でそこそこのいい製品を取り扱っていると云うことを知ってますからそこに行きますわ。」

前を歩くリーラはどんどん路地の裏の道へ進んでいく。

途中よさ気な穴場的武器屋があったりした。

そう、こうゆうのを最初は予想してたんだよ。

なのにあの店はどうなんだ。どこにでもあるような店構えにどこにでもあるような品揃え。

はつきり言ってつまらない店だった。

しかし、いつまで歩くんだ？

もう、町の周りを囲む壁のすぐ近くまできている。

「ここですわ。」

そろそろ声をかけようとしたときにリーラが立ち止まる。

そしてリーラが示した店を見て一気に不安になった。

なぜならばその店はあまりにメルヘンだったからだ。

見た目は一点を除けばお菓子の家のように見えなくもない。しかし材質は普通の建築材みたいだ。恐ろしいまでに似せてある。なににより全体的にピンクの配色の多いこと。実に九割はピンクだ。

これのせいで本来の配色であればお菓子の家に見えていたであろう建物が不気味なオブジェとなっている。

「大丈夫なのか、ここ。」

思わず口をついて出た子の言葉こそ紛れもなく嘘0%の俺の本音。

「見た目はあれですけど、実はいい店なんですのよ。」

そっぴいながら店に入っていくリーラ。

仕方ない、少しばかり嫌だが覚悟を決めて店の中に入る。

そして入ったことで更に不安になった。

予想していたが中もピンクだった。

照明がピンクなのはまだいい。しかし、商品までピンクしかあるようにみえない。

これなら質が悪かろうとさっきの店の方がマシだ。

この際つまらない店だろうと我慢してやる。

そう思い回れ右をして店を出ようとする。

「あらん、ナイスキャッチ！」

誰かに抱きしめられた。

甘い匂いがする。

「ああ、店長さんそこにおりましたのね。」

「あらあら、誰かと思ったらリーラちゃんじゃない！でもダメよ、店長さんなんて他人行儀に呼んだら。あたしのことはユリって呼んでくれなきゃ。ところで今日はどういったご用かしら。」

「今日は店長さんが抱きしめている男の方の防具を整えにきました。」

「あらいやだ、この子ってリーラちゃんの彼氏だったの？ごめんなさいね。ちょうどいい位置に来たからついキャッチしちゃった！」

「そんなんじゃありませんわ！色々あつて一緒に行動することになっただけです。」

俺抜きで話が盛り上がっていく。つーかいつまでこうしてりゃいいんだ。

「いい加減離してくれないか。」

「あら、ごめんなさい。あまりに抱き心地がいいもんで忘れてたわ。」

俺の言葉にやっとなは離れてくれた。

そう、男だ。

見た目はひろいオッサンだ。黒い髪を腰まで伸ばしている。

いわゆるお姉系というやつか。

これに抱き着かれてたわけだ。

でもそんなことはどうでもいい。

こいつについて気になっていることがある。

それはずばり

「切ったのか？」

男のこく一部を見ながら言う。

持つ者としては興味がある。

「いいえ。ここは切るつもりはないわ。だって親からもらった大事な体ですもの。傷をつけるなんて親不孝だわ。でも、私の意見だから他の人には押し付けられないけどね。」

そんなんになつておいて親不孝にはなっていないのか、甚だ疑問だが本人が いいのならそうなのだろう。

「そんなことより、あなたのお洋服を選ばなくっちゃ！あと、あたしを呼ぶ時はユリって呼んでちょうだい。それにしてもボロボロね。」

「いや、何とか修復できないか？」

一応これでも自分を知るための手がかりだ。処分されては困る。

「うーん詳しく見てみないとなんとも言えないけど多分大丈夫よ。結構いい生地みたいだからお高くなるけど。」

それならそれでいい。とりあえず聞いておくべきかもしれん。

「ところで、このような服はどこら辺で作られているかわからないか？」

「いえ、記憶にはないわね。どうかした？」

説明するのも面倒だな。

「わかったわ！お気に入りであったからもう一着欲しくなったけど、どこで買ったか忘れちゃったのね！んもゝあわてんぼさんっ！」

人差し指で鼻をちょんつてされた。無駄に鳥肌が立つ。

しかし当たらずとも遠からずか？少なくとも忘れたという部分は合っているし、結構自然だ。

よし、以後服のことを尋ねる時はこのようにして聞こう。記憶喪失云々を説明するよりは現実的で面倒がない。

「そんなことよりまずはお着替えしましょうか。」

うん？こら、思考の最中に脱がすな。

それにしても、随分と脱がすのに手慣れているな。

「ちょっと…店長さん？一応まだ私わたくしがいるんですけど。」

「あらあら、純情ねゝ。えっと、あなた…お名前は？」

「ゼロだ。」

「そう、ゼロちゃん。こちらにいらっしやい。」

そういつて店の奥に連れていかれる。変なことしたら殺すからなと殺意を滲ませておく。

「やだ、その視線…あたし感じちゃう。」

……こいつのこと苦手かもしれん。

それよりもまず言っておかないといけないのがひとつ。

「ピンク以外で頼む。」

そういったときのユリのがっかりした顔を見て、言っておいて良かったと思った。

後編へ続く

初仕事の物語 「前編」(後書き)

1話5000字程度を基準にしているので前後編に分けました。
だけどそれ以上を基準として頑張るべきですか？

やってやれないことはないけど文章がさらに崩壊しそうで怖いです。
後編は二人で実際に仕事にです。

早ければ明日にでも投稿します。

初仕事の物語 「後編」

ユリのセンスは色以外は至って普通だった。

通された別室にはピンク以外の色の服や装備品が並んでいた。

そこで服を脱いだ後ああでもないこうでもない color 服などの装備品を当てながら唸っている。

「うん、これに決めたわ。」

そういつて渡された装備を装着する。

ユリが選んだのは白と黒を基調として所々に赤い装飾が施された軽鎧一式だ。

銅には金色の模様が刻み込まれている。

「うん、あたしの見立て通りよく似合ってるわ。やっぱりあなたの白い髪に映えるのは黒よね。だけど、白黒で地味になりがちのそれを紅翔石^{こうせうせき}で作られた装飾が彩ってる。んゝ完璧っ！」

やり切った顔で親指を立てるユリを横目に俺も姿見で自身の確認をする。

悪くはない。第一印象はそんな感じだ。

防御力よりも機動力に重点を置いた軽鎧は銃を持つ腕の動きを阻害することはない。

「悪くないな。これでいい。」

「あらん、ゼロちゃんも気に入ってくれたのね。それじゃあリーラちゃんにお披露目しなくっちゃ！」

そいつって呼ぶまで出てこないでと言が残してからリーラの元へ戻

るユリ。

「ゼロちゃん、出ていらっしやい！」

ほどなくしてユリの呼ぶ声に部屋からでる。

視界がピンクに染まる。

そういえば店はこんなだったなと思いながら辺りを見るとリーラと目が合う。

「あつ…えつと…お、お似合いですわ。さ、さすがは店長さんの見立てですわね。」

しどろもどろになりながら俺から視線を外してユリに向き直る。

「あらあら、リーラちゃんったらゼロちゃんがかっこよくなっちゃって照れちゃったの？」

「そ、そんなことはありませんわ。ただ、みすばらしい格好からまともになったので驚いただけです。」

「素直じゃないんだから。」

自覚はしていたがみすばらしかったのだな。

「ユリ。俺の着ていた服の修復は出来そうか？」

「ええ、問題ないわ。とは言っても少し材料が特殊みただからお取り寄せしなきゃだめね。だから少なくとも見積もっても修復には一月はかかると思うってちょうだい。」

「直るのならなんの問題もない。」

材料を取り寄せなくてはいけないほどなのは予想外だが、しばらくはこの町に滞在するつもりなのだ。

気長にできるのを待とう。

「それはそうとおいくらですの？ 恥ずかしい話ですけど、持ち合わせがそれほど多くありませんの。」

「そのへんの抜かりはないわ。ブレストガード一式で三万Rよ。」

それが果して高いのか安いのか俺には判断がつかなかった。

しかし、特に気にした様子もなく代金を払うリーラを見れば、高すぎるわけではないらしい。

「ウフフ、代金丁度確かに受け取りましたと。そうそうこれはサービスね。」

そういつてユリは俺に布で出来た物を渡す。

「これは？」

「ただの外套よ。今の季節は陽が沈むと寒くなっちゃうからね。ほら、リーラちゃんにも。」

「えっ？ わっ… っと。よろしいんですの。」

同じものをリーラに投げてよこしたユリはリーラの言葉にいいのいいのと微笑む。

「ありがとうございます。ほら、ゼロさんも！」

「ユリ、ありがとう…」

リーラに促されユリに礼を言う。

「… ありがたいが」

言わなければいけないことがある。
先に礼を言ってしまったことで若干言いつらい雰囲気になってしまったが

「違う色はないのか？」

ピンクを着るよりはマシだ。

ユリは不満そうにしていたが、青の物に換えてもらった。
ちなみにリーラが貰った物は薄いピンクだ。

まあ、俺が着る場合に比べて遥かに似合っている。

ユリも自分の趣味を押し付ける相手は選ぶべきだな。

とユーかピンクを宛がわれて喜ぶ男はそうはいないだろう。

今、俺達は町の西門まで来ている。

あれから道具屋で諸々の準備をしてここにいる。

危なくなったら飲めと腰には回復薬を2つほど用意している。

これからアーガルドの町から徒歩2時間ほどのところにある森に行く。

そこに目的のモギヨの樹もイビルラビットも生息しているらしい。

「さあ、行きますわよ。」

前を歩くリーラの腰にはいつの間に装備したのか剣が尻いである。
結構細身だ。多分レイピアだろう。

そんなことを考えながらリーラの後ろを歩く。

「モギヨの樹は以前に依頼で偶然目にしたことがありますから、ま

ずはそこに行きましょう。」

「イビルラビットはどうすれば遭える？」

「偶然に期待するしかありませんわね。でも、大丈夫ですわ。これから行く森に1番多く生息している魔物はイビルラビットですから、すぐに遭遇するでしょうし。」

森に着くまでの間にモギヨの樹の大体の場所や森に生息する魔物の特徴などをレクチャーしてもらった。

森に生息する最もランクの高い魔物はDランクで生息数も少ないため、滅多に遭うことはないらしい。

「着きましたわ。」

リーラが立ち止まる。

目の前には鬱蒼と生い茂る木々。

「これから森に入りますわ。いきなり魔物に襲われることもありま
すから気をつけて下さいませ。」

リーラが先に森の中に入る。

森か…

俺が目覚めたのも森の中だったな…

あの時は魔物に襲われるどころかその姿すら見ることはなかった。
運がよかったのだろっな。

俺もリーラに続いて森の中に入る。

目当てのモギヨの樹はここから1時間ほど先の泉の近くらしい。

「ゼロさん、いましたわ。」

10分ほど進んだところでリーラが声をかけてくる。
その視線の先を辿ってみればなにかの死体に群がる動物が三体見える。

「あの死体は、野性のアブーですわね。」

アブーとは家畜として飼育される魔物で安いながらも質のいい肉質で家庭の料理でよく使用されている。

かく言う俺自身もアブーの唐揚げは好きでヤムウの町で初めて食べてから、また食いたいなと思っていたため、昨日も頼んだ。

「アブーに群がっているのがイビルラビットですわ。」

イビルラビットは体長1メートルほどで長い耳と眉間から伸びた30センチほどの角が特徴だ。

「まずは私の戦い^{わたし}をお見せいたしますわ。」

「相手は三体いるようだが大丈夫か？」

「問題ありませんわ。」

俺も加勢してやろうと思ったが自信たつぷりのリーラの顔を見てその考えを胸に留めておく。

リーラは剣を抜きながらゆっくりと極力音をたてないようにしながら近づいていく。

彼女の剣は予想通りレイピアだった。

3メートルほどまで近づいたところでイビルラビットは近づく者に気付く。

それと同時にリーラはスピードを上げる。
速い。

振り向いたイビルラビットの一体は何もすることなく頭を貫かれる。レイピアは突くことに特化した片手剣だ。

そのありようは斬ることにあまり向いていない。

リーラは一体の頭を突いた次の瞬間には抜き取って次に狙いを定めている。

そして残ったイビルラビットは仲間を殺されて敵と認識したのか角をリーラに向けて威嚇するように唸る。

動いたのは二体同時。いや、リーラも含めて三者か。

二体はリーラに向かって突っ込む。連携も何もない。ただ自分の敵を排除するための本能的な動き。

対してそれを予測していたのか、リーラは真横に動いている。

体制は崩れていない。

そのままさつきまで自分の居たところに突っ込んできた一体を串刺しにする。

そしてすぐに離れると残った一体に目を向ける。

そいつは殺されたもう一体と同じようにリーラの居たところに向かっていたがタイミング的に少し遅かったためにまだ生きている。

でも、もう終わりだろう。

どちらが強いのか先ほどの攻防を見れば明らかなのに、体制を直したイビルラビットはまだ戦う意志を見せているのだから。

明らかに蛮勇。

エンシエントワームもそうだったが魔物とは知能が低いのだろうか。勝てない相手に向かつてもしかうがない。

それとも仲間の敵討ちのつもりか。

その最期はあまりにも呆気なかった。

リーラは同じようにただ突っ込んでくるイビルラビットの攻撃をかわし、その頭を突いた。

その一撃でイビルラビットの体は地に沈む。

とゆーかこの女全部頭刺したぞ。えげつないな。

「もう大丈夫ですわ。どうでしたか？」

リーラが聞いてくる。さて、どう答えるか…

「頭が弱点なのか？」

「別にそんなことありませんわ。イビルラビットは弱点らしき弱点はありませんの。その分全体的に弱いですから。私は武器の都合上^{わたくし}、ヒット&アウェイが基本ですから手っ取り早く頭を突かせていただきますしたわ。」

俺の問いに答えながらレイピアに付いた血を拭い、鞘に納める。

「それにしてもいきなり三体とは幸先いいですわね。これなら思ってたよりもずっと早く戻れそうな気がしますわ。」

今度は懷からナイフを取り出す。何をするつもりなのか。

そう思っているリーラはおもむろにイビルラビットの角を掴み根本に刃を当てて切り取る。

「ずいぶん簡単に切れるんだな。」

「え？魔物の死後30分ほどは討伐部位をはじめとした体が柔らかくなっているのは常識ですわよ？」

そうなのか。とりあえず俺も討伐部位とやらを刈り取ろうとリーラが2番目に倒した個体に近づく。

なるほど…昨日の受付が言っていたことがやっと理解できた。確かにわかる。死んだイビルラビットの角に違和感を感じる。

これが討伐部位の証。

また、魔力が強く残っているということなのだろう。

あの女が不思議そうにするのも仕方ない。これがわからないのはお

かしい話だ。

俺はイビルラビットの角を持つと買ってから1度も使っていないダガーでリーラと同じように角の根本に当て切り取る。感触はパンをナイフで切ったような簡単な物だった。こんなものなのか？

「死後1時間もしくはと完全に硬直し、一流の刃物でもなければ、どんな魔物であっても討伐部位を刈り取るのは骨がおれるようになってしまいますから。迅速にすますることが何よりも重要ですわ。」

最後の一体の刈り取りを終えたリーラが近づいてきた。

「角はこちらの袋に入れて下さいませ。」

そういつて差し出されたのは赤ん坊が丁度入るくらいの大きさの袋だ。

「これは軽い空間魔法がかかっていて見た目の10倍ほどの大きさの物が入りますの。」

わざわざどうしてと思っていたことが顔に出ていたのを察したのだろう。

リーラは袋について説明してくれた。

しかし、魔法の袋か。便利な物だな。

「さあ、先へ進みましょう。」

俺がリーラの持っていた袋に角を入れると先へ向かって歩き出す。戦闘による疲れは全く見えない。

そのまま魔物に出会うことなく歩くこと1時間。

「着きましたわ。」

見えたのは泉だ。そしてその近くに花畑がある。

「どうやら魔物もいるみたいですね。」

その声に注意深く見てみると泉のそばで休憩しているのである。イビルラビット二体とそこから少し離れたところに別の魔物が一体いる。

「あっちの魔物はなんだ？」

指を指して聞いてみた。

「あれはウルフですね。イビルラビットと同じくFランクの魔物ですわ。」

あれもFか。ウルフとやは今は地面に伏せている。

「都市の近くはFランク以上の奴はそうはおりませんわ。結界がありますもの。」

つまり、結界によって高ランクの魔物たちが近づかないようにしているわけだ。

「か何にも言わないのに俺の疑問に答えるとは、リーラの説明スキルが上がったらしいな。」

「どっちにいきます?」

リーラが聞いてくる。

どうするべきだろうな。

動きを1度見たイビルラビットか。

数の少ないウルフか。

「…………もう、いいですね。数が多いイビルラビットを私が片付けますわ。ゼロさんはウルフをお願いします。」

悩む俺に痺れを切らしたのか、リーラはそう勝手に決めると動き出す。

甚だ遺憾だがリーラはもう動いている。こちらも動こう。

イビルラビットを迂回しながらウルフに近づく。

ウルフは気づいていないのか目を閉じて今だ地面に伏せている。

と、ウルフの耳がピクツと動きを見せる。それを見て歩みを止めたがウルフは起き上がりこちらを見る。

見つけたようだ。

俺はダガーを引き抜いてかまえる。

ウルフは四足歩行の獣で鋭い牙を剥いている。

その足から生み出される爆発的な脚力でもって俺に近づいてきたウルフは俺の腕に噛み付く。

「あぶねっ」

間一髪でかわしはしたが危なかった。

ウルフはすぐに体制を戻す。

俺はウルフの追撃がくるまえに攻撃を仕掛ける。
攻撃は最大の防御だ。

「はあっ！」

あっさりかわされた。

くそっ、もう一回。

そう思いダガーを振るが体制が崩れているためまたしてもかわされる。

そしてその隙を突いたのか左腕にウルフが噛み付く。

「ぐわあっ！」

痛い。すっげー痛い。

防具がなかったらやばかった。

っーかわいい加減離せ！

腕を振り回してウルフを離す。

「痛ってーなこのっ！」

ダガーで切り掛かる。

俺の腕から離れたウルフは体制を崩している。

殺った

しかし、予想と違いウルフはまたまた俺の攻撃をかわす。

そして俺に飛び掛かってくる。

押し潰された俺の上にウルフが乗っかている格好だ。

そのまま首に噛みついてこようとしたウルフの攻撃は膝を立ててウルフを弾くことで何とか回避する。

「ガウッ」

俺が起き上がるまえにウルフが跳びかかってくるが転がって回避する。

しかし、かわしきれず爪に頬を切り裂かれる。

腕といい、頬といい痛えんだよ。

俺は腰の銃を引き抜く。

その途端流れる時間はゆっくりになる。

ウルフは丁度着地し、こちらに向き直る途中だ。

よくもまあ、やってくれたな。

「死ね。」

銃を撃つ。狙いはウルフの脳天。

狙った場所に寸分の狂いもなく命中し、ウルフは絶命する。

「ざまあみる！」

「ざまあみるじゃありませんわ！」

俺の声とは別にヒステリックな叫び声。
リーラだ。

「何をやってるんですかあなたは！」

怒られる意味がわからん。

「何を意味わからないみたいな顔をしてるんですの！まったく、銃で倒したら元も子もないではありませんか。」

「何がだ？」

「何がって…あなたがダガーの扱いを覚えるためにきたというのに銃で倒しては意味がないでしょう。それに銃の弾が一発一万Rなのに対してウルフの討伐部位は五百Rですわ。かなりの赤字ですわ。」

……まあ、それは置いておいて私も悪かったですわ。いきなりおひとりにしてしまつて。」

俺は子供か。

「それにしても…クスツ、傑作でしたわ。なんですよ、あのへつぴり腰。^{クスクス}素人以下ですわね。」

失礼な。慣れてないんだから仕方ないだろ。

「あら、拗ねてますの？仕方ないですから少し私と練習^{わたくし}しましょう。と、その前にウルフの討伐部位を剥ぎましょう。」

ウルフの討伐部位は上下の四本の歯だった。四本一組で一体分の報酬が支払われるらしい。

そして、

「違いますわ。なんで体を全部相手に向けますの？常に半身を心掛けなさい。銃を構える時はできてますでしょ？」

こんなことや

「センスがありませんわね。」

などなど結構ぼろくそに言われながら小1時間ほど教授を受ける。

「とりあえず教えた型を練習してくださいな。その間に私はモギ^{わたくし}ヨの葉を採取してきますわ。」

そのまま放置された。

言われた通り型をこなす。

めんどくさいがリーラに笑われたのは失態だ。

我慢してやるしかない。

ここまでの練習でやっと素人並になったと言われた。

「ちっ、見てやがれ…」

今にうまくなるに決まってる。

そう思いながらリーラが戻ってくるまで型をやり続けた。

「さて、モギヨの葉の採取も終わりましたし、あとはイビルラビツトの角を5つ採れば終わりですね。ゼロさんも次は私も側わたくしに付きま

すから頑張らましょ？」

結局だが今回の仕事で俺がダガーで魔物を倒すことはなかった。

また、今回で銃の残弾もなくなった。

もう少しなんとかしなければな。

そう思いながらリーラが依頼達成の報告をしてくるのをギルドの外で待つ。

不本意ではあるがFランクの仕事であり、なおかつ倒した魔物もFランクだけなのでポイントは全て俺のものとなる。

ウルフー体しか倒してないがな。

強くなろう。

そう思った。

これは俺が決意を新たにした初仕事の物語

初仕事の物語 「後編」 (後書き)

魔物の名前は適当にそこら（直感とか響き）から引っ張ってつけて
ますます。

次どうしよっかな

ある日の物語（前書き）

作者もヒロインも暴走しています

ある日の物語

〈SIDE リーラ〉

朝の陽射しに自然と目を覚ます。

今日は天気も良好、ついでに言えば私の体の調子も良好みたいですわ。^{わたくし}

ベッドから起き上がり備え付けの洗面台で顔を洗い、鏡で細かくチェックする。

瞳は特に注意深く。

うん、特に問題もないようですわね。

次に髪を梳かした後にそれを結び上げます。

冒険者として生きると決めたとき以降人前に出るときはずっとこの髪型にしています。

「よしっ！」

鏡で自分の姿を見ながら気合いを入れます。

これはここ最近するようになった癖です。

あの自分勝手な方と共に行動するに当たって気合いを入れるにこしたことはありません。

いえ、別に悪いことではないんですけどね。
そうして部屋から出る。

向かうのは隣の部屋。

このなかにいるであろう人物は初仕事以来、時間があれば武器の扱いの練習をしているようです。

^{わたくし}私もそれを見ていることがほとんどです。

意外と文句は言って来ません。

真面目なんでしょうね。

今ではFランクの魔物であれば一対一で戦って勝てるようにはなっ
てきました。

でもはつきり言ってその戦い方は素人に毛が生えた程度。

いえ、最初のあれから考えると目覚ましい進歩ですわ。

それにしても、普段偉そうにしている方の失態は思った以上に面白
いものですわ。

つい、助けることを忘れてしまいましたもの。

隣の部屋をノックします。

これはもはや毎日の日課になりつつあります。

彼が起きていない場合はそのまま一人で下に行き、食事を摂ること
になっています。

でも、あの人は寝起きはいいみたいなので、そんなことは一度もあ
りませんけれども。

程なくして扉が開かれ見せた顔に朝一番に伝えるべき言葉を告げま
す。

「おはようございます。」

私の言葉にゼロさんはああとだけ返します。
わたくし

まったく、一度も一回でちゃんと返してくれませんかね。

「お、は、よ、う、ございます。」

「ああん？」

「お、は、よ、う、ござい、ま、す。」

「ああ…おはよう。」

やっと返してくれましたわ。

これが私^{わたくし}たちの朝の風景。

SIDE ゼロ

朝の気配を感じて起き上がる。

本日もまた天気がいいことだ。

備え付けの洗面台に行き顔を洗う。

そして簡単に寝癖を直す。

髭も剃る。うん、顔色に異常なしだ。

「問題なし。」

あの初仕事から数日、暇を見つけては型をこなしたりなどダガーによる訓練をしている。

Fランクの魔物は一対一ならば倒すことも出来るようになった。

ウルフへのリベンジも果たせた。

あれから銃の弾を求めて町中の装備屋をまわったが生憎と見つけることはできなかった。

そんなに手に入らないものなのか？

それにしても、今日はどうするか。

仕事を受けるもよし、ダガーの訓練を集中的にやるのもいいな。

などと考えていると部屋のドアがノックされる。

多分リーラだろう。

毎朝こうやって俺の部屋までくることがいつのまにか当たり前になっている。

「おはようございます。」

開けて第一声がこれだった。

いつもとなんら変わらない笑顔でリーラが立っている。俺はそれに
ああとだけ返してやる。

「お、は、よ、うございます。」

「ああん？」

聞こえてる！何だと言っんだ。

「お、は、よ、う、ご、ざ、い、ま、す。」

そこでやっと理解した。

こいつ挨拶を返してほしいのか。

「…ああ、おはよう。」

少し迷ったが挨拶を返して何か不都合があるわけではない。

「それでは朝食を採りに行きましょ。」

俺が挨拶を返したことに満足したのかリーラは宿にある食堂に行く。
俺達は同じ宿にずっと泊まっている。

というのも長期滞在は割引されるからだ。

宿の店主の飯が思いの外うまかったことも理由の一つだ。

食後、そのまま食堂にて今日の予定を確認する。

「本日は個人で自由ということにしませんか。」

リーラから告げられる。

「別にかまわない。」

とは言っただものの、さてどうするべきか…

なんだかんだリーラとは毎日一緒に行動してるしな。

個人で自由といきなり言われても何をするべきか困る。

「それでは先にしますわ。」

そう言っただけリーラは席を立つと宿から出ていく。

その姿を見ながらコーヒーを啜る。

専門店に比べるべくもないが、許容できる範囲のそれをゆっくり胃に流し込みながら食後のひと時を過ごす。

「さて、俺も行くか。」

席を立つて宿から出る。

背後からいつてらっしゃいと店主から声がかかってきたので手を挙げてそれに応えてやる。

店主は毎日全員に言ってるみたいだ。当たり前かもしれないがご苦労なことだ。

宿を出た俺が向かうのはギルドの後ろにある訓練所だ。

ここはギルド登録者が武技を高めたり、パーティーの連携を高めたりするための場所だ。

ここに向かうのはもちろんダガーの訓練のためだ。

ウルフへのリベンジを果たしたとはいえ、リーラからはまだ一本も取れていない。

銃さえ使えれば絶対に負けなはいえ、何となく悔しい。

訓練所に入った俺は黙々と型をこなす。

「よお、兄ちゃん。俺と一戦やらねえか。」

黒い髪を逆立てた男が話し掛けてくる。

重鎧に身を包んだその姿はいかにもな戦士体型だ。

俺が一人で型をやっていると大体こういう奴らが声をかけてくる。そうして決まってこう言うのだ。

「ただやるのも面白くねえから賭けようぜ。」

どうやら俺の動きは連中にとっていいカモに映るのだろう。

いつもならそばにいるリーラが何のかんの理由をつけて断るのが今日はいない。

ならば実力を試す意味で戦ってみるのも面白いかもしれん。

「いいぞ。掛け金はお互いの持ち金全部だ。」

「おっ、豪気だねえ。んじゃやりましょっか！」

男はいきなり切り掛かってきた。

男の獲物はバスターソードと言われる巨大な剣。

動きは遅いが一撃の破壊力は絶大だ。

最初の一撃は余裕でかわせた。

リーラの動きに比べれば大人が全力投球した石と子供の全力疾走くらい速さの違いがある。

それに相手は大きな誤りを犯した。

俺は二千Rしか持ってねえよ！

俺は相手の攻撃後の隙に切り込んだ。

SIDE リーラ

朝食を採りながらふと考える。

私達^{わたくし}お互いのことを全然知りませんわね。

立場上私^{わたくし}のことを知られるのは困りますが、ゼロさんのことは知っておくべきではないでしょうか。

とは言っても真正面から聞いてはまた忘れたとか言われてはぐらかされてしまうのは目に見えています。

と、そこで妙案が浮かびました。

それはやはりゼロさんをおひとりで行動させてみようということです。

そしてそれを陰からこっそりと拝見させてもらう。

毎日一緒にいては見えるものも見えなくなってしまう。

ここは一つゼロさんおひとりで行動させることで今まで見えなかったゼロという人物の人となりを見せてもらいましょう。

「本日は個人で自由ということにしませんか。」

「別にかまわない。」

私の提案にゼロ^{わたくし}さんは特に疑問もなく頷いてくれました。
計画スタートですわ。

「それでは先に出ますわ。」

そう言って先に宿から出ます。

さて、ゼロさんはどんな姿を見せてくれるのでしょうか。今から楽しみです。

失敗しましたわ…

宿を出て物陰に隠れること1時間半。

今だゼロさんは宿から出てきません。

そういえば食後はコーヒーかお茶をゆつくり飲むのがゼロさんのスタイルだということを失念してましたわ。

いつも私がせかすので途中で切り上げてくれましたが…

ほつとくとこんなに長いんですね。

これから私も^{わたくし}いるときは食後のコーヒータイムは早めに切り上げてもらいましょうと決意を固めました。

そんなことを考えているとやっとゼロさんが宿から出てきました。そしてどこかに向かいます。

追跡開始ですわ。

とは思いましたがゼロさんの向かった先は別に面白いこともない場所でした。

「訓練所ですか。」

今のゼロさんがここでやることなんてダガーの訓練以外有り得ません。

真面目ですのね。

面白くはありませんでしたが、感心はしてしまいます。

おひとりで黙々と教えた型を繰り返すゼロさんを隠れながら観察する^{わたくし}私。

我ながら怪し過ぎる気がしますわ…

もう少しやるでしょうし、飲み物でも買ってきてきましょうか。

そう考えていたときゼロさんに声をかけていく戦士系の方が目に入りました。

よくいるんですね。

素人相手に賭試合を挑んでくる愚か者が…^{わたくし}

私がそばにいるときはすべからくお断りしていましたが、嫌な予感がしますわ…

案の定ゼロさんは試合を了承したらしく、相手が切り掛かっていきます。

ゼロさんはわりと余裕をもってかわしたようにみえましたが、私はわたくし気が気でありませんわ。

ゼロさんたらご自分の実力わかってますの？

幸い相手は大した実力ではないようですがはつきり言って勝つ要素は薄いと言わざるをえません。

大前提として、間合いが違いすぎます。

身長ほどもある大剣と刃渡り20センチ強のダガー。

ゼロさんが相手に攻撃するには懐に入る必要があります。

現にゼロさんはかわすばかりで攻勢に出れていません。捕まるのも時間の問題ですわ。

と、そこで相手が転倒します。

ここからはゼロさんが足を引っ掛けたのが見えました。

ゼロさんはニヤニヤした顔で相手を見下ろしながら何か言っています。

その途端相手は起き上がり先程よりも猛然と攻撃を仕掛けます。

その間もゼロさんの口は動いています。

一体何を言ってるんでしょうね。

ここからでは全然聞こえません。でもきつと相手を挑発するようなことを言ってるんでしょうね。

ゼロさんが何か言ったたびに相手の顔が怒りで赤く染まっていく様子がわかります。

でもそれと比例するように攻撃は単調になっていつています。

あ、また足を引っ掛けましたわ。

怒りで足元が見えていないようですわね。

それにしても…

ゼロさんは転んだ相手を指差して笑っています。いえ、もはや大爆

笑ですわ。

こっちまで笑い声がハッキリと聞こえます。

ああ、訓練所内にいた者全員の視線を集めてますわ。

相手の方も恥ずかしいでしょうに…

しかしそれだけで終わ리と言っわけではありませんでした。

ゼロさんはそれから二度ほど相手の足元がお留守になったのを狙って足を引っ掛けて相手を転ばせました。

そしてその後は決まって指を差し大爆笑。

この場にいた誰もが思ったことでしょう。

性格が悪すぎると…

場がヒくような戦いが動いたのはそんなときでした。

猛攻をかわされ続け、幾度も転倒させられた男の体力はかなり消耗されたらしく、動きはだいぶ鈍っていました。

そこへ放たれたのはゼロさんのダガーの投擲。

そう、投擲です。

ゼロさんはダガーを相手に投げつけました。

持っている唯一の武器を投げるなんて一か八かの賭もいいところですよ。

でも、ゼロさんの投げたそれは鎧の脚部の隙間に命中しました。

ダガーが刺さり、相手の動きが止まります。

それを好機とみたのかゼロさんは相手にタックルしていきましました。

体格差はありましたが、相手を倒すことができ、馬乗りになりました。

俗に言うマウントポジション。

そこから殴る、殴る、殴る。

ってちよつと！

誰か止めた方がよろしいんではありませんの？

私が行くべきでしょうか…

あつ、やつと止められましたわ。

ゼロさんは止めた方に何か告げると戦った相手の懐を漁ってからダガーを抜き取り、立ち上がりました。

そのまま訓練所の外に出ていきました。

賭金の回収でいいんですわよね？

まあ、相手から吹っかけた戦いですから自業自得と思つことにしましょう。

今はゼロさんを追うことが優先ですわ。

ギルドを出たゼロさんはあっちこっちをブラブラしていました。

ようやく腰を落着けたのはお昼を少し過ぎた頃、いきつけとなっている喫茶店で軽く昼食を採り今はお決まりである食後のコーヒーを飲んでいます。

わたくし私も気づかれないように入店し、悟られないように近くの席に座っています。

というか飽きはじめています。

訓練所以来なんの動きもなく長いであろうコーヒータイム。

もう、ゼロさんをつけるのはやめてもつと有意義に過ごしましょうか…

ガタッ

あら？ゼロさんが立ち上がりました。おかしいですわね。コーヒータイムに放た入ってからまだ20分ほどしか経っていません。

ゼロさんが会計を済ませ外に出ていきます。

怪しませないように少し時間を置いてから私も会計を済ませて外に出ました。わたくし

そこで見たものは

女性に声をかけているゼロさんの姿。
いわゆるあれですわ。

ナンパ

デートやいかかわしいことに誘う目的で通りすがりの異性に声をかける行為。

…最低ですわ。

何か一気に冷めました。

馬鹿みたいですわね私^{わたくし}…

なぜか胸がムカムカとしてきます。

とりあえずゼロさんは死ぬべきですわね。

そのままゼロさんに背中を向け歩きだします。

さつき軽く食べたというのになんだかお腹が空きましたわね。

SIDE ゼロ

対峙して1分、こいつあんまり強くないな。

俺は男の攻撃をかわしながらそんなことを考えていた。

攻撃は見えている見えすぎてくるくらいだ。

そもそもリーラの動きだつて見切つてはいる。

ただ体が反応しきれないだけだ。

しかし、この男の攻撃は体がついてくる範囲内だ。

これなら体力が続く限りはかわし続けることが可能だろう。

そしてその可能性を高めるため挑発に次ぐ挑発行為を繰り返した。

とは言ってもあまりに面白かったので相手を何度もコカした。

そのせいか相手の攻撃は単調になりはした。

しかし自分自身の攻撃の決めるには欠けている。

どうしようかと思ったとき不覚にも汗でダガーが手から離れてしま

った。

丁度振りあげたときだったため結構な勢いですっぱ抜けたダガーは吸い込まれるかのように相手の脚部の隙間へ刺さった。こんな使い方もありだな。ともかくこいつは僥倖だ。こんなチャンス逃せない。

そう思った俺は相手にタツクルする。

体格差はあったがマウントポジションをとった。

とりあえずボコボコにしよう。

恨みはないがこれで決めなきや勝ち目はないしな。とりあえず殴った。

なかなかいいなこれ。

「ま、まいった…や、やめ、やめてくれ…」

何か聞こえたけど別にいいか。ちよっとワクワクしてきた。

「おい！そろそろやめてやれ！」

後ろから肩を掴まれる。

ん？少しやり過ぎたか？

ボコボコになった男の顔を見てちよっと反省した。

「んじゃ、俺の勝ちってことで賭金は没収だ。」

「容赦ないねキミ。」

制止にきた男を無視して倒れた相手の懐を漁る。見つけた財布袋はまるごといただき、ダガーも回収して訓練所から出た。

財布袋には七万R弱入っていた。

思わぬ臨時収入をどうするべきか。

そうだな…世話になっていいるリーラに何かプレゼントするのも悪くない。

そう思つて町をブラブラしたのだがめぼしい物はない。

昼食を採るために寄つた喫茶店で過ごしていると窓の外に一人の女が通りかかる。しかし、目に入つたのは女自身ではなく彼女が身につけている腕輪だ。

ちらりとししか見えなかったが、なにか感じられた。

急いで会計をすませ、女のもとへ向かう。

「おい、その女止まれ。」

俺の声に女が立ち止まり、こちらに振り向く。

「えっと…私ですか？」

「そう、お前だ。」

「ナンパならお断りしたいんですけど…」

「お前ごときをナンパするほど飢えてはいない。」

「それはそれで失礼ですよ…それで、なんの用件なんですか？」

「お前の腕輪どこで買ったんだ？」

「これですか？可愛いでしょ！？」

俺の質問に腕輪がどんなふうにか可愛いかと延々と説明し始める女。別にそんなこと聞いてないんだが…

それよりなんか背中に寒気が走った気がしたが気のせいかな？

「んで、結局どこで買ったんだ？」

女の話が途中であつたが割つて入る。
これ以上聞いているのも苦痛だ。

「あつ、そういえば用件はそれでしたね。これは裏通りのバーバラというお店の店長さんの手作りなんですよ。」

「その店はどこにある。」

「えっと…だから裏通りにある、お菓子の家みたいなピンク色のお店ですよ。」

「…そこはユリって言うお姉系が店長やってたりするのかわ？」
「知ってるじゃないですか。」

あそここの店名バーバラっていうのか…

女から離れてバーバラへと向かう。

相変わらずテンションが下がる店構えだ。
中に入るとユリの姿がみえた。

「あら、ゼロちゃんじゃない。生憎と頼まれた服はまだ直ってないのよ。ごめんなさい。」

「いや、今日は別件だ。お前が作ったというアクセサリーを見たいんだが。」

「あらあら、自分のかしら。それともプ・レ・ゼ・ン・ト？」

あ、ウザい。

「あら、そんなウザそうな顔しなくてもいいじゃない。あたし謹製のアクセサリーね。こつちよ。」

ユリに店の一角へと案内される。

そこにあるものは女が身につけていた腕輪類をはじめ、指輪や首輪など多岐にわたる。

そこで目に入ったのは一組の耳飾り。

緑の鉱石の取り付けられたソレはリーラによく似合うのではないか
と思った。

「これをくれ。」

「あら、目の付け所がいいわね。そのイヤリングには知り合いの魔法彫金士に頼んで護りの加護が入っているのよ。身につけるだけで防御力があがる魔法具としては最小ね。」

「いくらだ。」

「うーん一点ものだけどゼロちゃんになら特別に十万Rで売っちゃ
うわ!」

「じゃあ、五万Rだ。」

「半額っ!?!いきなり半額なの!?!」

そう言われても手持ちは六万R強しかない。

しかし、どうしても欲しい。

「なら、五万Rを頭金にしてローンで買ってやる。」

俺がそう言つとユリは少し考えるそぶりを見せる。

「うちは一括ニコニコ現金払いがモットーなのよね。……だから
いわ。五万Rで売ってあげる。だからこれからもご贖員にしてね。」

ユリは色の趣味は悪いがいい奴なんだよな。

だけど進んでこの店に来たいかと問われれば真っ向から否定してやる。

ユリの店で耳飾りを購入して宿に戻ってきた。
もう陽は沈んで晩飯の時間帯だ。

俺はリーラの部屋をノックする。

無論先程購入した耳飾りを渡すためだ。

特に意味のない贈り物だ。変に躊躇っても意味はない。

「誰ですの？」

部屋内からリーラの声がする。

「俺だ。」

「……何のようですの。」

なんか声に棘がないか？

「とりあえず開ける。」

「……分かりましたわ。」

扉が開かれると明らかな不機嫌顔のリーラがいた。

〈SIDE リーラ〉

食べても食べてもムカムカはおさまりません。

とゆーかひどくなってます。

完全に胃もたれですわ……

少し食べ過ぎましたわね。

そう思った私は宿へと戻ってきました。
わたくし

ベッドに横になって思い出すのはゼロさんのナンパの現場。

男って最低な生き物ですわ…

そんなことを思っているうちに瞼が重くなりウトウトとし始めました。

そんなときに部屋の扉がノックされました。

「誰ですの？」

返ってきたのは今一番ムカついている男の声です。

「俺だ。」

俺だ。って何様のつもりなんですの？ちゃんと名前を名乗りなさいな。

「……何のようです。」

不機嫌を隠さずに言っただけでした。

「とりあえず開ける。」

傲慢。この一言に尽きる存在ですわ。

「……分かりましたわ。」

会って一言言っただけでしょう。そう思って扉を開けました。

「邪魔するぞ。」

ゼロさんはいきなりずかずかと人の部屋に入ってきました。
デリカシーつてものがありませんわ。

それにしても、何のようです…

まさか、ナンパに失敗して代わりに私をわたくしどうこうするつもりじゃ…
汚らしい。

早く出ていって下さらないかしら。
わたくし

私の視線に耐え兼ねたのかゼロさんが口を開きます。

「これお前にやるよ。」

そういつて投げて寄越したのは小さな箱。

一体何が入っているんでしょうか。

気になって開けてみます。

中に入っていたのは緑色の宝石をあしらったイヤリング。

「これは？」

「ユリの店で買った。お前に似合うと思ってな。」

確かに店長さんのお店の一角にこんな感じのものがありましたわね。
てゆうかこれはあれですの？

いわゆるご機嫌とりのプレゼントってやつですの？

まったくなにかプレゼントすれば女が喜ぶと思って…

え？

プレゼント？

ゼロさんが？

わたくし
私に？

これはどうゆうことですか？

はっ！

も、もしやゼロさんは私にわたくし気があるのでしょうか…
こ、困りましたわ。

そんな経験ありませんからどうしたらいいのか…
とりあえず返事はしとくべきですわね。

「ゼロさん！お気持ちは嬉しいですが、まずはお互いを知りません
と。」

「んあ？何言ってるの、おま…」

「ああっ！ダメですわ。こんな時間に結婚前の若い男女が同じ部屋
にいるなんて。」

「はあっ？こんな時間って…まだ7時ぐらいだぞ？」

「いけませんわ。ゼロさん出ていって下さい。」

「えっ？おい、ちよっ、押すな。」

無理矢理ゼロさんを部屋の外に出しました。

いつのまにか好意を抱かれていたなんて青天の霹靂ですわ。
嫌な気はしませんけど。

知らず知らずのうちに胸のムカムカは収まっています

替わりにドキドキと高鳴り始めています

その日の夜はゼロさんにもらったイヤリングを眺めながら過ごしま
した。

これはそんなある日の物語

「……………何^がどうな^ったんだ。」

ある日の物語（後書き）

ただただフラグを立てたかったです！

基本リーラはヤキモチ妬きっ娘にしたいんでこんな感じになっちゃいました。

ゼロが首輪と言ってるのはネックレスだと思って下さい。

ユリの店に存在はしてますが、あそこで登場したのはネックレスなんです。

ソレ系の道具は存在はしてます（出ることは多分ありません）

王都への物語 「脱アーガルド編」

「アーガルドを出ますわ。」

発言者はリーラ。

アーガルドに来てから一ヶ月と半分が過ぎた頃だった。

これまでの間にこなした依頼や討伐した魔物で俺のランクもEクラスに上がっている。

また、つい先日ユリから俺が以前着ていた服の修復が終わったからと受け取ったばかりであった。

しかしそれにしても急だな。

「なんでまた…」

「なんでもなにもそういう依頼を受けたからですわ。」

また無断で依頼を受諾したらしい。とは言っても俺の実力に合ったものを選んではいららしい。

「どんな依頼だ？」

「商隊の護衛で王都まで行くことになりますわ。」

「商隊だと？」

アーガルドに来るまでの道中を共にしたあいつらのことなのか？
悪いわけじゃないが、Cがなにかしたら間違って殺しそうだな…

「今回の依頼は前の方達とは別の商隊の方達ですわよ。」

俺の意図を察したのかリーラが補足する。

「いつ、発つんだ？」

「明日の朝ですわ。」

だから急すぎるだろ。

整える荷物なんかは特にないがアーガルドという町でやりたいことはまだある。

屋台の飯とか食ってないのがあるんだぞ？

「不満そうですね…確かに急だったかもしれませんが、ゼロさんのためでもありますのよ？」

「どういう意味だ？」

「これまででダガーの扱いはそこそこまともになってきましたが、あなたの本質は銃技にあります。王都なら多分ですが確実に銃弾を手に入れることができますわ。」

そういえばそうだった…

最近ダガーばかり使い過ぎて忘れかけていた。

アーガルドに来た当初暇を見つけては町にある武具屋に赴いたのだが、どこの店にも銃弾はなかった。

てゆーかアーガルドって王都の次に栄えているとか聞いた気がするんだが、それでこれなのかと呆れた記憶がある。

「うん、そうだな。王都に行くのも悪くない。」

「それは結構ですわ。でもまあ、依頼は受けてしまっていますから、あなたがどう言おうと行くことにかわりありませんけど。」

なんか水をさされた気分だ。

「では、各自で明日の準備をしましょう。」

リーラはそう言って席を立った。

つられる様に俺も席を立つ。

やることはひとつ。

今日中に屋台の料理を制覇してやる。

一夜明けてリーラと共に商隊との待ち合わせ場所に向かっているのだが俺の気分は重い。
なぜなら

「まったく…食べ過ぎで体調不良なんて情けなさ過ぎですわ。」
ということだからだ。

そしてここまでやったにも関わらず結局屋台の料理を制覇することはできなかった。
二つの意味で気が重い。

「はい、お薬ですわ。」

リーラに差し出された錠剤を飲み込む。
味はわからん。

「お水で飲み込むものなんですけど…必要ありませんわね。」

リーラは俺に渡そうとしていた水の入った瓶を引っ込める。

「依頼者に会う前に少しはしゃっきりしておいて下さいな。」

そのまま歩きだす。

もう少し労りの心が欲しいものだ。

それから程なくして待ち合わせ場所である北門に着く。

薬が効いてきたのか気分は大分楽になってきた。

「相手の方が先に着いていたみたいですね。」

リーラの声の通り前方にはこれから護衛することになるであろう幌馬車が停まっており、横にはいかにもお人よしっぽい人相の男が立っている。

「君達が私達の護衛をしてくれる冒険者さん達かな？」

男が声をかけてくる。

ひ弱そうな声だな。

「ええ、そうですわ。私が^{わたくし}リーラ。そしてこっちがゼロと言います。」

リーラがギルドカードを見せながら自己紹介をする。

「では、こちらで紹介しましょう。みんな出てきなさい。」

男の声に姿を現したのは女が一人に男女の子供が二人だ。

「私達は家族で商売をしていてね。私がジオレン、こっちが妻のプ

グレー。あと、息子のルアップに娘のベリーだ。」

次々に紹介される。

家族か…

俺の家族はどんなだろうな…

そんな感慨に耽っていると息子…ルアップだったかが俺の顔をじつと見ている。

「なんだ？」

「お前ホントに冒険者か？オレでも倒せそうだぞ。」

失礼なガキだ。教育に失敗してるな。

俺は腰の横にくくり付けているダガーを引き抜きルアップの首に寸止めする。

「あれ？俺を倒せるんだったら今のくらいはかわすそぶりを見せろよ。俺の気分次第でお前の頭と体をさよならさせることぶしっ！」

殴られた。

犯人はリーラだ。

「大人気なすぎますわ！すいません、この人馬鹿なんですの。」

「いえいえ、今は息子が悪いですから…」

そこからリーラとジオレンの謝罪合戦。

俺は世の中の厳しさを教えてやってただけなのだがなぜ殴られる。というか最近リーラの態度がでかくなってるないか？

「女に負けてんのかよ…」

ルアップの弦きは無視してもいいが…
大人として伝えなければならぬこともある。

「世の中というのは正しいものが淘汰されるんだ。覚えておけ、ガキ。」

つねに正しいはずの俺の意見が通らないことなんてこの一月半の間に何度も経験した。

正しいことをやるためには力がある。

銃という力を失っている俺はまさに翼を奪われた鳥だ。

とりあえずリーラには銃弾を手に入れたら今一度どちらの立場が上なのかわからせてやる。

「意味わかんねえし…」

ガキには高尚すぎたか。

アーガイルを出てから数時間。

御者は基本的にジオレンが担っている。

リーラは周囲を警戒しながらブグレーと娘の話相手になっている。
そして俺はと言うと

「なあ、強くなる方法教えてくれよ！」

なぜかルアップに懐かれていた。

「なあつてば！」

旅立ってからずっとこの調子だ。めんどくさいことこの上ない。
いや、ウザい。

「オレ、強くなりてえんだよ。母ちゃんやベリーを守れるくらいに。」

父親は含まれないらしい。

というかこのしつこさは前に体験したことがある。

会ったばかりのリーラがこんな調子だったな。

とゆーかこいつ何良さそうな御託並べてやがる。

母親や妹を守りたいだと？

それを聞いて『なんていいやつなんだ！こいつに俺の知る全てを教
えてやらなければ！』とかなるとでも思ってたのか？

しかし、このままではこいつの追求は止むことはないだろう。

だったらあの時のように適当に答えてやるのが俺のためになる。

「歳をとっていきや自然に強くなる。」

「オレは今強くなりてえんだよ。それに父ちゃんは弱いじゃねえか。」

確かに強そうには見えない。

とゆーか弱いだろうな。

「いや、お前の親父は普段は力を隠してるんだ。それにあと三段階
の変身を残している。」

「いや、明らかに嘘だろそれ。兄ちゃんオレが子供だからって馬鹿
にしすぎだ。」

ガキは大人の言うことを素直に聞いてりゃいいというのに可愛くね
ーな。

ま、たとえ可愛くてもウザいものはウザいわけだが。

「んじゃ、一回死んでみる。うまくいきや今度は強い生物に生まれ変わることができる。」

「今強くなりてえっていつてんのに…てゆーか兄ちゃん中身色々と腐ってんね。」

憐れみを含めた目で見られた。

「っ！ かなんで10歳かそこらの色んな毛の生えそろってないガキに憐れまなければならん。」

こいつには教育的指導が必要だな。

死なない程度に痛め付けるなら言い訳もたつたろ。

「ゼロさん、自重して下さい。」

殺気が漏れたみたいだ。

リーラから制止がかかる。

あいつ、周囲を警戒しながら女同士で話もしてさらにこちらに注意を払っていたらしい。

器用なことだ。

そうだ。なぜ気づかなかった。

これを言えば邪魔なルアップをリーラに押し付けることができる。

「俺よりもその女の方が（接近戦は）強い。教わるならあいつに教われ。」

「女に教わるなんてカッコ悪くて嫌だよ。だから兄ちゃんに聞いてるんじゃん。」

馬鹿だなー。とかガキがのたまってる。
なにかが切れそうだ。

とゆーか…

「強くなりたいたいというのに格好を気にしているようじゃ強くなつてなれねえよ。その程度なら二度と声かけんな。不快だ。」

リーラにダガーを教わった俺を否定された気がした。

自分より優れた者なら女も男もない。

事実俺の師匠は男だが他のメンバーの女達のことと尊敬していた。

……俺は何を言っている。

師匠とは誰のことだ？

メンバー？なんのこと…

うっ、頭が割れるように痛い。

こんなことはじめてだ……

そのまま俺の意識は闇の中へと沈んでいった………

目を覚ました時に見えたのは建物の天井。
俺はベッドの上にいた。

「どれくらい気を失っていたんだ。まさか、もう王都に着いたのか？」

起き上がって辺りを見回す。

情報を集めようにも周りにはこれといったものはない。

その時ドアが開いて部屋に入ってきたのはルアップだった。

「お、兄ちゃんやっと思きたのか！待ってる、今姉ちゃんたちよん

で来るから。」

そう言っただけでまたドアの外に出ていってしまう。
色々説明してほしかったがリーラの方がいいだろうと思いつつ。

程なくしてドアが開かれる。

入ってきたのはルアップとベリー兄妹とリーラだ。

「ジオレンさんたちはお仕事でしたので来ませんわ。それにしても随分長いことお休みだったようで。仕事もせずに眠るなんて本当にどうしようもないですね。」

顔が心配していたと物語ってるんだが触れないでやるほうがいいのか。

「お姉ちゃんはこう言ってるけどお兄ちゃんが倒れてすごく心配してたんだよ。」

ベリーが俺に耳打ちするように話す。声的にはリーラにも聞こえているのだろう。顔が赤くなっている。

まったく、空気の読めない奴とは恐ろしいな。

「どれくらい寝てたんだ。」

触れないでやるのが大人だ。

リーラも触れてほしくないだろう。

「5日ほどですわ。ここは王都とアーガルドの中間地点にあるブル
ーテという町の宿屋ですわ。」

そんなに寝ていたとは…

「ここで10日間ほど商売や仕入れをするそうですからゆつくりと休みなさいということですね。」

「俺のせいで予定が狂ったのか？」

「いえ、もともとそのつもりだったみたいですね。ですからしっかりと養生して後半の道のりは前半の汚名を返上なさい。」

確かに倒れたのは失態だ。

汚名と言われても仕方ない。

「ごめんな、兄ちゃん…オレのせいで倒れたんだろ？」

このガキは何を言ってるんだ？

……ああ、こいつとの会話中に倒れたんだっとな。

まったく、変なところで素直な奴だ。

「お前のせいなんかじゃない。単に俺の体調管理不足だ。それよりお前の親父さんに迷惑かけてしまったな。少し手伝ってやるとしよう。」

そう言って立ち上がる。

今回は完全に俺の失態だ。なにかしないと申し訳ない。

「まだ寝てたほうが…」

「もう充分寝てたんだろ？眠気覚ましの運動だ。」

そう言っただけで外に出ると荷物の積み降ろしをしているジオレン夫妻が見えた。

近づいていき、それを手伝う。

二人は俺のことをとても心配してくれていた。

後にリーラも含めた全員が合流し、全員で仕事をした。

しかし、俺は知らなかった。

そんな俺達を遠くから見つめる視線があったことに

これはそんな王都への物語の一幕

「やっとみつけた！」

王都への物語 「脱アーガルド編」(後書き)

よくある記憶の断片が戻るお話です。

主人公食いしん坊キャラになっている印象ですね。

彼は記憶喪失というか欠如しているので知識としては知っていてもどんなものかはわからないものばかり。

その中で食べるということがものを知る上で一番の楽しみであるという設定です。

食べることも好きですが、知識の収集なんですよ。

そう思ってくれば幸いです。

ちなみに王都への物語は今回もいれて3〜4話になる予定です。

次回は新キャラ登場です。

(商隊の家族は行きずりの関係なんで厳密にはキャラとしていれてません。)

王都への物語 「ブルーデ編」 (前書き)

予告通り新キャラ登場です

王都への物語 「ブルーテ編」

アーガイルを出立してから7日目（実際にはそのうち5日寝てた）

結果的にジオレンたちの手伝いは飽きたので次の日には何一つやっていない。

といっても売るのはプロであるジオレンたちのほうがいいだろうし、俺が買い付けをするわけにもいくまいという戦略的な事由から控えたといったほうが正しい。

リーラなどは「それでもお手伝いできることはありますわ。」とか言って何やらやっているらしいが俺には関係ない。

「花の冠できたからお兄ちゃんにプレゼントしてあげる。」

そう、何も手伝わてないから暇だという理由でジオレン夫妻の娘であるベリーの面倒を見ることになってしまったが、手伝いという名の邪魔をするくらいならまだマシといえる。

「わゝ！お兄ちゃんスッゴク似合う！」

ちなみにルアップは売り子の手伝いでいないため、俺とベリーの二人きりだ。

それにしても、花畑で幼女と戯れる俺……この光景が端から見ても口リコンに見えないかが目下の心配ごとだ。

「まあお兄ちゃん！何か言ってよ！」

「……ん？ああ、悪い悪い……少し考えごとしてたんだ。」

「どんなこと？」

「ガキの相手はめんどくせえなあ〜って。」

「ふ〜ん、そうなんだ〜」

あれっ？流された…

ベリーはまたしても花で冠を作りはじめる。

「お兄ちゃん、ベリーといると退屈？」

流したと思っていたがちゃんと聞いていたらしい。

ベリーはこちらを見つめて首を傾げる。

はつきり答えてやるのが今後のためだな。

「退屈ってわけじゃない。ただ単に面倒なだけだ。」

「じゃあベリーおとなしくここにいてから好きに生きていいよ。」

それを聞いていい娘だと思いはしたがさすがにダメだとも同時に思う。

得てしてそうやって安心して目を離れたすきに何かをしでかすのが子供だ。

脳が警鐘を告げている。

ここでベリーから離れるのは正しくない…

「そうしたいのは山々だが、外というのは驚愕と不思議に包まれて
いるからお前から目を離すのは無理なことだ。」

「じゃあベリーと遊んで！」

聞き分けのいい娘だな…

しかし、少女よ。

ホントはもう一押し欲しいという輩も存在するからあと一回は確認
の意味で本当にいいの？とか聞いた方がいいぞ。

まあ、後々困るのは俺ではないから言ってやらんが
それに遊んでと言われたなら答えてやらねばなるまい。

「何をすればいい？」

面倒くさいが、相手してやろう。

「じゃあ、鬼ごっこ！」

「はい！」

鬼ごっこ……二人でか。

それは逃げる側と追う側がエンドレスで移り変わる地獄の遊び……
っ！か今誰がいなかったか？

辺りを見回すと俺の背後に一人の女がいた。
赤みがかかったピンク色の髪を肩ほどまで伸ばした赤目のとろそ
うな顔の女だ。

最も特徴的なのは体の全面にある二つの大きな山。くだらないかも
しれないが、脅威の胸囲と言わせて貰おう。

まあ、そんなことはどうでもいい。

俺はこいつが近づいてきた気配を感じなかった。もしかしてヤバイ
奴だったりするんのか？

「……お前は誰だ？」

「お姉ちゃんはお姉ちゃんです！」

……………何て言った？

「もう一回頼む。」

「だからあゝ、お姉ちゃんはお姉ちゃんです！」

こいつは別の意味でヤバい奴だった…
いわゆる電波系なのか!?

ベリーの頭上にも?が浮かんでいる。

「もう少しかみ砕いて言ってくれ。」

「まあ!お姉ちゃんはお姉ちゃんだってば!」

「誰の姉ちゃんだよ?」

「君の!」

ビシッと指を指される。

つてなに!?!俺の姉だと!

「本当に俺の姉なのか……」

「そうよ。」

女は優しく頷く。

まさかこんなところで俺の姉に会うことになるとは人生わからないものだ。

「お姉ちゃんはお兄ちゃんのお姉さんなの?」

「お嬢ちゃん……お姉ちゃんの名前はシャルロットって言つての。
だからシャルって呼んでね!」

ほう…俺の姉の名前はシャルロットと言つのか。

「うん、わかった!ベリーの名前はベリーって言つての。よろしくね、
シャルお姉ちゃん!」

輝かんばかりの笑顔でベリーが自己紹介する。

対するシャルロットの顔はなぜか晴れない。

「えっと、ベリーちゃん？お姉ちゃんのことはシャルって呼んでね？シャルお姉ちゃんとか最後にお姉ちゃんって付けなくていいから。」

「ん。でもベリー、シャルお姉ちゃんって呼びたいな。」

「うん…はつきり言わないとわかんないか。お姉ちゃんはベリーちゃんのお姉ちゃんじゃないから、お姉ちゃんって呼んで欲しくないの。とゆーかお姉ちゃんって呼ばれると不快。お姉ちゃんをお姉ちゃんって呼んでいいのはこの子だけ！」

シャルロットに抱きしめられた。

柔らかいものが腕に押し付けられる感覚がする。

まあ、それは置いておいて大人気ねなこいつ。

「別にそれくらい許してやれよ。」

「だめよ！お姉ちゃんの弟は君だけ！他には妹も弟もないの！」

そういつてさらにぎゅっと抱きしめてくる。

少し変人ではあるが、そういつてもらえて悪い気がしない。

「ベリー、すまないが言うとおりにしてやってくれ。」

「うん、わかった。じゃあ、シャルちゃんって呼ぶね。」

「そう、それでいいのよ。よろしくねベリーちゃん。ところで…」

シャルロットが俺を見つめる。

「弟君の名前は何て言うの？」

……こいつは何を言ってるだろう。
弟の名前を聞いてきやがるなんて。
…まさかとは思うが。

「お前も記憶がないのか？」

そんなことって……

「へ？なんのこと？」

こつちが何のことが聞きたい。

「いや、お前も記憶喪失で俺の名前がわからなくなってるだろう？」

「うん？お姉ちゃん別に記憶喪失なんかじゃないよ」

どういうことだ？

だったらなぜ俺の名前がわからないんだ？

さつきベリーに話してやった外での不思議ってやつに直面してしまった。

「記憶喪失でないならなぜ俺の名前がわからないんだ？」

「だって初めて会ったし……」

さらに謎が深まった。

考えろ、考えるんだ俺。

考えられる理由としては

俺が母親の腹にいるときに両親が別れてしまい、今まで会ったことがないため俺の名前を知らない。

いや、だったらなぜ俺が弟だと判断できた？

だとすればそもそも……

「俺たちに血縁関係はあるのか？」

そう、こいつが弟だというから無条件にそれを信じてしまったが、そもそも人違いの可能性がある。

「それは多分ないかな。だって昨日たまたま見つけたんだし。」

「見つけた？何をだ？」

「理想の弟！」

要約するとたまたま見た俺のことを理想の弟だと思ったということか……

なんだそれ！！

記憶を取り戻す新しい手掛かりだと思ったのにただの変人じゃねーか。

ちよつと運命の再会かもって思った気持ちはどうすんだよ！

「お前さあ……」

「お前じゃなくってお姉ちゃんって呼んで！」

「お前、ただのバカだろ？」

「あつ、だからお前じゃなくて

「うるさい、だまれ。」

相手してるのが馬鹿らしくなってきた。

シャルロットの抱擁から離れ、ベリーに近づく。

「ベリー、ここは危ないお姉さんがいるから違つところに行こつ。」

「え？お姉さんだって……キヤー！もうかわいーっ……！」

あれは無視しよう。

「えっ！ベリー、シャルちゃんと一緒に鬼ごっこする。」

「あっ、そういえばそうね。じゃあ最初の鬼はお姉ちゃんになってあげる。じゃあ10数えるから逃げてね。むふふっ弟との青春のページ開幕ね。」

数を数えだすシャルロット。逃げるベリーと差し出した手をそのままに固まる俺の図式の完成だ。

昨日といい今日といいベリーには空気を読むという感覚が抜けているらしい。

いや、子供だからと許容するべきか？

いやいや、甘やかしてはダメだ。

世の中は厳しいんだ。

「弟君っくかまえた。」

…捕まった。じゃない！

「お前、どうゆうつもりだ？」

「なにが？」

「お前が、俺のことを理想の弟だと思った。まあ、これは百歩譲っていいでしょう。だけどあえて言ってやる。だからどうした？」

「どうしたもこうしたもせっかく出会った運命の姉弟ですもの。」

仲睦まじく生きていきましょ。」

「残念だが俺はここに王都へ行く途中で寄ったにすぎない。お前とはあと数日でお別れだ。」

「それなら問題なしよ。ちょうどお姉ちゃんもギルドの仕事で王都に行くところだったんだもの。」

「お前もギルドの冒険者なのか？」

「そうよ。はいっこれ。」

シャルロットは懐からギルドカードを取り出し俺に見せてくる。
まあ、見せられても文字が読めないから意味はないが…
とりあえずE、Fランクではないみたいだ。

「ね？お姉ちゃんもギルドの冒険者でしょ。ん？お姉ちゃんもつてことは弟君も冒険者なの？」

「ああ、このとおり。」

俺もシャルロットに倣ってギルドカードを見せる。

最近気づいたが冒険者が自己紹介するときギルドカードを見せるのは慣例として半ば義務付けられているらしい。

「ふーん、弟君のお名前はゼロって言っただけ。じゃあ、ゼーちゃんだね。」

しまったと思った時にはもう遅い。シャルロットに名前を知られてしまった。

とゆーかゼーちゃん？

「もうー！二人ともなにしてるの？」

遠くでベリーが怒っている。

誰も追いかけてこず、様子を見てみたら立ち止まっている俺達を見て怒らせてしまったらしい。

「ベリーちゃんごめんね。さあ、ゼーちゃん。あなたが鬼よ。」

シャルロットが俺から離れていく。
さて、俺はどうするべきか。

馬鹿馬鹿しいと帰るのも一つの手だが、シャルロットとベリーを二人きりにすることはできない。つまりどっちにしろベリーを捕まえないといけないらしい。なら標的はベリーだ。俺は駆け出した。

結果的に鬼ごっこはベリーが力尽きるまで続けられた。

というのも俺がわりとムキになってしまったことが理由だ。

どうして子供の遊びというのは大人が本気でやると楽しいんだろう。それにしてもシャルロットは何物なんだ？

俺が鬼の時は全力で走っても追いつけないし、ちょっと目を離れた隙に姿が見えなくなる。

結局一回もシャルロットを捕まえていない。

また、シャルロットが鬼の時はあっさりと俺を捕まえる。

そのくせベリーのことは追いかけず、ベリーが鬼になったときは手を抜いて捕まりやがる。

この関係はさながらジャンケンのようだ。……俺が勝てるのは幼女だけっていうのは若干情けないが

ともかく、ベリーは力尽きて寝てしまっているし、そろそろ陽も沈む。

帰るべきだろう。

俺は眠っているベリーをおぶる。

「じゃあな。シャルロット。」

そう言ってベリーを起こさないようにしながら立ち去る。

歩いていると後ろに気配を感じたので振り返るとそこにはシャルロットの姿があった。

「なんでいる？」

「なんでって、お姉ちゃんもゼーちゃんと同じ宿だし、それにずっと一緒だよ。」

同じ宿なのか…

とゆーかこいつの言動からして付き纏われるのだろうな。

さて、どうするべきか。

考えるのは面倒くさい。

それに変人のようだがあまり嫌いではないしな。

まあ、こいつをどうするか判断はリーラに任せよう。

リーラならなんとかしてくれるはずだ。

これはそんな王都への物語の一幕

王都への物語 「ブルーテ編」(後書き)

変態姉キャラのシャルロット登場です。

変態というよりはむしろブラコンです。考えてたよりまともな部分
がなかったです。

まあ、彼女については後々のお話で見守って下さい。

次回はリーラ視点でこの話の続きからです。

王都への物語 「ブルーテ・リーラ編」

アーガイルを出立してから7日目、ゼロさんがいきなり倒れて目覚めてから1日が経ちました。

昨日は殊勝な態度を見せていたゼロさんも翌日には普段通りに偉そうに俺が手伝っても邪魔になるだけだから好きにさせてもらうなんて言っていました。

まあ、ジオレンさんの娘のベリーちゃんの面倒を見るようにお願いされて渋々引き受けていましたけど。

日中私はルアップくんと一緒に奥さんのプグレーさんのお手伝いとして売り子をしていました。

扱う商品は日用品や本など多岐にわたります。

ブルーテは人口1万5千人ほどの都市でアーガイルと王都の中間に位置することもあり、かなり活気があります。

事実、並べられた商品の売れ行きは好調であるといえました。

気分よくお手伝いを終え、今はルアップくんと一緒にゼロさん達が帰ってくるのを待っています。

ゼロさんがちょっとした爆弾を抱えてきていることを知らずに……

「……………で、そちらはどなたなんですか？」

私の視線のさきにはゼロさんとそのゼロさんの腕に抱き着いている

一人の女性がいます。

身長はゼロさんと同じくらいで肩ほどまで伸びたストレートの髪は赤みがかったピンク色で、少し垂れ気味な薄いパープルの瞳は整った美貌と相まって彼女に優しい印象を与えています。何よりゼロさんの腕を挟み込んでいる豊かわたくしということを通り越した二つの膨らみは見るものを圧倒します。私も決して小さい方ではありませんが、彼女と比べられるのは遠慮します。

ちなみにベリーちゃんがゼロさんにおぶられていますますがそこは割愛いたします。

「こいつは……」

「お姉ちゃんはゼーちゃんのお姉ちゃんです〜！」

ゼーちゃん？

……とゆーかお姉さん！？

こんなところで謎だったゼロさんの素性の手がかりが…

「こいつの自称だ。」

「……自称？それはどういうことですか？」

「こいつとは血の繋がりが無いことはおろか、今日が初対面だ。」

初対面！？

だったらどうして、その初対面の方と腕なんか組んじゃってるんですか！

そう声を大にして言いたいのを堪えたのはただ単にここで声を荒げてもみつともない気がするからという見栄です。

「へ、へえ〜。そのわりには腕なんか組んじゃって仲がよろしいんですのね？」

「これはこいつが勝手に」

「運命の姉弟ですものゝ仲がいいのは当然よ。」

さらに抱き着く力を強めたのが端から見てもよくわかります。
ゼロさんも嫌がるそぶりくらいみせなさい！

「運命の姉弟は結構ですが、あいにくこの町にはギルドの護衛依頼の途中で少ししか滞在しませんわ。ですからあまり仲良くしていいとお別れするときが辛くなりますわよ。ですから早急に離れなさい！」

「こわい。貴女そんな顔してるとあとでシワになっちゃうわよ。」

どんな顔してるか知りませんが余計なお世話です。

「それに、離れるなんてありえないわ。だってゼロちゃんとはこれからずっと一緒だもの。」

「……どういことですか？」

「せっかく出会った理想の弟と離れるなんてありえないでしょ？だから、お姉ちゃんはゼロちゃんについていくことにしました！」

何を言ってますのこの人……

ゼロさんに視線を移すと困ったように笑いながらどうにかしろと口パクで言ってきました。

どうにかしろということはどうにかして欲しいということ。

つまりはこの女性につきまとわれて困っているということですね！
とりあえず交渉の席につかなければいけませんわね……
でもその前に

「話はあとにしてベリーちゃんを宿のベッドに連れていきましょう。」

それから座ってじっくりお話ししよう。」

そう言っでゼロさんたちを先導して歩きます。

いつまでもベリーちゃんをおぶっでいてはゼロさんもお辛いでしょ
うし、もし交渉が難航してはベリーちゃんを起こしてしまひます。

場所は変わってゼロさんのお部屋です。

ベリーちゃんは私の部屋に寝かせました。

現在この部屋には私とゼロさん、そして問題の女性と何故かさつき
から一言も喋っでいないルアップくんがいます。

「なんでルアップくんがいますか。ベリーちゃんが寝ている部
屋にいなさい。」

小声でルアップくんに言っで、ルアップくんは私と女性を交互に見
比べました。

「いや、これが噂の修羅場っでやつだろ？ちよつと見てみたくて。」

別にそんな血生臭い場ではないのですが…

何より私とゼロさんは恋人関係にあるわけではありませんし。

……まあ、ゼロさんに好意を抱かれていますことは否定しようもない
事実ですが、

別に私はゼロさんのことをどうこっ思っでいません。
ゼロさんのことなんて…

「なんだ？」

「な、なんでもありませんわ！」

ゼロさんの顔を見ていたら目が合ってしまった。

なぜか動悸が速くなってしまいます。

冷静になりなさい私。^{わたくし}冷静に冷静に。

「コホンッ。まずは自己紹介をしましょうか。私の名前はリーラ^{わたくし}」
フラウン、冒険者でゼロさんとはパーティーを組んでいます。」

名前を言うと共にギルドカードを提示します。

「リーちゃんか。お姉ちゃんはシャルロット、シャルって呼んでね。」

そう言っただけで彼女もまた、ギルドカードをこちらに見せてきました。
そこには彼女の名前であるシャルロット^ルセフォンという文字の他に彼女のランクが記載されています。

記載されていたのはCランクという文字。

私の一つ上です。

ランクがすぐにあがるのはEランクまでで、そこからはランクがあるのは難しくなっていくます。

Bランク以上は超一流と言われる世界、つまりシャルロットさんのCランクはいわば一流の証みたいなものです。

リーちゃん呼ばわりは驚きましたが、それ以上にこのことに驚いたこともあり呼び方についてはスルーしてしまいました。

「へえー、シャル姉ちゃんって結構すごい冒険者なんだね。」

私が考えている間に同じようにギルドカードを見たルアップくんが感心した様子でシャルロットさんに話かけます。

しかし、対するシャルロットさんはなぜか今まで浮かべていた優し

げな雰囲気が見え、無感情な顔でルアップくんを見つめています。

「…えっと、シャル姉ちゃん？」

「それです〜！」

「うえっ!？」

「そのシャル姉ちゃんってやめてください〜!お姉ちゃんはゼーちゃん以外に弟も妹もいないので〜、君に姉ちゃんなんて呼ばれる筋合いはありません〜！」

「う、じゃあなんてよばいいの？」

「シャルちゃん、もしくはシャルさんでお願いします〜」

「んじゃあシャルさんで〜すごいんだね？」

「そんなことはありませんよ〜。」

あまりのことに開いた口が閉まりません。

子供相手に何言ってるんですかこの人？

実はすごい人って思ってたすぐに印象は覆りました。

変な人…

これでこの人の印象は確定です。

「そ、それはそうとシャルロットさんはゼロさんについていくと言っていましたけどこういうおつもりですか？」

「どういふつもりって一緒に王都に行くってことよ〜。」

「一緒について〜一応私^{わたし}たちは依頼の途中ですよ。」

「問題ないわ〜。お姉ちゃんも依頼のお手伝いするし〜。報酬もちろんいらないう〜。あつ、二人ってパーティー登録してるのよね〜。空気があつたらお姉ちゃんも入れて〜。」

そうきましたか…

確かに戦力が増えることは歓迎するべきことです。

また、ギルドの規則では依頼を受けた時点で関与していない場合は

どんな場合でも報酬を受け取ることはできません。
でも、あとあとから助力したからといって報酬を要求してくるかた
もさらにいらつしゃいます。

それを最初からいらないと明言しているのですから面倒な争いが起
きることはないでしょう。

……でも、なぜでしょう。

なんか腹がたちます。

とゆーか……

「いい加減離れなさい！」

なんでまだ腕を組んでいますの？

「姉弟だし、普通でしょ？」

「血は繋がってませんでしょ！？」

「小さな問題よ」。前世では姉弟だっただろうし。」

「前世はどうでも、現世は違います！」

「も、なんで貴女がムキになるの？」

「なってますん！」

なんで私が^{わたくし}ムキにならなければならいんですか！

「……………修羅場だ。」

「違いますっ！」

ルアップくんは何を言ってるんですか。

「ふ、これがモテる男は辛いというやつか……」

イラッ！

この人何言ってますの？

思考がお気楽すぎます。

誰のせいでこうなっていると…

とゆーか別に私は^{わたくし}あなたのが好きなわけじゃありません！
殺意を込めてゼロさんを睨みつけてやります。

「……冗談だ。場を和ませようと思ってな。」

「時と場所を選びなさい！」

まったく、何を考えているのやら…

ん？そういえばゼロさんがどう思っているのか聞いてませんでしたわね。

「ゼロさんはシャルロットさんのことをどうするべきだと思いますか？」

「あん？そうだな…変な奴ではあるが、嫌いではないかな。抱き着かれんのも慣れたしな。だけどどうするかはお前に任せる。」

「任せるって、ゼロさんはどうしたいんですか？」

「どうでもいい。お前が一緒でも問題ないというなら連れていけばいいし、お前が嫌なら意地でもこいつから逃げる。」

「逃がしません」

「黙れ。……どうするかはリーラ次第だ。」

なんか責任重大ですわ。

とゆーか何故か場の空気が受け入れる雰囲気になってませんか？
……とりあえずは一人で考えたいですわね。

「少し部屋で考えますわ。」

そう告げてゼロさんの部屋から出ました。

自分の部屋に戻って椅子に座って考えるのはシャルロットさんのこと。

彼女の印象は

第一に変な人。

あれが演技という可能性もあります。でも、多分あれは本気で言ってますわね。ルアップくんに言うときの目が本気でしたもの。

第二に綺麗な人。

あのゼロさんがデレデレしてましたもの。

気のせいかな、なんだかイライラする気が…

第三に強い。

あの時は少し冷静じゃありませんでしたが、今思えば動きが洗練されていましたわ。

ゼロさんに抱き着いていながらもあれなら相当な実力者かもしれないません。

……でも

「なーんかシャルロットさんが気に入らないんですのよね…」

「それは嫉妬ね。」

私のつづやきに答える声。
わたくし

その声の方を見るとベッドの上にベリーちゃんが座っています。

そういえばここに寝かせてましたわね。

「……何のことですか?」

「だからあ、リーラお姉ちゃんはシャルちゃんに嫉妬してるんですよ?」

「なんで私がシャルロットさんに嫉妬しなくてはいいけませんの!」
わたくし

「だって、シャルちゃんゼロお兄ちゃんに対して積極的だし。」

「そ、それでなんで私が嫉妬わたくしを…って嫉妬なんてしてませんわ！」

「そういうことにしとく。」

子供とは思えない悪い笑み。

この娘、ろくな大人にならないんじゃないや…

「あのね、シャルちゃんは悪い人じゃないよ？だってベリーと一緒に遊んでくれたし、優しくったよ？」

何となくわかります。

「まあ、リーラお姉ちゃんにしたらライバルが増えて気が気じゃないだろうけど」

「そんなことはありません。」

「えー、だってゼロお兄ちゃんが倒れたとき

「その話はやめてください！」

あんなにうるたえるとは自分でも思いませんでした。

今思うと恥ずかしい限りです。

まあ、理性を総動員させてなんとかジオレンさんの依頼の続行はできましたが…

引き返すというジオレンさんの提案に飛びつきそうになりましたが完全に違約金コースでしたし。

一応診た限り眠っているだけでしたから。……寝過ぎでしたけど。ともかくシャルロットさんをどうするか。

とは言ってもベリーちゃんとの話でいたい決めましたわ。

「私わたくし、シャルロットさんを仲間に入れようかと思っています。」

彼女がパーティーに入ればパーティーランクはD。私^{わたくし}としてもゼロさんにとってもプラスになります。

「そっか、ベリーは嬉しいけど、リーラお姉ちゃんは大変だね。」

「別に大変ではありません。」

「だって、ゼロお兄ちゃんとられちゃうよ?」

「だからどうだというんですか?」

ホントにどうしたというのか?

ゼロさんがシャルロットさんとどうなるうと関係ありません。

……ないんです。

とりあえずは明日、シャルロットさんを仲間に入れることを皆さんに説明しなければなりませんわね。

今日はベリーちゃんが悪い大人にならないように言い含めることにしましょう。

まだ陽が沈んでそんなに経ってはいませんがゼロさんたちに会う気はなぜありませんでした。

その日はそのままベリーちゃんと過ごしました。途中食事を持ってくるくださったブグレーさんも交えて女だけの語り。

次の日、シャルロットさんを仲間にすることを告げました。

少し痛んだ胸を無視しながら…

これはそんな王都への物語の一幕

王都への物語 「ブルーテ・リーラ編」(後書き)

前回と少し異なる描写が…
理由はそのうちに……

次は王都へ到着します。

王都への物語 「王都到着編」

リーラがシャルを仲間に入れると判断して俺達に告げてから2日が経った。

この2日でシャルロットのことをシャルと呼ぶことになった。（姉さんと呼んで欲しいみたいだが妥協させた）

相変わらずシャルは事あるごとに俺に抱き着いてくる。

ちよつとは迷惑だと思うが、害があるわけではないから好きにさせている。

しかし、その時のリーラの刺すような視線が気になるといえば気になる。

それにしてもシャルがCランクだったとは、少し驚いた。

というのもCランクになれば一流だと聞かされたことがあるからだ。

その上のBランクは超がつく一流、Aランクは英雄。Sランクに至ってはもはや伝説級らしい。

ん？そういえば俺はBランクのエンシエントワームを倒しているな…

つまり、俺の実力は（銃ありで）超一流というわけだ。

まあ、当然ではあるわけだがそう考えると気分がよくなってくる。

「なあに考えてるの〜？」

シャルが後ろから抱きついてくる。

「別になんでもない。」

「お姉ちゃんに隠し事はダメよ〜。」

「話すほどのことでもないだけだ。あとお前は姉ではない。」

「強情ね〜。けどいつかお姉ちゃんって言わせるわ〜。」

そりゃ立派な目標なこと。

絶対言わねーけどな…

「それにしても、シャルは出発の準備は出来たのか？」

俺達は明日にはブルーテを発つ予定だ。

だと言うのにシャルは俺かベリーのそばに常にいる気がする。

いや、ベリーのそばにいるというよりベリーがそばにいた
ほうが正確だろうか。

結構懐いているみたいだ。

まあ、ベリーはリーラと共にいることも結構あるみたいだが……

「問題ないわよ。だって支度はもう終わってるし。」

「そうなのか。」

だと言うのなら問題はない。

「だから、ゼーちゃんはお姉ちゃんと買い物に行こう。」

「だからに繋がった意味がわからん。」

「準備が終わってお姉ちゃん暇なの、それに今日でこの町ともお別れだし…」

確かにゆっくりとこの町を見た覚えがないな…

いつとも誰かと一緒だったし…

「買い物は他の誰かを誘え。俺は一人で町を廻る。」

「え？お姉ちゃんも…」

「黙れ。ついて来るといふのなら一生姉と呼ぶことはないと思え。」

「……………わかったわよ。」

これが2日の間に見つけた対シャルの最終の合言葉。

これを言えばシャルは結構なんでもする。
リーラよりも御しやすい存在だ。

事実こいつの金でこの町の特産品を食いまくった。
新たな財布の追加だ。

最近金を出し渋るようになったリーラよりは使える。

しかし、かといってあんまり搾り取りすぎると弊害を生むかもしれないのでほどの見極めが重要だ。

そんなこんなで町を歩くこと小1時間。

「なあ、次はあれ食おうぜ。」

俺はなぜかルアップのガキを引き連れることになっていた。

理由は町をふらついている俺を見つけてルアップがついてきたというだけだ。

追い払ったのだが帰る様子はない。

めんどくさくなってそのまま引き連れていたのだが、こいつが食うわ食うわ。

しかも俺の金でだ。

……くそつ、シャルを連れてくればよかったと後悔したが、後悔先に立たず
とはよくいったものだ。

「てめえ、人の金で飲み食いしてんじゃねえよ。」

「んなこといったって、オレ金持ってねえもん。それに奢りじゃないって出世払いだって言ってるんだろ。」

出世しそうにないやつ出世払いほど信用できないものはない。

とは言っても払ってやってる時点で俺も甘いのか…
まあいい。

でかくなったときに例えルアップが貧乏だったとしても元をとるまで財産は根こそぎ没収だ。

「で、今度はなんだ？」

「あれだよ、あれ！」

ルアップが指し示した先には香ばしい匂いの屋台がある。
あいにくと暖簾にはなんと書いてある文字は読めないが、うまそう
だ。

それに先日はあんなところに屋台はなかったので多分まだ食べたこ
とがない代物だ。

「あれはなんだ？」

「うーんとト力焼きって書いてある。」

「ト力？」

「うーんと、確か海に生息する八本足の魔物のことだった気がする。

」

なんとも不思議な魔物がいるもんだ。

八本も足があつて邪魔じゃないのか？

まあ、いい…

まずは食してみることにしよう。

「ひとつくれ！」

「ひとつくれ！」

俺の声と重なって誰かの声がした。

それはルアップではなく、隣にいる長身の男のものだった。

俺より頭ひとつ分高い身長はひよる長いわけではなく、しっかりとした筋肉に包まれている。また、意思の強そうなブラウンの瞳に女受けしそうな甘いマスク。背中に背負った馬鹿でかい剣は威圧感を放っている。

しかし、

「おい、ハゲ。俺が先だ引つ込め。」

頭髪がないのはウケる。

若く見えるのに可哀相だ。

「いきなり、喧嘩腰だな。しかし生憎だが先を譲るわけにはいかない。俺様のかわいい妹がお兄ちゃんト力焼きが食べたいよう。と俺様とト力焼きを待つてるんだ。あと、ハゲじゃないから。これ、剃ってるから。」

「剃っても頭髪がなけりやそれはハゲだ。つーか俺の方が先なんだからどけよハゲ。」

「いや。俺様の方が先だ。ほら、ここにはいない妹も囁いている。愛するお兄ちゃんの方が先です、って。あと、ハゲではなく極々短めの坊主頭ですから。」

「妹の声は幻聴だハゲ。どけ！」

「兄として妹の願いを聞きとげるため譲れるものか！」

俺とハゲが競い合う。

しかし筋力の差か俺が劣勢だ。

つーか負けそうだ。

「兄ちゃん、オレが買つといたからもういいよ。」

その声に顔を向ければルアップがト力焼きらしきものを持って立つ

ている。

「フハハハハっ、どうやら俺の勝ちのようだ。親父釣りはいらねえからとっておけ！」

銀板を一枚屋台の親父に投げて渡す。
いやー、すごく気分がいい。

「なんか兄ちゃんのキャラ違いすぎない？」

……確かに。ちょっとはしゃいでしまった気がする。
それにしても兄、兄うるせえやつだったな。
シスコンか？

シャルといい、あのハゲといい、ああいうのが流行ってんのか？

＼SIDE ???＼

まさか、伏兵がいたとは…

俺様としたことが不覚をとっちゃまった。

くそ、なんとか一矢を報いたい。

そうだ！

「親父、あいつの釣りの分で俺様にト力焼きをくれ。」

これで俺様の財布は痛まない。

つまりは試合に負けて勝負に勝ったようなものだ。
ざまあねえぜ。

「別に構わないけど…それじゃああんちゃんはそのお兄ちゃんに人間的にも負けたことになるぞ。」

な、なんてこった…

親父の言うとおりだ…

このままじゃ俺様は小さい人間になっちまう。
それじゃあ愛しの妹に顔向けできねえ。

「フツ……冗談だ。ちゃんと自分で払うに決まってるだろ。」

「あのお兄ちゃんは一万R払ってくれたわけだが…」

「なら、俺様は倍払うぜ。」

銀板二枚を渡す俺様カッコイイ…

ちっ、妹に見せられないのが残念だ。

どっかで見てたりは………してねえな。

それにしてもあの白髪、今度会ったときは俺様が勝つ！

〈SIDE ゼロ〉

「ト力焼きごときに銀板一枚なんて無駄遣いもいいところです！」

ただいま絶賛お説教中だ。

正座させられた俺の前にリーラが仁王立ちしている。

なぜこうなったのか？

言うまでもない。密告者が存在しているのだ。

「てめえ、覚えてろ。」

「だって、兄ちゃんが何してたのか報告しろって言われたんだもん。」

「

ルアップは反省した様子もなく答える。
あとでボコる。

「そもそもあれは俺の金だ。リーラにどうこう言われる筋合いはない。」

「例えそうだとしても、他のお客さんに喧嘩を売る時点で愚かな行為です。」

「あいつがさきに……」

「兄ちゃんがさきだよ。」

余計なことを！

「とにかくいいですか。まずあなたには一般常識というものが……」

リーラの説教を聞き流していく。

なかなかいい子守歌だ。

……だんだん夢心地に

……

……

……

堕ちた。

翌朝

俺達を乗せた馬車がブルーテを発つ。

説教の途中で眠ってしまったためかリーラの機嫌が悪い。

別に金を多めに払うことは悪いことでもあるまいに何故怒るのか意味がわからん。

「リーちゃん機嫌わるいわね。ゼーちゃん何かした？」

「特になにも」

「え、リーちゃんが怒るのなんてゼーちゃん以外の理由ってない？」

ふん、付き合いが浅いくせによくもまあ言えたもんだ。

そんなの………あつたよな？

俺はどうでもいいことは覚え^{たち}ない性質だ。

いちいちなんでリーラが怒ったかなんて記憶していない。

「俺は知らんから理由はリーラに聞け。」

「うゝん……女の子の口なのかな」

それこそ知らねーよ。

「まあ、いつか。」

そう、どうでもいい。

とりあえずアーガルドとブルーテ間とは違い仕事はきちんとやるか。リーラのことだ、どうせ時間が経てば機嫌も直る。

「ゼロさんどうぞ。」

リーラから野菜を煮込んだスープを手渡される。

今はもう辺りは暗くなっており、本日のキャンプ地点を築いて夕食をとるところだ。

アーガルドに行くときは違い、今回は正式な依頼だ。

道中の食事は依頼者であるジオレンたちに保証されているから温かいものが食える。

作ったのは女性陣でその間の見張りは俺一人に一任されていた。

…特になにもなかったが。

なんでも主要道路に滅多に強力な魔物は出ないらしい。

だからアーガルドに向かう時は、なんとかなりはしたが魔物に出会ったことは運が悪かったとしかいえない。

では、何を警戒するのかと言うと雑魚な魔物と夜盗などだ。

これからは毎夜リーラとシャルと俺の交替制で寝ずの番をするらしい。

しかし、本当にリーラの機嫌が直るとは……

もう少し長引くかとも思ったが案外切替が早いらしい。

「もう、怒ってないのか？」

「いつまでも怒るほど暇ではありません。でも、ゼロさんはもう少し常識的な行動を心掛けてください。これから向かう王都には火種がたくさんありますから。このままだと、火災を起こしそうで心配です。」

「…善処しよう。」

俺は俺のやりたいようにやるがな。

俺の進む道こそが正しいんだ。

そこで何が起ころうとそれは必然だ。

「私^{わたくし}の話を聞く気はありませんわね…」

ばれているようだ。

とゆーかこいつは俺のことを理解しているのかもな。

次の日もその次の日も馬車は王都へと向かって走る。

正直退屈だ。

何かがあるわけでもないし、景色もあまり代わり映えするわけでもない。

あまりに暇なのでシャルの相手をしたり、ルアップの相手をしたり、ベリーの相手をしたりリーラに怒られたりしながら馬車での時間を過ごした。

ブルーテを出てから5日目のことだ。

崖の上から馬鹿でかい都市が見えた。

「あれが王都グランネイドルですわ。」

「グラン…なんだ？」

「覚えきれなければ王都でいいですわ。」

リーラの言葉に納得して王都をまた眺める。

遠くから見る限りは山みたいだ。

円い外周で真ん中に行くほど階段のように高くなっているが、1番上が城なのだろうか。

また、王都の向こう側に見える大きな水溜まりは海という奴だろう。

さすがは王都、荘厳だ。

これから向かう王都には俺自身の手がかりは存在するのだろうか。

あと、銃の弾も手に入れなければ

王都の入口である門に近づいていく。

これで王都への物語は終幕だ

王都への物語 「王都到着編」 (後書き)

やっと(?) 王都に着きました。

特に山場ありませんでしたね…

まあ、そうそうあっても混乱しそうなので(作者がです)

またも新キャラばいのが出てきましたが、こいつの再出はあと何話か挟みます。

王都での初日の物語

「…ぐすつ、ふえつ…」

泣かれている。

誰に？

ベリーだ。

王都に着いたことで依頼は完了した。

つまりジオレンたちとはここでお別れなわけだが…

「ベリーちゃん泣かないでくださいませ。絶対にまた会えますから。」

「そうよ。今度会う時はもっと大きくなってね。」

「……うん、ベリー大きくなる。」

ベリーの涙に触発されたのか、なんかリーラの目にも光るものがある。

…しっかしまあ、そんな泣くようなことあんのか？

「なんで泣いてんだ？ガキ。」

「な、泣いてねえよ。」

そう、ルアップもまた泣いてる一人だ。

「いや、泣いてるし。とゆーか汚いから鼻水は拭え。」

「ずずつ…泣いてねえもん。」

「そうかよ。」

本人がそう言い張るのならそれで納得してやろう。

なんか会話のループに陥りそうだしな。

「兄ちゃん…オレのこと忘れんなよな……ぐすつ。」

完全に泣いてるじゃねえか…

そこまでの仲良くなった覚えはないのだが、子供は感受性が豊かだな。

「お前には貸しがあるからな、返すまでは忘れてやらねえ。」

「貸し？そんなのあったっけ…？」

「ブルーテの飲食代は出世払いなんだろう？」

「あ…うん。絶対返すから。」

さてそろそろ行きたいのだがまだお別れは終わらんのか？

とゆうか……

「そもそもルアップたちもしばらく王都にいらんだから明日にでもまた会えるだろうに。」

「ベリーは子供なんだし仕方ないだろう？それに、離れることに変わりはないだろ。」

そんなものなのだろうか？

まあいいや。

「そろそろ行こうぜ。」

「……………そう、ですわね……………」

「じゃあベリーちゃんバイバイ」

俺の声に二人がベリーに手を振りながらこちらに歩いてくる。ベリーもそれに手を振りかえしている。

「ありがとうございます。」

ジオレンとブグレー夫妻は俺達にぺこぺこと頭を下げている。
依頼なのだから当然のことしかしていないがここで謙遜するのも何
だしな。

「それじゃあな。」

そう一言だけ告げて歩きだす。
そして俺に追従する二つの気配を感じる。

「またな。」

一回だけ振り返ってルアップに
いや、ジオレン達全員に向けて言った。

「…うん、またな。兄ちゃん達！」

答えたのはルアップだったが、全員同じ気持ちだったかもしれない。

ジオレンたちはそのまま王都の商業区に向かった。
俺達は港湾区に向かっている。

というのもギルドも冒険者用の宿も港湾区にあるからだ。

この王都は大きく分けて商店などが建ち並ぶ商業区と旅行者、冒険

者などが使用する施設のある港湾区。王侯貴族の住む上流区と一般市民の住む居住区に分かれている。

他にもあるらしいが聞かされたのはここまでだ。

つまり、俺達がその中で真つ先に港湾区に向かうのは当然と言えるだろう。

まずは依頼完遂の報告とシャルのパーティー登録をすることが優先だ。

港湾区のギルドに到着したのだが感想は一言、広いという言葉に限られる。

アーガルドのギルドの倍以上はあるだろうか。

その中に装備品を売っている店や回復薬などを売っている道具屋などが併設されている。

ざっと見た限りでも品揃えは豊富だ。

「銃弾がないか見てくる。」

二人にそう告げると装備品を売っている店に向かう。

どうせ、依頼の報告もパーティー登録も二人だけで事足りる。

「わかりましたわ。いいですか！そこから勝手に移動しないようにしてください。」

「あ、じゃあお姉ちゃんもゼーちゃんと一緒に…」

「あなたがいないとパーティー登録できません。それでもいいのならご勝手にどうぞ。」

「リーちゃんのいじわる。」

二人してそのまま受付に向かっていった。
さて、俺も移動するか。

装備品は剣や槍、鎧など多種多様なものが置いてあったが、俺の目当てのものは見当たらない。

仕方なく奥にいる上半身裸で筋骨隆々の店主らしき男に話しかけることにした

「銃の弾が欲しいんだが置いてるか？」

「うん？あんた銃使いか。珍しいな。」

「俺が珍しいかどうかは聞いていない。」

「ん？ああ、悪いな。銃弾は置いてねえのよ。昨今の風潮で銃は飾るものってなってる。銃弾を扱う意味が薄れちゃったんだよ。俺だって銃を使ってるやつなんて20年ぶりくらいに見たぜ。」

王都でも置いてないのか…

ちっ、宝の持ち腐れってやつじゃねえか…

「悲観すんなよ。表にはねえが裏なら可能性はある。」

「裏？」

「ああ、その前にこれな。」

店主は手の平を上に向けて俺に差し出す。

「なんだよ？」

「情報科。」

「いくらだ。」

「一万Rでいいぞ。」

俺は店主に銀板を一枚渡した。

こういうとこで出し渋ると後々後悔することもあるかもしれんしな。ま、元がとれなきゃなにをするかわからんがな。

「毎度。んで、裏つてのは市民権を持つてねえ連中の住み処だ。」
「市民権？」

「王都の民だと認められるには市民権を持たないとダメなんだ。そいつを持つてねえ連中の住み処がここにある。」

そういつて店主は下を指さす。

「ギルドにか？」

「いや、違う。下だよ、下。地下にあるんだ。」

「どこに行けばいいんだ？」

「地下への入口は至るところにある。そして、あんたの求めるものがあるとすればガスカルつて奴のとこだろうな。」

「そこにいけば銃弾が手に入るのか。」

「可能性があるつてだけだ。ガスカルつてやつは昔は鍛冶師でな。でも、銃の魅力に取り憑かれちまって破産するまで蒐集に明け暮れて、今じゃ裏の住人つてわけさ。だから銃弾を持っている確率が高い。」

「そこしかないのか？以前王都で銃弾を購入したという男がいたんだが……」

「……ああ、それは多分別の国の商隊から買ったんだろ。時々銃と共に売られてることがある。最近はそんな話は聞かねえから探すだけ無駄だと思うぞ。」

ということとは基本的にはガスカルというやつのところに行くという方針でいいだろう。

さて、場所も聞いたし移動するか。

リーラが勝手に移動するなといったが、聞く理由もない。でも一応保険はかけておくか、

「ここに金髪かピンクの髪の女が来たらゼロは裏のガスカルってやつのところに行ったと伝える。」

「おう、承知した。言伝はサービスにしておいてやる。」

俺は店主によりしく頼むと伝えると店をあとにした。

店主から聞いたとおり裏への入口はいたるところにあった。とはいってもそこらにいた奴を捕まえて案内させた結果わかったことだ。

裏への入口は知っていれば何のことはなく、知らなければ素通りしてしまうような場所にあった。

中は薄暗く、壁に囲まれた非常に狭い空間だ。それが迷路のようにどこまでも続いているらしい。

俺はそこを案内させている男の後ろから眺めている格好だ。ちなみに今案内させている奴は入口まで案内させた奴とは別だ。

「しかし、もう少し寂れているというか殺伐としているかと思っただんだが……」

そう言いながら周りを見ると、子供達や大人達に笑顔が見える。

「最初はみんなそう思ってるんです。ま、そういう区画もあるにはありますが、そういうのは一部の無法者だけで、だいたいはこの感じですよ。」

「それにしても……だ。ここは市民権を持っていない、つまりは厳密には王都の民ではないのだから？王都の政策などの恩恵は受けられないはずだ。」

「政策による恩恵なんてあってもないもんです。とゆーか大体の政

策は貴族のためのものですからね。俺達はそんなもんとは関係ない。つまりは自由なんです。」

そついう考え方もありなのか。

とは言つても彼らに対する国の政策をみれば自由以上に不自由だ。

俺達冒険者や旅行者などは一月ごとに更新の必要な飯の市民権を王都にはいる時に渡されているらしい（とさっきの案内させた奴に聞いた）が、それすらないとどうなるか。

簡単だ。

市民権を持たないものにはなにをしても許される。

具体的には殺したとしても罪には問われないのだ。

ただ、暗黙の了解として裏へ侵入しての暴挙は禁止されているらしい。

しかし、それが守られているのかどうかは怪しいものだ。

「ここぞで。」

考え込んでいるうちについたようだ。

薄暗い通路にいくつかの扉が連なっている。

案内してきた男はその一室を指差している。

「ご苦労。」

そついつて男に銀貨を5枚握らせる。

「へへっ、ではあつしはこれで。」

そついつて男は去つていった。

今気づいたが、帰りどうしよう。

それは置いておいて早速部屋の中に入った。

部屋の中には誰もいなかった。しかし、部屋はそこそこ広いがかなり散らかっているな。足の踏み場もない。そして部屋に飾られている銃器に言葉を失った。何丁あるんだ？ 1、2、3…………… 37。37丁もあるのか。また、種類も様々で手の平に隠れてしまうような小さなものから8歳くらいの子供くらいの子供の大きなものもある。そして、それら全てがピカピカに磨かれている。紛れもなくマニアだな。これなら期待できる。

「誰だ。」

とそのとき奥にあった扉が開き、黒いボサボサの髪に無精髭を生やした眼鏡の小汚い格好をした男が出てきた。どうやら他にも部屋があつたようだ。

「誰だと聞いて

「黙れ。」

えええ……………」

「お前がガスカルか？」

「は、はい。僕がガスカルです。」

「用件を話す。」

「人の家に無断で入ったのになんで偉そうなんだこの人……………」

「この銃の弾が欲しいんだが」

俺は銃を腰から引き抜くと丁度目の前にあつたテーブルの上に置く。

「ん？……………こ、これはっ！」

なんかすんごい勢いで近づいてきやがった。

そのままいろいろベタベタと触りながらまじまじと見ている。

「これをどこで？」

「俺が聞いたのはこいつの弾を持っているかどうかだ。」

「残念だがこの銃は見たところがらくただ。」

「は？」

俺の言葉を無視したことにイラッとしたが、それよりも！

腕がよかったとはいえBランクの魔物を一撃で屠った銃がらくただと？

「そう、がらくただ。だけど芸術品としての価値はある。そして僕が持つコレクションはどれも実用性がある。つまり、何が言いたいのかというとこの部屋にあるものと、君の銃を交換しないふべっ！」

殴ったがそれがどうした？

「あ、いや…えっと、どれでもいいから僕のコレクションと交換ふべっ！」

「もう一回言ってみろ。下手なこと言っなら殴るだけじゃすまさないが。」

ダガーをガスカルの頬にペタペタと当てながらドスを効かせて語りかける。

「じよ、冗談じゃないか。いやだな。この銃にあった弾だろ？あるよ、ありますとも！今持ってくるから待っていてくれ！」

そういつてガスカルは後ずさりするように奥の部屋に入ってしまった。しばらくすると10センチ四方の箱を持って戻ってきた。

「今、手元にあるのはこの56発だね。」

そういつて開いた箱の中には紛れもなく銃弾が入っていた。

「よし、よこせ。」

「いや、ただつてわけには…」

「いくらだ？」

「そうだね…一発につき二万Rでどう？」

高い…^{リーフラ}以前買ったときの倍だと？

足元見やがって…

………殺すか。

「なんか僕、危険感じるんですけど。」

「そうか。」

「……なんで刃物持ちながら近づいてくるの？」

「別に」

「僕いつのまに死亡フラグ立ててたんだろう。」

うーん……

別に本気で殺そうとしてるわけじゃないが、なんかどうでもよくなくなってきたな。

「た、確かに少し高いとは思っけどこっちも精魂込めて作ったものなんだから、少しくらい欲張ったって…」

今、こいつはなんて言った？

作ったと、そう言ったのか！

「お前は銃弾を作れるのか？」

「へ？ああ、うん。作れるよ。昔のツテで型を手に入れてね。」

「そいつをよこせ。あと作り方も教える。」

「む、無理だよ。あれは自分の命より価値があるんだ。」

…ふむ、そりやそうかもしれん。とは言ったもののどうするべきか。いや、簡単な手がある。

全てを手に入れることができる最善の手がすなわち

「殺して奪うか…」

「こちらをどうぞ！」

俺のつぶやきにガスカルは手に持った箱をノータイムで差し出してくる。正直びっくりした。

「くれるのか。」

「はい！」

「なんでだ？」

「死にたくありませんし、型を渡すのが嫌だからです！」

妙に声を張るんだな…

でも、好都合かもしれん。

「なら、ありがたく貰っておこう。ちなみに今から新しく作ればどれくらいかかる？」

「新しく？まだいるのかい。すまないけど材料がないんだ。あつ、そうだ！材料持ってきてくれれば作ってあげるよ。」

そいつはありがたいが話がうますぎる気がする。

「何が望みだ？」

「話が早いね。とはいっても単純だよ。次回からは金を払ってくれ。」

「それで値段はどうなる？」

「材料は君が持ってきてくれるなら………そうだな。一発五千Rでどうだろ？」

「まだ高い。とゆーか材料を俺が出すならそんな高くならねえだろ。」

「うーん……でも、僕の生活のためにそこは譲りたくないなあ。だけど、一発二千五百Rでどうだ！」

いきなり半分か。

しかしどうなんだろう。高いのか？

最初に購入した弾から考えるなら安い。

しかし、あれが適正価格ではないだろう。

だとすればこの価格でもいいのか怪しいところだ。

「正直に言え。材料を俺が出したとして、作るにはいくらかかるんだ？」

「………そんなには」

「い、く、ら、なんだ？」

「一発千Rでお願いします……」

なんか粘ればもう少し安くなりそうだがガスカルの姿が憐れに思えてきた……

「仕方ない。それで許してやる。」

「ありがとうございます！………なんでお礼を言ってるの？」
ともかくだ。

銃弾を手に入れることができたわけだ。

「んじゃ、次は材料を持ってくりやいいんだな。ところで何が必要なんだ？」

「持ってきてもらいたいのは鉄鉱石と火炎草か火炎石だよ。まあ、どちらかと言えば火炎石の方がいいんだけどね。あつ、空の薬莢を持ってきてくれれば再利用出来るから取っておいたほうがいいかも。」

「わかった。じゃあまたくる。」

ガスカルの部屋から出る。

さて、戻るとするか。

と、元来た道に向き直って進むと薄暗い中こちらに向かってくる奴らがいる。

特に気にしていなかったが近づくと姿がはっきりと見えてきた。

かなり不機嫌なリーラだ。その後ろにはシャルもいる。もうひとり先ほど俺が道案内させていた男もいるがどうでもいい。

ありや怒られるな。

めんどくさいと思いつつ近づいていく。

俺に向けて放ったリーラの第一声は裏の道によく響いた。

これはそんな王都での初日の物語

王都での初日の物語（後書き）

やっと銃弾確保できました。

作中では一発千円の価値でしたが、調べたところリアルでは一発数十円らしいです。

やっす…、そして材料も出してるのにぼられすぎでしょ主人公！

まあ、滅多にないという付加価値がついたということでは……

Dランク討伐依頼の物語 「出発編」

「朝一で依頼を受けてきましたわ。」

朝食の席で告げられた一言に衝撃を受けた。

「なんでまた？」

まだ王都について二日目だ。

全然観光とかしてないだろうが。

護衛依頼の報酬も入っているはずだし、金には余裕があるはずだ。

「なんでと言われても冒険者なんですから仕事をするのは当然ですわ。」

「それが今日である理由は？」

「……………装備を新しく買ってお金が……………」

さて、話が切実になってきたな。

俺の財布（一号）であるリーラに金がなくなるとは…

「何を買ったんだよ。」

「加護持ちのレイピアを…」

なるほど。確かに加護持ちの武器を買ったんなら金がなくなるのは頷ける。

加護持ちとは魔法彫金師によって魔法印を刻まれた装備品のこと、様々な効果がある。

また、同じ装備品でも加護のない物とは価格の桁が違う。

ちなみに前にリーラにあげた耳飾りはめちやくちや安かったのだてあとで知った。

「どんなの買ったの？」

「はい、耐久上昇のものを…」

シャルの問いにリーラは新しく購入したであろうレイピアをテーブルの上に置く。

前のとそんなには変わっているようには見えないが、刀身には紋章が刻まれているのが明らかに違う。

耐久上昇とは装備品が壊れ難くなるというものだ。そこそこ値が張る。また、これ以上になると不壊というものになり、使用する上では絶対に壊れなくなる。しかし、こちらはさらに桁が違うらしい。

「とは、言ってもすつかからかなわけではなくて、これからのことを考えるとちよっと心許ないという感じなんです。」

なに勝手にそんな高い物買ってたんだよ。

それにこいつの口ぶりからして受けた依頼とはパーティー依頼だろう。

なんで、この女の尻拭いの形で俺まで仕事をしなきゃならん。

やるなら個人依頼受けてこいよ。

………… バックレるか。

「逃げるのはなしですわよ。」

読まれた…

「俺は関係ないだろ…」

「確かに勝手に依頼を受けたのは謝りますが、ゼロさんも無関係と

はいえません。」

「どこが。」

「思い返せば今までの宿代や食事代などはあなたの分もなぜか私^{わたくし}が払ってます。」

「当然だ。」

「完全におかしいですわ。ご自分のことですから今後はご自分で支払ってください。」

財布一号が今更なことをごねだした。じゃあ、二号^{シャル}に払わせよう。

「まあ、それは置いておきまして、今回の依頼なんですがゼロさんにとっても利がありますわ。」

利か…

とゆーか受ける依頼なんて基本的に俺にはポイントが入っているから須らく利があるといえはある。しかし、あえて言葉にしたということはそれ以外にも利があるということだ。

俺はリーラに続きを促す。

「今回の依頼はDランクのパーティー依頼で内容はDランクの魔物であるロックオーガを討伐して証明部位を5つ持ってくることですわ。」

「そのどこが…」

「ロックオーガは岩の魔人と別に呼ばれるんですが高い確率で鉄鉱石がそしてごく稀にですが火炎石を含んでいることがありますわ。言いたいこと分かりますわよね？」

つまりだ。今回の獲物は銃弾の材料を含んでいるから一石二鳥だと言いたいわけだ。

確かにそれなら利があると言えなくもない。

「仕方ない。やってやるよ。」

「やってやるではなく、やらなければならない、ですわよ。もう依頼は受けてしまっているんですから。」

「勝手にな。」

「うつ………謝ったじゃないですか。」

あれを謝ったっていうのか？

それにしても、魔物と戦うということは久々に銃を撃てるというわけだ。

最後はいつだったっけ……

ああ、そうだった。初めてギルドで依頼を受けた時にウルフっていう雑魚魔物に撃ったんだった。

とは、言っても未だに一对一で戦ってもヒヤツとすることもある。

ま、もう負けはないと思うが……

「つまり、お姉ちゃんも入れて初めてのお仕事ということね。」

シャルの言葉に確かにとと思う。

ここまでする護衛依頼から一緒だったのを忘れてしまいそうだったが、シャルが俺たちとパーティーを組んだのは昨日のことだ。

よく考えたらシャルがどう戦うのかも知らない。

「そういうことですわね。Cランクの戦いをぜひ拝見したいですわ。」

「まかせて」とは言ってもお姉ちゃん直接的な戦いはちょっと苦手だから、支援するのが主ね。」

そんなんでどうやってランクを上げるんだ？

ランクを上げる一番の近道は同ランク以上の魔物を討伐することだ。

まあ、そのせいでランクを上げるために無理に戦いを挑んで死ぬ輩は多い。

支援が主だというのなら前にも誰かとパーティーを組んでいたのだからうか？

まあ、必要があればそのうち聞いてみるのもいいだろう。今のところ興味はない。

「ところでそのロックオーガはどこにいるんだ？」

「それは王都から歩きで二日ほどのところにあるクセンタ洞窟というところですね。」

歩きで二日。そりゃまた遠いな…

馬車を借りるのも一つの手だが、これが割とする。

たぶんほんとに歩いて行くんだろうな…

「そこなら、お姉ちゃんも知ってる。でも確かポイズンバットも出現しなかったかしら？」

「はい、ですからあらかじめ毒消しを買っておきました。」

そういつてリーラは小瓶を12ほど取り出す。

その中には緑色の液体が入っていて、明らかにまずそうだ。

「とりあえず、全員に4つずつ配りますわ。」

そういつて小瓶を4つ渡される。

どうでもいいが、これ買ったのリーラだよな。

金がねえんじゃないのか？

シャルにでも金を出させればいいのに律儀なことだ…

それとも勝手に依頼を受けた罪悪感から用意したのだろうか。もしくはただ何も考えずに必要だからと買ったのかもな。どっちかとい

うと後者の気がする。

「それじゃあ、いつ出発する？」

「すぐにでも、と言いたいところですが道中の食料などは準備してませんから、これから用意しましょう。それで、その…」

リーラが言いよどむ。

まあ、何が言いたいかは大体察しが付くがここで機先を制してやると面白くない。なぜなら、ここからに続く言葉は

「私の分をゼロさんだしてくださいませんか？」
わたくし

予想とはちよつと違うな。

こうじゃない。俺が望んだのはこんなお願いみたいな言葉などではない。

仕方ねえな。

「お願いしますゼロ様。私の分もお金を出してくださいませんか。」
わたくし

リーラに向けて言つてやる。きっと俺の表情はかなり意地の悪いものになっていることだろう。その自覚がある。

俺の言葉を聞いて意図を察したのかリーラの顔は苦々しい。

ここでリーラはシャルに頼るといふ選択肢がある。

しかし、リーラが新入りであるシャルに頼るといふ選択肢を選ぶはずがない。

さあ、言え。苦渋に満ちたその顔で俺に懇願しろ。

「お姉ちゃんがリーちゃんのだそつか？」

「ええ、お願いしてもよろしいですか？」

シャルの空気読めない発言に天の助けとばかりに飛びつくリーラ。
まったく、これだから空気の読めない奴は……だがしかし、それを
俺が読んでないとも思うのか！

「やはり、俺には姉は存在しないというわけだな……」

「ゴメン、リーちゃん。やっぱりさっきのなし。」

「なっ……………」

相変わらず扱いやすい奴だ。

それにしても、道を失ったリーラの顔はなかなか面白い。

「さあ、どうする？」

「……………自分で出します。」

は？

「いや、だってお前……」

「さっきも言っただように全くないわけじゃありませんもの。」

なんてことだ……

こいつ、屈するよりもさらに金をなくすことを選びやがった。

まあ、致し方ない。

違う方法でいじめるか……

「それならそれでいいさ。シャル俺の分の食料も一緒に買っておい
てくれ。」

「なっ……………」

「了解。」

ふふ、睨んでる睨んでる。

シャルがリーラの分を買っのを阻んでおいて、俺は利用する。精神的にクedarう？

「……性格悪すぎますわ。」

リーラがなにか呟いたがあいにくと俺の耳には届かなかった。

「じゃあお姉ちゃんはいろいろ買ってくるね」

シャルが席を立ちリーラの耳に何かを囁いた。

リーラの顔から驚いた様子が見て取れる。

何言っただきたいわかるぞ。

ポーカーフフェイスの下手な奴だ。

大方、リーラの分も買っておくと言っただろうな。

まあ、リーラの苦々しげな顔や悔しそうな顔も見たし結構満足してるから見逃してやろう。

「俺はもう一眠りしてくるから準備は頼んだぞ。あと、シャルはリーラが本当に自分の金で買っのか見張っておいてくれ。」

言外に一緒に買い物に行けと含ませて席を立つ。このあとどうするかは二人に任せよう。

……ほんとに寝ちまうかな。

～SIDE シャルロット～

「うふふ、まったくゼーちゃんたら意地悪ね」

彼の意図を察してついつい笑ってしまう。

どうやら私がリーちゃんにリーちゃんの分も余分に買ってくるって言ったこともばれているみたい。

それにしもまったく、ゼーちゃんは素直じゃないのね。

「意地悪というか、性格が悪いです。」

うーん、リーちゃんの言うことも否定できないことが多いかな。
でもゼーちゃんのそこが可愛いのよね。

……でも

「なんでリーちゃんはゼーちゃんと一緒にいるの？」

「え？」

うーん、これだと邪魔だって言っているように感じちゃうかな。

「えーとね、性格悪いーとか、自分勝手過ぎるーとかいつもゼーちゃんのこと怒ってるのに一緒にいるのはなんでかなーって。」

私の問いにリーちゃんは考え込んでいる。きっと心の中で自問自答しているんだろうな。

「なんででしょうね。最初はアーガイルで別れるつもりだったんですが、いつのまにかという感じですね…それにあの入非常識ですから見張りが必要ですしね。」

いまいち要領を得ないけど多分リーちゃんはゼーちゃんのことを好きなんじゃないだろうか。

リーちゃんの言葉にラブを感じる。

でも、私も負けてないけどね。

ゼーちゃんを見たときのあの感情は忘れられない。

いわゆる一目惚れだ。

もちろん弟としても見ているけど男としても見ていることは否定のしようもない。

ちなみに近親相姦上等だ。

さらに血が繋がってないんだからもうどんと来いって感じ？
だから甘えられるとついつい甘やかしちゃう。

でもとりあえずは

「リーちゃん、お買い物行こっか」

「はい、そうしましょう。」

二人で一緒に街に出た。

＼SIDE ゼロ＼

陽が中天に差し掛かった頃。

俺達は再び集まった。

準備はしっかりと出来ているようだ。

「ではこれを持ってください。」

そう言つて色々入った袋を渡される。

そこそこ重い。

まあ、三人分入っているみたいだし当然といえば当然か。

しかし、俺がもつのか…

女に持たせるのも何だから仕方ないとはいえ、めんどくさいな…
男の下僕が欲しいな……

「さあ、出発しましょうか。」

リーラが先頭で歩きだす。

向かうのは王都の入口である門だ。

アーガイルには東西南北の4つの町への入口があったが、王都には2つ。

とは言っても1つは船で入ってくる港の入口のため、陸路は入ってきた門1つだ。

そこから西に二日ほどが目指すクセンタ洞窟らしい。

久しぶりに銃を撃てるな。

鈍ってなきやいいが

これはDランク討伐依頼の物語の一幕

Dランク討伐依頼の物語 「出発編」(後書き)

兆候はすでに取りましたが、主人公はSになってしまいました。
とゆーかヒモ？

まあ、そこそこなダメ人間です。

Dランク討伐依頼の物語 「クセクタ洞窟到着編」

歩くこと二日、俺達はクセクタ洞窟についていた。

道中現れた雑魚魔物は俺の華麗なる銃技で全て仕留めた。

久しぶりなんで腕が鈍ったかと心配していたが、道中の間に勘は取り戻したと言っていていいだろう。

「……と言っことだ。」

みたいな説明を現在俺はリーラにしている。

なぜそんなことが必要か？

それは全ての魔物を俺が銃で倒したことに起因する。

別に俺が全て倒したことによってリーラのストレス発散の機会を奪ったとかそういうことではない。

要は

「だとしても際限なく撃ちすぎです。」

ということだ。

残弾は残り10発。

つついテンションがあがってしまった結果の出来事だ。

はつきり言って戦う必要のないような奴まで撃った。

後悔？

なんでそんなことしなきゃならん。

別に悪いことをしたわけでもない。

「俺は悪くないという顔ですわね。」

「当然だろ。」

「確かに一概に悪くはありません。悪くはありませんが………なん

で肝心のクセンタ洞窟に入るまえに銃弾を五分の四も使っちゃうんですか！なにかあったときのためとかに節約するくらいはしてください。」

「なんでだよ。」

「なんでって……ゼロさん、銃がなければフランクの魔物1体と互角くらいじゃないですか。」

なんか言外に銃がなきゃ弱いんだから大事なことまでおとなしくしてろって言われてる気がする。

「つまり、リーちゃんはゼロちゃんが後で大変な目にあつたときに弾がなくなっちゃったら心配だ、って言いたいのだよ。」

「別に心配なんかしてませんっ！ただお荷物になられては困ると……」

「……」

なるほど。

シャルの考えもまた一つの可能性としてはありだ。

なんかリーラがつらつらと言いつつ訳がましいことを言っているのが逆に怪しい。

「そこまでしておけ。いつまでも長々とくだらない話をしやがって。とりあえずクセンタ洞窟に入るぞ。準備はいいか。」

「大丈夫。」

「偉そうに……誰のせいだと思ってますの。」

「口ぶりからすると俺のせいかな？」

「そうです。」

「そうか。」

「……反省とかしないんですの？」

「する理由がない。」

「っ！あなたに

「まあまあ、ケンカはそこまでにして、依頼を片付けましょう。」
「……………そうですね。」

シャルの制止にリーラが言葉を抑えて引っ込んだ。
三人になったメリットはこんなところにもある。

今までだったらリーラのハイパー怒鳴りタイム突入だったな。
あれは鼓膜に響くんだよな。……………何言ってるかは聞いてはいないがな。

俺を先頭にしてクセンタ洞窟の中に入る。

中は夜のように暗く目が慣れたとしても1メートル先を見るのがやっただ。

「なんも見えねえな。」

「ちよつと待って下さい。」

俺の呟きに後ろから声がかかる。

< 光よ 我らの行く手を照らせ >

リーラが何か唱えながら空間に紋様を描く。すると周囲5メートル程度が現れた光によって照らされる。

魔法

なんか久しぶりに見た。

便利だな。

「これでいいですわ。」

「へえ、リーちゃん魔導師なんだ。」

「いえ、私はそんな大層な者ではありませんわ。簡単な回復魔法と火と水の二階級までとこの魔法しか使えませんわ。」

「十分すごいよ。お姉ちゃんはまだ使えないしね。」

女二人で盛り上がっている。

とゆーか俺って魔法のこと全然知らないな。

「魔法って使える奴と使えない奴がいるのか？」

「いるよ。魔力がない人は使えないんだよ。」

俺の疑問にシャルが答える。

そりゃそうだ。

魔法の源は魔力だ。それくらいは聞いたことがある。

「その魔力がない人間って奴はどれくらいいるんだ？」

「魔法を使えるだけの魔力を持っている人間なんて百人に一人くらいですわ。」

今度はリーラが答えた。

「つかこれって

「……………自慢か。」

わたし凄いいみたいな感じに聞こえる。

「なんでそう思ったのか知りませんが事実を教えただけです。」

「…まあいいだろう。んで魔法の種類ってどれだけあるんだ？」

「どう説明したらいいものか……現代で公式に使われているものは火・水・土・風・雷・光・闇・回復の8つですわ。」

「意外と少ないんだな。」

「公式に、と言ったでしょう。それ以外にも古代魔法と呼ばれるものがあります。こちらは正確な数がわかりませんの。ちなみにこ

の光も古代魔法の一つですわ。」

「どう違うんだよ。」

「さっきあげた8つは魔法陣を描く必要がなく、箆めた魔力の量によって起こる現象が変わります。対して古代魔法はいちいち魔法陣を描かねばならず、また使用する魔力は変わりません。」

つまり、現代の魔法とやらは発動が容易だということか。

「古代魔法は不便だということだろ？なんでわざわざ使ったんだ？」

「不便というか発動させる手順が多いので面倒というだけです。どちらかと言えば古代魔法の方が便利なんですよ？」

「どこがだ？」

「現代の魔法は起こせる事象が限られています。それに比べて古代魔法は千差万別。意味があるのかわからないものから、反則的なものでいろんな魔法がありますの。ただ、古代魔法は習得が難しく、また、出会うことすら珍しいんです。この灯りの魔法も偶然出会った魔導師に頼み込んで伝授してもらったんですのよ。」

そういうことか、それなら納得というものだ。

「そういえば、火と水の二階級までとか言ってたがあれは？」

「それは先ほど言ったおこる現象に関わる事柄です。現代の魔法は箆めた魔力の量によっておこる現象を三つの階級に分けているんです。簡単に説明すると一階級でその属性が示すものが顕現し、二階級でそれを塊として放出することができ、三階級で指定した空間をその属性を象徴するもので殲滅するといったところでしょうか。8つの属性のうち回復魔法だけは違うんですがあとは同じです。例として火の属性を挙げると、一階級で指先から炎が出せます。まあ、種火くらいにしかありません。二階級でそれを拳二つ分くらいの塊にして飛ばせるんです。そして三階級では私が指定した空間、例え

ば今ゼロさんが立っている場所を指定したとしましょう。そこが炎に包まれてゼロさんは黒焦げ。みたいなことですね。」

なんか、例えとはいえ俺が黒焦げにされたことは甚だ不服だ。しかし、魔法か…ちよつと興味がある。

「俺にも使えんのか？」

「魔力があることが前提ですけど、属性の適性がないとだめですね。^{わたくし}私も火と水そして回復魔法しか使えませんもの。」

「それを調べる方法は？」

「…家系？」

「役に立たねえな、お前。」

「仕方ないでしょう。私は物心ついたときには魔法がつかえてましたし。」

説明キャラのくせに肝心なことは知らないのかよ。
使えねえ。

「お姉ちゃん知ってるよ。」

そこで今まで黙ってリーラの説明を聞いていたシャルが声をかけてくる。

そうだった、こいつがいた。

リーラがダメなときはシャル。これはもはや最近の俺の図式だ。

「んで、どうすればいいんだ。」

「んゝその前に、寄ってきた魔物を倒しちゃおっか。」

シャルの声に振り向くとウルフが三体唸りながらこつちによって来ていた。

そういえば、長々と立ち止まってしゃべっていたからな。そりゃ寄ってくるわな。

「ふん、雑魚が。死ねよ。」

「だめです。」

俺が銃口を向けたところで、リーラが腕をつかむ。

「なんで邪魔をする。」

「なんでって、後々のために節約してください。ここは私^{わたし}たちが、シャルさん援護を頼めますかしら。」

「オツケ。まかせて。」

リーラが新調したというレイピアを抜き、シャルが鞭を取り出す。

…… って鞭!?

おいおいおい、どこの女王様だよ。とゆーかお前に嗜虐嗜好があったとは驚きだ。

「なんかすごい誤解が生まれた気がする。」

「何を言ってますの。来ますわよ!」

ウルフの相変わらずの単調な攻撃。

しかしその速度は速い。

とゆーか速過ぎないか?

アーガルド周辺で戦った奴よりはえーんだけど…

気のせいか体毛の色も違って見える。

地域限定品か?

とりあえず俺もダガーを抜いておく。

本当は銃でちょちよいつと殺っちみたいが、リーラを怒らせるのもめんどくさい。

なあにウルフ程度ダガーで十分だ。

「ゼロさんは下がっていて下さい。こいつらはただのウルフではなく、ブラッドウルフ、Eランクの魔物ですわ。」

何？

種類どころかランクも違うのか。

それにしても戦力外通告されたのか今？

お前が待ったをかけただけで銃さえ使えれば余裕なんだぞ？

「捕まえた〜」

その声にリーラから視線を移すとシャルが鞭でブラッドウルフの体を拘束していた。

その声を聞いて動いたのはリーラ。

ブラッドウルフ以上のスピードで駆けると、拘束されたブラッドウルフを頭から串刺しにした。

えげつない。

リーラの攻撃が当たる瞬間に拘束を解いたシャルは残りの二体と相対している。

「はっ！」

シャルが鞭を横に振るう。

するとブラッドウルフの首が跳んだ。

あれ、鞭だよな……っつかさっきやれよ……

リーラも貫いたレイピアを抜き取ると残った一体に向かっていく。

ブラッドウルフもリーラに向かっていく。

両者がぶつかると思ったところでブラッドウルフの動きが不自然に止まる。

シャルが鞭によってブラッドウルフの後右足を捕らえたのだ。
哀れブラッドウルフはそのままリーラのレイピアの餌食に。
完勝。

このひと言に尽きる。

無傷での勝利はもちろん、連携もきちんととれていた。
まったく、いつの間に打ち合わせをしていたんだ。

「ふう、初めてにしてはきちんと連携できましたわね。」

「うん、ばっちり。」

「ゼロさんが戦いに参加しなかったのも大きいですわ。」

こちらを意味深な目で見ながらリーラが言う。

どういう意味だ。

まあ、それにしても

「直接的な戦いは苦手じゃなかったのか？」

シャルに向けて言ってる。

ブラッドウルフの首を鞭でポンツと跳ばすような奴がよくもまあ、
言えたもんだ。

「え〜っ、苦手だよ〜。本来のお姉ちゃんの戦いかたはリーちゃん
にやったように戦闘の補助なんだよ〜、でも誰とも組んでなかった
から必要に迫られてああいうことも覚えたんだよ〜」

覚えたらできんのかあれ……

なんとも非常識な。

なんか鞭ってすっげえ応用が利きそうだな。

「シャルはまあ置いておいて、お前の戦いかたは相変わらずえげつ

「ないな、リーラ。」

「……………毎回私が戦^{たたか}ったたびに言うのやめてくださいませんか？」

リーラは綺麗な顔してんのに戦いになると基本的に相手の頭を突こうとする。

時々飛び出てくる脳みそのグロいこと。

こいつと一緒に依頼をこなす上で何度も目にしたが今だに面白い。

また、気にしてんのかこれでからかったときのこいつの嫌そうな顔がまたたまらなく楽しい。

気にしてんならやめりゃいいのに。

「ゼロさんだって銃を撃つときは相手の頭を撃ち抜くじゃないですか！」

「それがどうかしたのか？」

俺は好きでそうしてるんだ。

魔物どもの頭が弾け飛ぶ瞬間がすごく面白いと思っている。

……………はっ！もしかしてリーラも同じような感覚を

「持ってるのか？」

「……………何をですの？」

「いや、魔物の頭を突くのが楽しいという感情。」

「持ってません！」

リーラはすっごく怒りながら俺に背を向け洞窟の先へと足を進めていく。

「ゼーちゃん…さすがにそれはないわ」

「いや、俺がそうだからもしかしてと思ってな。」

「それはそれで怖いわよ。でも好き。」

シャルが抱き着いてくる。
とゆーかりーラが離れていくたび暗くなってきてんな。
とりあえず追いかけよう。

チクッ

「いてっ」

なんか首に一瞬痛みがはしったような…

「どうかしたの〜？」

「いや、なんでもない。」

そう言つてリーラを追いかけるべく歩きだす。

まったく、お前がいなくなると暗くて周りが見えないだろうが。
ちよつと離れたところにいるリーラが止まったのだらう。

だんだんと灯りに近づいていく。

……しかしおかしいな。なんか視界がぼやけて……

「ゼーちゃん？ゼーちゃん！しっかりして！」

シャルの声が近くで聞こえるがそれも遠くなっていく

どうしたって言うんだ俺の体。

そのまま俺は意識を失った。

これは魔法を詳しく知り、シャルの実力の一端を垣間見たDランク
討伐依頼の物語的一幕

Dランク討伐依頼の物語 「クセンタ洞窟到着編」(後書き)

主人公の危ない思考が……

まあ、頭潰すのって戦いの王道ですよ。

それをどうとるかですよ

……嬉々としてやるのはどうかと作者自身は愚考します。

魔法に関してはわかりにくければ雰囲気だけでも掴んでくれれば幸いです

D ランク討伐依頼の物語 「依頼完遂編」(前書き)

文才が欲しい…

Dランク討伐依頼の物語 「依頼完遂編」

〈SIDE リーラ〉

シャルさんがゼロさんの名前を叫んでいます。

声の調子からとても良くない事態が起こっているのかもしれませんが、私自身と距離があるため、魔法の光は届かないためよくわかりません。^{わたくし}

急いで二人の元へ向かえば、ゼロさんが意識を失って倒れていました。みるからに呼吸も荒く、顔色も良くないです。

「何があつたのですか？」

「急に倒れて……多分毒にやられたんじゃないかと思うんだけど……」

そうかもしれません。

とゆーか症状からするとそうである可能性が高いです。

おそらくはポイズンバットに噛まれて毒に侵されたのでしょう。

熟練の冒険者ならすぐにでも解毒薬を飲むのですが、ゼロさんは飲まなかったようです。

よく考えたらゼロさんは冒険者になって日が浅い素人でした。

そういった経験がないゆえの出来事です。

「すぐにでも解毒薬を飲ませましょう。」

「そうだね」

ポイズンバットの毒が即死性の毒でなくてよかった……

シャルさんが手持ちの解毒薬をゼロさんの口に含ませる。

しかし、意識のないゼロさんはそれを飲み込まず吐き出してしまいました。
まいりましたわね…即死性ではないとはいえ、長い間放っておくと死んでしまうという毒です。あまり、解毒に時間がかかってはもしものことがあるかも……

「…ごめんね」

シャルさんはそう謝罪の言葉を述べると解毒薬を自身の口に含みました。

そしてそのままゼロさんと唇を重ね合わせました。

あれはゼロさんに解毒薬を飲ませるために必要な行為です。
そう自分に言い聞かせている私わたくしがいます。

いえ、言い聞かせるなんておかしい表現ですわ。

事実、ゼロさんは解毒薬を飲んでいるみたいです…

でも、何故か心は納得できません。

そもそも口移しで飲ませる以外の方法もありますわ。

口に含ませた後で鼻と口を塞げば嫌でも飲み込まますもの。

……てゆーかゼロさんも簡単に受け入れてるんじゃないやありませんわよ！

……私わたくし結構無茶なこと言ってますわよね？

でも、何故かそう思うんだから仕方ありませんわ。

SIDE ゼロ

頭に柔らかいものを感じながら意識が覚醒していく。

薄く目を開けて見えた光景はよくわからない。

いや、完全に目覚めた頭で理解した。

現在俺は誰かにひざ枕をされている。

違うな…誰かではなく十中八九シャルだろう。胸の大きさから考えて間違いない。

「どうしてこうなった。」

「！ゼーちゃん起きたの？よかった〜！」

開口一番の俺の声にシャルがそのでかい胸の上から俺を覗き込む。

「で？どうなったんだ俺。」

「ゼーちゃんは急に倒れたのよ。傷からしてポイズンバットに噛まれて毒が回っちゃったみたいね。一応解毒薬を飲ませて様子を見てたの。」

「リーラは？」

「索敵と警戒に行ったわ。ここはクセ centa 洞窟の入口付近にあった小部屋みたいなのよ。」

とりあえず上半身を起こして辺りを見回す。

そばに焚火が焚かれ、空間内を炎の色で照らしている。

大きさは宿の二人用の部屋ほどだろうか…

「どれくらい眠っていた？」

「ほんの二時間ほど。まあお姉ちゃんもリーちゃんも心配したんだよ。」

ずいぶんと眠っていたようだ。

それにしてもいつ噛まれたんだ？

！あのか…

首筋に痛みが走ったあの時にやられたんだろう。

「ゼーちゃん、あまり気にしない、気にしない。」

シャルが再び俺をひざの上に戻して頭を撫でる。

ガキか、俺は…

つか別に気にしてねーよ。

「気が付きましたの。」

と、そこにリーラが戻ってくる。

「おかえり。どうだった？」

「近くに魔物の気配はありませんでしたが、簡易の結界石を配置してきましたので一晩は問題ありませんわ。」

そいつってリーラは俺達から離れたところに座る。

「そつか、じゃあゼーちゃんはこのままお休みしていいよ。」

このままって、ひざ枕でか？

まあ、断る理由もないか…

「そんなにいちやつけるなら、ずいぶんと良くなったようですね。」

「ああ」

本来ならこのまま先へ進みたいところだがまあ、いいかとゆーか

「なんか言葉に棘がないか？」
「別に」

やっぱり棘がある。
なんかしたか？

いや、倒れたから怒らせるようなことはしてないはずだ。
待てよ…そもそも倒れたから怒らせてるのか。

確かに俺の不注意ではあるがそんなに怒ることじゃないだろう。
短気だなあ……

「シワ増えんぞ。」

「黙りなさい。」

石を投げられた。

仮にも病人（？）に対してなんてことをするんだ。

鬼畜め……

「はいはい、ケンカはそこまで。とにかくく、ゼーちゃんは体を休めなさい。」

シャルに目隠しをされたので視界が暗くなる。

そのまま目を閉じると程なくして眠気に襲われたので、俺はそれに身を委ねた。

俺が目を覚ましたときにはすでに二人とも洞窟のさらに奥へと進む準備を整えていた。
ちなみにリーラの態度は未だに刺々しい。

こいつの長所は物事をあまり引きずらないことだというのがどうしたというんだ。

俺が倒れたからといってここまで引きずるとは思えない。もしかしてリーラの戦いかたがえげつないとか言っただのが関係してたりするのか？でも、いつつとも言ってるしなあ……

寝てる間になにかあったとか？

それなら俺が知るわけねーし……シャルにでも聞くか？

「なにやってるんですの！行きますわよ！」

考え込んでいた俺に不機嫌を隠そうともしないリーラの怒鳴り声がかけられる。

「はいはい……」

俺は思考を中断してリーラたちのあとを追った……

そこからの道中はリーラの独壇場と言っている。

出てくる魔物の頭蓋を砕き脳みそを撒き散らせながら屠っていく。

俺はシャルと組んで足の止まった奴へとダガーで切り掛かっていく。

リーラは一撃で倒してしまうような相手に俺は最低でも10度切り掛からないと倒すことができない。

まあ、これがリーラと俺の差ってやつだ。

くそ、相変わらず銃は使用禁止だし、やる気でねーな。

「それにしてもロックオーガは全然出ないんだな。」

今まで倒したやつらの中にそれらしき姿はない。

「……………」

「あはは…えーと、クセンタ洞窟は地下三階まであってロックオーガが出るのは地下二階からなんだよ」

リーラからの反応はなかったのでシャルが代わりに答えた。

今が確か地下一階だから次からか。

そう思っていると下へと繋がる穴へとつく。

そこから鎖が垂らされ下へと降りるのだ。

地下一階へ降りる時も同じような感じだったが、これがまたしんどい。

そこヘリーラが先頭で降りていってしまう。

感じ悪いな、声くらいかけろよ。

「んじゃ、次お姉ちゃんが行くね」

そういつてシャルが降りていく。

俺もそれに続いた。

一階下に降りても洞窟内の感じは変わらない。

いや、若干乾燥気味か？

そう思いながら歩いていくと発見した。

ゴツゴツとした岩の塊。

しかし、それは人型をとっており、なにより動いている。

間違いなくあれがロックオーガだろう。

それが一体いる。

「どうすんだ？」

「幸いこちらに気づいていないみたいですし、このまま倒しますわ。」

俺の問いにリーラが答えるとそのままロックオーガに突っ込んでいった。

おいおい、それでいいのかよ……

あとに続くというか暴走気味のリーラをフォローするためにシャルもロックオーガに近づいていく。

「はあっ！」

リーラがロックオーガを突く。

狙いはやっぱり頭。

しかし

「きゃあっ！」

弾かれてしまった。

そしてロックオーガが振り向き様にその太い岩の腕が振り払うようにリーラを襲ってきた。

「しまっ」

タイミング的にリーラはかわすことができなかった。

だが間一髪でその攻撃はリーラに当たらない。

なぜなら

「大丈夫？」

シャルが鞭でロックオーガの腕を搦め捕っていたからだ。

「助かりましたわ。」

リーラが後ろに跳躍してロックオーガと距離をとる。

「堅いですわね…」

リーラが悔しそうに言う。

それもそうだろう。今までの敵はだいたいさっきの攻撃で屠ってきたのだ。

「ちょっとやそつとじゃあの岩の装甲は貫けないわ。まずはあの装甲を剥がさないで。」

シャルの言葉に少し興味が沸いた。ちょっとやそつとじゃ貫けないか…どの程度なものなんだ？

「どれ…」

ロックオーガに狙いをつけて銃を撃った。銃声が洞窟内で反響して辺りに響く。

カンッ

弾かれた。

あれ？Bランクの魔物も一撃で殺したんだけどな。……相性の問題？だとすれば

「俺こいつ無理だわ。」

となるよな。

「最初から期待してませんわ。」

ちらりともこちらを見ずに言われた。

「シャルさん、私が魔法で攻撃しますからその間相手をお願いします。」

「了解」

シャルが腕の拘束を解き、自分にその注意を引き付けるように鞭をふるい、攻撃をする。

まったく、効いているようには見えないがロックオーガはシャルに向けて進む。速度は速くない。俺が歩くくらいの速度だ。

リーラは魔力を集中しているのか手の平が赤い光を持っている。

それが炎となり、またそれが集まって球になるのに対した時間はかからなかった。

ちょっと前に聞いた現代の魔法の二階層って奴だろう。

そしてこれをロックオーガに向けて放つわけだ。

んで、狙いはやっぱり

「頭にやるんだろうな。」

「うっさいですわ!」

俺のつぶやきが聞こえたのかリーラがこちらに振り向く。

「あっ……」

そして何故か俺に向かって放たれた炎の球。スピードはそこそこ速い。

って、おいおいおい洒落になってねえよ。つかあっ……ってなんだよ!

何で味方にむけて魔法放つてんだよお前。

ヤバイ。どの程度の威力か知らんがこれはヤバイ。

つい考え込む暇があるなら逃げねーと。

いや、もう遅いわ……

持っている銃を盾にするような体勢で衝撃（？）に耐える。

盾にならないことくらい知ってるよ！

しかし、予想していた衝撃（？）は俺に訪れなかった。

「フェイズ１の起動を確認 現在の魔力属性炎 総蓄積魔力量二パ
ーセント フェイズ２への移行不可」

誰かなんか言ったか？

幻聴？

いや、そんなことより……

「殺す気が、ボケッ！」

リーラに向けて言ってる。

ヤバかった……なんか知らんが助かった。

「？ なんともありませんの？」

あつたら喋れねえだろうが！

「ついが謝れ！」

「え？あ、えーと……な、なんともなかったのならあ、謝る必要はありませんわ！」

何だと！

このアマ…

いつそドタマぶち抜いてやろうか？

「リーちゃんはやく〜。」

そこでシャルの声が聞こえてくる。

リーラから視線を移せばロックオーガにだいぶ近づかれていた。

ホントに頑丈だな。シャルの鞭ってウルフの首簡単に跳ねんだぞ？

また、リーラに視線を戻せばさっきと同じように炎の球が形成されかけていた。

次俺に向かって放ちやがったらその瞬間に頭撃ってやる。

そう考え照準をリーラの頭に固定する。

しかし、リーラは今度はちゃんとロックオーガに向けて魔法を放った。

当然といえば当然だが、内心自分に向かってこなくてよかったとほっとした。

放たれた炎の球はロックオーガの頭ではなく腹部に命中した。

球は当たると同時に小規模な爆発を起こし、ロックオーガの岩の装甲を吹き飛ばす。

……あれが俺に向かって放たれたのか。

吹き飛んだ岩の下から覗いたのは赤く肉々しいロックオーガの内部。

そしてその瞬間そこに向かってシャルの鞭が振るわれた。

それは肉をえぐるとともに剥がれかかった岩の装甲も剥がす。

そして距離を詰めてリーラもまた、装甲のなくなった部分にレイピアによる渾身の突きを見舞う。

しかし、その一撃では倒れなかったロックオーガに再度の鞭による攻撃。

と、ロックオーガの体が上下の二つに分かれた。
だからあの鞭何なんだよ…

俺が特になにかすることもなくロックオーガは倒れた。

「つーか今回の戦闘ってリーラに殺されそうになったただけか？
そういえばなんで助かったんだ？」

「さあ、討伐部位と鉄鉱石やらを回収しましょう。」

「ちよい待て。」

なんかさっさと先へ進めようとするリーラを制止する。

「なんですか？」

「なんですか？じゃねーよ。謝れ。こちとらお前に殺されかけたんだぞ？」

「死んでないどころか、怪我もしてないじゃありませんか？」

「んだと？」

「なんですか！」

「まあまあ、二人とも落ち着いて。取り合えずリーちゃんがゼーちゃんに魔法を放ったのは事実なんだから、一応謝りましょ？」

なんで一応なんだよ。悪いのは完全にリーラだろうが。

「……………すいませんでした。」

謝罪もなんか不服そうだしよ。
気に入らねえ。

「はーい、これで二人とも仲直り。」

シャルは俺とリーラの腕をとって握手させる。

また、子供扱いだよ。

まあ、お互い手を握ってはいないがな。

それから俺とリーラはさらに陰悪な感じで依頼をこなしていく。
まあ、俺はもっぱらロツクオーガとの戦闘には関わらず増えていく
回収物の運搬係と化していた。

結構な重さだ。鉄鉱石も火炎石も手に入れることができた。

これでまた、銃弾を補充することができる。

それにしてもリーラには腹が立つ。

ちゃんと謝れば許してやらないこともないというのに……

クセンタ洞窟の探索も終え、王都へと向かう道でそんなことを考え
ながら歩いていく。

「ゼーちゃんごめんね。」

とそこへシャルが近づいて俺に謝ってくる。

「なんで、シャルが謝る？」

「だって、多分リーちゃんの機嫌が悪いのお姉ちゃんのせいだし。」

リーラの機嫌が悪いのはシャルのせい？

そーいえば俺の魔法爆殺事件の前から機嫌悪かったな。具体的には
倒れた後。

「なにがあつた？」

「いや、ゼーちゃんに解毒薬飲ませるときにそのまんまじゃ飲み
込んでくれないから口移しで飲ませたんだよ。多分それでリーち
ゃんのご機嫌が悪くなってゼーちゃんに当たってたんじゃないかな
……って。」

なんだその理由は…

人命救助のための行為で機嫌がわるくなるものなのか？

そんなんでも当たられても困る。

っーかなんだ、あいつ俺に惚れてんのか？

あんまりに怒られるからそんな選択なかったんだが……いや、心当たりがないこともない、…か？

だというなら話は早い。

「おい、リーラ。」

「……………」

近づいていくが無視だ。

ずっと必要な会話以外はしようとしない。

「おい」

「聞こえてます！なんで……」

リーラが振り向いたところでその口を俺の口でもって塞ぐ。

リーラの顔が超至近距離で見える。

驚いているのかその瞳は大きく見開かれている。

十秒ほどの口づけから離れてリーラを見る。

いまだリーラは驚き固まっている。

「これで問題解決だ。さあ、謝れ。誠心誠意、心を込めて俺に魔法を放ったことを詫びろ。」

シャルが俺に口移しで解毒薬を飲ませたことで機嫌が悪くなったとしたら、それは嫉妬だろう。

そして、その嫉妬も今のキスで払拭されたことだろう。

ならばあとに残るのは？

そう、俺に対する贖罪のみだ。

さあ、こい。

生半可な謝罪では許してやらん。

地面に額を擦りつけ、涙ながらに謝罪しろ。

ん？何を震えてるんだこいつは…

なんだ涙腺決壊か？

どうせ泣くなら謝ってから泣け。

謝罪が聞き取りづらくなるだろ。

「なにさらすんですかこの駄馬————っ！——！」

なんか重い一撃を顎に貰って吹き飛ぶ。

なんだ？

殴られたのか俺。

なぜ？

好きな男にキスされて殴る女なんているのか？

「このっ！変態っ！」

唾を吐きかけんばかりの声。

これはどういうことだ？

「さすがに今のはお姉ちゃんもフォローできないわ。」

シャルが呆れたように言う。

俺、なんか悪いことしたか？

もしかして……リーラは俺のこと好きじゃないとか。

じゃあ、なんでシャルが俺と口移しすると機嫌悪くなんだよ………
待てよ、もしかして逆か！

俺ではなくてシャルのことが好きで、機嫌が悪くなったのか！

なんてこった……まさかリーラが同性愛者だったとは予想外だ。
んじゃ、完全に俺が悪いじゃん……

くそ、常に正しいはずの俺がとんだ間違いを犯したもんだ……

「リーラ、（同性愛者と気付かず）キスなんかしてすまなかった……」

「わ、わかればいいんです。シャルさんもいるというのにいきなり……いくら私わたくしが好きだとはいえ、迫る時と場所くらい……」

ん？後半口ごもってよく聞こえんな。

「ああ……（お前が好いているシャルがいるというのに）こんなことで本当に申し訳ない。」

「ま、まあ済んだことですから。今回に限り許します。次から気を付けて下さい。」

次？

……ああ、言葉の綾か

「わ、私もあなたに魔法を撃つなんて失態を犯してしまいましたわ。
本当にごめんなさい。」

「いや、もういい。」

「そうですか、では私わたくしと本当に仲直りしてくれます？」

リーラが俺に手を差し出す。

俺がその手を取ると引っ張り上げられ立たされる。

そしてそのまま握手となった。

今度は互いに手を握りあったのは言うまでもない。

これはいろいろあったDランク討伐依頼の物語の終幕。

Dランク討伐依頼の物語 「依頼完遂編」(後書き)

い、石は投げないでください…

どうなの？って展開でしたけどまだ出てないキャラもいるしヒロインをリーラー1本にするわけにもいかんのですよ。

だからってこれはない？

はい、ごもつとものです。

酒の席の物語（前書き）

今回女性陣は出てきません。

酒の席の物語

王都に来てから一ヶ月が経った。

その間に王都に来てからの初依頼のときにシャルが言っていた魔法を使えるかどうか調べる場所へと行った。

ぶっちゃけていえば教会だ。

そこで調べてもらったところ、素養がないと言われた。魔力はある。

というか魔力がない奴なんて存在しないらしい。

要は魔法を使えるだけの余裕があるかどうかだ。

俺に関していえば魔力は軽い魔法を放つくらいにはあるらしいが、魔法を扱うセンスがないということだった。

……センスがないってなんだよ。

思わずシスターのババアを殴りそうだった。

もう少し遠回しに言うとか、魔法を扱えるだけの魔力がないとか嘘つけよな。

もしかしたらという期待が生まれるだろうが。

まあ、魔法を使えないのならそれはそれで受け入れよう。

そして俺は商業区へと繰り出す。

目指すは風俗街。

ここんとこ王都にいる夜は必ずといっていいほど通っている。

とは言っても別に女とあれこれするためではない。

目的は適当に歩いてた時に見つけた酒場だ。

いや、厳密にはバーというべきか……

カウンターしかないこじんまりとした店だが静かに酒を飲むには最適な所なのだ。

そしてその店は風俗街の一角にある。

最初はしつこく風俗の客引きに声をかけられていたがあんまりしつこいんで人通りの少ない路地に連れ込んでボコボコにして以来俺に對して声をかけてくる馬鹿はいない。

……いや、一度だけ十人くらいの屈強な男たちに声をかけられて囲まれたが、全員の四肢を撃ち抜いて衆人環境の中で爪を剥いだりした。

……あれは楽しかった。また来ないかなあ。

それに結構金を持っていたから儲かった。

当分金には困らないかもしれない。

あくまでもかもしれない、だ。

そうこう考えているうちに目的の場所につく。

看板は読めないので店名はわからん。とゆーか必要に迫られない限り知るつもりもない。

「いらつしゃいませ。」

俺が店に入ると長い黒髪の髭を生やした40代くらいのおっさんが出迎える。

この店のマスターだ。

飲食店を経営する上でその姿はどうなんだ、と言ったことがあるがなんでも嫁ができるまでの願掛けらしい。はやく結婚できることを願うばかりだ。

「米酒、燗で」

席についてもはやお決まりとなった注文をする。

俺は酒では米酒が一番好きだ。

清らかで程よい甘味と辛味がある。

もともとこの店の雰囲気合わないということ置いていなかった
がお願いして置いてもらった。

ここのマスターは酒を見る目は確かでこれがまたうまい。

「あと、メキンの煮付けも。」

「……………お客さん、何度も言ってるけどここは小料理屋じゃなくて、お酒とちよつとしたおつまみを楽しむ大人の社交の場なんだよ？」

「で？」

「いや、だから米酒については百歩譲っていいとしても、メキンの煮付けとか本来ないんだよ。」

「あるだろ。」

「君が毎回頼むし、なによりなければ買いに行かされるからね……………脅しながら。」

「なら問題ないだろ。お任せの野菜炒めとウレンホのお浸しも頼む。」

「……………はい。」

いちいち駄々をこねるんだよな、こいつ。
最終的に頷くんだから無駄なことすんなよ。

「いやー、噂通りだな青年。」

俺が入る前から店の奥にいた男が声をかけてくる。

容姿は肩ほどまである赤い髪で、両目を覆うように眼帯をつけている。ゆとりのある服を着ていて体つきはよくわからない。

ただ一つわかるのはそこその年齢だということだ。

雰囲気もそうだが加齢臭がする。

「どっかの店でのプレイ中にも抜け出てきたのかジジイ。」

「……おっさんまだ50代よ。だからジジイはやめてくれ。おっさんさらに老化しちゃうから……あと、おっさんにアブノーマルな趣味はないよ。これはあくまでおっさんなりの個性的なオシャレ。」

オシャレかどうかは別として

思ってたより年いってんだな…

最高でも40くらいだと思ってたんだが。

「噂ってのは？」

「いや、おっさん久しぶりに王都にきたんだけど、ここら界隈じゃ青年は有名みたいよ？衆人環境の中で大の男数人の爪を大爆笑しながら剥いたのはもはや伝説みたいじゃん。白髪頭の男に気軽に声をかけるんじゃないって行く店ごとに言われたよ。」

「白髪なんてそこらにいるだろ。俺じゃねえよ。」

「いやいや、この店がその噂の男のいきつけらしいし、何よりマスターからやたら無理言ってくる噂の白髪男が店に来るって言質もとってたから、青年で間違いないでしょ。」

無理なんて言ったことあったか？

実現できている以上無理なことではないはずだが……

「そんで話を聞く限り、その男は悪党なのかな……とおっさんは思ってたわけさ。」

「それで、なんでまたその悪党に声をかけてくるんだよ？」

「興味があつてね。」

「あつそ……」

「おお……青年冷たいな。おっさんの話相手になつてよ。」

「くだらない話をしたけりゃ、女が酌をしてくれる店に行け。」

「いや、おっさん結構含蓄ある話すんだよ？人生経験が豊富だからね。」

なんだこいつは…

馴れ馴れしい。

無視だ無視。

「はい、注文の品。」

酒とお浸しが目の前に並べられる。

煮付けと野菜炒めは調理中だ。

もう少しかかるだろう。

俺は酒を猪口に移して一気に呷る。

「おっ、いい飲みっぷりだね。んじゃおっさんが酌してやるよ。」
「いらね。」

初老の男に酌をされて喜ぶ趣味はない。

「いーからいーから、年長者の好意は余計だと感じつつも受けるもんだぞ。」

そういつておっさんは勝手に俺の猪口に酒を注ぐ。
はた迷惑な……

「そらぐいつと、ぐぐぐいつと！」

煽るのがまた、ウザい。

かといって注がれた酒に罪はない。そう思い猪口を空にする。

「いいね。それでこそ若いつてもんだ。ほれ、もう一献。」

また注ぎやがった……

「俺はゆっくり飲みたいんだ。」

「お、悪い悪い……んじゃ詫びがわりに、今日はおっさん奢っちゃうよ。」

ほう……殊勝な心がけじゃないか。

ならば遠慮する必要はない。

「マスター、1番高い酒と料理を用意しろ。」

「青年よ、それでこそ男だぜ。」

「……だから酒はともかく肴は軽いつまみ程度しかないって。」
「買ってこい。」

マスターに懇願する。

額に鉢をつきつけているのはご愛嬌というやつだ。

「……わかりましたよ。買ってきます。その前に注文の品を作り上げるから待ってくれ……」

少し時間が経って

半泣き状態のマスターから煮付けと野菜炒めが出される。

「おっ、うまそ〜おっさんも注文していい？」

「もう、どうでもいいよ……ちょっと買い出し行ってくるんでそのあとに用意します。」

そう言つてマスターは外の世界に出ていった。

その背中には何故か哀愁が漂っていたというのはおっさんの談だ。俺は見えてない。メキンの煮付けに集中していたからな。

それからどれだけ時間が流れたのだろうか。
俺はすっかり出来上がっていた。いや、俺だけではない。

「だからレイラちゃんはおっさんには優しいのよ。ありやもう女神だわ。」

「商売だからだろ。」

「女神というのなら俺様の妹こそが地上に舞い降りた天使だ。」

何故かもう一人若くしてハゲているブラウンの瞳の男が増えて男三人で酔っていた。

どこかで見たことあるんだよなこいつ……

あと、女神から天使にランクダウンしてるぞ。指摘してはやらんが。

この若ハゲはマスターが買い出しから帰ってきたところに店に入ってきた。

どうもマスターとは顔なじみらしい。

なんか、いきなり喧嘩を売ってきたが静かに飲みたいので丁重に断った。

そしたら横にいたおっさんによって一緒に飲むことになってしまった。

さらには

「聞いてんのか親友。」

何故か親友にいつのまにかランク付けされてしまっている。
気持ち悪い。

酒の席は仲良くなりやすいと言うがここまでくると嫌悪感が募る。
つか何なんだこの状況。

いつもだつたらすぐに出ていつていただろう。
だが最近俺はストレスが溜まり、疲れている。
なぜならみじかにいる同性愛者のために二人きりにしてやったりな
んかしてそこそこ気を遣つてゐるからだ。
まったく……人に気を遣うっていうのも疲れる。
こつちが気を遣つて欲しいものだ。
だからこの男しかいない空間というものが気持ち悪くても居心地は
悪くないのかもな。

「なあ、同性愛つてどう思う？」

だからだろう。

ふとこんなことを聞いてしまったのは。
酔いのせいもあるな。

「……………」
「……………」

何で若干ヒいた顔してんだよ。

おいコラ、ハゲ。てめえは何でケツ押さえてんだ。

「俺じゃねえよボケども。」

マスターまでヒいてんじゃねえよ、殺すぞ。

「よ、よかった。おっさんちょっとお尻の心配しちゃったよ……」
「俺様は親友を信じてたぜ！」

笑顔で親指立てんなハゲ。
っーかお前もケツの心配してただろうが！

調子いいこと言ってるじゃねえよ。

「話を戻すぞ。どうなんだ？」

俺の問いに二人は真剣に考えている。

酔ってるからこそだな。

素面なら無理だ。

「俺様はありだと思っぜ。俺様が標的でなければの話だな。何より下賤な男に妹を取られるより女に取られた方がマシだ。」

「おっさんは反対。男女の営みがないなんて寂しすぎる。なにやりおっさんは女が好きだから。」

なるほどな。

どっちも馬鹿だという結論しか出ねえな、これじゃ。

「そもそも青年はなんでこんなこと聞いてくるんだ？もしかして誰かに尻の穴狙われてたりすんの？」

「いや、パーティーを組んでる女の一人が同じくパーティーの女に惚れてるらしくてな。どうしたらいいかちよっと困ってる。」

「大変だな親友。しかし、案ずるな。この俺様が素晴らしい教訓を授けてやるっ。」

「なんだ？」

「『なるようになる』だ。」

思いつき殴ってやった。

なんの解決にもなってるねえよ。

「このハゲっ！」

唾を吐きかける。

「青年は苛烈だねえ。」

「まったくだ。この俺様に唾を吐きかけるなんて妹以外にはいなかったんだぞ。まあ、親友だから許してやるんだからな。」

妹に唾吐かれてんのかよ。

それって嫌われてるんじゃないのか？

「ーか簡単に立つな。」

ダメージないのか？

「まったく……若者達よ、ここはおっさんに任せなさい。伊達に歳とつてないみたいなダンディな部分見せるから。」

おっさんは酒を一口口に含み姿勢を正す。

「そのハゲた

「剃ってますから。」

……オホンっ、頭を剃っている青年の言ったことに似てるけどその女性を見守って余計なこととはしないことだ。なんか青年が入ってくとこじれそうだ。」

ハゲの言ったこととなんか変わったのか？

俺への侮辱が加わった感じしかないが。

「いや、おっさん良いこと言うわ。俺様少し感動したよ。」

「ダンディ？」

「よっ！ダンディ。」

「イエス、ダンディ！！」

何やってんだこいつら……

もういいや。

なんか酔い醒めてきたな。

「親父！強い酒寄せ！」

「もはやマスターでもないんだ……」

こうして夜は更けていく。

なんか知らんがこいつらとはまた会いそうな気がする。

そっいえば名前聞いてないな。

まあ、覚える気はそんなにねえけど

これはとある夜の酒の席の物語

酒の席の物語（後書き）

作者は正月やお盆くらいしかお酒を飲まないのので割と適当な描写です。雰囲気重視でお願いします。

途中から出てきたハゲは一回出てきますのでわからない場合はまだ登場人物には追加してませんので本編を読み返してみてください。

とある依頼の物語

「今回はこの依頼を受けましょう。」

夕食の席でリーラが依頼書をたたき付けるようにして置く。そんなことされても読めないものを見る気はさらさらないとゆーか

「また勝手に決めてきたのか。」

「いえ、今回の依頼はシャルさんと二人で決めてきました。」

「だからそれを勝手に決めてきたと言うんだ。」

俺に断ってねえだろうが。

「あら、それはすいません。でももう決まってしまったので諦めて下さい。」

「ゼーちゃん、ごめんね。」

なんか蔑ろにされてるな。

いや、リーラの恋路がうまくいっているということか……
だとしても蔑ろにされるのは面白くないものだな。

「俺はこの依頼をおりる。」

めんどくさいし、何よりいつも勝手に決められてる。
それに毎回付き合っていた今までの俺は偉いな。

「……………あなたはこの依頼を見ても何とも思わないんですか？」

そうは言われても読んでねえしな……

「そうだよ、可愛いそうだよ。」

シャルまで……

どんな依頼なんだ？

「依頼を具体的に説明しろ。」

「読めばわかりますでしょ。」

リーラは依頼書を俺の手前に移動させる。
適当に読む振りでもしとくか……
どうせやる気ないし。

「ね、大変でしょ？」

「これはなんとしても助けてあげないといけませんわ。」

二人がここまで言うなんて初めてだな。
一体何をそこまで……

「こんなんじや夜も眠れませんわ。」

「お姉ちゃんも嫌だな、気持ち悪いし……」

夜も眠れなくて、気持ちが悪くなおかつ大変……
不眠症？二日酔い？

……違うな。

こんなんがギルドの依頼に出るわけがない。出してたらそいつは馬鹿だ。二重の意味で病院に行け。
だとしたらなんの依頼なんだ？

魔物関係か？

……きつとそうだな。

夜も眠れないというのは騒音のことで、気持ち悪いのはその音のことだろう。

そんな事態が起こっているのなら大変なのだろう。

ということはその原因たる魔物の駆除が今回の依頼か。

リーラが憤っているのは大方依頼主が女なんだろう。

「勝手にやれ。俺は部屋に戻る。」

馬鹿らしい。

勝手に受けた依頼なら自分達でやればいい。

俺は飯もそこそこに切り上げて部屋に戻った。

翌朝、いつもの時間に目を覚ました。

俺が起きる時間はいつ寝たとしてもだいたい一緒だ。

眠ってから起きる時間まではなにが起ころうと基本的に起きることはない。

それが徒になった。

朝起きると俺は縄で縛られていた。

「……なんのつもりだ。」

「だってゼロさんこのままだと依頼受けてくれなそうでしたし。」

「とゆーことなの。」

なんなんだよ……

つーかこの縛り方マニアックすぎないか？

多分縛ったのはシャルだな。
さすが嗜虐趣味の女王様だ。
体の自由を奪いつつ苦しくはない。
俺には出来ない縛り方だ。

「あれゝ？久しぶりに嫌な感じがするゝ。」

「……どうしましたの？行きますわよ。」

「あ、うんゝ。せーのっ！」

二人に持ち上げられる。

なんか複雑だ……

まあ、逃げられないっばいからおとなしくすつか。
でもひとつ言っておかなければならないことがある。

「朝飯は？」

「ばっちり用意してるゝ。」

「ならキリキリ運べ。」

「……ご自分で歩こうとか思いませんか？」

「別に解放してもいいぞ。俺の足がお前たちの望む方向に進むことは
はないと思うが。」

「……このまま連行しますわ。ずっと持ち上げるのも疲れますし引き
ずっていきましょう。」

リーラがその手を離す。

ちなみにリーラが持っていたのは頭側だ。
つまりどうなるかというと、

「痛っ！いや、熱い熱い熱いっ！リーラお前っ！俺の機嫌損ねたら
どうなるかわかってんのかっ！っ！かシャルも足を止めろっ！」

「あははゝ、ごめんごめんゝ。」

誠意を感じられない。

「で、怒らせるとどうなりますの?」

俺を見下ろすような形でリーラが立つ。

くそっ、リーラごときに見下ろされるとは屈辱だ。

「少なくともお前の下着の色くらいはわかる。」

位置の都合上まる見えだ。

白とはまた、清纯ぶってやがる。

「っ!!」

目が踏み潰された。

「おおおおあつっ……………」

「言わなきゃもう少し眺めを楽しめたのに……………」

「ふんっ!」

まじでいてえ…………

いやゝでも眼球に直接じゃなくてよかった。

すぐに回復すんだろ。

それにしても躊躇なしたったな。

見たくもないものを見せられたのは俺だというのに…………

完全に被害者だろ。

くそっ、リーラには最近優しくすぎたな。

久しくいじめてねえから自分の立場を忘れているらしい。

結局二人に持ち上げられたまま連行された。
……ぜってえ泣かしてやる。特にリーラ。

「とゆーことでご依頼されたオルト＝シリアさんでよろしいですか？」

「……………いい。」

「お姉ちゃんはシャルロットって言うの。シャルって呼んで。」

「……………そう。」

「わたくし私はリーラ＝フラウンですわ。よろしくお願いします。」

「……………よろ。」

「こっちの男の方はゼロさんですわ。」

「……………ども。」

未だ視界は戻って来ない。

それにしても言葉に感情を感じない奴だ。
ずっと喋りが平坦だ。

「……………悲しい？」

「ああん？」

「……………泣いてる。」

「体の防衛本能からだ。どそぞの馬鹿女に目を攻撃されてな。」

「……………じゃあ」

そこでなんか顔辺りが温かくなつて痛みが消えていく。

目を開けると手が翳されているのが見える。

その手が淡い光を放っていることから魔法によって癒してくれたのだらう。

「もう、大丈夫だ。」

「……………そう。」

手の平が下ろされる。

そこで初めて俺は依頼者の姿を見た。

長いブラウンの髪をうなじのところで二つ結っている。

またその瞳は髪と同じくブラウンであり、顔は若干幼さを持っているがその造形はいいのではないだろうか。いわゆる美少女だ。

ローブ姿でよくわからないが胸は若干乏しい……

「……………趣味？」

俺を指さして女が言う。俺の姿といえば宿からずっと同じで、縄で縛られている。

「……………忘れてたな。おい、ほどけ。」

「……………おけ」

リーラ達に言ったつもりなのだがなぜか女がほどきはじめる。いや、どっちにしろ問題ないのか。

ようやく自由になれた。

「……………ゼロ？」

「そうだ。」

俺を指さして言うので肯定してやった。

「……………オルト。」

今度は自らを指さして女、オルトが言う。

「ふうん。」

だからどうしたと言った。

「……………よろ。」

手を差し出される。

どうやら握手を催促されているようだ。

「結構です。」

会ったばかりで友好的過ぎるだろ。

それに何考えてるんだかわからない感じが少し不気味だ。

「ゼーちゃんそれはどうかと思うわ。」

「助けてもらっておいてお礼を言わない所か、握手を求めた相手を断るなんて、人として最低限のこともできませんのね。」

「助けられる原因はお前らにあるだろうが。」

目の治療も縄をほどいたのもどっちもお前らのせいだ。

礼と言ったのならお前らに御礼参りという名の礼をしてもいいんだぞ。

「……………気にしてない。」

オルトはそういつてベンチに腰掛ける。

よく見るとここは港湾区中央にある公園内みたいだ。

そこにある噴水広場は待ち合わせ場所として有名で、カップルも多い。

ここには一回だけ来たことがあるだけだが印象に残っている。

とゆーのもここに来た時、たまたまカップルの女の方にぶつかってしまったのだ。

とは言ってもその女が好みだったとかそういうわけではない。

女の顔なんてモザイク処理されていて思い出せない。

印象に残った理由とは彼氏のほうが女の前で格好をつけたかったのか、謝罪と慰謝料を要求してきたからだ。

どうなったのかは想像に任せるが、俺の財布が潤ったと共に一組の恋人が別れたという事実だけは知ってもらいたい。

「……………お仕事。」

そっぴやそのためにきてんだよな。
結局なんなんだ？

「お任せ下さい。絶対にそのストーカーさんを改心させてみせますわ。」

……………はい？
なんて言った？

「そっだよ。ストーカーなんて許せない。」

あつ、空耳じゃなかった。

つかストーカー…………

確かに気持ち悪いし、大変だな。

眠れないというのはよくわからないが、脆弱な精神の輩ではそうなのかも知れない。

しかし、わざわざ依頼するようなことか？

「……………無理なら半殺し。」

改心が無理ならって意味か？

しかし半殺しもオツケーとは物騒だ。少し依頼に興味が湧いてきた。
でも……

「どうせなら殺しちゃった方が早いだろ。」

改心すると言って本当に改心するとは限らない。

ならばいつそいなくなったたほうがあとあと安心出来る。

「……………殺すの不可。」

殺すのは不許可ということか？

それとも殺すことが不可能という意味だったり。

「……………どっちも。」

「うおっ、……………心を読んだのか？」

「……………乙女の嗜み。……………フッフ。」

やっぱ不気味だよコイツ。

「まあ、暗殺の類はギルドの仕事として認可されてませんから。とにかく！そのストーカーさんの改心、もしくは半殺しということではよろしいですか？」

「……………おけ」

オルトはピースをしてリーラの問いに了承の意を示す。

「それじゃあ、そのストーカーの特徴を知ってたら教えて。」

シャルの問いにオルトは顎に手を当てて考えるそぶりを見せる。

「……………頭が寂しい？」

「馬鹿ということか？」

「いえ、この場合頭髮の量のことを言うのでは？」

「……………フフフ。」

どっちだよ。

いや、ストーカーの特徴というからにはリーラの言うことの方が正しいのか？

「他には？」

「……………オルトのこと何でも知ってる。」

「お前の一人称自分の名前だよ。」

「そこは個人の自由でしょうに…………でもそれは特徴とは言えませんわね。」

「そうでもないよ。」

「どういうことですか？」

「だって、何でも知ってるってことはオルちゃんが今ここにいらってことも知ってるってことだね。それじゃあ今もどこかで見てるかも。」

「……………オルちゃん？」

「うん。そう呼んじゃダメ。」

「……………いい。」

「ありがと。」

確かにシャルの言うことももつともだ。

ストーカーという一方的な愛を押し付けてくる奴は神出鬼没。どっかからこの光景を見ている可能性が高い。

「ではこの辺りを見回って、頭髮の残念な方を探してみよう。」

リーラの声によりシャルも動きだそうとする。

……俺？

動かないに決まってるだろ。

すでにおいしい所だけ掻つ攫う気満々なんだから。
精々俺のために働け。

そしてストーカーめ、待ってろ。

リーラへの前哨戦として痛ぶってやる。

「……………探す必要なし。」

とそこで制止の声がかかる。

言うまでもなく発したのは依頼者であるオルト自身だ。

「どういうことですか？」

リーラの疑問も当然だろう。

ストーカーを探し出さないことにはどうすることもできない。
もしかして今更怖じけづいたのか？

「……………呼べば来る。」

そう言うオルトは手招きをする。

それであるのか。

軽いなストーカー……

「……………ゼロ。」

「はっ？俺を呼んでんの？」

「……………イエス。」

なんのつもりだ。

「つか人に指図されるのあんまり好きじゃないんだけどな。会って間もない奴ならなおさらだ。」

「行きなさい。」

やっぱ調子乗ってんなコイツ。

とりあえず事が済んだら泣かせるか。

まずはシャルと二人きりになるのを妨害して、シャルと四六時中くつつく。

「……………この計画はなしだ。」

シャルを付け上がらせてしまう。

ならば直接的に？

撃つか？撃っちゃうか？

ん？

いつのまにかオルトが目の前にいるぞ。

「……………こつちからきた。……………手。」

オルトは俺の両腕を持ち上げ、そのまま自分の両肩の上に置く。なにがしたいんだ……………

「……………助けて。……………犯される。」

相変わらずの平坦な声音で声量なく発せられたその言葉はあまりにリアルティーがない。

こんなんで来るわけ……………

「貴様あゝゝ！俺様の天使から手を離せえゝゝゝ！！！」

あ、来るんだ。

やっぱり寂しいのは頭の中身だったな。

……訂正。頭の中身も寂しい、だ。

現れたのはハゲ上がった青年だ。

出現場所は噴水の池の中だったのだろう、ビチョビチョだ。

……しかし、どっかで見たような？

「現れましたわね。女の敵！」

「お姉ちゃんもお置きする〜。」

お前ら簡単に受け入れるんだな。

俺はこんなお約束だとしてもヒいてるんだけど。

「クッ……仲良く談笑してるかと思いきや、こんな青空の下、衆人環境の中で堂々と強姦しようとするとは……それにそうやって妹を人質にとったつもりか！見損なったぞ親友！」

俺に向かって指を突き付けるハゲ。効果音がつくのならズビシッ！
といったところか……

っーか思い出した！

あいつ多分この前一緒に飲んだ奴だ。

顔は覚えてねえけどあのハゲ頭とウザい感じは間違いないだろう。

「妹〜？」

「それよりもあの方ゼロさんを指さして親友って言いましたわよ？」

「……………知り合い？」

さてどう説明するべきか……

でもとりあえず決まっていることは

「人違いだ。」

だって、親友になった覚えはねえもん。

つかこいつがストーカーの正体か？

妹って言ってたけどストーカー扱いされてるってことはシャルの男版か？

俺はオルトから手を離し銃を構える。

とりあえずハゲの半殺しショーでもやるか。

これはとある依頼の物語

とある依頼の物語（後書き）

ストーリーカーへの解釈は作者自身が部屋に幽霊がいるとふと思ったときに感じた気持ちに基づいて捏造してますので実際に被害にあっている方の思いとは違うでしょう。

この場を借りてお詫び申し上げます。

（別に作者には靈感はありません）

とりあえず出したかったキャラを出してます。

少し急ぎすぎですか？

ハゲの名前は次回にでも……

とある依頼の結果の物語

SIDE ???

今日も今日とて俺様は愛しい妹を陰から日なたから見守る。

ああ……なんて罪な女なんだ。

お前が笑いかけてくれるだけでお兄ちゃんは、お兄ちゃんは……！
いかん、鼻血が止まらない。

とりあえず妹観察日記に今の気持ちを綴っておこう。

それはそうとオルトがギルドに依頼を提出した。

なんでもストーリーカーに悩んでいるらしい……

一生の不覚だ！

俺様はそんな妹の思いを察する事が出来なかった。

それにいつも基本的にはそばにいたのにそんな気配を感じなかった。
敵は何者だ？

まさか暗殺を生業とするような奴がオルトのあまりの可憐さにストーリーカー行為をしているのか！
よし、殺そう。

誰であろうと妹を困らせるような輩は万死に値する。

ということと、妹と共に依頼を受けてくれた冒険者を待つ。

場所は待ち合わせ場所としてよく使われる噴水広場。

その一角にオルトは立っている。

俺様？

噴水の池の中ですけど何か？

過保護過ぎるのもよくないからな。俺様は遠くから見守るだけなのだ。

程なくして依頼を受諾したであろう冒険者達がやって来た。

女二人組だ。

金髪と赤みがかったピンクの髪の女たち。

まあ、そこそこの美人だろうか。

オルトの魅力を一億ポイントとしたら7、80ポイントはいくんじやねえか？

おっ…とゆーことは高得点だな。

しかしまあ、オルトと並ぶと俄然引き立て役にしかないのは可哀相というほかない。

ん？よく見たら何かでかい荷物が…

あ、人だよあれ…

何？どうかしたのかあれ。

やたらマニアックな縛り方されてただけど…変態か？

！　　っーかあれ、親友じゃん！

親友とは二回しか会ったことないがもはや長年連れ添ったかのような感覚をもった。

きつと親友もそう思っていることだろう。

なぜここに…

おや？オルトが近づいていくぞ。

ダメだよ、知らない男の人に近づくなんてお兄ちゃん許しません。でも、果たして親友にまで目くじらをたてていいものなのか？

それは妹の自立を妨げる要因にはならないのか？

いや、やっぱり自立しなくていいや。俺様が一生養う。

っーか親友っ！

オルトが握手求めてんだろっがつ！

何断ってんの？馬鹿なの？

あ、いや、でも…触れてほしくないしな…つまりは、グッジョ

ブ親友！

その後もわりと和やかな談笑がされている。
と、オルトがいきなり手招きをします。

もしかして俺様を呼んでいるのか？

でも違ってたら恥ずかしいしな……

あれ？なんかまたしても親友の方に近づいていつてないか？

！！ 手をとった……

あまつさえそれを肩の上においた。

な、なにを……

そういった戸惑いは次のオルトの言葉で吹き飛んだ。

水中なのでよく聞こえなかったが確かに妹はお兄ちゃん助けると言
ったのだ。

「貴様あゝゝ！俺様の天使から手を離せゝゝゝ！！」

オルトの方から手をとって、自ら肩の上にのせたように見えたがそ
んなの関係ない。

妹天使が助けてと言ったのだ。

助けない理由がない。

なんか女共がなんか言ってるが俺様の視界には入らない。
見つめるのはただ一点。

「クツ……仲良く談笑してるかと思いきや、こんな青空の下、衆人
環境の中で堂々と強姦しようとするとは……それにそうやって妹を
人質にとったつもりか！見損なったぞ親友！」

未だに妹を離すそぶりを見せない親友と思っている男。
裏切られた気分だ。

俺様の中では目の前の男は親友から敵へと認識がシフトされつつある。

それは親友も同じ気持ちなのか、麗しの我が妹のかっこいい最愛のお兄ちゃんの知り合いだったの？という問いに親友は

「人違いだ。」

と答えた。

そうだ。俺様たちはもはや親友などという間柄ではない。上等だ。

これで貴様は敵だ。

妹に手を出そうとした罪を悔いながら死ね。

俺様は愛剣である白夜叉を構えた。

＼SIDE ゼロ＼

ハゲが背中から馬鹿でかい剣を抜いて構える。

両刃の剣の刀身は真っ白で美しいと言わざるをえない。

また、抜き放っただけでその威圧感が増す。

何よりハゲの殺気がビリビリ来やがる。

本能のままに襲ってくる魔物どもとは違い明確にこちらに向けられた殺意。

知らず知らずのうちに俺の口元に笑みが浮かぶ。いいぞ。

これがいいんだ。

こうゆう奴を叩き潰すのがたまらなく楽しいんだ。

「お前ら手を出すな。こいつは俺一人で殺る」

「しかし……この方強いですね。ゼロさんお一人だともしものことが……」

「黙れ。人の楽しみを邪魔するなよ。めんどくさいと思った仕事をやってやると言ってるだろうが。」

「……はあ、わかりましたわ。お好きになさい。」

「いいの？」

「だって、邪魔したら私が殺されそうですもの。」

その通りだ。

「そっか、ゼロちゃん？相手の間合いに入っちゃダメだよ？」

五月蠅い。余計なお世話だ。

間合いに入るも何も一発で終わる。

「死ね。」

ハゲの額に向けて銃を放つ。

狙いは寸分変わらず、銃弾は額に向けて進む。

「おらあつ！」

しかし、その銃弾がハゲに当たることはなかった。

斬られた。

そう、斬られたのだ。

普通では目で捕らえる事が出来ない速度で飛んでくる銃弾を斬ったのだ。

まぐれではない。

こんなことがまぐれでできるはずがない。

「面白い。」

こんな奴がいるとは……
殺しがいいがある。

「どうでもいいですけど、殺すのはダメですよ。」
「……………半殺し希望。」

知るかよ。

殺す気で戦って結果的に半殺しですんだらラッキーとも思ってる。

「次はこっちから行くぜ。」
「何言ってるんだハゲ。まだ俺のターンだ。」

言葉と同時に銃を撃つ。

額と腹部の二点にはほぼ同時に放たれた銃弾をハゲは右側にかわす。
銃口の向きと引き金の指の動きからそう判断したんだろう。

素直にすげえよ。
だが狙い通りだ。

てめえがそっちに避けるようにわざわざ正中線から少し左側を狙ったんだ。

そしてすでにその逃げ道に銃弾を放っている。

一息での三発の早撃ちが俺の限界だ。

「くっ、このっ！」

しかしその俺の限界の力でさえこいつは跳ね返した。

二発の弾丸をかわした後に迫ったもう一発の弾丸を斬った。
間に合うはずはない。

奴がそれを認識出来たとすれば放たれた後なのだから……

なんて剣速。

そしてそれを可能とした臂力と銃弾を斬った技量。

間違いない、今まで会った中で一番強い。

少なくとも銃を持った俺とまともに戦える奴なんていなかった。

「ふう、危ねえ。もう少しでやられるところだった。んで、今度こそ俺様の番でいいか？」

ハゲは悠然と構える。

……舐めやがつて。

「行くぜつ。」

ただただ真つ直ぐ俺に直進してくる。

策もなにもない。

その額に向けて一発弾丸を撃つ。しかしそれもまた斬られる。

「クソッ！」

ハゲの間合いに入ってしまった。

大剣が俺を左から袈裟斬りにするべく迫る。

間に合え。

俺は咄嗟に左手でダガーを引き抜きハゲの剣に合わせる。

ゴキッ

嫌な音が左腕からした。

それと同時に視界が右から左へ流れる。

ハゲの攻撃により吹っ飛ばされたのだ。

着地の衝撃は肺からの空気と肋骨を二、三本もっていった。

苦しい……息が出来ない。

うつすらと目を向けた先には追撃をかけるべく迫ってくるハゲがいる。

たった一撃でこれか……

情けねえ……

見ればダガーの姿も無惨なものになっている。

結構長い付き合いで愛着あったんだけどな。

でも、よくやった。

まだ俺は生きている。

お前がなかったら斬られてお陀仏だった。

正直駄目元だったんだが……

さて、思ったより吹っ飛ばされたな。

まだハゲはこちらに来てねえ。

いや、シャルの鞭に捕まって来たくても来れないだけか。

「邪魔すんじゃない！」

立ち上がってシャルを怒鳴りつける。

左腕はダメだな。使い物にならねえ。とゆうことはリロードはなしだ。

残弾は三発。

これで決めなきゃマジで死ぬかも……

「こい、ハゲ。」

「これは剃ってるだけだ！」

シャルの拘束が解かれてハゲが俺に迫ってくる。

まずはその足を止めてやる。

そう思っただけに撃ったが、かわされてしまっ。

また、撃った衝撃で左腕と肋骨に痛みが走る。

ちっ、残り二発。

ハゲは間合いの一步外まで迫って来ている。
額に向けて撃つ。

しかし、それは振り上げられた剣により斬られてしまう。
くそっ、くそっ！

なんで当たんねえんだよ！

「終わりだ。」

「終わんねえっ！」

剣を振り下ろそうとしたハゲに自分から近づく。

ハゲは俺に近づく勢いそのままに斬り掛かるうとしていたから必然的に距離はハゲの想定よりも近づく。

「なっ！」

避けるでもなく近づいてきた俺にハゲはびっくりしている。

だが体の動きはもはや制止することは出来ない。

俺は首を右側に傾ける。

頭から真っ二つはごめんだ。

最初からこいつの動きは見切っている。

だからこそ最初の攻撃では死んでいない。

でもできることはこんな小さなことくらいだ。

もう少し身体能力が高けりゃ軽くかわして頭に風穴開けてやるのに。

剣が振り下ろされる。

根本が左肩に食い込む。

俺が近づいたことでハゲは剣を振り切る事が出来なかった。
左肩が少し裂けているがどうでもいい。

痛い。

痛い！がそれ以上に

嬉しい。

だつてやつと

「捕まえた。」

銃をハゲの体に押し付けながら撃つ。

ゼロ距離で放たれたそれはかわすことも剣で斬ることも出来ない。

「ぐわっ！」

ハゲは堪らず後退した。

その時に剣が引かれ、左肩に激痛が走ったが、どうでもいい。
好機だ。

銃で剣を押し上げるとともにハゲに蹴りを放つ。

無論狙いは手で押さえている銃傷。

「があっ……」

奴の苦痛の声が俺の痛みを忘れさせてくれる。

いいぞ、もつとだ。もつと鳴け！

右手のみでリロードを行う。

左手が使えた場合の実に三倍以上の時間を費やした。
しかし、その間ハゲからの攻撃はない。

当然だ。

俺が撃つたのは左股関節だ。
痛みでまともに立てん。

「はははっ！いい様だ。」

ハゲに向けて言い放つ。

まだそんな殺気の籠る目で俺を見れるのか。
やはり面白い。

俺はハゲの左腕を撃つ。

一発、二発、三発。

当たる度に苦悶の声上がる。

「俺の左腕をこんなんにしてくれた礼だ。」

剣によって切り裂かれた左肩から血を流している左腕を見せる。
痛み以外の感覚はなく、動かそうと思ってもピクリとも反応しない。

「まあ、俺はそれ以上を貰っていくが……」

右腕に一発。ハゲが剣を落とす。

さらにもう一発。これで剣は持てまい。

「ほれ、次だ。」

右足の太股に一発撃つ。

「ああっ……！」

「あはははははっ！」

笑いが止まらない。

楽しい。

今までで一番楽しい。

左足の太股も撃つ。

また、上がる苦悶の声。
愉快だ。

……さて、最後の一発だ。
ハゲの頭に銃口を当てる。

「死ねよ。」

——俺が撃った銃弾は天空に放たれた。
俺の意志ではない。
それをさせたのは俺の腕に絡まる鞭だ。

「なぜ邪魔をする？」

「殺しは依頼に入ってないわ。」

いつもの優しい笑みが引つ込んで堅い顔をしたシャルがそこにいた。
リーラも同様の顔をしている。
なんでそんな顔してんだよ。

「……シラけた。」

殺意を納める。

同時にシャルの鞭が腕から離れる。

「………とりあえずびよーいん。」
「そうですわね。」

俺はそのまま自力で歩いて、ハゲはたまたま近くを通った男二人によって病院に行った。

「全治四日程度でよかったですわね。」

俺の隣に座ったリーラが言う。

「ほんと、ほんと。血がドバッと出てるからもう少しかかるかも
くっと思ってたよ。」

シャルもいつも通りの笑顔を浮かべている。

病院は各区に何力所があり、そのうち一番近いところに来ている。
病院とは回復魔導師による治療が行えるところで、怪我であるなら
長くても10日程度で完治させることができる。

「……………ほんとにオルトが全部治療するつもりだ。」

なぜかオルトもここにいる。

ちなみに俺の治療はこいつがすることになった。

まあ、治療代も馬鹿にならないところをただでいいというので都合
がいい。

だがしかしハゲの方は体内に銃弾が残っているため、まずはそれを
摘出する手術からはじめている。

「お兄さんがこんなことになってしまって、ほんとにごめんなさい。」

リーラがオルトに頭を下げる。

実はあのハゲはシャルのような自称兄ではなく、正真正銘血のつなが
った兄であった。

まあでも、あいつが依頼にあったストーカーで間違いないらしい。

妹にストーカーって……

気持ち悪い。

ハゲでどがつくシスコン。……人として可哀相だ。

「……………問題なし。……………約束通り半殺し。」

そして、兄がほんとに半殺しにあったというのにオルトには動揺した様子はない。

「でもでも、やりすぎた感が。」

「……………いい。」

「それでも、さすがにあれば……………」

リーラが俺をちらりと見る。

なんだ？

「……………好い気味。」

「妹にそれ言われるって、どんだけ嫌われてますの……………」

「……………嫌いではない。……………ウザいだけ。」

まあ、兄弟関係なんてそれぞれだ。

「きちんと仕事をやったんだ。あんまり、自分達を卑下するな。」

「……………殺そうとしたくせに。」

「お姉ちゃんいなかったらヤバかったよね。」

二人からの非難の視線を浴びる。

居心地が悪い。

俺、悪くねえのに……

「いや、あなたが悪いですから。」
「心を読むな。」

お前も乙女の嗜みを会得しているのか？

「顔に書いてあるんだよ。」

ああそうかい。

そうこうやり取りをしているうちにハゲが手術室から出てくる。
そしてそのまま全身包帯姿で回復魔法をかけられながら病室に連れていかれた。

「ご家族ですか？」

そこへ手術を担当していた医師が声をかけてくる。

「……………オルトがそう。」

「手術は無事に終わりました。しかし、股関節の損傷が酷いため、ライルさんの退院には7日ほどかかります。」

「……………おけ」

なぜか敬礼をするオルト。

得体がしれん…………

「……………じゃあ行く。」

俺の右腕を掴んでオルトが病院を出ようとする。

「え、あの、お見舞いとかしないんですか？」

「……………勝手に治る。……………あと頼んだ。」

医者にそう告げるとそのまま俺を伴い外に出た。リーラとシャルも後に続いている。

「ほんとうによろしいんですの？」

「……………いい。」

「それじゃ、どうしよつか。」

「……………うち来る。」

「ああん？お前の家にか？」

「……………ゼロの腕の治療する。」

確かにそれは必要だが…………
めんどくさいな…………

「お前が俺達の泊まってる宿にこい。」

「……………おけ。」

ピースで了承の意を示すオルト。
軽いな、コイツ。

まあ、いいか。

途中で水をさされたとはいえ

楽しかった。

そういえば結局朝飯食ってないな。

もう、昼過ぎか…………

なに食おう……

これはとある依頼の結果の物語

とある依頼の結果の物語（後書き）

戦いつてやっぱ難しいですね。

つーか書いてて改めて主人公イカしてんなあゝってビックリしました。

書いてんの自分なのに……

何の説明もなく微妙に出てきたハゲの名前。

これじゃいかん……

ちゃんとした機会を作らねば！

とある朝食時の物語

ハゲとの戦いから三日が経った。

未だに俺の治療は終了してないため、左腕は首から吊っている状態だ。

肋骨に関しては完治した。

今は朝食を摂るため宿に併設されている食堂に来ているのだが……

「……………あーん。」

この状態は何なのだろうか。

オルトがスプーンで食事を俺の口に運ぼうとしている。

「あゝ！お姉ちゃんもする〜。」

「ど、どうしても言うのなら私もや^{わたくし}ってあげてもいいですわ。」

そして追従するように俺の口に食事を摘んで近づけてくるシャルとリーラ。

「鬱陶しいからやめろ。何度も言ってるが俺が怪我してんのは左腕で利き手は何の問題もない。」

そう、何度も言っているのだが、毎食のようにこうなる。

赤子じゃねえんだから一人で食えるっつーの。

だからといって抜け出して一人で食おうにも絶対一人はついて来るのでダメだった。

ウザったい……

俺は抗議の目を三人に向ける。

「そうだぞ。親友が困ってるじゃねえか！あ、オルトには怒ってないからね。そ、それより妹よ。そのスプーンをお兄ちゃんの口にインしてみないか？」

「……………断固拒否。」

オルトはそのまま自分の口にスプーンを運ぶ。
とゆーか実はオルトの兄ことライル＝シリア、通称ハゲもこの場にいる。

というのも病院に置き去りにしたあと、目を覚ましたハゲは妹分が足りないと思脱走してきたのだ。

まだ、弾を摘出して穴を塞いだくらいしか治療してないためはいずりながらここまでやってきたハゲは妹が俺の治療のため俺らと共に行動しているからとここに居着いてしまった。

当然問答無用で病院に強制連行されるかと思いきやオルト自身が治療するからここにいてもいいと言ったため、普通に存在している。
でも、俺の治療を優先しているためまったくといってよくなっていない。とゆーかその状態でもオルトについて回るので悪くなってるらしい。

見かねたリーラなど回復魔法の使える者達が治療を申し出るのだが、妹が治療してくれるからと割ときつく断っている。

まあ、所々宿を血で汚すので宿の女店主に怒られて渋々傷口を塞ぐくらいの治療は受けている。

「ああ…………、その氷の女神のような冷たい態度にお兄ちゃんゾクゾクきたよ。」

ハゲがすっごい恍惚とした表情をする。

キモい…………

でも俺はなんか慣れた。

しかし、リーラとシャルは鳥肌を立ててなんか汚いものを見るような目をハゲに向けている。

オルトは相変わらずの無表情で兄をガン無視している。
この領域にくるまでどれだけ掛かったんだろうか……
でもこいつなら最初からこんな反応してそうだな。

「……………兄。」

オルトがハゲに話かける。

「なんだいマイエンジェル？」

「……………部屋に櫛を忘れた。」

「忘れ物かい？お兄ちゃんに任せなさい！すぐに取ってくるから！」

そう言うやいなやハゲはいずってオルトの泊まる部屋に行く。
つか

「今必要じゃねえだろ。」

「……………イエス。」

「なら別に行かせる必要ねえだろ。」

「……………目障りだから排除。」

「お前性格悪いな。」

「……………ゼロほどじゃない。」

……………

……………

……………

「俺、性格悪いのか？」

「悪いですわ。」

「いいとは言えないかな。」

俺の問いにリーラは肯定、シャルは消極的な肯定をする。
あれ？

俺……性格悪いの？

いやいや、そんなことない。

俺は世界の中心として正しい行動しかしてないし、内面もそれと同じく世界の中心として申し分ないものだ。

つまりは問題なしだ。

とゆーかよく考えたら、こいつら結構な変人どもだったな。
そもそもの聞く人選を間違えている。

まあ、変人の視点から見た場合の参考程度にはなるか……

「今帰ってきたよ！我がヴィーナス。」

また、うつせえハゲが帰ってきた。

人の思考を邪魔すんじゃないやねえよ。

「……………予想より早い。」

確かに……

はいずつたにしては早過ぎる。

「はい、お兄ちゃんからのプレゼントだよ、花の妖精さん。」

あ、鳥肌立った。

慣れたと思ったのにな……

「っ」か音符が見えた気がする。
キモいキモい。

あと、わかりにくいから妹の呼称を一つか二つに決める。

「花の妖精って………プフッ」

「センス最悪」。

女性陣には受けが悪いらしい。
俺にもだが。

「あん？うるせえな醜女共。受け取り手がいいのなら別に問題ないだろ。っ」かもしかしてオルトの可憐さに嫉妬してんのか？ひとつ言っておくが畑違いの嫉妬はみつともないぜ？そんなんじゃモテねえぞ。」

なんか新鮮だ。

リーラとシャルが醜女って言われてるよ……

いつもいい女だのヤリてえだのばかりだったからな……
さて、どんな反応を返すんだ？

「別にあなたにどう思われようと、構いませんわ。そ、それに私^{わたくし}のことを好きだと言ってくれる殿方もいます。」

「お姉ちゃんもひとり以外はもうでもいい」。

あんま動じないのか。

面白くない。

ん？でもシャルのひとりって奴は俺の可能性が高いとして、リーラを好きって奴は誰だ？

殿方って言ってるから男だよな……

なんか面白そうな気配がする。

要調査の必要ありだな。

なんて考えているうちにリーラとハゲの言い争いがヒートアップしていつてる。

シャルは時折リーラに加勢しているがオルトは我関せずで食事を続行している。

俺が止めるべきか？

いや、食事が冷めてはもったいないから食べてからにしよう。

「……………兄うるさい。」

「ごめんな〜麗しの君。おい金髪、てめえも黙れ。」

「なっ……………」

リーラが絶句している。

それにしても変わり身はやい奴……

でも俺が止める必要なかったのは重畳だ。

「……………お知らせがある。」

またしてもオルトが発言する。

「なんだ？」

「お兄ちゃんが大好きとか？」

男二人で聞き返すが、女共は別に気にした様子もない。
内容を知っているということか？

「……………昨日ゼロのパーティーに加入した。」

「なにっ!？」

「なんだと!?!」

右ストレートかと思ったたら右フックをくらった気分だ。
要は殴られた感じ？

ってそんなことはどうでもいい。

「聞いてねえぞ……」

リーラとシャルをジト目で見る。

「言ってますんもの。」

また勝手に決めやがった。

やば、ちよつといらついでる。

クールダウン、クールダウン……

やっぱ無理！！

「なんでそうゆうこと言わねえんだよ！アバズレ！！」

「あ、あばずれ……？それ、わたくし私のことですか？」

「黙れ！依頼を勝手に決めるのは一億万歩譲って許容できるが、これは勝手に決めていい問題じゃない。いくらなんでも俺に話を通すべきだ。」

「うつ……そんなに怒らなくてもいいじゃないですか。」

俺の剣幕にリーラがたじろぐ。

「そんなことはない！親友の意見ももっともだ！お兄ちゃんはそのこと許してないよ！」

「……………兄は黙る。」

「これくらいにしといてやる。」

なんだこの兄妹。コントがしたいなら他の所でやれ。

「お前らうつせえよ！大体こいつ戦えんのかよ。」

俺は指をオルトに指す。ギルドの仕事は戦うことがほとんどだ。足手まといはいらない。

「あ、それなら問題ない。我が美麗なる天女はかの有名なフィズス王国の魔導学園において天才の名を欲しいままにした魔導の鬼才！」
「うるせえって言っただろ。」

ハゲに銃を突き付ける。

お前に聞いてないんだから話の腰を折るな。

「ひ、ひいつ！ご、ごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさい……」

あっ……

やっちゃった。

「……………トラウマ発動。」

そう、あの戦い以来ハゲは俺が銃を向けると極端に怯えだすようになってしまった。

めんどくさいから気をつけてたのに怒りで忘れてた……

「……………ま、ほっとけば直るからいいか。んで今の話はほんとか？」
「……………魔法全種おけ」

親指を立てて任せるみたいなことやられてもな。

「別にオルトのパーティー加入はどうでもいいんだよ。要はなんで俺に確認しないのか。俺が一番聞きたいのはそこだ。」

リーラを睨む。

どうせこいつがゼロさん意見を聞く必要はありませんわ。とか言っただんだけ。

「えっと、ゼロさんも嫌ってないし、魔導師がパーティーにいて困ることはないと思いましたので……」

「ので？」

「ゼロさんには事後承諾でも大丈夫だろうと……なんかサプライズ的な感じになればいいなんて思ってた……」

さて、どうしたもんか……

ハゲのせいで怒りは霧散しちゃったし、かといってすぐに許す気にもならない。

「この件に関しましては完全に私が悪わたくしかったですわ。だからお詫びに何でもしますわ。」

「お姉ちゃんも罰を受ける。」

罰って……

そこまでのことじゃねえよな……

でもどうせだから何かさせるか？

犬のように四つん這いで一日過ごさせるとか喋る時に語尾にわんとかだっちゃんを付けるとか。

ヤバいなんか楽しくなりそうな予感がする。

なんだったらハゲみたいに頭剃らせるとか？大爆笑ものじゃねえか！

「……………エロいことさせるの？」

「なんでだよ。」

オルトの突拍子もない発言に思わずツツコミを入れてしまった。
「っかなに言ってるのこいつ。
そんな気持ちは毛ほどもない。」

「お姉ちゃんならいいよ？」

「ゼロさん、破廉恥ですわ！」

二人が顔を赤くしている。

なに考えてるんだか……

「別にそんなことしねえよ。オルトもいい加減なこと言っな。」

「……………冗談。……………フフフ。」

オルトの無表情な顔が一瞬にやりとした。
こいつ、俺らをからかって愉しんでやがる。
すっげえ厄介なんですけど……

「はあ…、めんどくさいからダガーに変わる装備の金を全額お前から負担しろ。」

「えっ……………」

「わかった。」

困った時は金銭で解決するのが一番だ。
俺も納得、相手も納得。

後腐れもない。

惜しむらくは丸坊主か……………是非見たかった。

「……………あまり高いのはダメですわよ？」

絶対高いの買ってやる。

「そういえばオルトのギルドランクはどこなんだ？」

「……………D」

Dか。俺の一個上だな。

つまりはランク負けてる。

少し悔しいが実力は俺が上だ。

「……………ちなみに兄はB」

「Bっ！」

「うそ」

「ほお」。

上から順にオルト、リーラ、シャル、俺の言葉だ。

Bランクは超一流の冒険者の証。

ギルド全体でも二百人程度しかないらしい。

話によるとギルド加入者は億にのぼるらしいからその希少性が伺える。

確かにハゲは強かった。

ん？そのハゲに勝った俺はやはり実質的にはBランクなんだな。

まあ、Bランクの魔物を倒してるから当然ではある。

飛び級とかねえのか？

「あの方そんなに凄いですの？」

「ん、でもゼーちゃんの射撃を見切ってたし、お姉ちゃんと同
等以上とは思ってたよ」。

「た、確かに…………」

おいおいおいお前らはいつももっと強く、凄い存在と一緒にいるだろうが。

なにを深刻な顔をしている。

「そんなことより飯を食うぞ。今日は装備屋に行くんだから。」

「は、はい……」

「うん。」

また、食事に手を付け始める。

料理はすっかり冷めてしまったがうまい。

と、そこで宿の扉が乱暴に開かれ、お揃いの白い全身鎧を着込んだ奴らがゾロゾロとなだれ込んでくる。

「なんだありや？」

「……騎士がなんで」

騎士？

ああ、お国のための兵隊か……

一体なんのようでこんなところに……

と、一人だけ黒い鎧を着た奴がこっちに近づいてくる。
そして俺の目の前に立った。

「白の悪魔とお見受けする。」

悪魔？なんのことだ。

「人違いだ。」

「貴様を殺人未遂および器物損壊の罪で連行する。」

話聞いてねえよこいつ……

つーか連行？

身に覚えがない。

俺と黒い鎧は違いに見合ったままだ。

これはとある朝食時の物語。

とある朝食時の物語（後書き）

オルトのパーティー加入＆問題発生です。

オルトの兄は名前出てきましたが、ゼロの中では基本ハゲで行きます。

ちなみに初っ端のオルトのあーんはゼロ及び女二人をからかっているだけです。

取り調への物語（前書き）

視点は騎士団団長です。

取り調べの物語

<ゼロへの騎士襲来三日前>

「うはははは！それでどうなったのじゃ？」

少女の快活な笑いが周囲に響き渡る。

その声は透き通るように私の体の中に入っていく。

しかしここは騎士団総本部の団長室で、本来ならこの声の持ち主はここにいてはいけない人物だ。

「それで、その男は男達をちぎっては投げちぎっては投げる。そして動けなくなつた男達の爪を剥ぐ！」

「ひいつ……」

「その度に悪魔の笑い声が大きくなっていくんです。」

「ホントに悪魔じゃ……」

騎士団副団長であるヴァン・テンホーが少女に聞かせているのは巷を騒がせている男の武勇伝というか起こした騒ぎの話。

あまりに非道でありながら倒したのはこの王都グランネイドルでも評判が悪く、悪どい商売を行っていたやつらだった……

それに男は我々騎士が駆け付けける前に姿を消すためなかなか捕まえることができなかった。

まあ、捕まえる気があまりないというのが現状ではある。

今のところは我が国に損害を与えるようなことはしていないどころか害虫を駆除してくれたのだ。

「その白の悪魔はどんな人物なんじゃろうな？」

「きつと人間の内臓が好物なんでしょうね。」

「……………」

「……冗談です、多分。」

「ど、どっちじゃ？いや、べ、別に怖いわけではないのじゃ。」

「そこまでにしておきなさい。姫様もご自分のお部屋にお戻り下さい。」

少女、このグレイセス王国の第三王女ラキナ「グレイセス」グランネイドル様が怯えだした時点で話はおしまい。これが最近の日常になりつつある。

怯えるのにも関わらず姫様は件の男、白の悪魔と呼ばれる男の話に夢中だ。

毎日姫様がここへと足を運ぶのは新情報は必ずここへと集まるからだ。

「うーむ……一度そやつに会ってみたいのう。」

「えっ……白の悪魔にですか？」

「そうじゃー！」

だが今日に限って姫様の話は止まらない。

「なりません。」

思わずきつい言い方になってしまった。

「どうしてじゃ？」

「危険だからです。」

「お主がついていれば問題なかる？」

まったくどうしてこう、王侯貴族というものはわがままなのか……でも自分の言ったことになんの疑いも持っていない純真無垢な瞳で

見つめられると、自分に対する信頼が感じられ誇らしい気分になる。

「わかりました。かの男を適当な罪でも着せてしょっぴきます。」

「冤罪はいかんじゃろ……」

「とんでもないです。見逃していただけで白の悪魔にはいくつもの罪があります。」

被害届こそ出ていないが傷害とか傷害とか……
ん？傷害しかないな。

まあ、それでもしょっぴくための罪としては充分か。

「団長！港湾区中央公園噴水広場で騒動が起きました！」

一人の騎士が部屋に駆け込んでくる。

「どんな騒動だ？」

「喧嘩です。」

「そんな小さな案件はお前達で処理しろ！いちいち団長室まできて報告する必要はない！」

ヴァンの意見ももつともだ。

喧嘩なんて毎日町のどこかで行われている。

喧嘩両成敗で両者を一晚拘置所に入れておけば済む話だ。

「そ、それが喧嘩している一方は白い髪で銃を使っていると……」

「白の悪魔か！？」

「……おそらく。」

噂をすればなんとやらか……

しかし都合がいい。

これで現行犯として捕まえることができる。

「ヴァン。騎士一個小隊を率いて騒動を鎮圧し、白の悪魔を捕らえてこい。」

「はっ。」

「おっ！白の悪魔とやらに会えるのじゃな！」

黒い鎧に身を包んだヴァンが部屋から出ていく。

そしてそれを見て姫様がはしゃいでいる。

なんでそこまで会いたがっているのかわからないが姫様の願いを叶えてやるのもまた騎士の仕事だ。

「既にいなかったと？」

帰還してきたヴァンから報告を聞いて啞然とする。

「はい。我々が駆け付けた時には既に騒動は静まっており、戦いのあととして石畳が壊れていることが確認できたのみです。白の悪魔のその後の動向は相手と共に近くの病院に行ったらしいのですが、既に病院から去ったあとでした。」

「喧嘩の相手もか？」

「いえ、そちらは重傷らしく眠ったままです。一応見張らせています。」

「そうか……とりあえず相手が目覚めたら事情を聞いて被害届を……」

「ご報告しますー！」

私の話の途中で慌てた様子の騎士が駆け込んでくる。

「お前は病院で張り込みをさせていたはずだ。一体どうした？」

「それが…… 白の悪魔の喧嘩の相手の男が忽然と消えてしまいました。」

……うまくいかないものだな。

< 騎士襲来二日前 >

調べによれば白の悪魔の喧嘩相手の男はライル＝シリアと言う名でなんとギルドランクBの手練れだ。

そいつを倒した白の悪魔の実力は相当だろう。

ライルが消えたのには驚いたが彼は王都に住居を構えているから見つけたのは用意だと思っていたのだが……

「帰ってこない？」

「はい。」

一向に帰ってくる気配がないのだ。

さて、どうするべきか……

「白の悪魔の所在は掴んでいるのか？」

「目下捜索中ですが、じきに見つかります。」

だとしても王都は広大だ。

港湾区のに絞ったとしてももう少しかかるだろう。

さて、どうやって白の悪魔を引っ張るか……

「そういえば港湾区の中央公園の石畳が破損していたな。」

「はい。」

「じゃあ器物損壊で引っ張ってくるか。」

「少し弱いです。」

「ならばライル」シリアの殺人未遂もつけよう。」

「被害届は出ていませんか？」

「目撃者多数だからどうとでもなる。」

ライルを押さえることができなかったのはちょっと痛い問題はな
い。

「ヴァン。白の悪魔の所在が掴め次第。連行してこい。」

「了解しました。」

これで理由はできた。

姫様喜ぶかな？

<騎士襲来当日>

ついに白の悪魔の所在を掴んだ。

今頃ヴァンが身柄を押さえているだろう。

「ホントに白の悪魔と会えるのじゃな？」

「ええ、ですが先程も言ったように半径三メートル以内には近づかないこと。あとは私の指示に従うこと。これらはきちんと守って下さい。」

「わかっておる。」

姫様の喜ぶ顔がみれて不思議と私の顔も綻ぶ。

それから3時間が経ったところにヴァンが帰還してきた。
いくらなんでも遅すぎる。

あれ？なんか泣いてないか？

「……………何があつた？」

「団長……………俺らつて能無しの役立たずの給金泥棒のゴミ屑なんですか？」

ホントに何があつたんだ？
とゆーか

「白の悪魔は？」

「……………うわゝん、団長……………」

ヴァンが抱き着いてくる。

男である私に同じく男に抱き着かれて喜ぶ趣味はないがなぜか引き
はがせなかった。

ヴァンは若く、ヘタレではあるが優秀であり、最年少で騎士団の副
団長まで上り詰めた男だぞ。
なんでこんなになつてんだ？

理由を聞けば、白の悪魔の食事（普通の朝食）を邪魔したとかでい
きなり説教をしたらしい。

自分を捕まえにきた騎士を説教するのもいささか非常識ではあるが、
それを聞くこいつらは非常識を通りこしてもはや馬鹿だ。呆れるほ
かない。

さらにはそのまま帰ってきやがる始末だ。

「減俸は覚悟しておけ。」

「どうせ俺らは給金泥棒なんです……」

聞いてないし…

「つまりは、白の悪魔には会えないということじゃな？」

そういえば姫様がいた。

「いや、あの、これは」

「よい。わらわは部屋に戻るとしよう。」

ガツカリした様子で騎士団長室を出ていく姫様。
くそつ、失態だ。

私達の仕事は姫様を悲しませることではないというのに。

「今度は私自らが出向こう。」

決意を新たにする。

部下に任せたのがそもその間違いだったのだ。

「ご報告します！」

一人の騎士が部屋へ駆け込んてくる。

……最近このパターンが多いな。

「白の悪魔と思わしき男が出頭してきました。」

この報告は少し予想外だった……

尋問室。尋問とは聞こえが悪いが要は取り調べのための部屋だ。部屋の大きさはさして大きくなく、大人三人入れば息苦しさを感じる。

そこで私と白の悪魔はテーブルを挟んで向かい合って椅子に座っている。

「なぜ出頭してきた。」

「行けってやかましい女がいるんでな。」

ふてぶてしく答える白の悪魔。

「貴様の名前は？」

「ライル」シリア。」

ラ、イ、ル……って！

「それは貴様の名前じゃないだろう！。」

俺は調書に書いていたペンを投げ出して思わず叫んだ。
なんで真顔で嘘を即答でついてんだ？

「お前の、いいか？お、ま、えの名前を言え。」

「キシワ」ゴミクス」

「……………お前舐めてんのか？」

「なんで？」

あれ？すごい普通に返されたぞ？

もしかして本当にキシワ」ゴミクスが名前なのか？

「もう一度確認する。貴様の名前は？」

「そんなことよりそろそろ昼飯時じゃね？」

「……………」

「おい、なんか用意しろ。」

胸糞が悪くなるような犯罪者などいろいろと見てきたが、こいつは違う意味でム力つく。

「貴様がちゃんと名前を教えるなら飯を出してやらんこともない。」
「そうか。」

白の悪魔は胸元から何か取り出す。
あれはギルドカードか。
と、床に投げ捨てる。

「拾って確認しろ。」

殴る。

いや、むしろ殺す。

かつてここまで侮辱されたことがあっただろうか？

我慢しながら拾い上げたギルドカードにはゼロ、Eランクとかかれています。

「ゼロ君。君の罪状なんだけどね、港湾区中央公園の器物損壊とライル＝シリアの殺人未遂が容疑としてかかっている。」

「ふーん……………」

優しく懇切丁寧に説明してやるが白の悪魔、もといゼロは特に興味もなさそうな反応を返す。

「容疑を認めるんだね？」

「つーか容疑ってそれだけ？」

「……………今のところは。」

「なら、帰っていい？あつ、その前に飯を用意しろ。あんたの奢りで。」

「帰るのを認めるわけにはいかない。」

あえて昼食の要求を無視する。

そもそも用意する気などさらさらない。

「いーや。あんたらの言う俺の容疑とやらがそれだけなら俺を裁けない。」

「どういう意味だ？」

ゼロの自信満々な態度を訝しみながらも問いかける。

「どうもこうも、公園壊したのはハゲだ。目撃者多数だ、調べればすぐにわかる。あと、ハゲの殺人未遂？そんなの戦いの結果だ。俺だってこの通り。」

ゼロは首からつるされた左腕を上げて見せる。

「第一あれは、依頼でもあったんだ。半殺しは依頼者の希望だ。そもそもやられた本人が気にしていない。」

「し、しかし君がやったことには……………」

「黙れよ、盛りすぎ筋肉。よく調べもしねえで人を犯罪者扱いしやがって。賠償金よこせ。」

……………だつてお前犯罪者じゃん。

町中で男数名の爪を爆笑しながら剥いでるじゃん……………危険人物じゃん。

と言つか盛りすぎ筋肉って何？
確かに人よりは鍛えているから筋肉発達してるけれども。

「と、とりあえずお前の話を確認するまでは牢に入ってもらおう。」
「筋肉。飯はまだか？」

なんで聞いてないの？
二人しかいないし、雑音もないだろうが！
こんな自分勝手な奴初めてだ……
姫様のわがままとは全然違う。

「腹持ちがいいのを寄越せ。」
「……牢で臭い飯でも食ってろ。」
「飯が臭いのか？ある意味楽しみだ。」

ゼロがニヤリと笑う。

どこまでも馬鹿にしゃがって……

本当に殴ってやろうか？

私とゼロは睨み合う。いや、ゼロの視線は睨むというより、観察しているといったほうが近いかもしれない。

その金色の瞳を見ているとなにもかも見透かされる感覚がして思わず視線を逸らしてしまった。

ちよっとした静寂が訪れる。

しかし、その静寂も新たに登場した人物により破られる。

「ここに白の悪魔がいるそうじゃな！」

現れたのは姫様だ。

そこでゼロの視線が私から姫様に移る。

奴は一言。

「なんだ？あのがき。」

と発した。

姫様に対してなんと無礼な。

これはゼロの取り調べの物語。

取り調べの物語（後書き）

この世界というか国では殺人は別として他は被害届がでていないと現行犯以外では捕まえることができません。

お姫様のお願いの物語

「ここに白の悪魔がいるそうじゃな！」

そう言って入ってきたのは赤毛のショートボブで翡翠色の瞳をもつ10歳くらいの子供。

無駄に筋肉のついた暑苦しい男との二人きりの空間が華やぐ。……のは俺がロリコンだった場合だ。あいにく俺はロリコンではない。まあ、俺の感想としては

「なんだ？あのがキ」

である。

「貴様！姫様に向かってなんて口を聞くんだ！」

筋肉が少し声を怒らせて俺に告げる。

ふむ、お姫様が……

「んで、そのお姫様がなんのようだ？」

「白の悪魔と呼ばれるお主に会ってみたくての」

それはまた好奇心旺盛なことだ。

っーかそもそも

「白の悪魔ってなんだよ？」

黒い鎧の奴も言っていたが、なにそのダサイ悪役っぽい感じ。白はわかるよ？

だって髪の毛は白いし、普段着（目覚めた時に着用していた服を修繕した物）も白。仕事着の軽鎧も白黒のものだから白がつくのは当然だな。

問題は悪魔。

どこが？ と声を大にして聞きたい。

「お主についた通り名みたいなものじゃ」

そんなのわかってるっつーの！

察しが悪いな……

お姫様といえども所詮はガキか。

俺が聞きたいのは

「俺のどこが悪魔だよ？」

普段の俺は慈愛に満ちあふれた好青年だ。

「……いや、だってお主、衆人環境のなかで笑いながら爪を剥いたり、他いろいろ考えられない行為をしとるじゃろ」

そんなこともあったような……

でも、そのどこが悪魔に繋がるんだ？

俺は降り懸かる火の粉を払っただけだ。

「そんなこと言ったらせつかくの食事を邪魔するだけでなく、テールブルごとひっくり返した騎士のゴミ共のほうがよっぽど悪魔だ」

あれはないだろ。

本当は撃ち殺してやろうかと思ったが右腕をシャルとリーラの二人がかりで押さえられてできなかった。

「……そんな理由で説教したのか」

筋肉が呟いている。

そんな理由とはなんだ。食べ物で粗末にするのは重罪だぞ。

「ふむ、まあよい」

「偉そうにすんなガキ」

なにがまあよいだ。何様だよ。

「偉そうというか、わらわはこの国の姫じゃぞ？」

「その通りだ。貴様、先程から無礼がすぎるぞ」

「そ、それはすいませんでした！お姫様どうかお許しを……これでいいか？」

言っててちょっと気持ち悪い。

世界の中心である俺が高々一国の姫ごときにへりくだるなんてオルトに擦り寄るハゲ以上に気持ち悪い。

「貴様……」

「ミンジャスやめよ！」

俺を殴るためなのか胸倉を掴みあげた筋肉をガキが止める。
苦しい。

俺は持ち上げられたため呼吸が詰まる。
っ！が見た目通りの怪力だな。

「しかし、姫様。こいつは姫様に度重なる無礼を……」
「わらわがよいと言っておる」

「……了解しました」

筋肉が俺を降ろす。

いやー苦しかった。

……ぶっ殺す。

「はうっ！」

股間を蹴り上げてやる。

内股で股間を押さえる筋肉。

さながら土下座のようにうずくまった。

……ちよつとスカツとした。

「ミ、ミンジャス！な、何をするんじゃ！」

「正当防衛」

「……どういう意味じゃ？」

「やられたらやり返してもいいと言う免罪符」

「めんざいふ？まあ、つまりはミンジャスがお主の胸倉を掴んだからやり返したということじゃな？」

「ああ」

「ならばよし。許すのじゃ！」

なにこのガキ。

扱いやすい。

いい玩具みつけ。

「ひ、姫様……だまされております……」

「お姫様を騙す？そんな無礼な輩がいるわけないだろう？」

「その通りじゃ！」

「こ、こんな時だけ……卑怯な。」

聞こえない、聞こえない。
さて、どう遊ぶか。

「まずはお前の名前を教えろ」

姫って単語自体が敬っているようで気に食わん。

「人にものを尋ねる時はまず自分から名乗るものじゃ」

こういう風に返されるとム力つくな。

「キシワ」ゴミクスだ。フルネームで呼んでくれ。」

「変わった名前じゃのう。わらわはグレイセス王国、第三王女ラキナ」グレイセス」グランネイドルじゃ。」

なっげえ名前……

ラキナでいつか。

つーかはじめて国名知ったんですけど。

それにしても第三王女ねえ……

「ラキナね。それにしてもあれだよな。第三王女って言ったら他国とかいいとこの貴族に嫁がせて政略結婚の道具としての利用価値しかない存在だよな。」

王族とか貴族ってのはそんなもんだよな？

「き、貴様！」

「身も蓋も無いこと言うのう。まあ、間違いではない。現にわらわも二月後には輿入れとして隣国のシュナイゼル皇国に行かねばなら

ん。」

筋肉はうずくまりながらも怒りをあらわにするが、ラキナは俺の言葉を肯定する。

とゆーか

「はやくね？」

どう見ても10歳前後にしか見えないんだが。

「わらわの姉はもっと早かった」

「ふーん、そういうもんか。ところで結婚相手っていくつ？」

10歳前後のガキと夫婦になろうとするロリコン……いやいやまだ決まったわけじゃない。同じくらいの歳かもしれないからロリコンと決めつけるのは早い。でも願わくば

「確か四捨五入で50じゃったな。」

ロリコンきました。

超ウケるんですけど！

なんでシヨタコンよりもロリコンのほうが面白いんだろうな？俺が男だからか？

「なんじゃその目は？」

ヤバイ。目は口ほどにものを言う。きつと俺の目は大爆笑していることだろう。

「良縁だと思つてな。祝福の眼差しを送ってたんだ」

「なんか違うような気もするが、まあよいか」

こいつ、細かいこと気にしないんだな。

「ところでキシワ」ゴミクス。お主に頼みがあるのじゃ!」

「なんだそのキシワ」ゴミクスって?」

「お主の名前じゃろ?」

……ああ、そんな風に言っただな。つーか信じてんの?扱いやすいから素直バカにランクアップだ。

「ああ、キシワ」ゴミクスは俺の名だ。んで頼みってのは?」

社交辞令って奴だ。

頼みなんか聞く気はない。

「実はわらは民の暮らしを体験してみたいのじゃ」

「で?」

「案内役としてお主にそばについてもらいたいのじゃ」

「いつ?」

「今から、そうじゃのう……一月半ほどじゃ」

「うん、嫌です」

なんでお姫様の道楽に俺が。つーか期間なげえって!

むしろいきなりすぎ!今日初めて会った相手に頼むことじゃない。

「もちろんただでとは言わん」

「ただだつたら誰もやらねーよ」

「報酬はくれてやるし、なんならギルドに掛け合ってお主のランクを上げてもよい」

「嫌だつて言つてんだろ」

「貴様〜！姫様の頼みが聞けないというのか！」

筋肉はまだうずくまっている。いい加減復活しろ。とゆーかお前は反対する立場にいなきゃだめだろ。

「そうか……どうしても嫌なんじゃな？」

「ああ」

「ならばわらわも最終手段にでるのじゃ。ミンジャス！こやつを王家の侮辱罪で牢にいれる。明後日に処刑じゃ」

「はっ！」

筋肉復活。

そして瞬く間に拘束される俺。

つーか何？この展開。

横暴通りこして頭イカレてるんですけど。

「うはははは！どーじゃ？妾の頼みを聞けないというのならこのままお主は死ぬだけじゃぞ」

「姫様。今すぐ殺しましょう」

……すつげえ置いてかれてる。

「なんで俺なんだよ？」

「それはお主が自由だからじゃ！」

「はあ？」

「妾はお主の話を聞いて思ったのじゃ、お主は恐ろしいと。でも同時にとても自由だと思ったのじゃ。そして今日お主に会って確信した。お主と共にいれば素晴らしいものが見れると」

なんかの電波でも受信してるのか？
すごくイタい娘なんだな。
っーか

「一国の姫様を一月半も連れ回せるわけねえだろ、バカあほマヌケ
ちびガキ」

「……明日処刑じゃ」
「今すぐ殺しましょう！」

なんか火に油を注いだみたいだな。
仕方ねえ妥協するか。

「あほは取り消す」
「……いいじゃろう」

自分で言っておいてなんだがあほ以外はいいのか？
……考えてねえだけか。

「して、わらわが一月半もいなくて大丈夫かという話じゃが、問題
はない。輿入れまでは自由にしてよいことになっておる」

「だからって子守は嫌だ」

「わらわは結婚を控えた大人じゃ。子供などではない！」

「おい、筋肉。このガキ止める」

「姫様の決定は絶対だ」

んなわけねーだろ。

お前の元締めは国王とかだろ。

ガキの我が儘に付き合うほど騎士ってのは暇なのか？

「すでに父様の了承は得ておる。ゆくぞキシワ〓ゴミクス！」

「いや、いかないから」

「……こういう時はノリで行くものじゃろ」

ラキナの頬が風船のように膨らむ。

かわいこぶりやがって……

そもそも拘束解かれてねえんだよ！

「どうすればわらわの頼みを聞いてくれるのじゃ？」

真剣に考えてみる。

ガキの面倒をみるのは嫌だし、そもそもいきなりすぎる。

俺に決まった理由も不明瞭だしぶっちゃけ厄介だ。

でも、受けるに当たってなにか条件をと言われれば……おっ！閃いた。

「いいぜ？条件を全て飲むのならな。」

俺の出した条件が無事受理されて施行されるのは少しばかり後の話だ。

ところは変わって俺は宿に帰ってきた。

とつくの昔に陽は沈んでいる。

なんでこんなに遅くなったのか。それはとある生物が準備を終えるのを待っていたためだ。

俺は赤い髪のカキとメイドを一人連れている。

「メイドだ」「メイドさんだ」「彼氏の趣味か？」「ご奉仕されたい」「どちらかと言うと俺はあっちの子供のほうか……」

外野がうるさいな。

赤い髪のカキとはラキナのことで、メイドはラキナの護衛兼世話係のことだ。

名前は確かエレナって言ったな。

性別は女。銀髪をサイドポニーにっていて、瞳は琥珀色。ミニスカートのメイド服を着用していて、よく見ると太ももに投擲用のナイフがみえる。

「……遅いから一晩泊まってくるかと思って心配していましたが、ほんとに犯罪を犯してくるなんて！」

「……………幼女誘拐」

「メイドさんもいるよ」

女共が冷たい視線を向けてくる。

「事情があつて一月半ほど一緒にいることになったラキナとメイドだ」

「よろしく頼むのじゃ！」

「メイドのエレナと申します。よろしく願いいたします……全員死ねばいいのに」

「こ、これはどういふことですか？」

あ、メイドの毒はスルーか。

つか俺に聞いてんの？

「どうもこうも決まったことだ」

「どうして勝手に！理由を説明してくださいませ！」

「いっつも勝手に決めるのはお前だろ？今回は俺が勝手に決めた。安心しろ報酬は出る」

「そ、そういうことではなくて……」

じゃあなにが不満なんだよ!?

「……………オルトは別にいい」

「お姉ちゃんもゼーちゃんが決めたのなら従うわ」

オルトとシャルは最初から反対しないだろうと読んでいた。

オルトは無関心だろうし、シャルが俺の意見を反対するはずがない。問題はリーラか……

「せめてどういう経緯でそちらのお二人と一緒にいることになったのかの説明をしてください」

うーむ……どうしよう？

ラキナからは自分が姫だとは内緒にしろと言われているしな。

まあ、そもそもばらして欲しくないならメイドを連れてくるなという話だが、護衛を付けるのは絶対条件らしいからな。

つーかそもそもそこまでの配慮が必要なのか？

なんか面倒くさくなってきた……

「こいつ、国のお姫様。俺、こいつの我が儘聞かなきゃ殺される、以上。」

「はあ？」

「ちよつー、内緒にするはずじゃろ？」

「面倒になった。つーわけで説明よろしく。俺は眠いから寝る」

部屋へと続く階段を登る。

いやー疲れた。

それにしても護衛が筋肉でなくてよかった。

部屋のベッドに顔を埋める。

階下からリーラの驚きの声が微かに聞こえる。

いい子守唄になって俺は眠りについた。

これはお姫様のお願いの物語

お姫様のお願いの物語（後書き）

結構強引にお姫様と行動をとみにさせました。

騎士たちの名前は覚えても役に立たないので忘れてくれても全然いいです。

完治した日の物語

やっとだ。

やっと……

「治った」

昨日の夜に左腕が完治した。

騎士のゴミ共と我が儘お姫様のせいで予定よりも一日ほどズレたが、治ったので今は気分がいい。

一晩たつてもきちんとかの確認のため左腕を動かし、指の動きも確認する。

……うむ、支障はない。

完治したとはいえ、左肩には大きな傷痕ができた。まあ、それは裂けてたのだから当然だ。

女でもあるまいし、傷を気にするようなこともない。

ただひとつ気になるのは

「若干筋肉が落ちたか？」

怪我してからまだ一週間も経っていないのだから気のせいかとも思うのだが、一度気になるとますます疑いが深くなっていく。

そもそも俺は右利きで左腕なんて補助程度にしか使わないのだが、昨日の自分より劣ることは個人的に嫌だ。

ならばどうする？

左腕を鍛えるか？

一般的に鍛練を一日休むと取り戻すには三日かかる。

俺が怪我をして五日が経っているから取り戻すのに十五日、つまり以前より進歩するにはさらに一日プラスして十六日かかる計算だ。

こう考えると実にめんどくさい。

そういえば俺って左腕の鍛練してたっけ？……してないな。
んじゃあ進歩も糞もない。

普通に生活しよう。

ん？今、部屋がノックされたな。

「誰だ？」

「わらわじゃ」

なんだラキナか……

一体なんのようだ？

いや、その前に世間の厳しさでも教えてやるか。

「だから誰だ？」

「わらわじゃと言っておるじゃろ！」

「ワラワなんて知り合いに心当たりはない。人違いだ」

「……ラキナじゃ」

「なんだチビガキか。入っていいぞ」

「声でわかるじゃろ」

ラキナが部屋に入ってくる。

後ろにはメイドのエレナも控えている。

「例え声でわかるとしても、誰だと聞かれたらちゃんと答えるのが普通だ」

「そ、そうなのか……」

間違いではないはずだ。

ただ気心しれたやつにやることはそうはない。

ちなみに俺とラキナは気心がしれてるわけではない。

「んで、なんのようなんだ？」

「おお、そうじゃった。キシワ「ゴミクズ、わらわと町に出ようではないか！」

「……お前まだソレ引つ張ってんの？」

「なんの話じゃ？」

「いや、別にいい。つかお前昨日リーラ達と町に遊びにいったじゃん」

俺の名前についてまだ誰も訂正してないみたいだ。

何か不自由があるわけでもないしいいか。

昨日はリーラ、シャル、ラキナ、メイドの四人で出かけていた。

ちなみに俺はオルト（シスコンハゲのおまけ付き）と終日治療のために宿の部屋内にいた。

「うむ、そうじゃ！じゃから今日はお主と出かけることにしたのじゃ！」

「嫌だ。俺は忙しいんだ。他をあたれ」

さて、なにしようかな？

寝るか食べ歩きか。

どっちにしよう。

「リーラとシャルは仕事じゃし、オルトは兄君の治療で忙しいらしいのじゃ」

「んじゃ、メイドに遊んでもらえ」

「恐れながら私はただのメイド。主たる姫様と遊ぶなどもつてのほかです……ペド野郎」

「ペド？そ、そうじゃそうじゃ！エレナはただのメイドじゃ。妾は

お主と町に行くんじゃない！」

……うぜえ

つーかなんでペド扱い？

手をだすことはおるか欲情した覚えすらないんだけど。

「いやだね。なんでも自分の思い通りにいくと思うなよ」

とりあえずメイドの毒は流す。

発言の後に必ずといっていいほど毒を吐きやがるからいちいち相手すんのも疲れる。

「むう、こんなに頼んでおるのにダメなのか？」

「ダメだ。それよりいつお前が頼むなんて殊勝な行動したんだよ。」

頼まれた覚えなど一切ない。

あたかも決定事項のように告げられただけだ。

「つーわけで一人で勝手に行動しろ。……いや、メイドもいるから二人か」

そう言つて二人を残して部屋を出た……はずだった。

「ついてくんな」

宿から出て10メートルほど歩いたところで後ろを振り返る。
そこにはラキナとメイド、そしてオルトがいた。

「……増えてるし」

「お主についていつているわけではないぞ。たまたま向かう方向が一緒なだけじゃ」

なんてベタな言い訳……

どうする？ 撒く方法なんていくらでもある。

「つーかオルトは何？ ハゲの治療で忙しいんだろ？」

「…………… 本日の兄の治療終了」

ずいぶんはやいな。

まだ午前中なのだが。

「それで、どこに行くのじゃ？」

ラキナは俺の横に並ぶ。

もはや自分が述べたたまたま行く方向が一緒だという言葉い訳を忘れているらしい。

「…………… 食べ歩き？」

オルトも俺を挟むようにラキナの反対側に並ぶ。

…………… 自分勝手な奴ばかりだな！

「大丈夫です。姫様の分だけでなく場合によってはお二人のお食事代も払う所存です…………… 両手に花かゲスめ」

音もなく背後に近づいたメイドが耳元で囁く。

魅力的な提案ではあるような気もする。

だからといって一人で動いたほうが自由なんだよな。

「地面に頭こすりつけて懇願するか、何か一発芸を見せるならついてきてもいいぞ」

俺の妥協案がこれだ。

要は俺を楽しませるならオツケーってことだ。

「……………よろ」

オルトは躊躇なく土下座した。

…………躊躇なさすぎて逆に面白くない。

もう少し苦悩の末に出した結論として土下座してくれよ。

「む？そうやればいいんじゃない？」

ラキナもオルトを真似て土下座する。

こっちは一国の姫がやってるというだけで愉快極まりない。

「私も何かすべきですか？…………チ○カス」

「お前下品だな…………」

なんのためらいもなくチ○カス言いやがった。

さすがにこれは許容してもいいものなのか…………

「土下座なんて死んでも嫌なので一発芸を…………刮目しろゴミ野郎」

お前が死んでも嫌なことを主たるラキナがやってたわけなのだが、止めるそぶりすら見せなかったら。

…………それでいいのか護衛兼メイド。

「ふんっ！」

メイドは自らの右腕を掴むと力任せに関節を外した。
ゴキッと嫌な音がした後、左手を離すと不自然に右腕がブラブラする。

なにしてんのこいつ？

俺、そういうの求めてないんですけど。

「おおっ！すごいじゃー！」

「……………こいすー」

外れた腕を突つつきながらはしゃぐラキナと無表情かつ平坦な声で賞賛するオルト。

……………まあ、どうであれ俺の提示した条件を満たしたことには変わらない。

「仕方ねえからついてこい。あとメイド。いい加減腕嵌めろ」

一発芸としてはそこそこだが、俺が外したわけでもなく自分で外した腕なんか見ても全然楽しくない。

「……………計算通り。……………フフフ」

はたして何を計算したのだろうか。

つつがなく時間を過ごし、昼飯を食べ終えてそこらの店を冷やかしながら歩いている。

たったそれだけなのだが、わりと注目の的となっているのは後方を

歩くメイドのせいだ。

メイドなんてものは貴族の住む居住区以外では滅多にお目にかからないものらしい。

男共の視線を釘付けにしている。

まあ、本人がそれを露ほども気にしていないので問題ない。

問題があつたとしても俺に支障がないならば解決する気もないが……

適当に町を歩いていると人だかりが見えた。

その人だかりのせいで道が塞がれているため正直邪魔である。

「なんの騒ぎだ」

近くの野次馬に声をかける。

道端でなんか凄まじい芸でも魅せる芸人でもいるのか、はたまた超絶有名人でもいるのかわからないがはた迷惑だ。

「なんでもお貴族様が因縁つけて騒いでるらしい」

なるほどね。

馬鹿がこの先にいるのか。

「どけ」

人混みを掻き分けて先に進む。

野次馬根性？

そんなものではない。

迷惑な輩を排除したいだけだ。

プラスチックを隠すなら森。人混みに紛れてラキナ達を撒く。

人混みが拓けたところに高そうな服を着た偉そうな金髪の男と護衛

らしき屈強な男二人、さらに偉そうな男に頭を踏まれている汚れた服を着ている十代前半の少年がいた。ちなみに周りにはラキナ達はいない。作戦成功ってやつだ。

「お前らが誰のおかげで暮らせているのかわかってないらしいな！」

偉そうな男は少年の頭をぐりぐりと踏み付ける。そのたびに少年の頭は地面にめり込んでいく。

「お前ら貴族が俺達になにをしてくれたんだよ」

「黙れ！薄汚い裏の住人の分際で僕に意見なんかすんじゃねえ！」

さらに強く踏み付けられて少年がみつともない呻き声をあげる。

……代わってほしいなあれ。無論踏み付ける側で。

それにしても裏の住人ね。町中で見つかったら殺されても仕方ない存在。見つかったのが運のツキってやつだ……ご愁傷様。

「だいたいどいつもこいつも無能のくせしやがって僕を見下しやがつて！」

話がずれてんぞ。

それにしてもどこかはわからんが見下されてんのか？

まあ当然か、馬鹿にしかみえないからな。それにしても八つ当たりの様を呈してきたんじゃねーか？

「お前らも集まって見てるんじゃないよ。クズ共がつ！」

そう言つて馬鹿貴族（決定）は地面に唾を吐く。

俺なら踏み付けた少年もしくは集まってる奴に吐くのだが……中途半端め。

「な、なんと言ったことじゃ……あんな男、貴族の面汚しじゃ！」
「……………ム力つく」

いつのまにか周りにはラキナ達がいた。
足を止めすぎたな。

それにしてもさっきの言葉にお姫様はご立腹らしい。ついでにオルトもだ（表情は変わんねえけど）

……なんかあの馬鹿貴族を殺しても許されそうな雰囲気だな。
他の野次馬共も馬鹿貴族に対する非難の目が強くなってる。

そんな雰囲気微塵も気にせず馬鹿貴族は平民、はては貴族の批判までありとあらゆる暴言を吐く。

そうとう溜まってたんだな。

とゆーか少年関係なくなってきたるじゃん。

「キシワ」ゴミクス。わらわが許す。あやつの蛮行を止めよ」
「命令される覚えがねえ」

いつからお前の部下になったんだよ。

とゆーか弱者を踏みにじるのは強者の特権だ。

形は違うが自分も同じようなことをしてるからこそ今まで何不自由なく暮らせていたことを理解してるのだろうか。

まあでも馬鹿貴族に好感を持ってるかと言ったら皆無だ。

それにイキがつてる奴をへこませるのは個人的に大好物なんだよな。
とゆーことで肉体的にはいつでも可能なので、今回は軽く精神的なものでもやっておくか。

「かーえーれっ！かーえーれっ！」

手拍子と共に帰れコールを発する。

ラキナはよくわからなそうにしていたのでとりあえず真似させた。
場は完全に馬鹿貴族に否定的だったため途端に辺りは大きな帰れコールに包まれる。

わけわからず参加してる奴もいるんだろっなあ……

「な、なんだよ。これじゃ僕が悪者みたいじゃないか……」

少なくとも今は悪者だけだな。

「く、くそっ！ 帰るぞ」

馬鹿貴族は護衛を引き連れて退散する。
あれ？ こっち来た。

「邪魔だ、このマヌケっ！」

馬鹿貴族は俺に向かって言い放ちやがった。
あらやだ。こいつ、殺しちゃってもいいのだろうか。
当然ときませんけど？

「どけって言うてんだろ！」

「どけと言われたのは今のが初めてだ」

「貴様！ 僕に口答えをするっていうのか！」

「え、何？ 何か言った？」

「馬鹿にしているのか！」

「してる。よくわかったな」

「貴様！ おいつ、こいつを痛め付けてやれ」

馬鹿貴族の指示により、あとをついていた護衛がゆっくりと俺に近づき、俺を殴ろうとする。

とりあえず銃を引き抜いてその拳を撃つておく。
一応の配慮として貫通したとしても周りに被弾しないように上向きに狙いをつけた。

「がああっ……」

「ネル！よくもやってくれたな。おい、チャン！今度はお前がいけ」
「坊ちゃま……しかし」

「いいからいけ！」

「は、はい。りょうかぐわっ！」

「ちんたら喋ってんじゃねーよ。馬鹿共」

待ちきれなくて足撃っちゃったじゃん。

それにしても弱いな。

いや、前に戦ったのがハゲだから感覚がおかしくなってるのか……
あいつ変態だけど強いしな。

「お、覚えてろっ！」

そう言い残して馬鹿貴族は俺がいるのとは逆方向へ駆け出す。

撃つても当てる自信はあるが、あの口ぶりからするともしかしたら
報復にくるかもしれないから見逃してやる。

出来れば10人は揃えてもらいたいものだ。

つーかあいつ護衛置いていきやがった。

「病院には自分たちでいけ。あとお前らの主に伝えとけ。報復大歓迎
迎ってな」

「ぐっ……覚えてろ」

「それはさっき馬鹿貴族が言った」

護衛二人は支え合いながら病院に向かっていく。手を貸そうとする

ものは今のところいない。

「お、おい。あんた大丈夫か？貴族に盾突いて……」

未だ大勢いた野次馬共の一人が俺にそう聞いてきた。

「問題ねーよ。くだらねえこと聞いてくるな」

お前にとつたら他人事だろうが！

馴れ馴れしく声かけてくんなよな。

問題になるならなで別に構わねーよ。

「な、なんかすいません……」

「謝るならそれなりの謝り方が……なんだよ？」

袖を引かれた感触がしたので見てみるとオルトだった。

「……………そこまでにして帰る」

そう言う俺の袖を掴んだまま踵を返す。

「おおっ！わらわもやるのじゃ！」

ラキナも反対の袖を持って引つ張る。

どうでもいいが歩きにくい。

それにしても……これからがいいところだったのにな。

そのまま宿に帰った俺達の元へと宿の女店主が焦った感じで走り寄って来る。

「どうかしたのか？」

「どうもこうも、あんたのお仲間が仕事で怪我して病院に担ぎ込まれたらしいんだよ！」

……

……

…

「ハゲの男か？」

「俺様はここにいるっ！あとハゲじゃないから」

なぜか背後（正確にはオルトの背後）からハゲが出現してくる。つか反応したということは少なからずハゲだという自覚があるんじゃないのか？

それにしてもオルトを尾行してやがったなこいつ。
ん？とゆーことは……

「病院に担ぎ込まれたのは女の子二人だよ」

へえゝ……

これは怪我の完治した日の物語

魔法植物採取依頼？の物語 1

リーラ達がケガをして病院に担ぎ込まれたと聞いて幾分か時間が経っているが俺は未だに宿にいる。

いや、それどころか併設された食堂にて軽い食事と酒を注文して今まさに食べているところだ。

オルトやラキナは女店主に何処の病院に担ぎ込まれたのか聞いてすぐに出ていった。

俺はと言うと若干動揺っぱいものを感じはしたが、自分の今のこの落ち着きようから考えれば心の底から別段気にしていないみたいだ。ま、最悪死んでなきやいいや……

「貧乏揺すりやめな」

女店主が俺に声をかけてくる。

無意識にひざのあたりが小刻みに揺り動いていたみたいだ。

「そんなに気になるならあんたも病院にいきやあいいじゃないか」

「別に気になってねえよ。それよりも味付け薄いぞ」

朝と同じ料理を食っているのだが味が感じられない。塩をちゃんと使ってるのか？

むしろこれを作った奴はクビにすべきだな。

「薄いもなにもあたしゃいつも通りちゃんを作ったよ」

「お前が作ったのか。馬鹿が……味見くらいはしろ」

「いや、したから。三回くらいしたから」

なぜ三回も味見を……

もはやつまみ食いの範疇ではないか。

「平静を装ってはいても、やっぱり内心はめちゃくちゃ動揺してんだねえ……」

私わかつてます的な声音で話す女店主。

俺が動揺？

それは少し認める。

でもそれは話を聞いた当初のみだ。もう治まっている。

「いきおくれすぎてボケたか、ババア」

「いきおくれるもなにもあたしゃ結婚28年目で普段から旦那とはラブラブだよ」

すっげーどうでもいいことだ。

「おっ、帰ってきたみたいだね」

なにっ!?

顔を上げて入り口付近を見るが入ってきたのは醜悪な面の三流戦士と同じく顔の作りの残念な女で、全然知らない奴だ。

「やっぱり気にしてるじゃないか」

「ハメヤがったな……」

「ハメるもなにもあいつらはうちに宿泊しているお客さんだよ。だから帰ってきたという表現は間違っちゃいないさ。それにいつあたしがあんだのお仲間が帰ってきたって言ったんだい？」

ナメた真似してくれやがる。

こうやって人の揚げ足を取るような輩はろくな死に方しないではない。

むしろ俺が執行者となるか？

「今度は本当に帰ってきたよ」

三度目の正直と言うから二度目の今回は無視だ。
何度も騙されてやるほど俺はお人よしではない。
味のしない料理を口に運ぶ。

「……心配するそぶりもなく食事してるなんてあんまりよ」

「ちよつと神経を疑いますわね」

声のした方に目を向けると所々に包帯を巻くなどの治療跡のあるリーラとシャルが立っていた。
リーラは呆れるような目を俺に向け、シャルは半泣きで俺を見ている。

「つーか元氣そうだな……」

「大した事なかったみたいじゃねーか」

「ええ、話がちよつと大袈裟になったみたいですけど別に死にけるほどの大怪我をしたわけではありませんわ」

「でもでも、オルちゃん達は息を切らしながら駆け付けてくれたのにゼーちゃんひどい」

「なんだ？お前らのケガごときで俺が取り乱すことを期待してたのか？」

この俺がリーラ達のことをそんなに気にするわけが……

「こんな風に言ってるけど結構あんたらのこと気にしてたんだよ？

カッコつけてイキがってるけどさ」

……ババア。

根も葉も無いこと言いやがって！

俺のどこがカッコつけてイキがってるんだよ！

「さっさと消えろ」

「あははははっ！少しは素直になりな！そうすりゃもうちょっとモテるよ」

そう言い残すとババアは仕事に戻っていった。

「ふうん、気にしてましたの？」

「ゼーちゃん……やっぱりお姉ちゃんのことを！」

ニヤニヤしながら俺を見るリーラと抱き着いてくるシャル。

なんかどう言おうと本当は心配してたけど素直になれない男が言い訳している構図にしかないなコレは……

「んで？確かお前ら今日は仕事してたんだろ？なんかあったのか？」

「……………話題のすり替え」

「すり替えたのじゃ！」

うるせーよ。

すり替えたのではなく本題に入っただ。

「単刀直入に言えば今回の依頼は失敗してしまいましたわ」

なんだと？

リーラとシャルはひいき目に見てもそこそこの実力をもつ冒険者で

無理な依頼を受けるとも思い難い。

一体何が……

「どんな依頼なのじゃ？」

「依頼自体は魔法植物の採取で簡単なもののよ。ただ……」

「ただ？」

「その魔法植物の群生地に強力な魔物がいましたの」

「どんな魔物だ？」

「あれはおそらくダークプラント……木々を司るAランクの魔物ですわ」

Aランクの魔物だと！？

そりゃまた大物のご登場だな。

「そいつに襲われてケガをしたわけだ」

「さすがにAランクの魔物相手にシャルさんと二人きりで勝てるとも思いませんでしたので……」

なるほどね。

「でも、ゼロさん達も加われれば依頼をこなすこと自体は可能です」

「は？依頼は失敗したんだろ？」

「いいえ！便宜上さつきはそう言いましたが、本当の意味で依頼は失敗していません。なぜなら期限はあと三日あります。その間に魔法植物の採取を出来れば問題ありませんわ」

なんか熱弁しだしたぞ。

「依頼失敗のペナルティはご存知ですわよね」

「ああ」

10ポイントの減点と報酬の一割程度の罰金だが、俺には関係ない話だ。

自分達の力で乗り切ってほしいものだ。

「自分は関係ないような顔をしています、依頼失敗の際はゼロさんのポイントも減点されますわよ」

「なんでだよ」

「パーティー依頼ですもの。連帯責任ですわ」

はあ？依頼を受けたのはリーラとシャルだろうが！

「パーティー依頼は受けたときに原則としてパーティー登録をしている全員が受諾したことになります。ですからゼロさんもこの依頼を受けていることになります」

そんな規則だったけな……

完全にとばっちりじゃねえかよ。

「ゼロさんのケガも完治したことですし、ご協力お願いします。オルトさんも巻き添えにしまいましたわね、ごめんなさい」
「……………いい」

俺への謝罪はないわけだ。

もっとボロクソにやられればよかったのに……

「と言うわけで今日はゆつくり休んで明日の早朝から依頼達成のために魔法植物の採取に向かいましょう」

「おいおい、ダークプラントとやらはどーすんだよ？」

すっげー重要なことじゃねえのか？

「基本方針は逃げることにします」

「戦わねーのか？」

「うゝん……勝てる見込みは薄いかな。Aランクの魔物は町ひとつ簡単に滅ぼしちゃうからね。ギルドに報告したから近いうちに討伐隊が組まれるよ」

確かに王都ならば人材も集まるだろうし、わざわざ戦う必要もないな。

だからと言ってその魔物が討伐されないうちにテリトリーに向かうのもどうかと思うが……

「よくわからんが大変だということなのじゃな！わらわも行くぞ！」

「ダメです」

「ダメよ」

「……………ダメ」

ラキナの提案というか思いつきは即座に却下される。

メイドが沈黙を保っているのは何故なのだろうか。

まあ、ラキナがついてきても足手まといになるだけだしな。

明日は王都へ留守番してもらおう。

「いやじゃいやじゃいやじゃ！わらわも行くんじゃ！」

「わがまま言わないで下さいませ。一国のお姫様を危険なところに連れていくことは無理だということを分かってください」

「むゝゝ……………」

不服そうなラキナは置いておいて他の面々も席について食事を注文する。

俺も追加で注文をした。
いつのまにやら食事の味が元通りになっているしな。

明けて翌朝の早朝。

装備を整えて俺とリーラ、シャル、オルトの四人は宿の前に集まっていた。

いやあゝ眠い。

最近は自然に目が覚めるまで寝てたからこんなに早く起きるのなんて久しぶりのことだ。

今回初めて一緒に仕事をすることになるオルトの恰好をみる。

紺色のローブを着たいかにも魔導師然とした姿になんか分厚い本を持っている。

「読書なら戻ってからしろよ」

「……………これは魔導書」

魔導書？

なんだそりゃ…………

「すごく珍しいものをお持ちになられていますのね」

「知ってるなら魔導書がどついうものなのか俺に説明しろ」

オルトの答えにリーラが反応する。

オルトだときちんと説明してくれるか不安だから困った時の説明係であるリーラに聞く。

「魔導書はその名の通り魔導に関する書ですわ。いくつもの古代魔

法が書かれているもので複製不可のすごくレアな代物ですわ……
うらやましい」

よくわかんねーんだけどとにかく凄い物なんだな。
ん？でも……

「書かれている古代魔法を暗記したらいらねえだろソレ」

「……………無理」

「なんでだよ」

「古代魔法は魔法陣の構成式が複雑な物が多いんです。ですからこのように魔導書による補助が必要になるんです」

つまりはカンニングペーパーみたいなものか……

「我が愛しき天使の実力をもつてしてもきちんと習得できた古代魔法は8つだからな。それでもすげーんだからな？」

魔導師の事情なんて知ったことではない。

俺は魔法を使うセンスがないのだから。

まあ、すげーならそれでいいんじゃない？

「つーかハゲ、お前おとなしく寝てろ。一応は怪我人なんだからな」

相変わらずのはいつくばった姿勢のハゲに声をかける。

「何を言う！妹が危険なお仕事に赴くというのにおめおめと寝てな
どいられるか！あとハゲじゃないから」

「……………寝てろ」

「了解さ。お休みマイスイートエンジェル……気をつけて行くんだ
よ？」

オルトのことだけはちゃんと聞くんだよな。

「……………ついてくんなよ?」

「ギクツ…お、お兄ちゃんとは別にしておとなしく寝たふりをしてあとあとついていくつもりはこれっぽっちもないよ!」

ついてくる気だったのか…………

まあハゲなら当然の選択といったところか。

「オルトさんもライルさんを心配してこう言っているのですからおとなしくしててくださいな」

「そうそう、オルちゃんにはケガのないように注意をするから」

「絶対だぞ?親友もオルトの命だけは守ってくれ!それ以外の奴らの命はどうなってもいいから。あとこれも重要なことなんだがオルトになるべく触れないようにな」

なんて自己中心的…………いや、オルト中心的な発言だ。

「……………黙て消えろ」

その言葉とともにオルトはハゲに唾を吐く。

「ありがとうございます!」

へ?ありがとうって言ったのかコイツ…………唾を吐かれてありがとうって…………変態も変態、ど変態じゃねえかよ。

「気持ちわりいよお前…………」

格別のキモさだ。

視界に入れないようにしよう。

「さて、出発すつか」

「え、ええ……そうですわね」

「ゼーちゃん、手繋ごつか」

俺と同じように二人もハゲを視界に入れないようにしている。
ちなみにガキじゃねえんだから手なんか繋ぐわけないだろ。

ハゲを無視して歩いて王都の入り口である門まで来た。ここから二時間ほどのところに目指すべき場所がある。

ずいぶんとまた近い。

俺達は目的地の森へと進む。

しかし、その後ろを少女と目を引く恰好をした女。

そして若くしてハゲている男の三人がついてきていることは今のところ気づいていなかった。

これは魔法植物採取依頼？の物語の一幕

魔法植物採取依頼？の物語1（後書き）

魔法植物採取依頼？の物語は3〜4話くらいの予定です。

あともう少しで王都編も終わりかなあ……

魔法植物採取依頼？の物語2（前書き）

久しぶりの投稿です。

少し見苦しい感じがするのでそのうち手直しします。
それでもいいという方はどうぞ

魔法植物採取依頼？の物語2

俺達一行はたいした時間をかけることなく森についた。

木が鬱蒼と生い茂り奥には陽の光が届いていないと思える。

「さあ、行きますわよ」

リーラの合図と共に森の中へと入る。リーラとシャルの二人が先頭で、俺とオルトがその後ろをついていつてる並びだ。森の中は当然道などないため少し足場は悪い。

「どこに依頼にある魔法植物が生えてんのか分かって進んでんのか？」

素朴な疑問だ。

「奥です」

それに対して返ってきた答えはあまりに抽象的である。

「奥って……もしかしてあてずっぽうで進んでんじゃねーだろうな？」

「そんなことはありませんわ。きちんとした根拠の元進んです。そうですわよね、シャルさん」

「うん」。少なくとも昨日通った道をもとに今回のルートを組んでるからダークプラントに遭う確率も低いと思うよ」

シャルも同意しているし、いきあたりばったりというわけではない

らしい。

「んで、その魔法植物とやらはなんなんだ？」

「ラスカウリという種の薬草で陽が沈んだ頃に花を開くと花冠の縁が白いレースのように広がって淡い光を放つんです。その光景は芸術的な美しさがあると言われてるんですわ」

……聞いたけどわかんね。

薬草に芸術的な美しさがあるとかいわれてもなあ

「それなら暗くなってから来たほうが良かったんじゃないの？」

女って綺麗なものには弱いし。

「ゼーちゃんは、夜になってさらに暗くなったこの森を歩きたいの？」

シャルに言われて考えてみる。

ただでさえ薄暗いこの光景がさらに闇に包まれると怪しさ倍增。幽霊のたぐいが苦手な奴なら近づきすらしない光景となるだろう。でも俺はそうゆうの平気みたいだ。しかし好き好んでいくかと言われるればダルいことこの上ない。

結論、どうでもいいけど積極的にはこない。

「消極的否定の方向だ」

「でしよ？だからさっさと採取して陽が出てるうちに戻った方がいいのよ」

まあ、別に花が光るとかどうでもいいしな。
それにしても

「魔物の姿が見えないな」

そこそこ進んでいるのにまだ一体の姿も発見できない。

「……………多分ダークプラントの所為」

「なんでまた？」

「怯えているんですわ……自分よりも圧倒的な強者の存在に。でも、今はそれが好都合と言えますわ。無駄な戦いもなく迅速に用事を済ませることが出来ますもの」

まあ、確かに俺も病み上がりだしな。本調子ではないかもしれん。でも、それを確かめるためにも雑魚の一体や二体はぶっ殺したかったんだけどな。

少し残念だ。

「だからと言って周囲の警戒は怠らないで下さい。逃げていない魔物もいるかもしれませんし、何よりダークプラントとの遭遇だけは避けなければいけません」

もつともだ。

俺としてはAランクの魔物と戦ってみたい気もするが、それはまた別の機会にしよう。

正直あんまりテンション上がんねえし……

などと思っていると

「ひょえ~~~~~~~~~!」

という甲高い悲鳴のような変な声が後方から聞こえてくる。なんか聞いたことあるような声質の気がした。

「魔物の泣き声でしょうか？」

「ん〜でもこんなの聞いたことないよ〜？」

「……………悲鳴みたいだた」

「確かにな……………」

無視していききたい所なのだが、さてどうするべきか…………

「一応見てきましょう」

「そうだね〜誰か人がいるのかもしれないし〜」

リーラとシャルが振り向いて歩を進める。

「俺はここにいるから」

「……………わかりました。オルトさんもゼロさんと共にここにいてください。シャルさん行きましょう」

一時失敗組ととばつちり組に分かれての行動となった。

オルトを残したのも負い目から疲れないように気を遣ったのだろう。とりあえず近くの倒木に座ってリーラ達が帰ってくるのをオルトと二人待つことにした。

〜SIDE ラキナ〜

こっそりとキシワ＝ゴミクス達のあとをつけておるのじゃ。

留守番はぜんぜん楽しゅうない。わらわはシュナイゼル皇国へと嫁いでしまえば自由に行動することは出来なくなるだろう。

今の期間はパパ様に無理を言って了承を得た大切な時間なのじゃ。

無為に過ごすのだけは嫌じゃ。

それなのじゃから仲間外れなど許さぬ。

Aランクの魔物？

そんなものはエレナがおれば大丈夫じゃ！

いざとなれば途中で拾ったハゲのシスコンを罠に逃げれば良いの。
ん？そういえば森に入ってしまったからハゲの姿が見えなくな
ったの。

「エレナ。ハゲがおらんぞ？」

「多分妹さんをストーキングしているのでしょう……あの役立たず
め」

「ふむ、困ったのう。あやつはキシワッゴミクス達を見失った時の
切り札でもあったのじゃが。」

ハゲには妹がどこにいるのかわかるという特殊能力があるらしいか
らの……

「姫様、急がないと見失ってしまいますよ……ただでさえ遅いんだ
から」

エレナの声に歩くスピードを上げる。

切り札がない以上、見失っては大変じゃ。

「ところでエレナ、わらわは喉が渴いたのじゃ。なんか飲み物が欲
しいのじゃ」

昨晚のうちに持っていく荷物は全てエレナによって準備されておる。
わらわは振り返ってエレナに飲み物をねだったのじゃが

……………エレナがおらぬ。

忽然とその姿を消しておる。

隠れてるのかとも疑ったがどっちにしろ姿が見えぬことに変わりはない。

妾はなぜかこんな薄暗い森の中で一人になってしまった。

「エ、エレナ……どこにおるのじゃ。悪ふざけはやめよ」

静かに辺りに声を向けてみるが帰ってくるのは静寂だけじゃ。怖い。

ただ一つ、その感情のみが妾を支配する。

これは怒られるの覚悟でキシワ「ゴミクス達と合流すべきじゃろうか……うん合流しよう。

そう思い前方へと走り出す。

しかし、それと同時に何者かに首根っこを捕まれて持ち上げられてしまう。

「ひよえ~~~~~!!」

つつい口から情けない声が漏れてしまった。

わらわはこんなんでもこの国の姫じゃ。

もしや身代金目当ての誘拐かとふと思ったが、わらわを捕まえている存在は人ではない。でもエレナの悪ふざけじゃったらいいなと顔を向けた先に見たものは角の生えた白い馬じゃった。

その姿を見たときわらわの思考は停止してしまった。

SIDE ゼロ

あいつらが来た道を戻ってから30分ほど経っただろうか。一向に帰ってくる様子がない。

「おせえな……ウ○コでもしてんのか？」

「……………二人とも？」

いや、それはないわ。

小さい方やら化粧直しにトイレに多人数で消えることはあれどかい方に連れ立って行くなんてありえないだろ。

それでも一緒に行くという人物がいるのならばデキてることを疑うしかない。

……もしかしてデキてたりすんのか？

やだ、いつのまに？

おっと、取り乱すな俺。

もともとリーラはシャルが好きなんだ。知らない間に告白とかして付き合うことになってる可能性も否定できない。

いや、待てよ……

よく考えてみるとシャルがリーラの告白を受け入れるのか？

確率は低いな……

んじゃあ、なんで遅れてるんだ？

シャルが大きい方をしていて、んでリーラがそれを陰から覗いてる的な？

おお…これだ！

これなら納得できる。

リーラがど変態となっているが二人が付き合う可能性よりも遥かに高い。

そんな凶行は止めてやるのが世界のためだ……

「しょうがない。探しに行くか……」

「……………おけ」

二人で共に立ち上がり二人が向かった道へと進む。

周囲を見回しながら進んでいくが一向に二人の姿は見えない。
どこまで行っただんだ？

いい加減疲れてきたぞ。

つーかもう少しで森を抜けちまう。

「引き返すか」

「……………無駄な労力をつかた」

確かに…………

黙って待つてりゃよかった。

元来た道に戻る俺達。

そんなときだ視界の端に白い何かが映ったのは

「おい、見たか？」

「……………見た」

すっげえ綺麗な馬だったなあ…………

野生の馬だろうか？

普段俺達が目にする馬は人によって飼い馴らされておとなしくなっているが、本来の馬は気性が荒い魔物で、群れをなして行動するらしい。

「……………子供が捕まてた」

「いやいや嘘だろ」

そんなの見えなかった。

しかし、いいな〜アレ。欲しい。

必要ないといえは全くないんだが、あって困るのは餌代くらいなものだ。

売ればそこそこにはなるだろうし、最悪食える。

「あいつ捕まえつか……」

「……………リー達は？」

「ほっとこう！もともとあいつらの不手際だ」

そう言つて白い馬の元へと歩き出す。

その姿はすでに見えないが向かった方向はわかる。

頼むから真つすぐ進んでくれよ。

程なくして森の中の泉へと出た。

そこにいた白い馬を見て、無神論者ではあるが神がいたらよくやつたと褒めてやりたい気分になった。

んでもなんで

「ちびガキがいんの？」

なぜかラキナが白い馬のそばにいた。

一心不乱に泉の水をさながら家畜のように飲んでいる。

「……………子供捕まえてるて言た」

「本当だったのか……………つかそれがラキナだつて言うんなら教えろ」
「……………そこまではわかんなかった」

んじゃあ仕方ないか。

「んでどうすつか？ノープランできた上に予想外の事態だ。アレら捕まえる魔法とかあるか？」

手をピースにして指の先を馬とラキナのそれぞれに向ける。

「……………ラキも？」

「ガキに関してはお仕置きの意味も込めてだ」

「……………捕縛の魔法はある」

「んじゃ、やれ」

「……………だめ」

「なんでだよ？」

「……………あの魔物がユニコーンだから」

ユニコーンってなんだ？

よくわからんが上等な馬ってことか？

よく見りゃ頭から角生えてるしな。

ますます欲しくなった気がする。

「んじゃあ、真っ正面から行くか」

「……………え？」

ユニコーンとラキナに近づいていく。

数歩進んだところでユニコーンがこちらに顔を向ける。

【なんやアンタ？】

いきなり直接脳に響く感じで声が聞こえる。

……………幻聴か？

【いや、なんで近づいてくんねん。ワイは男に擦り寄られる趣味はないんやけど】

もしかしてこの馬が喋ってんのか？

……………ないない。

馬は喋りません。

【いや、喋ってへんよ？心に話し掛けとるんや】

幻聴が若干自分と会話をするかのようになってきた。
最近疲れることばかりだからな。
脳がどうにかしたらしい。

【兄さん現実見ようや。ちゃんといと話しとるやん】

.....

.....

「うつせんだよ！駄馬っ！」

【えええ〜.....いきなりキレるとか初めての反応やで】

「ん？おお、キシワ」ゴミクスではないか！なんじゃ偶然じゃのう」
「なにが偶然だちびっ！てめえ俺らについてきただろっ？」

「はっ！そういえばそうじゃ.....いやっ、違うぞ？たまたま散歩してたら偶然ここにきての」

ぐだぐだと言いつを連ねるラキナ。しかし最初にもう白状してるので意味ないんだがな.....

【なんや、ラキナちゃんの知り合いかいな】
「まあ」

【ほな、男は嫌なんやけど仲良うしたるさかい】

なんか偉そうでムカついたので、ちょうど耳を掠るだけになるように黙って銃を引き抜いて馬を撃った。

【ほわっ、な、なんやねん。この兄さん頭おかしいんとちゃいますか？ム力ついた思ってた瞬間攻撃してくるとかどこの凶人やねん】

なんかこいつの言動からして心を読めるのではないかと推測を立てる。

【兄さん大当たりや！心を読むんはワイの能力の一種や。どや、すごいやろ？】

「うぜえだけの能力だろ」

【なにゆってんねん！この能力さえあれば好きなあの娘が自分のことどう思っとるかわかんねんで？】

なんか疲れんなコイツ。

「……………本と違う」

「なにがだよ？」

「……………本ではユニコーンは清廉で書いてた」

確かに清廉ではない感じがひしひしとする。

【フツ……………わかってへんなあゝ。ワイ、めっちゃ繊細やねんで？】

確かに清廉ではない感じがひしひしとする。

【え？あれ？なんかさっきと同じな感じが……………】

確かに清廉ではない感じがひしひしとする。

【三回きたか……………完全に流す方向やな。】

「んでなにがどうなっただろうってんだ？よく見りゃメイドもいないし。説明しろ」

ラキナと、とりあえずユニコーンに向かって告げる。

まさかメイドに黙ってついてきたんじゃ……

【メイド服のエロい姉ちゃんはない……ダークプラントに捕まってしまった】

「らしいのじゃ」

は？

なんだソレ……

「わらわはこやつに助けられたということみたいじゃ」

ラキナはユニコーンの方を見る。

「……ホントか？」

【ホンマやで？おなごのエエ匂いがするなって近づいたらちよつどメイドのお姉ちゃんが捕まっとなってな。まあ、パンツも見たから結果的には得やったけど】

嘘臭い……

【嘘ってなんや。ユニコーン嘘つかない】

「………と言われている」

「……まあいい。とりあえずラキナを森から連れ帰ろう」

「エレナ助けにいかんのか！？」

ラキナが俺の言葉に憤慨するが、

「足手まといがいたらどうにもできねえだろ」
「……………」

続く俺の言葉に声を失う。

頭は足りないが、悪いわけではない。

俺の言う足手まといが自分だということはしっかりと理解できていることだろう。

【せやけどはよせんとメイドの姉ちゃん死ぬで？】

「なっ…………キシワ」ゴミクス頼む！エレナを助けに行っちゃってくれんか？」

「断る。勝手についてきたお前らが悪い。自業自得だ」

「頼む！」

頼まれてもな…………

すでにこいつの頼みはおっきなのを一つ聞いてるわけで、ぶっちゃけ嫌だ。

まあ、メイド…………エレナだっけ？も姫を守るために殉職しました。で綺麗に人生終われていんじゃないかねえの？ちょっと脚色すれば大衆好みの英雄的存在になれると思うぞ。

【なんか色々人としてそれどうなの的なこと考えとるとこ悪いんやけど、あんたら他にお仲間おる？】

ユニコーンが俺に声をかけてくる。

仲間ってリーラ達のことだろうか？

正直に話すべきか？

【いや、考えた時点でワイにはわかるから。そか、おるんか】

「……それがどうしたんだ？」

【多分やけどその娘っ子たちも捕まっとるで？】

マジかよ……

これは魔法植物採取依頼？の物語の一幕

魔法植物採取依頼？の物語2（後書き）

エセ関西弁のユニコーン登場です。

関西は高校のときの修学旅行のときでしか行ったことないので雰囲気です。

関西の方すいませんm（・・）m

ユニコーンはこの物語独自の設定がそこそこあるのでちよいちよい説明があるかと思います。

とは言っても説明係はいないんですね……

魔法植物採取依頼？の物語3（前書き）

新年あけましておめでとございます！
今年初投稿です。

魔法植物採取依頼？の物語3

ユニコーンにリーラ達もメイドと同じくダークプラントに捕まったと聞かされたわけだが

「よく考えれば、なんでそんなことがわかるんだよ、見たのか？」

【ちゃうよ？気配というか匂いやな。ワイは女であれば枯れ果てた婆さんから生まれたての赤子まで半径1キロ以内なら補足できるんや。せやからメイドの姉ちゃんの近くに知らん女の気配があるとゆーことからもしかしてと思うたんや】

よくわからん能力だ。

役立つのか？

【フツ……愚問やな。女子のいるところを察知できるなんて漢おとこの夢やがな。それにワイの能力なんておとんに比べたら対したことあらへん。なんたつて女見ただけでスリーサイズわかるんやで？】

「思考を読むな。殺すぞ」

【ぬおっ……ごめんなさい、銃向けんといってください。なるべく読みません】

銃を引っ込める。

勝手に頭の中を覗かれることに嫌悪感を示さない輩などいないだろう。

例え相手が人でなくても。

とゆーか明確な知性を持ち、意志疎通ができているのだから感覚的には人と同じだ。

【そういえば兄さん変わった銃使ってますなー。加護持ちの銃なんて初めて見ましたわ】

「コレのことか？」

仕舞った銃を取り出す。

鉛色の無骨な装飾銃。そこに刻まれた紋章はもしかしたらとも思っていたがやはり加護の紋章だったか。

「加護持ちの銃って珍しいのか？」

【珍しいも何も武器に魔法によって加護を付けれるようになったのは近年のことや。それ以前、銃が主流に使われていた時代には彫金の技術は確率されておらんかった】

存外このユニコーンは物知りらしいな。

「どんな加護なのかわかるか？」

【それをワイに聞くんかい。そこまでワイも人間の技術に詳しいわけではないしな……おっ、茶髪のお嬢ちゃんはそこそこわかるみたいやで】

その言葉に視線をオルトに向ける。

オルトが発言した様子もないことから、またこの馬は人の思考を読んだのだろう。

「わかるのか」

オルトに向けて言う。

とりあえずユニコーンの思考を読んだ疑惑は横に置いておく。まあ、俺の思考を読んでさえいなければ見逃してやろう。

「……………少しなら」

オルトに紋章がよく見えるように銃を持ってみせる。

オルトはそれをじーっと見つめる。ただひたすらに。

数十秒、いや、一、二分ほどの時が経ちオルトの視線が銃から俺に移る。

「わかったのか？」

「……………六割くらい」

「どうゆうことだ」

「……………すごく複雑。……………いくつもの紋章が複合されている」

「んで、どんな加護があつたんだ？」

要はそれを聞きたい。

あとはまあ、記憶の手がかりになるようなものでもあれば僥倖だ。

「……………まずは不壊」

この加護を持つ武具は決して壊れないと言われる最高クラスの加護。
やべ……………これだけで凄いですけど。

まずはってことは他にもあるってことだ。

「……………あとは魔力吸収」

魔力吸収？

【要は魔法なんかの魔力による攻撃なんかを受けた時にそれを吸収するってことみたいやな】

また、思考読んだのか？いや、でもただ単に言葉の少ないオルトの

補足をただけかもしれん。

「……かそれって魔法は効かないってことか？」

「そういえば以前リーラによる魔法爆殺事件の時、何故か無傷だったという不可解なことが起こったことがある。」

「あれはこの加護のおかげだったのかもしれない。」

「……………あとは幸運プラス」

「……………なんか他の二つに比べると格が落ちるな。」

「しかしまた幸運プラスって、俺は幸運だったことはないんだがな。」

「……………わかたのはこれだけ」

「おう、ご苦労」

「三つも加護加護があるってわかったただけですげえ役立つ情報だ。」

「それにしてもオルトは最初六割って言うってたよな？ってことは単純計算であと二つは加護があるってことか……………」

「コレ売ったらいくらになんだろ？売らねえけど。」

「……………えっと、助けにいかんのか？」

「それまで空気と化していたラキナの声に大事なことを思い出す。」

「ユニコーンの言を信じるならばリーラとシャルが捕まってんだった。やべ、完全に忘れてたよ。」

「いつの時代も男というものは武器とかに弱いものだ。」

「……つーかなんでもっとはやく言わねえんだよ、ちび」

「……なっ……………だって入れる雰囲気ではなかったじゃろ」

「……どこがだよ。オルトが紋章見てたくだりなんか声をかける格好の」

タイミングだったじゃねえか」

すげえ静かだったし。

つーが無駄に空気読むな。

「おい、ユニコーン。女共は死んでねえよな？」

【それが……………】

なっ…………ま、まさか！

【生きたる】

「…………いらねえ溜めを作んな」

【お約束やん】

知るかよ、そんなこと。

【そもそもまだ捕まってそない時間がたってへんからまだ大丈夫やと思うで？ダークプラントは捕まえた獲物は大体一日ほどかけてゆつくりと消化してくし】

「なんだ。それなら焦る必要もないな。休息にしよう」

【いや、はつきり言うとかけど今助けとかなアウトやで？】
「なぜだ？」

【ワイがゆうたんは消化完了までの時間や。人が死ぬんは取り込まれて大体二、三時間ほどや。加えて陽も落ちてきとる】

「暗くなると不便なことでもあるのか？」

【不便なこと…………相手はダークプラントやぞ？ダークっちゅうからには闇の中での戦いはお手の物や。加えて兄さんら人間っちゅう存在は夜目が効かへん。暗くなったらまず勝てへんやろな】

なんてめんどくさい相手なんだ。

つーか失態組、捕まってるじゃねえよ。

罰ゲーム決定だ。

さて、何をやらせるか……

ついでにラキナにもなんかやらせるか。

「おいユニコーン。場所はわかってるんだな？」

【無論や。女子の居場所のことならワイにお任せや。案内したる】

「……そういえばなんで協力してくれるんだ？」

俺の問いにユニコーンは歯を剥き出しにして笑う。

【漢が女子のピンチのために尽力すんのは当たり前やろ】

その笑顔はとんでもない馬面でありながら世界中の誰よりも漢らしく
かった…… ってなんだそりや。

すっげえいい笑顔で言ってるっぽいがユニコーンの発言は否定せざるを得ない。

まあ、少なくともこの馬が漢であるとは認めることなどできない。
漢ってのはこうどつしりと構えて小さなことにも動じない。
例えば師匠の親友のあの男のことを言う。

……あの男？

くっ、頭が痛い。

これは前にも経験したことがある。

このままじゃまた倒れる。

なんとかしないと……

でもどうやって？

くそっ、目が霞む。

……そうだ。

おい、ユニコーン野郎。聞いてるなら許してやるから俺をどつけ。

そう思考した瞬間腹部への強烈な一撃。

そしてその衝撃と共に俺は後ろへと飛ばされる。

目に映るのは俺へ後ろ足による蹴りをかましたユニコーンと、突然の出来事に大きく口を開けているラキナとしつかりと俺が吹っ飛ばされているのを目で追っているオルトの姿だった。

数瞬の空中浮遊が終わり、重力による落下が始まる。

俺はそのまま水面へと叩きつけられた。

「ほあーっ！な、なにをしとるんじゃ！キシワッゴミクス大丈夫か！ー！」

ラキナが奇声を挙げている。

なんて耳障りな。

泉からはい上がりながら自身の状態を確認する。

体はずぶ濡れ。ぶっちゃけ寒い。

怪我に関しては痛い、それだけみたいだ。骨は折れていない。飛んだ先が泉だったのも幸いしたのだろう。

頭痛に関しては若干鈍く痛むが倒れるほどではない。

結論。

痛かった……

ユニコーンを睨む。

【そないな目で見られても……やれゆうたんは兄さんやし。それに、ちやーんと手加減もしたやろ？】

確かに馬が本気で人を蹴ったなら骨の一本や二本は軽く持っていくだろう。いや、下手したら内臓破裂で死ぬ。

だからその点に関しては問題ないし、よくやったと言える。

でも俺が言いたいのはこうゆうことじゃない。
俺が言いたいのは

「俺の思考を読むなって言っただよな？」

【な、なんや。めっちゃ殺気立つとる。え、ええやんか。それで兄さん助かったんやろ？】

誰が言っただか知らないがいい言葉がある。

「それはそれ。これはこれ」

【うぎゃーーーーー！】

一頭のユニコーンの叫びが森にこだました。

「……………思念だからこだまさない」

お前も思考を読むのかよ。

そんなこんなでなぜかタテガミの一部が消失したユニコーンの背に跨がり俺達はマヌケにもダークプラントに捕まったリーラの救出に向かう。

本当なら足手まといになるラキナは置いてきたかったのだが森に一人にするわけにもいかず、仕方なく連れて来ている。

とは言ってもこいつはダークプラントに近づいたらユニコーンの背中にて待機する手筈になっている。

魔物に分類されるユニコーンに預けるのは若干不安ではあるが、ユニコーンはなぜか女には優しいらしく、心配するだけ余計なことらしい。

「あとのくらいだ？」

【もうすぐや。そろそろ兄貴達でも知覚できるはずや】

そうユニコーンは返答する。

なぜか知らんが俺に対する呼称の親密度が上がったような気がするが気のせいかな？

などと考えていると周りの空気が少し重くなった。

これがAランクの魔物の気配なのだろうか？

だとすればBランクのそれとは桁が違う。

ちなみにユニコーンもBランクらしい。

全くそうは見えん。

「つーかこんな濃密な気配にも気付かないのか、あの馬鹿共は」

呆れる他ない。

【そんなことあらへんよ。ダークプラントは本体から無限と言えるほどに伸びる触手によって獲物を捕獲するんや。そんで本体に近づくかんて気配はわからへん。捕まるのも道理うちゅうこっちゃ】

「だとしても捕まった時点で駄目だ。もつとも、ダークプラントがいると知っててこの森に入ったこと自体が最悪の一手とも言えるが」

【厳しいなあ】

「甘やかすよりマシだ。降ろせ、ここらでいい」

俺の声とともにユニコーンが立ち止まる。

その背から俺が降りると続くようにオルトも降りる。

本当はユニコーンの背にそのまま乗って迅速に駆け抜け、さっさと助けて町に帰りたいのだからリーラ達がダークプラントの腹の中に収まっていたことを考えると慎重にならざるを得ない。

敵との距離は約百メートルほど。

相手の大きさは目測およそ十メートルといったところか。

なんてでかいんだ。

「うーかよくもまあ、あんなでかいのがここまで王都に近づいてこれたものだ。」

監視とかしてないのか？

「だとしたらなんて危機管理のなっていない、平和ボケしている愚かな存在のトップにいる国なんだ。まあ、そのトップの娘が近くにいるわけだが、ガキに何言っても大体は理解されないし、今はダークプラントに気付かれないように行動中だ。余計な騒ぎの種を植えることはない。」

さてさてマヌケはどこかな？

目を凝らして見てみるとダークプラントの本体の近くにある大木にさながら蓑虫のようにぶら下がっている物体が三つ。

「ダークプラントの卵か？」

【そうやない。あれは餌や】

餌。

つまりはリーラ達である可能性が高い。

「どうだ？」

ユニコーンに問いかける。

聞いているのは勿論あれがリーラ達であるかどうかだ。

【うん。あれは全部人の女子やな。一つはメイドのお姉ちゃんや】

なるほど。間に合ったということか。
それにしても

「なんで喰われてないんだ？」

【ダークプラントが捕まえた獲物を保存しとる理由は一つだけや】
「なんだ？」

【食事中なんや。現在進行形で】

とするとあれか。

すでに口に食べ物が入っているので新しく口に含むことはできませんというわけか。

まあ、いい。

誰かは知らんが犠牲になってくれてありがとう。

おかげで楽にマヌケ三匹を助けたすことが出来そうだ。

「作戦変更だ。ラキナ、ユニコーンから降りる。」

ラキナは俺の言葉に素直に従うとゆっくりとユニコーンの背から降りる。

それと入れ違いに俺がユニコーンの背に乗る。

【どないするんや？】

「難しいことは考えるな。ただあそこに向かって全力で走れ」

俺はそう言つて蓑虫状態のソレを指差す。

【了解や。振り落とされるんやないで！】

そついうやいなやユニコーンは駆ける。

速い。

とにかく速い。

つか

「速過ぎる。落ちるっ。スピードを緩めろ」

ユニコーンが走りだして僅か一秒後にそう言っていた。

よく考えたら俺、馬とか乗れねえじゃん。

鞍とか積んでればまた別だろうがな。

今のユニコーンのスピードは成人男性の全力疾走よりもちょっと速いくらいだ。

それでもなんとか落馬しない自分を褒めてやりたい。

しかし、俺はただ単に乗馬をしにユニコーンの背に跨がったのではない。

腰から銃を引き抜く。

狙いは蓑虫状態の三匹と大木とを結ぶ細い蔓のようなもの。

ユニコーンの背は走っている最中ということもありよく揺れる。

しかし意識を集中すれば俺の周りの時間は緩やかに流れる。

銃声は三発。

それはほぼ同時に発射された。

当たるのは撃った瞬間に確信できた。

そしてその確信通り銃弾は蓑虫と大木を結ぶ蔓を穿つ。

重力に従い落ちていく蓑虫。

そこであることに気づく。

落とすのはいいが落とした後のこと考えてなかった。

ただ回収して終わりと考えていた。

……どんまいどんまい。そんな高いところにあるわけでもないし死にやしないだろ。

落ちた三つを一つはユニコーンが喰わえ、一つは背に、もう一つは俺が抱えてユニコーンはまた走り出す。

先程よりも鈍いのは増えた重量故か。

俺に保存食を奪われたダークプラントがやっと動きだす。

どうやら食事に夢中だったようだな。

ますますありがとう、食われてる人。

だからといって油断できない。

振り返って見てみると本体の動きはその巨体もあり鈍重極まるがその触手はえらく速い。

すぐ後ろに迫るソレをかわす術は荷物を抱える俺にはない。

と、俺らを追っていた触手に炎の球がぶつかり燃え上がる。

出所を見るべく視線を前に戻すとそこには前方に手を翳すオルトの姿がある。

その手に新たな炎の球が形成される。

オルトはそれを投擲する。

その炎の球は俺に近づいた触手に命中し、燃え上がる。

その後もいくつか投擲された炎の球は目に見えた触手の全てに命中し、消し炭に変える。

そして全ての触手を消したというのにオルトはその手にまた新たな炎の球を生み出す。しかし、その炎は段々と密度を増し、ついには霧散してしまう。

「……………燃えろ」

そのオルトの言葉とともにダークプラントが大きな火柱に包まれる。これこそが現代の魔法、火の三階級。

凄まじい威力だ。

「やったのか？」

なんかとりあえずコレを言わなければいけないかと思ったのでとりあえず言ってみた。

「……………無理」

だろうな。こんなでやられるならAランクなんて名乗れない。

【精々時間稼ぎ程度にしかならへんけど、十分や。ようやった】

これ以上ユニコーンの背に人は乗れないと判断したので餌共に巻き付くものを剥ぎ取ると、なかからリーラとシャル、メイドが出てきた。

三人は大した怪我もなく、眠っているみたいだ。

「っか何、人様に迷惑かけておいて呑気に寝てんだよ。」

「オルト、こいつらに魔法で水、ぶっかける」

「……………ん」

オルトがリーラの顔に手を翳すとその手の平から水が生まれでてリーラの顔にドバドバかかる。

「んっ……………ぶはっ！な、なんですか？」

「やっと起きたか、マヌケ1号」

とりあえず起きた順だ。

「あつ、あんつ。ああっ……………ここは？」

微妙になまめかしく起きたシャルロット改めマヌケ2号。

「おはようございます……………もしかして今ので勃ちました？」

運よく水をぶっかけられる前に起きたマヌケ3号。

「とりあえず説明は後だ。素早くこの森から撤退する」

「えっ？」

「うん？」

「かしこまりました」

俺の言葉に不思議そうにしているリーラとシャル。

対して状況を理解しているからかそうでないのか素直に従うメイド。

とりあえず俺はダークプラントとは逆方向に走り出す。途中ラキナを捕まえるとユニコーンの背中に乗せる。

「……ってそれなんですか!？」

リーラがユニコーンを指差して驚きの声を上げる。

つか説明は後って言っただろうが。

というわけで無視。

走る。

ダークプラントの射程外へと。

するとそこでメイドが俺の横に並ぶ。

「そっいえば、変態シスコンハゲの姿が見えませんが？」

「は？」

何を言ってるんだコイツは？

変態シスコンハゲだと？

そんなのあいつしかいない。

来てるのか？ここに……

ちょっと待てよ。

「ユニコーン。一つ聞きたい」

【なんや？】

「ダークプラントは現在進行形で食事中と言ったな」

【そうや。女子達が食われてへんのがその証拠や】

「ああ、それでその今食事中なのは女なのか？」

【……気配も匂いもあらへん】

「つまり？」

【ダークプラントの腹の中にいるのはすでに死んでいるか、男や】

.....

「.....兄！」

黙って俺らの会話を聞いていたオルトが踵を返す。

ほつときたいし、見捨てたいが……

オルトには治療で世話になった。

俺は立ち止まり振り向く。

見えるのはダークプラントに向かっていくオルトの姿。

「ユニコーン、メイド！ラキナを連れて森から出る！リーラ、シャル！手を貸せ。オルトに加勢する！」

言うだけいつて走り出す。

答えなど聞かない。

当然だ。

俺の選択は正しいのだから反対する道理がない。

マヌケ4号もいたのは想定外だったが、問題ない。

今決めた。

ダークプラントを殺す。

これは魔法植物採取依頼？の物語の一幕

魔法植物採取依頼？の物語3（後書き）

やっとゼロの持つ銃の力の一部が明かされました。

次回でこの魔法植物採取依頼？の物語も完結を迎える予定です。

でもノリ次第でもう一話増えるかも……

魔法植物採取依頼？の物語4

「加勢するって言っても、どうするおつもりですか？」

後ろからついて来たリーラが疑問の声をあげる。

「どうするって、あの植物を殺す」

簡潔に答えてやる。

「殺すって、ダークプラントを？」

「ああ」

シャルも疑問を投げ掛けてくるがそれも簡潔に返す。

「そんなの無理ですわっ！今の私達に勝てる相手とは思えません」
わたくし

リーラの言葉を黙殺する。

勝てる可能性が低いのは理解している。

だが、ハゲを助けるには一番手っ取り早い。

……っか殺すって決めたらテンション上がっちゃって、もはやそれ以外の選択肢が浮かばない。

「……どうでもいいことかもしれないけど、オルちゃん追い越しちゃったよ？」

「うそ？」

振り返ると結構後ろにオルトがいる。

見るからに死にそうだ。

あの無表情がここまでつてくらい……

足を止めてオルトを待つ。

やっと追いついたオルトは肩で息をしており、何十キロ走ったんだお前？ な様子である。

「体力ないな」

「……………全部兄が奪た」

……ああ、あいつの身体能力だけは凄そうだもんな。

そのかわりに大事な何かを落としてきたんだろう。

それをオルトが回収したかは置いておいて。

「で？ 殺すつてどうやるんですの？ まさか、ノープランで突っ込む

わけにもいきませんかでしょ」

「なせばなるとか？」

「ならないよ」

「馬鹿かお前ら。とりあえず殺ると決めたことが重要なんだ。他ならない俺の決断だぞ？ 結果なんて後から付いてくんだよ」

「それとノープランは別です」

「たしかにね、オルちゃんは何かいアイデアある？」

「……………オルトは兄を助けられればそれでいい」

オルトの眼には強い決意の色が浮かんでいる。

普段は冷たくしていてもやはりハゲのことは兄として思っているみたいだ。

「あれに弱点とかはないのか？」

ダメもとで聞いてみる。

そんな都合のいいものは……

「ありますわ」

あるのか……

いや、好都合だ。なら、そこを攻めるだけだ。

「魔物には魔核と呼ばれる力の源とも言えるものがあります。Bランク以上ともなれば視認することも可能です。そこが最大の弱点と言えるものです」

「とは言っても、当然相手もそこを重点的に守ってくるはず」

「当然のことですわ。だから私と^{わたくし}オルトさんの魔法でダメージを与えて弱らせます。ダークプラントの属性は闇ですから光の魔法に弱いはずなのですが、^{わたくし}あいにく私は使えませんから、次点で炎による攻撃を仕掛けますわ。あるいは届くかもしれません」

ダークプラントの方を見る。

巨大な花の蕾のような姿をした魔物の体の中央付近に一箇所だけ不自然に赤い部分が見える。

とは言っても大きさからいって1センチ四方あるかどうかくらいの大きさしかない。

普通ならこの距離では見えないだろう。

だが俺は見える。

それこそが真実。

とゆーか前に似たようなのを見たような……
忘れた。

つまりはどうでもいいことだろう。

つーか見えてるってことはチャンスじゃねーか？

俺はとりあえず赤い部分を撃った。

当たるといふ確信はあった。

なぜなら俺は狙った箇所を外したことはないからだ。

だがしかし狙った箇所を外したことはなくとも当たらなかったことはある。

それは相手が防いだ場合だ。

ダークプラントはその触手を器用に動かし俺の銃弾を防ぐ。

ちっ、オルトの魔法で大人しくなったと思ったのにな。

それまで活動を静止していたダークプラントがまた動き出す。

オルトに焼かれた触手も再生しており、こちらに向かってきている。

「まだ、作戦会議の途中でしょ。なんでここの話を聞かないんですか！」

「敵の目の前で作戦会議なんかやる奴の気がしれない」

「ちゃんと視界から隠れてたよ」

だとしても賽は投げられた時間というのは巻き戻したりできない。
あとはもう殺るだけだ。

「ああもう、先程言った通りに動きますわよ」

「りょうかい」

「……………おけ」

全員が武器を構える。

まあ、オルトは持ってないが、細かいことはいい。

リーラの手からは炎が生まれ、オルトの手からは光が溢れ出す。

二人が集中している間、それを触手たちから守るのはシャルだ。
鞭を振るい触手を一切近づけない。

間もなく二人の手の平に各々球を作り出す。

現代魔法、炎と光の二階級。

それがほぼ同時に放たれる。

俺とは違い、弱点が見えていないのだろう。放たれたそれらは魔核らしきもののある場所ではなく、それぞれ別の場所に向かって進む。しかしどちらも本体に当たるのは間違いなかった。防がれなかったらの話だが。

「なっ……」

魔法ひとつに触手一本を犠牲にすることでダークプラントは二人の魔法を防ぐ。

「ちっ、おいオルト。さっき見たいに三階級の魔法でとばーっとやれよ。あれは空間を指定してやるんだから触手で防ぐなんて芸当できねーだろ」

「……………だめ」

「なんでだよ？」

「……………兄も巻き込まれる」

確かにあれは凄い威力だった。

下手すれば食われてるであろうハゲすら焼いてしまっているほどに。知らずに放ったとはいえ、オルトにしてみれば兄を自分の手で仕留めてしまったかもしれないのだ。

それに生きていると仮定するならば追い打ちをかけるような真似をするのはそれこそ無理だろう。

つまり、ちまちまやらないとだめってことか……

俺の都合ではあるが兄を犠牲にして放てって言ってみるか？

いやいや無理無理。

それは空気読めない子ですから。

ん？でもダークプラントを殺すって言った時点で空気読めてないのか？

違う。

オルトの気持ちを汲んだんだ。

まあ、俺の気持ちも結構入ってるが。

ハゲを見捨ててもらうのは最後の最後だ。

牽制のために一発銃を撃つが動じることなく触手に阻まれる。

あれ、邪魔だな。

と思ったその時、ダークプラントの触手が増える。

その数、一、二、三……襲われて数える暇がない。

とにかくたくさんだ。

およそ百としところ。

当然シャル一人で捌けるものではない。

「くっ……しまったっ！」

何本も自身の後ろへの進入を許してしまう。

「きゃあっ」

リーラは弾き飛ばされ、

「……………」

オルトは捕まってしまふ。

「ちっ」

オルトを捕まえる触手に向かって撃つ。

三本あるからひとつにつき、一発。

それでオルトの拘束は解けた。

俺はそれを確認せず、その場から離れる。

銃から空の薬莖を捨て、リロードをする。

「こつちだ、ボケ！」

大声を張り上げる。

これでこつちに注意を払ってくれれば重畳。
だが現実はそのうまいくもものではない。

触手の幾本かはこちらに向かってくるが大半は女共だ。
でも、それならそれでいい。

ダークプラントの弱点に向けて撃つ。

それは簡単に防がれてしまいが、それによって奴は俺を1番危険と
みなしたらしい。

半分以上の触手が俺に向かってくる。

ちらりとリーラ達を見る。

リーラはすでに起き上がってレイピアを抜いている。そしてシャル
と共にオルトを触手から守っていた。

あいつの剣は斬ることではなく突くことに特化しているものだから
触手相手では相性が悪そうだ。

目が合う。

視線が今、援護しに行きますとでも言いたげだが、まあ無理だろう。
幾分かの劣勢の中の膠着状態が続いた。

しかし、

事態は急激に変わる。

触手の先が鋭く尖ったのだ。

ヤバイ……

あんなのに当たったら痛いで済まない。

俺は何もずっとヒラリと軽やかに触手の攻撃をかわしているわけ
はない。

何度か棒で突かれたような衝撃をこの身に受けながら進んでいるに
過ぎない。

そう、触手の攻撃は当たっているのだ。

左足に激痛が走る。

見れば太股が貫かれている。

洒落になってない。

さすがはAランクの魔物。

魔物ごときにこうも危機感を覚えたのは初めてだ。

続いて左腕にも激痛が走る。

おいおい、やつとこさ完治したんですけど……

右足もダークプラントの触手が貫く。

一思いに殺さないのは俺を嬲っているのか、はたまたこいつは人間の踊り食いが好きなのか。

さらに一つの触手が俺の右腕に狙いを定めているのが見える。
前方から触手が迫る。

「右腕^{こわ}だけはやらせねえよ」

激痛を無視して左の手の平で受け止めた。

当然、手の平に穴が空いた。

「ゼロさんっ！」

「ゼーちゃんっ！」

叫びのような悲鳴のようなそんな声が聞こえた。

首を動かして声の方に目を向けると、傷だらけの三人が見えた。

所々自身のものであろう血に汚れ、リーラは左腕が不自然にダラリとし、シャルは右足を庇っている。

オルトも外傷こそ目立っていないが顔色が悪く、額には玉の汗が浮かんでいる。

これは魔導師の陥る魔力の損耗による疲労だと聞いたことがある。

それでもなお、オルトは魔法を放つ。

そしてこちらに目を向けると光球を生み出す。

いや……光球は消えた。
魔力切れ？

違う。

次が来るのだ。

どこに？

まさか……

「オルトっ！それでいいのかよ！？」

口から出たのはなぜか否定的な言葉。
確かに劣勢だ。

いや、正直ヤバイ。

でも、だからってハゲを殺してしまってもいいのかよ！？
まだ大丈夫なはずだ。

誰も死にかけてないし、俺の右腕も問題ない。
諦めるには早いはずだ。

「……………問題ない」

小さくだが確かに聞こえた。

「……………オルトはまだ諦めてない」

その言葉と共に放たれた魔法。
現代魔法光の三階級。

それが俺の目の前……いや、
周りで発現した。

「おいっ！」

なにこれ？

周り光っててよく見えないんだけど！

と、俺を刺し貫いていた触手の根本が

俺に追撃をかけようとじわじわ迫っていた別の触手たちが消えた。
光が消えた時には俺の周りに触手の姿はなかった。

「……………ゼロがあれば殺すから問題なし」

そうオルトが言った瞬間。

背後からオルトが触手に刺し貫かれる。

場所は腹部。

空気が止まった。

「オルトっ！」

「くっ、このっ！」

すぐさまリーラがその触手を断ち切る。

「大丈夫ですっ！致命傷ではありません」

傷を見て大きく声を張り上げて言うリーラの言葉に安堵した。

だが触手の数は減らない。

今もシャルが一人で捌いている。

俺はいつでもどうとでも出来ると思われているのかダークプラント
は無視している。

「このっ……………おい、ハゲっ！お前の愛しの妹が大変なことになって
んだぞ。お前なにしてたんだよっ！」

ダークプラントに向けて怒鳴る。

いや、正確にはダークプラントの中にだ。
その瞬間

ダークプラントの体から何かが出てきた。
ちょうどダークプラントの体の中心の辺り。
よく見ればそれは人の指だ。

それがどんどん出てくるとそのまま穴をこじ開けた。
見えたのは怒気に染まったブラウンの瞳。
間違いなくあいつだ。

「ああああ……オ、ル、ト……」

ハッキリとは言葉を発せないらしい。

死ぬんじゃねえか？

だがまあ……

しぶといな。

それでこそ俺を追い詰めただけあるってことだ。

やはりまだ、お前が俺の戦った中では1番だ。

自然と腕に力が籠る。

そうだ、お前に比べればこいつごときなんでもねえ！

「仕手の魔力を確認 現在の魔力属性炎 総蓄積魔力量三パーセン
ト フェイズ2への移行不可」

何かが聞こえた。

これは前に聞いたことがある。

脳髓に響く感じはユニコーンと同じだがこちらはなんか無機質な感じがする。

「現在の魔力属性炎 総蓄積魔力量四パーセント フェイズ2への

移行不可」

また聞こえた。

なんだこれは……いや、なんだではない。
分かる。

これはお前なのか相棒。

視線を銃に移す。

鉛色の装飾銃。

俺の意識が目覚めてからずっと共にあった存在。

ユニコーンは言った。

この銃には加護があると

オルトは教えてくれた。

この銃にある加護を

何と言った。

不壊

壊れないのはいいことだ。

幸運プラス

運つてのは重要なファクターではある。

魔力吸収

そう、魔力吸収。

リーラの魔法を掻き消した、加護。

しかし、消したのではない。

オルトの話を信じるならば吸収したのだ。

どこに？

こいつは言った。

総蓄積魔力量と

つまりはこの銃は魔力を溜めることができるんだ。

だが、遅い。

いくら溜めればいいのか知らんがこれでは全滅の恐れがある。
ならばどうする？

簡単だ。

また、この身に魔法を撃たせればいい。

「リーラっ！俺に向かって魔法を撃てっ！」

「えっ？何を言ってますの！？」

「いいから撃て」

「……回復魔法ですか？それなら近づかなければ」

「そっから撃てる最速最強のものだ」

「ええっ……自殺願望ですか？」

うつせえなこいつ……

いや、そういえばリーラ達は銃の加護のこと知らないんだっとな。

それならば仕方ねえのか？

ってそんなこと考えてる場合じゃねえ。

「いいからやれよ。早くしねーとお前の私物適当に売っぱらうぞ！」

男共の視線や思考を考えればよく売れることだろう。

……とつさに言ったがいい商売になるかも

「イマイチ意味がわかりませんが、死んでも怨まないで成仏してください」

リーラが手に魔力を込める。

それは炎となり、次に塊となる。

それが俺に向かって放たれる。

ダークプラントにそれを防ぐ義理はない。

球は真っ直ぐ俺に向かってくる。

俺はそれを銃で受け止めた。

「魔法による吸収を確認 現在の魔力属性炎 総蓄積魔力量十三パーセント フェイズ2への移行可能」

なんかわからんがフェイズ2とやらに移行可能となった。

……………でどうすればいいんだ？

ヤベー、百パーセントまでいかないといけないのか？

でもなんかが可能になってるわけで

どうすればいいんだ！？

誰か教えてくれ

—その銃はきつと、人類の切り札だね—

懐かしい誰かの声が聞こえた気がした。

この世で一番嫌いで

一番好きで

一番信頼できる声

そしてその声の終わりと同時に理解した。

いや、そうじゃない。

思い出したんだ。

この銃の使い方を

「フェイズ2移行^{シフト}」

「仕手の認証を確認 フェイズ2へ移行します」

手にする銃が光を発する。

それが収まると手の中の銃はその色を紅く染め上げていた。

「フェイズ2への移行完了 弾丸の魔法弾への変換完了 現在の魔力属性炎 残り魔法弾数1」

充分だ。

現在ダークプラントの触手はほとんどリーラ達に向けられている。

しかし自身の守りのためなのか十本ほどはそばに置いている。でも関係ない。

これでお前はおしまいだ。

「死ね」

銃を撃つ。

放たれたのは魔力の付加された魔法の弾丸。

ただこれでは足りない。

少し遅れてもう一発撃つ。

放たれた二発の弾丸がダークプラントに迫る。

狙ったのはやはりダークプラントの魔核。

弱点を狙うのは戦いにおける常道。容赦なんかしない。

ダークプラントの反応は迅速だった。

十本の触手でもって銃弾の進路を塞ぐ。

しかし、最初の弾丸は着弾すると同時に爆発を起こした。

これこそが魔力礼装・爆炎弾の効力。

爆発により、触手がちぎれ飛ぶ。

普通の弾丸ですら一発で壊せる触手ごときたった十本束になったところで魔法弾は防げない。

だが着弾した以上弾丸の役目はそこでおしまいだ。

だからこそもう一発撃つたのだ。

その弾丸は爆発の影響を受けないように計算して撃った我ながらに

してえらく満足できる出来だった。

爆発の後を抜けダークプラントの本体、その弱点の魔核へと向かう。
ダークプラントに抗う術はなかった。

俺の弾丸が魔核にきっちり当たったのを確認して俺はほくそ笑んだ。

そっいえばハゲは無事だろうか？

これは魔法植物採取依頼？の物語

魔法植物採取依頼？の物語4（後書き）

魔法植物採取依頼？の物語完結できませんでした。
次回で完結させます。

それでその後何話が挟んで王都編はおしまいです。
んでは本文について触れたいと思います。

いやー、何と云うかいつにも増してくどい感じがします。
まあ、私の味ってことでなにとぞ。

んで、色々ツツコミたくなる部分があるかもですが批判などは甘んじて受け入れます。

ところで魔法弾。

今回は炎ですが他にも考えてあります。

とゆーか現代魔法の属性は回復魔法以外は考えてるんですがこういう属性はどう？とかこんな効力はどう？みたいなのがありましたら意見下さい。もしかしたら使わせていただくかも知れませぬ……

あくまで強制ではなく、あったらですのだから無視して下さい。
ちなみに一属性にひとつの効力にしますので炎以外でお願いします。

魔法植物採取依頼？の物語5

「……倒せましたの？」

「みたいだね」

二人の呆然とした声が聞こえる。

それを合図として膝立ちの状態から崩れ落ちる。

両足の太股を貫かれてるんだ、ある意味限界だ。

〔現在の魔力属性炎 総蓄積魔力量一パーセント未満 フェイズ1
へ移行します〕

脳に声が響くと銃の色が紅から元の鉛色に戻った。

「大丈夫？」

近くにシャルが近寄って来ていた。

リーラはというと魔法や魔法薬などでオルトの治療を行っていた。

ダークプラントを倒したため、触手が沈黙し安全に作業が行えるようになったようだ。

「俺はまだ大丈夫だ。それよりハゲの方を頼む」

ダークプラントの死骸を指差す。

ぶっちゃけ今すぐにでも治療してもらいたい気分だがハゲの容態の方が心配だ。

魔法弾の爆発はダークプラント本体にはちょっとした熱と爆風くらいしか届いていないだろうが、助けようとした相手が俺のせいで死んでしまっただけでは寝覚めが悪い。

「わかった」

シャルは俺の言葉に頷くと足を引きずりながらダークプラントに近づいていく。

無理させちまったか？

でも俺に比べれば軽傷だし、いいよな？

「あつ！」

そこでリーラが大きな声をあげる。

なんだ？

もしかしてオルトのケガが思ったよりも悪かったとか言うんじゃない……

「ラスカウリですわ！これで依頼達成ですわね」

見れば白い花のついた草を摘んでいる。

そっぴや、そのために来たんだっぴな……

オルトの治療は終わったみたいだ。

でも、まだ重傷者である俺がいるわけなのだが、それをほっぽって草摘みとはどうなんだお前。

呆れる他ない。

この時俺はシャルから視線を外していた。
だから見逃していた。

ダークプラントがまだ生きていることを。

そもそも俺はきちんと魔核に銃弾をぶち込んだわけではあるが、ダークプラントの死を確認したわけではない。

まあ、弱点を撃ち抜いたと言うのに生きてるなんて思ってるわけない。

触手も大人しいもんだし、死んだと思っても不思議はない。

ようは俺が、いや、俺達がAランクに名を連ねる魔物を舐めてたつてことだ。

「きゃあー！」

声のした方に視線を戻せば触手に捕まっているシャル。

いや、捕まってるわけではない。

地面に縫い付けられているのだ。

シャルは仰向けで倒れており、両手両足だけでなく腹部まで触手が貫いている。

一瞬で一番の重傷者になってしまった。

くそっ！なんで俺は目を離したんだ。

しかし、視線を外していなくても何か出来たかといえば疑問が残る。ただひとつ真実はこのままだとシャルが殺されるかもしれないというのと助ける手段がないということだけだ。

せめて時間を稼げればもう一発魔法弾をかましてやることができるのだが、無情にも触手の槍はシャルの胸部へと鋭く突かれる。

「やめろっー！」

銃を構えようとするが体を起こすことが出来ない。

リーラはどうだ？

目だけ動かして様子を見る。

魔法を撃つ体勢にはなっているがまだ魔力を集中している段階だ間に合わない。

クソッ……

その時、

風のような速さで何かが駆けていった。

目に映ったのは白い体の角の生えた馬。

誰かが背中に乗っていた。

そしてその誰かはシャルの胸に迫った触手を間一髪で握る。

誰だあれは？

リーラの突き並、いやそれ以上の速度の触手を掴むなんて離れ業をやったのけるなんてただ者じゃない。

「レディーには優しくするもんだよ」

現れた奴はそんなことを飄々と言った。

この声は聞いたことがある。

そこでやつと俺はそいつの存在をはつきりと認識できた。

肩ほどまである赤い髪に、両目を覆うような眼帯。重厚のある蒼の鎧に身を包み、背にはハルバードを背負う男。

それはいつかの酒場で出会ったおっさんだった。

「まったく、魔核を砕かれてるってのにしぶといねー。散り際は潔く逝くのが正しき雄の姿ってもんだろ。いや、そもそも雄なのか？」

そっぴいながらおっさんは背中の中ハルバードを手取る。

「だけどまあ、おっさんはそうゆう足掻きつてのはわりと好意的なのよね。でも、死んだふりして不意打ちつてのはダンディじゃないね」

ハルバードを手にしたおっさんはそれを無造作に突く。

俺が砕いた魔核のあったところだ。

眼帯してるのに見えてるのか？

「特にこーんな美人で胸もでかい淑女に対する行為としては下劣だ」
おっさんは突き刺したハルバードをダークプラントに埋め込んでいく。

ダークプラントから低い唸り声のようなものが発せられる。

「あの世で大反省会でも開きなさい」

ハルバードの斧の部分が埋まった所でおっさんがハルバードを振上げる。

縦に切り裂かれたダークプラントの体内にライルの姿が見えた。

「おっ、頭を剃ってる青年はっけーん！」

そのままダークプラントの体内にいるライルをハルバードのピックの部分に引っ掛けて引っこ抜いた。

「救出完了〜。おや？」

まだダークプラントは微かに動いている。
あきれた生命力だ。

「このままほつといても死ぬだろうけど、とどめをさしてやるよ。
青年がやるかい？」

そこで初めておっさんが俺に視線を向ける。
いや、眼帯をしているので本当にこちらを見ているとは限らない。
それでも俺を見ている気がした。

「見りゃわかるだろ。動くのは億劫だ」

「確かに痛そうだね。おっさんも最近腰が痛くて痛くて……」

左手でポンポンと腰を叩きながらおっさんが言う。

お前の腰痛と一緒にしないでほしい。

「んじゃあ、おっさんがやっちゃうね」

おっさんは腰を落とし、槍を限界まで引く。
そして突いた。

渾身の力をもって放たれたそれはダークプラントの体を貫通し、大きな穴を空けた。

「……すげ」

思わず感嘆の声が漏れる。

俺の目をして突いたという結果しか見えなかった。

銃弾の軌跡すら追える俺の目でもだ。

恐ろしいまでの高速……いや、神速の突き。

このおっさんはいったい何者なのだろうか。

「いよっし！さすがにこれで生きてたらおっさんヒクわ」

おっさんはダークプラントの状態を確認する。

「うん、完全に死んでるね。さてと……」

おっさんはシャルに近づいていく。

「きついな……早く治療しなけりゃ危ない。こっちの頭を剃ってる

青年も同様だ。とりあえずこれを飲みなさい」

おっさんは自身の懐から取り出した袋から青い液体の入った小瓶を二つ手に取ると問答無用で二人の口に突っ込む。
強引過ぎないか……

「体力を回復させるだけで治癒効果は薄いものだけど王都までは二人ともつだろう」

「あ、あなたはいい……」

リーラの疑問も最もだ。

俺だってこいつのことは酒場であつた馴れ馴れしいおっさんだということしか知らない。

一体何者なのか？

「おっさん？おっさんのことを知りたいというのか、そこな少女よ！」

おっさんが立ち上がる。

なんか芝居がかってねえか？

つかリーラに対して大抵の人間は少女という印象は抱かないだろ。

「え、えつと……はい」

流されやがった。

「そうかそうか！だが生憎だがおっさんは名乗るほどの者じゃない……くーっ！おっさん超かっこいい。とゆーか渋い。ちょーしぶい」

渋いおっさんはちょーとか使いません。
なんか色々台なしだ。

と、微かだが後方から何か来る気配を感じる。

「あつ、アルヴィス様ここにいましたか」

「うおつ、ダークプラント倒してる。さすがはアルヴィス様です」

「アルヴィス様すごい」

やって来たのは軽鎧に身を包んだ黒髪の子ヨビ髭中年にローブを纏った青髪の優男。あとは司祭服の取り留めて特徴のない緑の髪の女。三人とも馬に乗っている。

「こちら、おっさんがせっかくかつこよくキメた所なのに名前を呼びながら来るんじゃない。台なしだよ」

すでに自分で台なしにするときながらおっさんは今来た三人注意をする。

「まあそれは置いておいて、スイはこの二人に応急処置を施しなさい。リュックはそこで俯せに倒れてる青年」

「わかりました」

「僕、女の子の方がいいんですけど……」

二人の元に女が向かい、俺の元に優男が馬から降りて近づいてくる。

「んじゃ回復魔法かけますんで動かないで下さい。とは言っても応急処置程度の腕前しかありませんけど」

「ちっ」

「なんで舌打ちするんですか？」

「さっさとやれよ」

「それが人に物を頼む態度なんですか？」

「いいからやれって」

「……アルヴィス様、僕こいつ嫌です」

「そーゆう生き物だと思っただけで諦めなさいな」

なんか馬鹿にされてる気がするような……気のせいかな？

おっさんの言葉に優男は俺に回復魔法をかけはじめた。

俺はその魔法が銃に触れないように注意しながらそれを受ける。

吸収されちゃたまらんしな。

思い出したと言っても銃の基本的な使い方といくつかの属性の魔法弾の効力くらいだ。

魔力を吸収すれば属性は上書きされる。

何かわからないものになるよりも今の方が楽だ。

程なくして優男の処置が終わる。

最初に言われた通りのあくまで出血しないように穴を塞いだだけの簡単な物で、まだ痛みがかなりある。

早く病院に行くべきなのだろう。

「んじゃ、怪我人つれてグランネイドルに戻りますか」

ダークプラントのそばで何かをしていたおっさんが声をかけると各々が準備を始める。

【女の子はワイが運んだ。さあ、その魅惑の尻をワイの背中に乗せるんや】

そういえばおっさんを運んできたのはコイツだったな。

「ラキナ達はとうした？」

【このおっちゃんらのお仲間になんか来ましたわ】
「そうか」

ならいい。

俺達はそれぞれ馬に乗せられる。

ユニコーンにはおっさんとリーラ、シャルが、司祭服の女はオルトと、チョコビ髭はハゲ、そして俺は優男の馬に乗つけられている。

乗っているのではなくて乗つけられているというのはあたかも荷物のように積まれているからに他ならない。

他の奴らは落ちないように工夫されたり抱き抱えられたりしているというのにあまりに無造作だ。

まあ、優男に抱き抱えられるなんて死んでも嫌なので文句などはない。

「おっ、忘れるとこだった」

そついつとおっさんは俺に近づいてくる。

なんかユニコーンの顔が露骨に嫌そうだ。

【そりゃ、乙女たちやのうてこない加齢臭のするおっちゃんをまた乗せなあかんですから、当たり前や】

なるほど。つーか心を読むなって。

「ほれっ」

そついつとおっさんに投げて渡されたのは手の平に収まるほどの大きさの花の蕾のようなものだ。

とは言ってもその材質は宝石のように輝いており、また、額の部分は硬い。だというのに蕾の部分は絹のように滑らかで柔らかい。

なんとも不思議な物だった。

「なんだこれは」

「ダークプラントの討伐部位」

俺の疑問におっさんが即答する。

「なっ……！なぜ、こいつにそれを？」

先に反応したのは優男の方だった。

「なぜってそりゃ、ダークプラントを倒したのはおっさんじゃなくてその青年だからに決まってんでしょ」

「え……」

驚いた様子で俺を見る優男。

だけど俺にはおっさんの言葉で受け入れられないことがあった。

「倒したのはあんただろ？」

「違う違う。魔核を砕いた以上あいつは死んだも同然だった。あれはただの悪あがき。おっさんがしたのは美女を助けたことプラス妹思いの青年の救出だけさ。倒したのは青年」

だけでもとめはおっさんなわけで……

でも、おっさんの言葉が本当ならばおっさんの言うこともその通りであることも否めない。

「とりあえず貰っとく」

「そうそう、若者が遠慮しないの！前に言っただろ？年長者の好意は余計だと感じつつも受けるもんだって」

とは言ってもおっさんが来たことで助かったのもまた事実だ。
いずれなんらかの形で礼をするのが礼儀というものだろう……シャルがな。

その後王都の病院に運ばれた俺らはリーラ以外は全員入院と相成った。

まあ、死人が出なかっただけ良かったな。

それにしてもこの銃、色々と確かめなきゃなんかもな。

あと、依頼の方はちゃんとリーラが報告をすませ、依頼達成となつたみたいだ。

これは依頼以外のことが大きすぎた魔法植物採取依頼？の物語

魔法植物採取依頼？の物語5（後書き）

とりあえず魔法植物採取依頼？の物語は終わりです。

前話後書きにて言った魔法弾ですが出てきていない属性の物ならばいつでも歓迎しますのでどうかよろしくお願いします。

とりあえず色々と消化してから王都編を終えたいと思います。

ギルドランクアップの物語

ダークプラントとの一件から三日が過ぎた。

俺は今だ病院のベッドの上にいる。

とは言ってもそれも今日までのことだ。

他の三人よりもケガの軽い俺は先駆けて退院だ。

そして次の日にはオルトが、それから二日遅れてシャルが退院する。ハゲに関しては俺との戦闘の傷も癒えていないというのにさらに追い打ちがかかり、シャルの退院から四日後に退院することになっている。

ちなみに抜け出さないように厳重に拘束するよう俺から希望を出しておいた。

そんな時一人の来訪者が来る。

ピンチに颯爽と駆け付けたあのおっさんだ。

おっさんは俺らを病院に運ぶとフラリと姿を消したため、こうして会うのは久しぶりだ。

「お姉さんいいケツしてんね」

「きゃっ！」

通りすがりに看護士の尻を撫でるといってセクハラをかましながらか俺の元に近寄ってくる。

「よっ、青年。明日退院だそうだな」

普通に話し掛けてきた。

「ああ」

俺も言葉少なく返す。

「そつか。んじゃ飲むか」

そう言っておっさんが取り出したのは酒だった。
自分勝手な野郎だ。

ここがどこだかわかって持ってきたのか？

「ほい、青年の分」

そう言つて渡されたコップを受け取る。

まったく……ありがたい。

病院の味気ない飯や健康的な飲み物などには辟易していたのだ。
酒なんて久しぶりだ。

注がれていた液体を一気に飲み干す。

上物の米酒だ。

うまい。この一言に尽きる。

「やっぱ病院での生活なんて刺激がないよな。おっさんも白衣姿の女を見る以外では来たくないもん。健康的過ぎて逆に不健康になっちゃうよ」

「同感だ」

白衣の女云々以外だが。

やれ9時には消灯だの病院食以外は口にするななどやかましいことこの上ない。

まあ、一番やかましいのは病院関係者ではなく

「失礼しますわ」

ただ一人入院せずに済んだこの女。
リーラである。

当たり前ではあるがリーラは毎日見舞いにきているわけだが、これがまた母親の如く厳しい。
母親なんて覚えちゃいないが……

「あら、先客が……って何を飲んでるんですかつ！」
「酒」

「ここがどこでっ！ あなたがどうしてここにいるのかっ！ そういうものを弁えなさいと何度も言ってるじゃないですかっ！」

リーラの怒声が病室に響く。

ここは四人部屋で他の患者がいるというのに迷惑な奴だ。
ちなみに俺以外の三人は同室だったりする。

「病気なわけでもねえし、いいんだよ」

ケガで入院してんのに飲食に制限をつける方がどうかしている。

「そういう問題ではありませんでしょ！」

「まあまあ、そこまでにしなさいな。いいかい酒は百薬の長といつてだな……」

「五月蠅いですわっ！ 少しは黙ってて……ってアルヴィス様っ！」

そこでリーラはやっと先客の存在に気づく。

とゆーか様付け？

前に聞いた時は分からないって言ってたんだが

「なんだ？ このおっさんのこと分かったのか？」

「おっさんなんて無礼ですわよ。この方はギルドに三人しかいらっしやらないSランクの冒険者ですよ！」

その言葉を聞いて少し思考が止まる。

Sランクはギルドで付けられる最高ランク。

言動とか見てるとそうは見えないがあの実力だ。納得というものだろう。

だが

「おっさんはおっさんだ。現にこいつが自分でおっさんって言ってるだろ」

「そうよそうよ。少女も遠慮なくおっさんって呼んで。名前に様付けされるとムズムズしちゃうんだよ」

「でも、あの三人や他の方は……」

「あいつら言っても聞かないんだもん。おっさんという生き物は本当に譲れない物以外は諦めるの早いからね」

「いや、あの、しかし……」

「さあ、呼んでくれ。その可憐な口でおっさんって蔑んだ感じで」

今のはスルーするべき所か？

ツツコミ入れたらダメだよな？

「あ、えっと……ではおじ様と呼んでもよろしいですか？」

「はいきた。ズッキュン来ました。かつてない衝撃！ なにその甘美な響き。様付け嫌なのにおじ様だと燃える（萌える）！ 是非それでっ！」

リアクションがでかい。

そしてうるさい。

「と、病室だしこれくらいにしとこうか。今日は青年のお見舞いに来たんだからね」

その割には見舞いらしいことなんて酒の差し入れしかしていない。

「つーか聞いてよ青年。マキちゃんって子がね？」

それから何故かおっさんはマキって女とのノロケ話をしだす。まったく意味がわからない。

視線でリーラになんとかしろと促すが奴は首を横に振り、無理だという意志を示す。

仕方なく片手間に聞くことにする。

おっさんの話を要約すればマキって女と付き合うことになって色んなとこにデートしに行って楽しかったということである。

これを実に30分ほど語っていた。

なぜ俺がそれをキレることなく最後まで聞いていたかというわりと面白かったというのが理由だ。

すっげー退屈な日常を送ってたからな。

こんなくだらね話も真面目に聞けば普通に楽しめてしまった。

「つまりマキちゃんってそーゆー娘なのよ」

「そんじゃなんでここに来たんだよ。そのマキって奴とデートでもしてりゃ良かったじゃねーか」

「いや、彼女はさ、ほら何て言うの、特殊な職業でさ」

俺の皮肉混じりの茶化しに対するおっさんの返答は歯切れが悪い。

「どんな職業ですか？」

リーラの問いにおっさんは苦笑いをする。
なんだ？

そんなに言いたくない職業なのか？

「マキちゃんの職業はね……詐欺師ってやつ」

ギャグか？

これはまたクソ寒いのかましたな。
なんて返せばいいのやら。

「それは、えっと……やめさせるべきですわね」

「ははは……もし次会うことがあったらそうしようかな」

リーラの言葉におっさんは乾いた笑みを返す。
ん？ 何？ もしかしてギャグじゃねーの？

「もしかして……被害に遭われたのですか？」

「うん……お母さんの手術費用に三億R必要だっていうから渡しちやった……それ以来連絡がつかないのよね。勤めてたお店も辞めちやったし」

なんかおっさんの顔に縦の線が何本も見える。錯覚か？

つい何かこいつ詐欺師との作られた恋愛のノロケを俺らに披露してんの？

なんかいままでの時間がすっげー無駄な時間に思えてきた。

「時間を返せ」

「なんで？ いいじゃん。彼女との楽しかった思い出を誰かに話して心の安定をはかりたかったんだよっ！」

何その独りよがりな思い。

「なんで俺んどこ来るんだよ……」

「あと話してないのは青年達くらいだから」

知り合い全員に言ったのか……

よほどショックだったみたいだな。

だけど

「お前もう帰れ」

「ひ、ひどい。傷ついたおっさんを慰めるどころか放り捨てるなんて……不法投棄で捕まっちゃってもしらないんだからね！」

すごく気持ち悪い喋り方で捨て台詞を吐いておっさんは病室を出ていった。

かと思っただけ病室の中に入れる。

「あ、そうそう。退院祝いとしてサプライズを用意していたから。近いうちお目見えすると思います。そんじゃ！」

そう言っておっさんは去っていった。

「サプライズってなんでしようか？」

「俺に聞くなよ。ところでレックスはどうした？」

「好みの女性の観察に忙しいそうで、置いてきましたわ」

レックスとはあのユニコーンの名前である。

あのあと俺らと共に行動すると言い出して一緒に行動することになった。

なんでもユニコーンは普通の馬の十倍は力があり、人と接するのは稀らしいのだが、レックスに関してはそれに当て嵌まらない。

まあ、基本的には女としか関わろうとしないがな。

それでも十分に珍しい。

それに特殊な力も有していてあいつは自分の大きさのある程度変えられるらしい。

限界まで大きくなると普通の馬よりも少し大きいくらいなのだが、小さくなると手に乗るくらいになる。

この能力もあってか餌代はそうかからないし、何より場所をとらず、便利であるうため飼うことにした。

「ふーん。ラキナは？」

「一緒に病院まで来てオルトさん達のところへ行っただけだね」「ずいぶん経つんだがこっちは来ないのか？」

とゆうか入院中一回も来たことがない。

「フフ」

俺の発言にリーラが可笑しそうにほほ笑む。

「何が可笑的なんだよ」

別に寂しいわけではないんだぞ？

「いえ、ラキナ様だったらゼロさんに怒られると思って逃げてるんですよ」

なるほどな。

確かなんらかの罰は与えようと思っていたんだが、察しやがった

な。

「明日みてる……」

「ほどほどにしてあげてください。反省はしてますから」

そんなことを話ながら一日が過ぎていく。

そして翌日の早朝

「うし、やっと窮屈から解放された」

退院した俺は久しぶりに道を歩いている。

なんかリーラ達が迎えにくるとか言っていたのだが無視だ。
とりあえず退院祝いつてことで旨いもんでも食おうかと思ったが先
立つものがないことに気づく。

「とりあえずはギルドに行くか……」

預けている金を下ろしに行くことにしよう。

「あとは……」

そう言っ取り出したのはダークプラントの討伐部位。

これを換金することにしよう。

Aランクの魔物のものだ、そこそこするだろ。それで豪華な飯でも
食おう。

そう思っギルドに入って受付に並ぶ列の最後尾に並んだ。

程なくして俺の番が来る。

「本日のご用件は？」

「こいつの換金」

受付の女の前にダークプラントの討伐部位を置く。

「こ、これは……少々お待ち下さい」

討伐部位を見た受付の女はそう言つと奥に行つてしまふ。
いったいどうしたというのだろうか。

「お待たせしました」

程なくして女が戻ってくる。

「あちらの扉から中に入ってきて下さい」

そう言つて女が指し示したのは受付より中へ入るための扉だ。

「換金しろよ」

なんで中に入つてこいとか言われなければならんだ。

いつも通りギルドカードを受け取つて本人確認をして必要であれば
ポイントを入れて金を渡せば済むことだろうか。

「あの、大切なお話がありますので……」

「ちっ」

なんなんだよ。

めんどくせえ……

そう思いながら扉の方へと向かい中に入る。

「ようこそいらっしやいました」

出迎えたのは長い白ひげを生やしたの爺だ。

「誰だ」

「私はボルック。当ギルドでギルド長を勤めております」

そりやまたお偉いさんが出たもんだ。

「何の用だよ」

「ほっほ、まずはおかけになってください」

そう言つてボルックは俺をソファへと促す。

俺は薦められるままにとりあえず座った。

テーブルを挟んで向かいにボルックが座る。

「まずはお茶でもどうですか？」

「いらん。用件を言え」

「別に用件と言うものでもありません。ただひとつ確認をしたいのですが、あなたのお名前は？」

「……ゼロだ」

呼びつけておいて俺の名前を知らないのか？

馬鹿にしてるんじゃない……

「やはりそうですか。アルヴィス様から聞いておりますよ。なんでもダークプラントを倒したのはあなただとか」

アルヴィスってのはおっさんのことだよな。

「そうだ」

正確に言つと微妙なところではあるが弱点を砕いたのは俺だから間違ではないだろう。

「やはりそうですか。ではギルドカードを渡してもらっていいですか？」

「……ああ」

少し訝しみながらギルドカードを渡す。

「それではこれを握って下さい」

ボルックが取り出したのは本人確認のための白い球。言われた通りに握る。

「うむ、間違いなく本人ですな。おい、あれを持ってきてくれ」

ボルックの声にギルド職員のひとりが何かを持ってくる。それをボルックが受け取ると俺に渡す。

「こちらがこれからのあなたのギルドカードです」

差し出されたのは赤いカード。

これは……

「特例によりあなたのギルドランクはBとなります」

「特例？」

「はい。本来ならありえないのですが、あなたがダークプラントを倒したという事実とSランクであるアルヴィス様の推薦ということ
で」

なるほど……

おそらくこれがおっさんの言うサプライズなのだろう。

少しだけ驚いたが今までのランクが俺に合っていなかったただけだし
な。

いずれは自力でここまで来ていただろう。

まあ、近道できたと思えばいいだろう。

「あと、あなたのパーティーの方もそれぞれひと階級ずつランクア
ップされます」

「そうか」

「まずはあなたからということでしたので、パーティーの他の方に
退院したら一度ギルドに来るように言ってください」

「ああ」

「ではBランクになった特典の説明をさせていただきます」

「そうゆつがあるんだったな、確か」

「はい、とは言ってもBランクの方はギルド直営の店全店がギルド
カード提示で一割引になるぐらいですね」

なんだそのお得な割引券方式。

でも、ギルド直営の店と言えば装備品屋から宿など多岐にわたる。
あつて損な物ではないだろう。

「それとこちらを」

そう言つてボルックはテーブルの上に布に包まれた何かをのせる。

開いてみると金板が二十枚はある。
総額二千万R
かなりの高額な金がそこにあった。

「これは？」

「討伐部位の報酬と依頼達成金です」
「依頼達成金？」

魔法植物のか？

いや、あれはリーラが受け取ったはずだ。

「今回のダークプラント討伐は特殊依頼に指定していましたから」
「ほう」

まあ金が入るのはいいことだな。
とりあえず金板を一枚手にとる。

「あとは預金しておいてくれ。ああ、特殊依頼とやらの報酬は四等分してパーティーの奴に分けてくれ」
「わかりました。そのようにいたしましょう」

ボルククの言葉を聞いて席を立つ。
あとは任せておけば大丈夫だろう。
とりあえずは飯だ。
めちやくちゃ贅沢できるな。

これはギルドランクアップの物語

ギルドランクアップの物語（後書き）

ユニコーンを仲間？にすることはほぼ決定事項だったとはいえ名前をかなり迷いました。

レックスかタミオか……

さすがにタミオはネタに走り過ぎであかんやろってことでレックスにしかし、馬にレックス……合わないかな？

でもこれでいきます。

あとはゼロのランクアップ

なんでAランクの魔物倒しておいてBランクなんだよと思われるかもしれませんが、いきなり三つも上がってること自体が異例ということでご納得ください。

脱王都な物語

ランクアップから幾日が経ち無事全員退院したところ俺はとある用向きで商業区に来ていた。

といっても買い物ではない。

しかし、やっとラキナのお守りをする条件で提示したものが用意され、見る機会が来たのだ。

一軒の武器屋に入る。

ここは武器を売っているだけでなく、店の奥で鍛冶も行っている。

「いらつしゃい。何をお探ですか？」

店番の娘が聞いてくるが無視して奥に進む。

「あつ、お客さん。そっちは関係者以外ご遠慮していただきたいんですけど……」

構わず入る。

用があるのは人だ。

「ガスカル出てこい」

「あつ、ゼロさん来てくれたんですかつ！」

ちょうど何かを作成中だったガスカルが俺に気付いて作業を止める。

ガスカルは王都に来た初日に裏で銃弾を売ってくれた奴だ。

それ以後も定期的に弾を仕入れるために会っていた。

それがなぜ商業区の武器屋の鍛冶場にいるのか？

理由は簡単だ。

これこそが俺のラキナに突き付けた条件だからだ。
俺が望んだのはガスカルの市民権の再取得とそれに伴う借金の帳消しや新たな仕事先の紹介などだ。

つまり俺のおかげでガスカルはまた表側の舞台に舞い戻ってきた。

「いやー、ここに勤めてから数日経つけど一向に現れないからどうしたのかなと思ってたんですよ」

そんなことを言いながら近づいてくるガスカル。

「用がなけりやこねーよ。つーことで弾丸をありったけよこせ」

「とは言ってもすぐには……」

「別に急いでないから気長に待つ今日は注文だけだ」

「そうですか、承りました。出来たら宿の方に運びます」

「気が利くじゃないか」

「いえいえ、こうやって表に出てこられたのもゼロさんのおかげですから」

そう言つてガスカルは朗らかに笑う。

でも俺は知っている。

今はこんなこと言ってるが市民権が与えられ、表に出れると言われた時のこいつの反応を。

その場にいた盛りすぎ筋肉（王国騎士団団長）の話では泣き叫びながら出ていくのを嫌がったという。

おそらく自慢の銃器コレクションのことで一悶着あったのだろう。しかし、今では表での生活を謳歌しているらしい。

だからこそ……

「もちろん代金はタダだよな？」

「うつ……はい、もちろんです」

ということになる。

俺が善意で人を助けるなんて自分のことながらまずないと言ってしまえる。

それが自業自得のことなら尚更だ。

でも、利用価値があれば話は別。

それがガスカルにはあった。

現在、俺はガスカル以外に銃の弾を用意できる者をしらない。だから出来るだけ力になってやらなくてはと思うのだ。

「その……いくらかは頂けませんか？」

恐る恐るといった感じでガスカルが聞いてくるが無視する。

都合が悪いとかじゃなく、取り次ぐ必要性を感じないからだ。

「んじゃ、よろしく」

そう言い残してその場を去ろうとする。

「ちょっと待ってください」

しつこいな。

そんなに金が欲しいのかよ。

そう思いながらも一応立ち止まって振り向く。

「なんだよ？」

「あ、よかった。いえ、お金のことではなく、あなたにお礼がしたくて」

そう言つて近くのテーブルに近づくとそこから小さな箱を取り出す。

「これを渡したくて」

そういつてガスカルが箱を開けると中には指輪が入っていた。

「これは？」

「僕の渾身の作品に知り合いの魔法彫金師に頼んで生命の加護を刻んでもらいました」

「生命の加護？」

「はい、怪我の回復力を高める加護です。短い期間に二度も大怪我されてるみたいですから」

「ほお、ありがたいが鍛冶師が指輪かよ」

普通は武器とか防具じゃないのか？

「武器は銃がありますし、防具は苦手で……」

どうしようもないな。

「着ける」

そう言つて左手の甲を上にして出す。

「えっ？　僕が着けるんですか？」

「そうだけど？」

なんで疑問形なんだ？

「……それじゃあ着けます」

そう言つてガスカルは俺の手をとり、人差し指に指輪をはめる。指輪はピッタリと俺の指にはまった。

「男同士で指輪の交換……たまらないわっ！」

ずっと静観していた店番の女が色めき立った声を上げる。つーかずつと背後にいたのか。

「フィオちゃん！？ こ、これは違うんだ。別に深い意味はなくてっ！」

「いいのよ、ガスカルさん……男同士なんてとても背徳的で素敵なもの。断然応援するわ」

「違うんだーっ！」

くだらない誤解が生じているらしい。

なんか二人で追いかけてこがはじまったのでほつというて帰ることにする。

ガスカルには頑張つて誤解をといてもらいたいものだ。

「あ、あのっ！ 頑張ってください」

背後から女のよくわからない応援と何とも言えないような生暖かい視線を感じた。

数日後宿にガスカルから宿に弾と共に手紙が届いた。

そこには一言『店にはなるべく来ないでください』とだけ書かれていた。

どうやら誤解は解けなかったらしい。

それからの日々は瞬く間に過ぎたといっただろう。
色んなことがあった。

なんか夜な夜な奇襲もどきを受けたと思ったら、なんと馬鹿貴族の
報復だった。

完全にそんなの忘れてた。

あとはラキナ。

相変わらず俺を避けてるみたいだ。

結構長いこと続くな。

寂しくはないが、なんか腹立つ。

ということとで突撃してやる。

「俺だ、入るぞ」

俺が居るのはラキナの部屋の前。

返事も聞かず中に入る。

本来なら鍵がかかっているのだが、今日はメイドに言って鍵を開け
とくように言っている。

すんなりと部屋に入ることができた。

ラキナの部屋は俺と同じ宿なのにも関わらず四倍は広かった。

いわゆるスイートルーム。

さすがはお姫様。

民の血税で贅沢し放題だな。

「キ、キシワッゴミクス……」

びつくりした顔で俺を見つめるラキナ。

こうやって顔を合わせるのは本当に久しぶりだ。

「よう。お前が逃げまくるからこっちから来てやった」

「お、怒りにか？」

「お前どんだけビビってんだよ？」

「だって……お主は笑いながら爪をはぐんじやる？」

そうゆうこともある。

でも……

「お前にはやんねーよ」

「ほ、ほんとか？」

俺は10歳くらいの女の子の爪をはぐほど鬼畜ではない。
精々……

「これくらいだろ」

本気の力でデコピンする。

強烈な音がなってラキナが後ろに倒れる。

「くう~~~~っ!」

額を押さえながら悶絶するラキナを見つめる。
愉快愉快。

「とりあえずこれでダークプラントの件の罰としてやる」
「痛いじゃ……」

これくらいで許してやるなんて優しいな、俺は……
まあ、日にちが経ったことで怒りのようなものは薄れてるんだけど
な。

「まったく、さっさと謝ればもっと軽い罰で許してやったかもしれないのに……」

嘘だけだな。

多分もう少しきつい罰を与えていただろう。
具体的には尻を叩いていただろう。

「も、もっと早くに謝る予定だったんじゃない
「いつだよ」

「……お主が退院した日じゃ」
「……………」

「でも、迎えに行ったらすでにお主はいなくて、そのうちタイミン
グを逃してしまったのじゃ……」

つまり、なんだ

「俺のせいって言いたいのか？」
「ち、違うぞ。もともとわらわが悪かったのじゃ」

わかってるじゃねーか。

「だから、ホントにすまなかった」
「いいよ、もう罰は与えた」

ラキナの頭を撫でる。
とゆーかグシャグシャにしてやる。

かなり迷惑そうだがどこことなく嬉しそうにしているようにも感じる。

「ラキナ」

「なんじゃ？」

「俺の名前はキシワ」ゴミクスじゃなくてゼロって言うんだ」

いつまでもキシワ」ゴミクス呼ばわりも何だしな。

「つかいつまでも誰も訂正しないなんて思わなかった。

「知つとるぞ」

「はあ？」

しかし返ってきたラキナの言葉は少し予想外で思わず情けない声が出ってしまった。

「とゆーか、気づかん方がおかしいじゃろ」

「じゃあなんで……」

俺の言葉にラキナはガキとは思えない艶やかな笑みを浮かべる。

「だって……わらわだけの特別な呼び名じゃろ？」

特別と言うか、からかったただけなんだがな……まあ、いいか。

こうしてラキナとの仲直り？も無事に終了した。

また幾許かの日にちが過ぎていった。

俺達は基本的に日帰り出来るような仕事をしながら毎日を過ごしていたのだが、朝、眠りから覚めるとそこは知らない天井だった。

「ここは……」

記憶を掘り起こすがやっぱり知らない。

起き上がって周りを見回すとそこは狭い個室だった。

「どこだここ……」

最初に感じたのはこれだったが、次いで違和感を感じる。
なんか揺れてね？

「地震か？」

ベッドから出て、なぜか丸い窓に近づいていく。

そこから見えた景色は青。

それも空のような明るい青ではない。

どちらかというとき深い青。

つまりは大量の水だ。

それが視界の下の方に広がっている。

「なんだこれ？」

夢でも見てるのだろうか。

昨夜俺はたしかに宿のベッドに入ってから眠ったはずだ。
とりあえず部屋から出ようと思い、扉を開ける。

「あら、ゼロさん。おはようございますわ」

「ゼーちゃんおはよ」

「……………おす」

「グッモーニング親友っ！」

迎えたのはラキナとメイドを除いたいつもの面子。

とりあえずハゲに向かって歩いていくと全力で顔面を殴った。

「ぐおっ……………い、いきなり何すんのっ？」

「痛いかな？」

「そりゃいてーよ」

ふむ、痛いということは夢ではないのか？

事実殴った俺の拳も痛い。

「どういうことだ？」

リーラ達に問い掛ける。

なんかハゲがなんで殴られたのとか聞いてきてうるさいのもうー
発殴っておく。

「えっと……………あとである方が説明しにきますわ」

「お前が説明しろ」

「今回の件は私^{わたくし}ではなくその方の口から聞いた方がよろしいかと。
何せ首謀者ですから」

リーラはそう言って俺の問いをはぐらかす。

「ならせめて、ここがどこか教えろ」

「ここは、お船の中だよ」

「船だと？」

なんでそんなのに乗ってんだ？

いや、そもそもいつ……って寝てる間に運ばれたに決まってるよな。とりあえず首謀者とやらを待とう。

今俺がいるのは大きな部屋で、でかいテーブルと椅子がいくつか置いてある。

また、簡素なキッチンもあり、いわゆるダイニングみたいなところだ。

そこから俺の出てきた部屋と同じような扉がいくつかある。

恐らくそれぞれが個室に繋がっているのだろう。

また、個室への扉とは別に大きな扉があるのだが、そこから外に出ることができるのだろうか。

そんな風に観察していると大きな扉が開き、ラキナが入ってきた。

「む？ キシワ」ゴミクス、起きたのか」

「ああ」

「……説明はした方がよいか？」

もしかして首謀者ってこいつか？

「しろ」

「簡単に言うんじゃないな。わらわの輿入れが早まって、向かうことになったのじゃが……皆についてきてもらうことにしたのじゃ」

……問答無用ってのは問題があるよな。

せっかく仲直りしたのだが、また罰を与えなくっちゃ。

これは脱王都な物語

脱王都な物語（後書き）

なんとゆうか、急な展開です。

しかもやたらはしょっちゃいました。

つーても面白い話もないし、なんかやるといつまでも王都にいることになるんで致し方ない処置だと思ってください。

気が向いたら王都編の番外編的なもので馬鹿貴族の報復とかシャル達の入院生活を書くかもしれません。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7581o/>

ゼロの男の物語

2011年2月14日08時26分発行